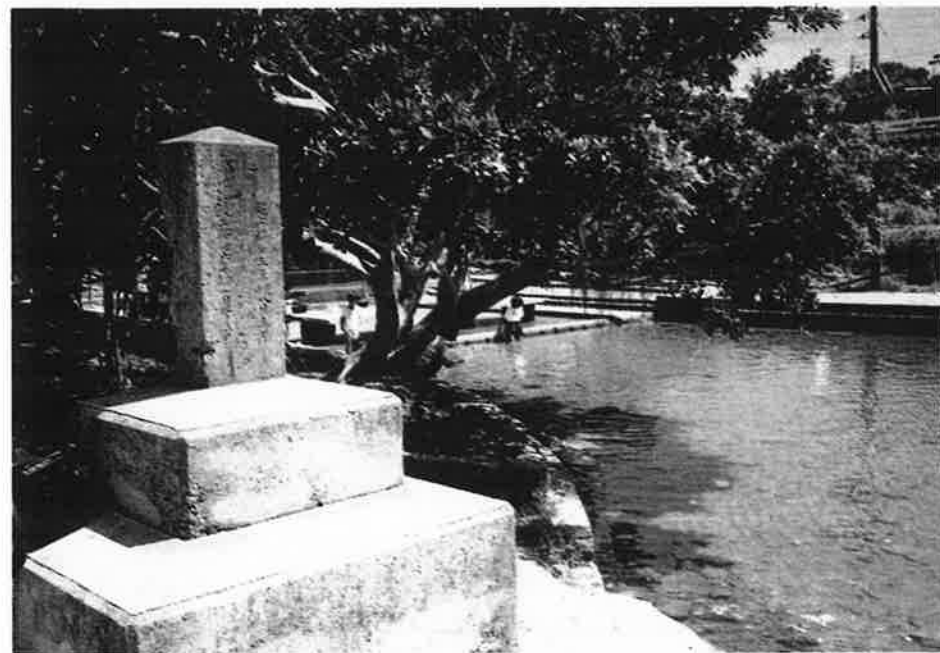


沖繩・糸満市の昔話

立命館大学説話文学研究会
糸満市教育委員会



南山城址の碑



か 手 志 が
嘉 手 志 川



糸満大綱引き



白銀堂



真栄里大綱引き



糸満ハーレー

糸満市の主な語り手



字武富 長嶺和男



字糸満 野原由宗



字糸満 上原牛蔵



字糸満 田場天龍



字北波平 大城正太郎



字武富 大城トミ



字糸満 金城安彦



字糸満 上原亀広



字名城 新垣武登



字真栄里 島袋仁栄



字賀数 照屋亀八



字阿波根 平田徳太



字小波蔵 伊敷フヂ子



字小波蔵 伊敷カミ



字与座 伊敷清保



字豊原 国吉マツ



字米須 仲宗根善道



字伊原 玉城ハル



字新垣 宮里栄吉 字国吉 翁長文子 字糸満 大城英次

序 文

糸満市教育委員会教育長 金城正徳

このたび、糸満市内に伝わる民話を『糸満市の昔話』として発刊できましたことを市民とともに喜びとするところであります。

『糸満市の昔話』は立命館大学説話文学研究会の方々が、一九八七年から一九九一年にかけて、市内全域にわたりお年寄りの方々から聞き取り調査したものをまとめあげたものであります。

近年、社会情勢のめまぐるしい変化の中で、民話を語り継いでいくことが難しくなってきました。そのような中で、遠い昔から代々語り継がれてきた民話を後世に残していくため、「語り」を文字化し、市民に民話のすばらしさを理解していただくことは極めて意義深いことだと思えます。

民話は、庶民の生活の中で育まれ語り伝えられてきた生きた文化財であるとともに、言葉づかいや抑揚など、語り手独特の個性が活かされており、すばらしい芸術作品でもあります。

今回収録した作品は、語り手の口調をなるべく損なわないように配慮がなされ、また挿し絵も多く入れてあるので楽しく読んでいただけることと思います。

『糸満市の昔話』が家庭や学校現場、あるいは社会教育の場で活用され、情報氾濫の現代社会において、ややもすると忘れ去られようとしている「語り」の場における心の温もりを呼び覚まし、二十一世紀に向けて、新たな地域文化の創造に役立つことを期待いたします。

おわりに、今回の民話調査に快く協力してくださった各字の皆様、調査を担当していただいた立命館大学説話文学研究会の皆様に対しまして深く感謝申し上げます。

目次

写真	序	目次	地図
.....			
	教育長	金城正徳	

《解説》	一 市の概要.....	金城 善.....	1
	二 昔話採訪記録.....	松本孝三.....	7
	三 伝承の系譜・機会.....	松本孝三.....	12
	四 糸満説話の伝承世界.....	福田 晃.....	27

《本文》	凡 例.....	43
------	----------	----

神 話	1 アマミキヨとギジムナー.....	45
	2 稲の始まり.....	46
	3 五穀の始まり.....	47

4 大力のイツカンウエーブーと ジョウサグンウエーブー.....	48
-------------------------------------	----

伝 説

5 糸満の地名由来.....	49
6 暁城の名の由来.....	50
7 与那原の綱引由来.....	51
8 小波蔵の綱引由来.....	53
9 阿波根の飯石の由来.....	54
10 金の砥石.....	54
11 フチャギ餅の由来.....	55
12 左御紋の始まり.....	56
13 火返し（ヒーゲーシ）御願.....	57
14 七月お盆の始まり.....	59
15 位牌の由来.....	60
16 ニービチ由来（イ）.....	61
17 ニービチ由来（ロ）.....	62
18 伊原の喜納ワタブトウの土地分け.....	63
19 糸満のヒーダチ御願.....	64

20	ユードレ墓の由来	65
21	波平玉川の由来	66
22	遊女墓の由来	67
23	真玉橋の人柱(イ)	69
24	真玉橋の人柱(ロ)	71
25	真玉橋の人柱(ハ)	72
26	白銀堂由来(イ)	73
27	白銀堂由来(ロ)	76
28	普天間権現由来	78
29	運天港由来	79
30	婿入橋の由来	80

史 譚

31	かぎやで風節	81
32	北谷王子と黒鉄座主(イ)	82
33	北谷王子と黒鉄座主(ロ)	85
34	京阿波根親方(イ)	86
35	京阿波根親方(ロ)	88
36	内間金丸	89
37	大里嘉手志川と金屏風	90
38	網の始まり	91
39	名護親方と具志頭親方(イ)	92

本格昔話

40	名護親方と具志頭親方(ロ)	95
41	名護親方と具志頭親方(ハ)	97
42	名護親方と具志頭親方(ニ)	99
43	名護親方と具志頭親方(ホ)	101
44	米須按司の敵討ち	102
45	瓦屋情話	104
46	吉屋チル	106
47	チャタンモーシー	107
48	仲村渠マカトウ	107
49	天人女房	109
50	ハブ簞入	110
51	アカマタ簞入(イ)(浜下り由来)	111
52	アカマタ簞入(ロ)(普天間権現由来)	113
53	睡次郎	114
54	難題簞(熱田のマーシリー)	116
55	ウールンチブシ(勝連按司の難題 ・アガデーガマ由来)	120
56	継子話(麦搗き・二十日月)	123
57	継子の味噌弁当	124
58	継子の毒入り弁当	125

59	継子話(簞と七重ね毛)	125
60	継子とみみず	126
61	継子台	127
62	継子話(チバナより痛い)	127
63	兄弟の仲直り(イ)	128
64	兄弟の仲直り(ロ)	130
65	仲順流り(イ)	131
66	仲順流り(ロ)	133
67	仲順流り(ハ)	134
68	仲順流り(ニ)	135
69	大年の客	136
70	猿長者	139
71	泥棒の恩返し	142
72	鬼餅由来(イ)	143
73	鬼餅由来(ロ)	145
74	鬼餅由来(ハ)	146
75	鬼の家の便所	147
76	クスケー由来	148
77	ハジチ由来	149
78	姥捨山(イ)(柴折り・難題)	150
79	姥捨山(ロ)(柴折り・薩摩の難題)	152
80	姥捨山(ハ)(馬の親子)	153

81	ハブの昇天	154
82	フカに助けられた男	154
83	武士と肥やし	155
84	唐商いよか糠商い	156
85	モーイ親方(イ)(勉強・煙草は一回・ 嫁取り・薩摩の難題)	157
86	モーイ親方(ロ)(勉強・薩摩の難題)	160
87	モーイ親方(ハ)(嫁取り・薩摩の難題)	162
88	モーイ親方(ニ)(薩摩の難題)	165
89	モーイ親方(ホ)(薩摩の難題)	167
90	モーイ親方(ヘ)(打たぬ太鼓・灰縄)	169
91	モーイ親方(ト)(嫁取り)	170
92	モーイ親方(チ)(嫁取り)	171
93	モーイ親方(リ)(煙草は一回)	172
94	モーイ親方(ヌ)(勉強)	173
95	モーイ親方(ル)(年若い馬・煙草は一回)	175
96	モーイ親方(ヲ)(草履と下駄)	176
97	モーイ親方(ワ)(小便の罰金)	177
98	モーイ親方(カ)(出たものは切る)	178
99	モーイ親方(ヨ)(卵割り・出るか入るか)	179
100	モーイ親方(タ)(ヌブシの玉)	179
101	モーイ親方(レ)(マブイの恩返し)	180

103	モイ親方(ソ) (三本の矢)	182
102	モイ親方(ツ) (親方の最期)	183

因縁・化物譚

104	生き返った大屋のアヒトウ	185
105	後生戻りの話	187
106	ナーチャミー由来(イ)	188
107	ナーチャミー由来(ロ)	189
108	子育て幽霊	190
109	シバサシ由来	191
110	平良(テラ)シカマグチ	192
111	逆立ち幽霊	193
112	国吉坂の遺念火	195
113	遺念火の話	196
114	識名橋の幽霊マジン	197
115	キジムナーと友達(イ)	198
116	キジムナーと友達(ロ) (名嘉地大屋)	199
117	キジムナーと友達(ハ) (名嘉地大屋)	201
118	キジムナーと友達(ニ) (ムーチー汁)	201
119	キジムナーと友達(ホ) (我那覇大屋)	202
120	坊さんと猫	202

笑話

121	ナヴァーグワの知恵(イ) (尻拭き)	205
122	ナヴァーグワの知恵(イ) (食い逃げ)	206
123	山原と団亀	207
124	糸満の女は男勝り	208
125	渡嘉敷ペーク(イ) (十日月・嘘の名人)	209
126	渡嘉敷ペーク(ロ) (十日月)	210
127	渡嘉敷ペーク(ハ) (王様と碁・米俵)	212
128	渡嘉敷ペーク(ニ) (王様と碁・米俵・着物)	212
129	渡嘉敷ペーク(ホ) (低頭門・米俵・味噌)	214
130	渡嘉敷ペーク(ヘ) (煙草は一回)	216
131	渡嘉敷ペーク(ト) (塩がうまい・低頭門)	217
132	渡嘉敷ペーク(チ) (屋根の葺き替え)	218
133	渡嘉敷ペーク(リ) (競馬)	219
134	渡嘉敷ペーク(ヌ) (ル力島返し)	219
135	津堅バーマー(十日月・屋根の葺き替え)	220
136	糸満マギー(イ) (あそこは人並み)	222
137	糸満マギー(ロ) (山原船)	223

138	糸満マギー(ハ) (帆柱)	224
139	糸満マギー(ニ) (寿命)	225
140	糸満マギー(ホ) (足跡)	226
141	保栄茂タルチー(イ) (力比べ)	226
142	保栄茂タルチー(ロ) (力比べ)	227
143	保栄茂タルチー(ハ) (妹の大力・力比べ)	228
144	保栄茂タルチー(ニ) (仕事は弁当)	231
145	保栄茂タルチー(ホ) (牛抱え・仕事は弁当)	232
146	保栄茂タルチー(ヘ) (山原船)	234
147	保栄茂タルチー(ト) (保栄茂の最期)	235
148	保栄茂タルチー(チ) (保栄茂の祟り)	235
149	保栄茂ユーチー(仕事は弁当・牛抱え・最期)	236
150	文徳マサー(イ) (空手の修業)	237
151	文徳マサー(ロ) (空手の修業)	238
152	文徳マサー(ハ) (藁綱い)	239
153	文徳マサー(ニ) (大力)	240
154	文徳マサー(ホ) (足型・天井蹴り)	241
155	文徳マサー(ヘ) (力比べ)	242
156	アガリ武士の力比べ(イ)	243
157	アガリ武士の力比べ(ロ)	244

鳥獣草木譚

158	アガリ武士の力比べ(ハ)	244
159	サクマエバーの大力	245
160	ガネクダクローの強力譚	246
161	名城ヘンサの早足	246
162	雀孝行(イ)	247
163	雀孝行(ロ)	248
164	雀孝行(ハ)	249
165	雨蛙不孝	250
166	雀酒屋	250
167	十二支由来(イ)	251
168	十二支由来(ロ)	253
169	猿の生き肝	254
170	犬の脚	255
171	世間話	257
172	キジムナーの胸押え(イ)	258
173	キジムナーの胸押え(ロ)	258
174	キジムナー封じ	258
175	兼城のカマロー	259
176	遺念火と相撲	259

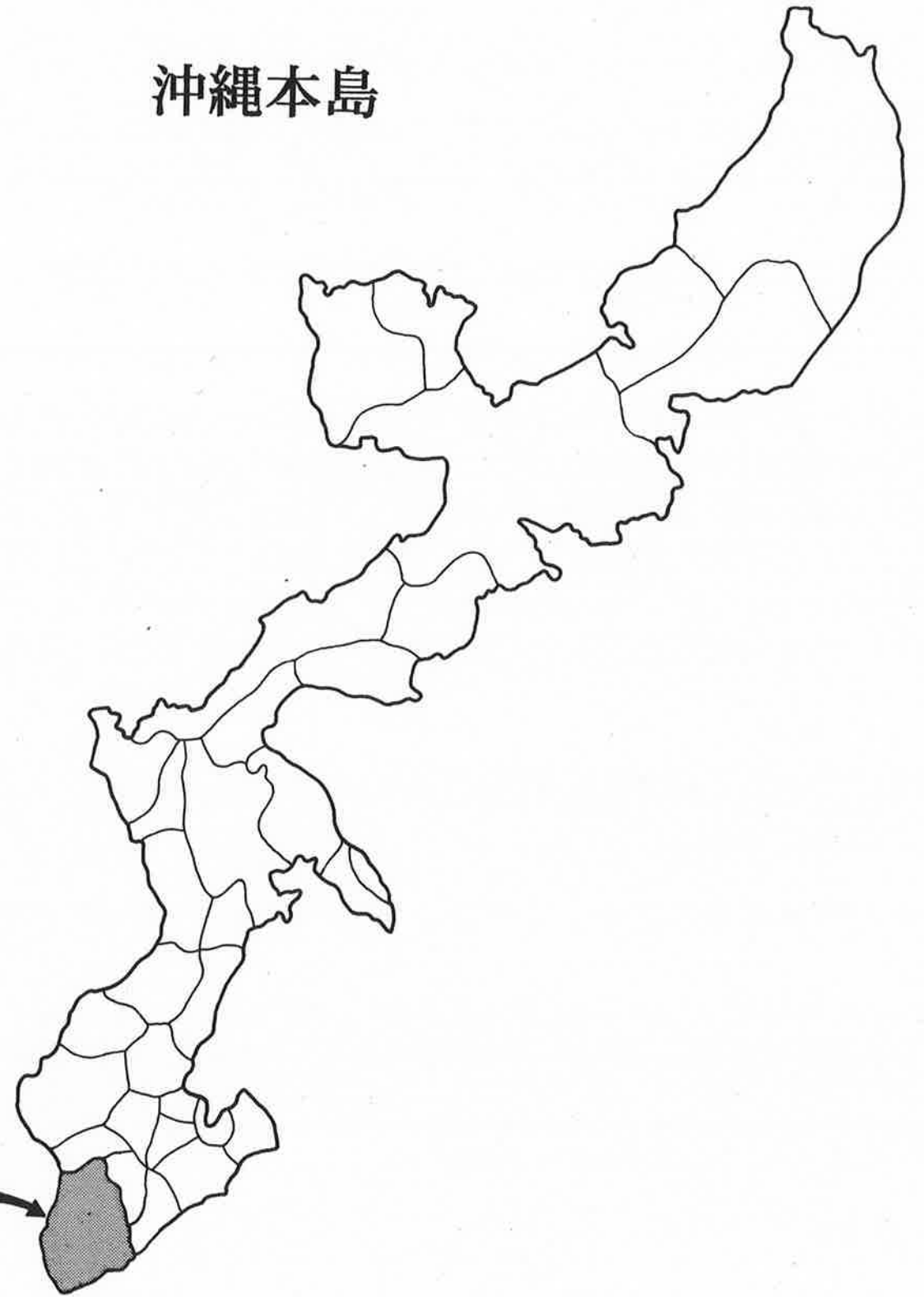
194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176
雀孝行	渡嘉敷ペークー(十日月・味噌・競馬・米俵)	名嘉地大屋とギジムナー	ギジムナーと友達	モイ親方(ヌブシの玉・勉強)	安里の童	猿長者(口)	猿長者(イ)	難題婿(二つの馬に鞍一つ)	アカマタ簀入(浜下り由来)	米須按司の敵討ち	慶留バーリーの祭り	与座の名の由来	犬の見つけた井戸	稲の始まり	人の始まり	煙草は吸うもの	マーザーデーに出会った話	ヨウドレの由来
298	295	294	292	289	287	283	279	278	276	270	269	268	266	265	263	261	260	260

対訳資料

195	アヒラーマジムン	300
	話型対照表	305
	語り手一覧	316
	採訪者名簿・翻字者名簿	322
	あとがき	323
	立命館大学教授 福田 晃	

沖縄本島

糸満市



沖繩・糸満市の昔話

解説

糸満市の概要

(1) 糸満市の位置と行政区画

私たちの住む糸満市は、沖縄県の県都那覇市のある沖縄本島の南部の西側に位置し、人口五万四千人の農業と商業と漁業のまちです。四五、八四平方キロメートルの面積を有し、周囲は北から東にかけて豊見城村・東風平町・具志頭村と隣接しています。南に太平洋、西に東シナ海を望み、西方海上には慶良間諸島が眺望できます。南端にある喜屋武岬が黒潮を太平洋と東シナ海を分けるように突き出しています。

本市は、古くからある三一の字（北から字武富・字北波平・字阿波根・字賀数・字座波・字潮平・字兼城・字照屋・字糸満・字豊原・字与座・字大里・字国吉・字真栄里・字新垣・字真栄平・字宇江城・字真壁・字伊敷・字小波蔵・字名城・字糸洲・字南波平・字摩文仁・字大度・字米須・字伊原・字福地・字山城・字東里・字喜屋武）と、西側の海岸を埋め立てて造成した西崎町と西川町とで構成されています。



金城善

(2) 地質と地形

沖縄本島南部の地質は、中新世後期から更新世初めに形成されたクチャと呼ばれる青灰色のシルト質泥岩（島尻層群）を基盤に、その上を更新世に珊瑚礁を形成していた生物の石灰質遺骸の堆積物によってできた琉球石灰岩（琉球層群）が覆っています。西側の海岸には砂や泥の堆積物による沖積層を形成しています。南部の地形は、地殻変動によって隆起した台地をいくつかの断層が横切り、多くの断層崖や海岸段丘崖を形成しています。また、地下水の溶解浸食作用によって形成されたカルスト地形にはブリやアブ（落ち込み穴）やガマ（鍾乳洞）が発達しています。

本市の地質構造もこの島尻層群を琉球石灰岩の琉球層群が覆った構造になっています。島尻層群からなる地域には保水性のある肥沃な灰色のジャーガルが分布し、琉球層群からなる地域には保水性に乏しい赤色の島尻マージが多く分布しています。地形は波状に起伏する琉球石灰岩の丘陵が東西にいくつも走り、その稜線に平行する南斜面にはほとんどの村落が位置しています。西海岸にはリーフが発達し、その内側のイノー（礁池）には魚介類が豊富に生息し、古くから良好な漁場として発展してきました。そこには、かつてはアナギ（沖之島）・イーユー（伊保島）・ウカワ（岡波岩）・エーギナ（エージナ島、国絵図には「あいけな島」）・オーグワー（奥武島）といった小島が点在していたのですが、幾度かの埋め立てによって報得川（むくえがわ）河口の三つの島（オーグワー・アナギ・イーユー）は陸続きとなつてしまいました。海岸線は、本市の発展とともにこれからも大きく変化していくことでしょう。

(3) 気象

本市の位置する沖縄本島は、亜熱帯海洋性気候に属し、年平均気温が二二度から二三度で、月別平均気温が一六度から二八度の範囲内にあり、年較差が小さく四季の変化に乏しい気候となっています。また、夏期になると三〇度を越える日も多く、加えて湿度も八〇パーセント以上になるため、かなり蒸し暑い日が続きます。沖縄が台風の進路にあるため年に数個の台風が接近し、降水量は年間二千ミリ前後と多いのですが、年によっては降雨量が少なく断水や

旱魃に悩まされることもあります。

(4) 歴史と文化

南山の興亡 現在、糸満市立高嶺小学校が位置する石灰岩丘陵は、南山城（なんざんグスク）と称された城が築かれていたところであります。ここは糸満市指定文化財で、南山城跡と称しています。また、大里城（ウーザトウグスク）とか、大里村の大里城跡と区別するために島尻大里城（シマジリウーザトウグスク）とも呼ばれています。築城年代は、野面積みの石垣や遺物からして一四世紀ごろではないかと考えられています。時代は、グスク時代とか三山鼎立時代と称される時期にあたります。築城した人の伝承は残っていませんが、『おもろさうし』で「しものよのぬし（下の世主）」とうたわれた有力な支配者であったとみられています。『おもろさうし』によれば、本市域には他にも「くめすよのぬし（米須世主）」や「いしやらのぬし（石原世主）」、「やまきたらすさへ」、「やまくすくたたみきよ」、「やまきにや」、「ふくしおわるよのぬし（福地に居る世主）」、「まかひおわるよのぬし（真壁に居る世主）」、「あはこんの大や（阿波根の大屋）」という有力者が群雄割拠していたことがわかります。

南山王統は、大里按司（ウーザトウアジ）をはじめとして、承察度（しょうさつと）・汪応祖（おうおうそ）・他魯毎（たろまい）と続いた王統であります。その支配は、はじめ「しもしましり（下島尻）」と呼ばれた兼城・大里・真壁であったが、しだいに豊見城・喜屋武・摩文仁・東風平・具志頭・玉城・知念・佐敷・島添大里にまで及んだと思われまます。そして、沖縄本島を南山・中山（ちゅうざん）・北山（ほくざん）の三つの勢力が覇を競う三山鼎立時代には、南山王承察度は一三八〇年に中山に次いで明国に朝貢し、進貢貿易を展開しています。南山の対明貿易の拠点は、ヘーシカタ（南の渦）と報得川の河口であったといわれています。ヘーシカタはかつては入江で、その奥の門中墓があるあたりは南山城の船着場があったといわれます。また、報得川の兼城橋付近までは船が遡上し、左岸の断崖上には南山の御物城（ウムヌグスク）ともいわれる照屋城（テイラグスク）が築かれています。

『おもろさうし』に「大きとは さとからる、かでしかわ みづからる」と歌われ、南山城の東にある水量豊かなカディシガー（嘉手志川）から湧き出る水が城下の田畑を潤し、南山繁栄の基盤をなしていました。しかし、南山王他魯毎は、この川と佐敷の小按司（尚巴志）の持つ金屏風とを交換したことで、臣下の信望を失い、ついには巴志によって滅ぼされてしまったといえます。

近世・近代の行政区画 糸満市域を構成する行政区画は、古くは「しもしましり・「きやめ」・「まふに」と称されていました。「しもしましり」は、いつしか島尻兼城・島尻大里・島尻真加比の三つに分割され、島尻大里間切は一六六七年に高嶺間切に改称しています。近世を通じては兼城・高嶺・真壁・喜屋武・摩文仁の五間切であります。それぞれの間切には、間切を領する按司地頭と総地頭の両総地頭と村を領する脇地頭が任じられていました。総地頭らは、首里や那覇に居住し、間切や村を支配していました。間切や村の行政を実際に担うのは、地頭代を頂点に夫地頭やさばかり（首里大屋子・大掟・南風掟・西掟）、村掟らで、総務・納税・糖業・農務・林務・治安等の職務を分掌していました。

市域の村々は、一七世紀後半の間切境界の見直しによって大きく変化しています。兼城間切は豊見城間切から武富・波平・阿波根の三か村を編入し、中城・崎中城の二か村を高嶺間切へ、伊敷・新垣の二か村を真壁間切へ出して、武富・波平・阿波根・賀数・座波・潮平・兼城・照屋・糸満の九か村となっています。高嶺間切は古波蔵・名城・糸洲の三か村を真壁間切へ出し、兼城間切から編入した中城・崎中城の二か村と「わたりきな」・「げる」・「神里」・「くびり」・「中間」の五か村を近くの村々に併合して、与座・屋古（後に大里）・国吉・真栄里の四か村となっています。真壁間切は兼城間切から新垣と伊敷の二か村を、高嶺間切から古波蔵（後に小波蔵・名城・糸洲の三か村をそれぞれ編入し、喜納と中間の二か村を近くの村に統合して、真壁・あがるい（後に宇江城）・前平（後に真栄平）・新垣・伊敷・名城・小波蔵・安里・糸洲の九か村となっています。喜屋武間切は「さき村」を廃して、喜屋武・福地・山城・東辺名・上

里の五か村となっています。摩文仁間切は摩文仁・小渡・米次（後に米須）・石原・伊礼の五か村で、境界の見直しや村の統合などは無かったようです。

一九〇八（明治四十一年）四月一日に施行された「沖縄県及島嶼町村制」によって、糸満は兼城間切の一村落から分離し、町制を布いて沖縄県で唯一の「町」が誕生しました。兼城間切は兼城村に、高嶺間切は高嶺村に、真壁間切は真壁村に、喜屋武間切は喜屋武村に、摩文仁間切は摩文仁村に改称されました。

一九四五（昭和二十年）年の沖縄戦によって、市域は壊滅的な戦災を受け、多くの尊い人命と遺産を失いました。特に人口が激減した真壁村・喜屋武村・摩文仁村の三村は、一九四六年に合併して三和村となつて、復興に尽力しています。それから一五年後の一九六一年には、糸満町を中心に兼城村・高嶺村・三和村が合併して新たな糸満町を形成しています。そして、一〇年後の一九七一年には、市制を施行して県下で一〇番目の市となっています。

農業の振興 市域の田は、水源をもたない天水田が多く、しばしば旱魃による害を被ることがありました。一七二六年、尚敬王の命により、高嶺間切与座村の泉の水を周辺の三間切へ引くための用水路が築かれています。この用水路だけでなく、私財を投じた水路の建造が武富村でも行われています。これらは、長年使用するうちに所々が決壊し、補修の必要が生じたとき、私財を投じて改修を行い、農業の振興として報奨された記録をみることができます。

親族組織と門中墓 字糸満は、三腹あるいは七腹の親族集団にはじまり、近世中ごろに近隣の農村から漁業を営みに移り住むものが出て、やがては一三腹に増加し、明治の初めには首里・那覇に次ぐ大きな集落を成していました。現在には四〇の親族組織（腹）となっています。

沖縄最大の門中墓として知られる幸地腹（コーチバラ）と赤比儀腹（アカヒギバラ）の両門中の墓は、兄と妹の婿の子孫だけが使用する血縁共同墓であります。一六八四年の墓碑には、上原掟親雲上の八人兄弟と金城ちくどの三

人兄弟の子孫の墓の使い分けが記されています。創建当時から一八六八（明治元）年までのトシーバカ（当世墓）は一つの小さな亀甲墓であつたようです。近代になって子孫が広がり、年間の死者の数も増すと、一基では洗骨までの処理が間に合わなくなり、遺体が朽ちるまでの間安置しておくためのシルヒラシ墓を一八六九年に一基増設しています。それでも子孫が増え、一九一〇年と一九一一年にもシルヒラシ墓の増設を行っています。一九三五（昭和十）年には、小さなトシーバカを現在見るような大きな墓に立て替えるとともに、あと一基のシルヒラシ墓を増設し、屋根の形もこれまでの亀甲形式のものから破風形式の家型の墓に改修しています。

糸満漁業の発展 糸満の伝統的な漁業は、糸満の西海岸に発達したリーフを漁場とするアンブシ（建干網）漁と呼ばれる沿岸漁業でしたが、鰯釣りやイカ釣り、トビウオ刺し網といった沖合漁業へと展開し、一八八四年にミールガン（水中眼鏡）が考案されてからは、潜水を主体とするパンタカーやアギヤーと呼ばれる追込網漁業へと発達していききました。獲れた魚は、消費地である那覇等へと運ばれ、カミアキネー（頭上運搬による商い）で売りさばられました。組織的な漁業経営であるアギヤーからは、多くのイチマンアンマー（糸満婦人）がワタクサー（私財）を蓄積することができました。このことをマルクス経済学者の河上肇が「琉球糸満の個人主義的家族」として論文発表したことにより、多くの研究者らが糸満に興味を抱いて訪れるようになりました。

二 昔話採訪記録

松本孝三

(1) 調査方法

この昔話集に採録する民間説話は、昭和六十二年から平成三年にかけての採訪、および、平成七年の補足調査の結果に基づいている。当該地へは計五回の採訪調査を行ない、その総数二百四十二名（男百二十一名、女百二十一名）の語り手にお会いして伝承話をうかがったものである。

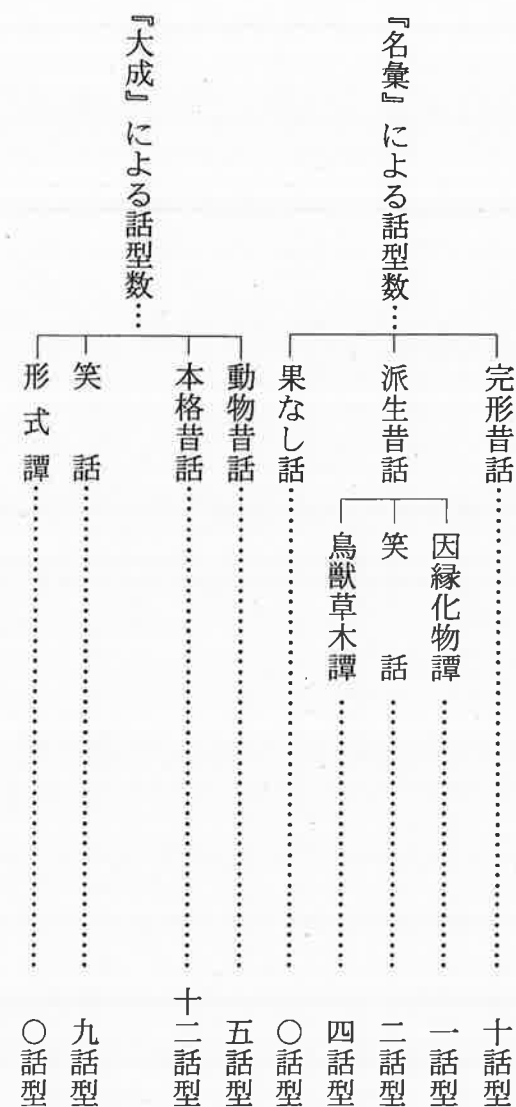
その調査方法は、始め二回の調査は、各集落（十九地区を調査）の老人クラブの方々に公民館・集会所に集まっていたが、一班三・四名の調査者が赴いて伝承話をうかがい、録音テープに収録するという形態をとった。三回目の調査からは前回の調査に基づいて、主に個別訪問の形を主体とし、伝承話のほか、伝承の系譜・機会、民俗についても調査を行なった。なお、第五回目は補足調査で、特徴的な話柄についての伝承の系譜、伝承の機会などを中心に調査を行なった。

語られた民間説話は録音テープに収録し、後にこれを翻字することを原則として調査ごとに採訪ノート、話者カードを作成し、採訪状況や集落の概況、民俗、語り手の伝承事情、話柄とその梗概などを記録している。

(2) 話型

本集に収録した民間説話の総数は百七十八話である（対訳資料十七話は除く）。その内訳は、神話四話、伝説二十六話、史譚十八話、本格昔話五十五話、因縁・化物話十七話、笑話四十一話、鳥獣草木譚九話、世間話八話である。南島における民間説話の伝承実態には、独自の伝承上の特徴がみられるために、必ずしも『日本昔話名彙』（柳田国男氏編）や『日本昔話大成』（関敬吾氏編）の分類におさまらないものがあるが、^{注1)}参考までに共通と思われる話型

を掲げるならば、『日本昔話名彙』に含まれるものは十六話型、『日本昔話大成』に含まれるものは二十四話型となる。
その内訳は次のとおりである。



(3) 形式

昔話の呼称・発端句・相槌・結末句として採録できたものは次のとおりである。これらは、実際の語りの場とは別に思い出していたいただいたものもあるが、発端句と結末句についてはその多くが、収録された実際の語りの中で使われていたものである。ただし、それは本土に見られるような本格昔話に限定されてはいないし、すべての語りに付随しているものでもない。

おおよそ南島においては、本土のそれに較べて昔話の形式句は未発達であるということがいわれているが、沖縄本島南端に位置する当糸満地方において、かつて、本土とはやや異なった形ながらも、南島独自の、形式句を備えた口

承文芸の世界が育まれ、豊かに持ち伝えられていたことがうかがえるのである。^{注2)}

〈呼 称〉

- ・チテー
- ・チテーバナシ
- ・シカシヌチテーバナシ
- ・トーバナシ

〈発端句〉

- ・昔
- ・昔ね
- ・昔です
- ・昔々
- ・昔、大昔の話になるが
- ・昔あるところに
- ・これは昔々の話ですよ
- ・昔の人の話でね
- ・これ、本当かうそか、これはわからんけどもよ
- ・そんなことあったかなかったか知らないがね
- ・チテードー
- ・グエーサチウンヌケービラ（ご挨拶いたします）
- ・アヌヨーエン

〈結末句〉

- ・昔のお爺ちゃん、お婆ちゃんから聞きました
- ・こういう話聞きました。これは昔話
- ・こういうお話がありますかね
- ・この話もあつたんだって
- ・そんな話もあつたんだがね
- ・そういう話だ
- ・その話もあつたんですよ
- ・そんな話です
- ・ニフエーデービル（ありがとうございます）
- ・ニフエーヤイビータン（ありがとうございます）
- ・ワカイビタンデー（わかりました）

〈相槌〉

- ・アンヤイビーンナー（そうですかⅡ目上の人に対して）
- ・アンヤンナン（そうですかⅡ目下に対して）
- ・アンヤンドー（そうですかⅡ目下に対して）

注

- (1) 福田晃・岩瀬博編『民話の原風景―南島の伝承世界―』（平成八年 世界思想社刊）所収の福田晃氏「Ⅰ 総論 南島説話の伝承世界」にその特質が総合的に分析されている。

- (2) そのことについては、本書解説「三 伝承の系譜・機会」で述べる。なお、福田晃氏はその論攷「沖縄地方の民間説話―その「語り手」をめぐる―」の中で、名護市の山本川恒翁の語りを例にあげ、そこに昔話の叙述の形式が本格昔話を指向する中で笑話も伝説も昔話化して語られ、語りの形式を整えていった形跡をたどっておられる（『日中文化研究』第五号《特集》「アジアの中の沖縄」平成五年 勉誠社刊所収）。また、拙稿「南島説話の伝承者」でも同じ山本川恒翁の語りの発端句と結末句について、その叙述の形式の一貫性を分析している。（福田晃・岩瀬博編『民話の原風景―南島の伝承世界―』平成八年 世界思想社刊所収）。

三 伝承の系譜・機会

松本孝三

(1) はじめに

我が国の民俗文化から、民間説話の伝承の場が失われてしまったといわれて久しい。確かに本土において、かつて昔話の宝庫といわれた地方をみてもその伝承の衰退ぶりはすさまじいものがある。たとえば、平成六年に訪れた新潟県佐渡郡新穂村・同郡畑野町の調査では、かつての昔話伝承の様相が嘘のような現実があった。昔話はやせ細り、断片化している。伝承が今まさに衰亡の危機に瀕しているのであった。畑野町では、かろうじて多田在住の長島タミ嬢（大正四年生まれ）が往年の伝承の一端を示して下さったが、そのタミ嬢も、孫に囲まれて生活するという状況にはなかった。

佐渡といえ、戦前には鈴木棠三氏がいち早く『佐渡昔話集』^{注(1)}をまとめられ、戦後には丸山久子氏が『佐渡国仲の昔話』^{注(2)}をまとめておられた。その鈴木棠三氏は昭和初期の頃の採訪について、「苦勞らしい苦勞を一つもしないで」古老たちの思い出すがままに昔話を記録したという。また丸山久子氏は、敗戦後の日本にはもはや昔話を本格的に語る人がいないのではないかと不安を胸に抱いて佐渡を訪れ、畑野町での岩井キサ嬢との出会いのなかで、その見事な語りを当時の重い録音機に忠実に記録し、師の柳田国男をして強く感動せしめたのであった。しかし、もはや今日の我が国においてはそのような採訪は望むべくもないであろう。

(2) 「むかし」は家の宝

かつて、福田晃氏は、「むかし」は家の宝^{注(3)}と言われたことがある。つまり、昔話を語ることの喜びは、「自ら語ることで、心にあたためていた父母や祖父母の声を聞く」ことであり、そのことが、生きてゆく心の支えにもなつてゆ

くというのである。その意味で昔話はまさしく「家の宝」なのであり、大切な「心の遺産」ともなるのであった。

しかし、今や我が国において、自ら語ることで父母・祖父母の声（語り）を聞くという場が残されているであろうか。この平和な時代にあつて、いわゆる昔話伝承の場が急速に失われて久しい。時は激しく流れているのである。しかも昔話は生身の人間が語るものである。その語るべき口が失われれば、口伝えの文化の伝統はその灯を消してゆかざるを得ないといえよう。

私たちは、昭和六十二年の夏、糸満の地に採訪の第一歩をしるした。そこは、半世紀前の戦争末期に、我が国で唯一あの悲惨な地上戦を経験し、数多くの尊い人命を奪われ、壊滅的な打撃を受けた土地である。そのような体験を持つ地域において果たして昔話といったものが残っているのか、あるいはそれ以上に昔話調査それ自体ができるのか、といったことが大きな課題であつた。今日、平和祈念公園・平和祈念堂などのある摩文仁の丘や、新たにつくられた『平和の礎』^{注(4)}の存在する糸満市を選んだのは、そこがたんに南島における昔話の未調査地域であるということだけではなかったのだ。

しかし、昭和六十二年から平成三年まで、都合四回にわたる立命館大学説話文学研究会の調査結果は、そのような私たちの予想をおおいに覆すものであつた。糸満市という活気あふれる町は、海沿いの旧糸満をはじめ、内陸の農村部、あるいは具志頭村や東風平町、豊見城村に接する地域も含め、沖縄のどの地域にも増して豊かな昔話伝承世界を復活させていたのである。それに伴って優れた伝承者も数多く見いだされた。それは少しく大仰な言い方を許してもらえるなら、恰も敗戦後、口頭伝承の終末を予想した柳田国男が佐渡の昔話に接し、その健在を確認し得た時の感懐にも例えられようか。

いずれにしても、今日、当糸満における昔話伝承の実態は、わずか五十一年前の悲惨な出来事を見事に克服しているもののように感じられたのである。しかしながら、そう考えてしまうことは歴史認識を誤らせることにもなる。それはやはり幻想である。『平和の礎』に、集落ごとに刻まれた膨大な数にのぼる戦争犠牲者の名前を見るにつけ、

失われたものはあまりにも大きいと言わざるを得ない。

沖繩にはかつて、今日の状況と比較にならぬほど、神話・昔話・伝説・史譚・世間話といった、父祖の代から伝えられてきた実に多岐にわたる口頭伝承の世界が豊かに花開いていた。そうして、それらが親から子へ、子から孫へと連綿と語り継がれ受け継がれてきたはずなのである。まさしくそれらは「家の宝」として機能していたと思われる。戦争はそれらを一度は根刮ぎにしまったと考えねばなるまい。今、私たちが糸満市の調査で聞くことができた民間伝承は、その過酷な、筆舌に尽くし難い状況をぐり抜け、なおかつ人々の復興・再生への願いとともに生き続けてきた文化の一端だったのだと言えよう。

(3) 糸満の主な語り手

さて、昔話伝承の系譜は、およそ家系伝承、村落（共同体）伝承、来訪者による伝承の三つに分けて考えることができる。それはまた、昔話伝承の担い手としての語り手と、伝承のなされた場および機会を軸として見てゆくこともある。ここでは、当該地における主たる語り手についてまず紹介し、次項において、伝承系譜ごとに語り手としての特質を考察しながら当該地の昔話伝承の特徴を見てゆきたいと思う。

まず、当該地における昔話伝承の豊かさは、その優れた語り手の多さによって証明できよう。私たちの調査した中でもっとも多くを語って下さったのは豊原の国吉マツ嫗で、四回の調査で延べ七十話を語られた。次いで名城の新垣武登翁の四十二話。次に、三十話以上の語り手を掲げれば、武富の大城トミ嫗、与座の伊敷清保翁、賀数の照屋亀八翁、伊原の玉城ハル嫗がいる。また、二十話以上の語り手を掲げれば、糸満の田場天龍翁、野原由宗翁、福地の上良正光翁、新垣の宮里栄吉翁、糸州の神里カマ嫗、米須の仲宗根善道翁などがあるのである。その他にも、本文例話として比較的数量多く掲げた語り手としては、糸満の金城安彦翁・大城英次翁・上原牛蔵翁、武富の長嶺和男翁、照屋の上江洲由豊翁、国吉の翁長文子嫗、真栄里の島袋仁栄翁がおり、さらに、調査時ほとんどの話を方言で語られたゆえ

に、本書においてはその素晴らしい語りの多くを対訳資料として掲げた方に、小波蔵の伊敷フチ子嫗・伊敷カマ嫗のお二人がある。こんなにもたくさんのお優れた語り手が存在することは調査前には予想もつかないことなのであった。

(4) 家系伝承の中で

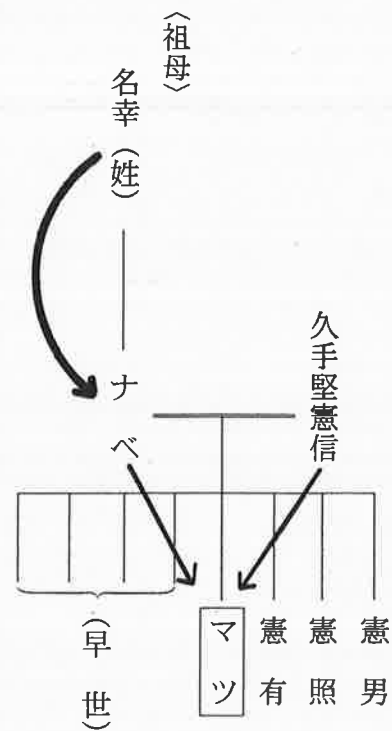
当該地において、伝承系譜の主体はやはり家系伝承によるところが大きいといえる。

まず、豊原の国吉マツ嫗（大正三年九月一日生まれ）について紹介する。嫗は典型的な家系伝承のなかで育った。父母から聞いた昔話を自らの語りの世界に受け継ぎ、昭和六十二年から平成三年までの四回の調査で語られた話数は延べで七十話にもなる。話柄としては、「アカマタ智入（浜下り由来）」「鬼餅由来」「継子話」「姥捨山」「モーイ親方」「子育て幽霊」「ニービチ由来」「十二支由来」「雀孝行」「キジムナーと友達」などの話を得意とされ、本格昔話が中心のまとまった内容の語りであるが、神話・伝説・史譚なども語っておられ、幅広い伝承の世界を持つておられるのである。

マツ嫗は、父親の憲信と母親のナベから多くの昔話を聞いている。ナベはその母親（姓は名幸、名前は覚えていない）から聞いていたという。伝承の機会は、雨降りの日などに父親は縄縄い、母親は芭蕉布を織る手仕事をしている時に、子どもはムシロを作りながら聞いたものである。また、マツ嫗が結婚する時、夏物冬物を半年かけて自分で作ったというが、その時に母親が家事をやりながら語って聞かせてくれたともいう。

話を催促する時、嫗がたとえば、「モーイ親方の話してくれ」と言うとお母さんが話してくれたが、それは芝居で見たものであったという。嫗の語る「モーイ親方」の内容をみると、〈勉強〉〈煙草は一回〉〈嫁取り〉〈薩摩の難題〉〈小便の罰金〉〈草履と下駄〉〈ヌブシの玉〉など、「モーイ親方」の話柄のおおよそ一通りのものを語っておられる。同様のことは「継子話」についても言えた。嫗の語った〈麦搗き〉〈二十日月〉〈毒入り弁当〉〈継子台〉もやはり当該地において聞くことのできた「継子話」のうちの主要な話柄なのであった。

その唄の伝承経路は次のように図示できる。



真栄里の島袋仁栄翁(大正十年十一月二十日生まれ)は、本格昔話の「70 猿長者」の語り出しとその最後に次のような注目すべきことを述べておられる。まず、冒頭の部分では、「それでは、私たちが小さい時に、お正月の、お爺さんやお父さんたちが、年頭の挨拶参りを兼ねての席でよく聞いた昔話をこれから始めます」とあり、話の最後には、「世の中には貧乏してもね、嘆いてはいけなないと、僻んでもいけないと。また、金持ちになってもね、人を馬鹿にするのではない、奢るのではないと。金持ちも貧乏人も助け合って世の中を渡るもんだよというような教訓があつて。いつも昔の年寄りの方々は、われわれの小さい子どもたちにはいつもそういう話を聞かして。そして、われわれもそういう話を聞いて、ああ、そうかなあと真面目にこれを聞いて、今でもうる覚えではあるがまだまだ覚えて、たまには子どもたちにも、また、孫たちにも今現在實際話しております」と述べておられるのである。ここには実に、昔話の語られる機会、伝承系譜、昔話を語ることの意義といったことが見事に集約されているとみることができる。また、翁自身がその祖父や父親から聞いてきた「家の宝」としての昔話を、みずからの子や孫たちに語り聞かせてい

るといった、昔話伝承のあり方からすればたいへん幸せな状況にある様子がうかがえるのである。翁からは話数だけみるとそう多くの話をお聞きしているわけではないが、語られた「猿長者」「モーイ親方(薩摩の難題)」「煙草は一回」(草履と下駄)「アカマタ簪入(浜下り由来)」(鬼餅由来)「雀孝行」「運天港由来」などは、当地方の主要な伝承を伝えておられるのであつた。

翁は市の収入役を勤められ、また、家系は元首里の士族の家柄ということで先祖からの系譜を作つてもおられた。武富の大城トミ唄(明治四十年十月二十四日生まれ)は十三歳で父(当時三十七歳)を亡くし、祖父母に育てられた。そのため、若い時から働き通しだったそうで、学校へも祖父母にお願いしてようやく行ける状態だったという。唄は昔話そのものよりも若い頃の苦労話をよくされ、「今は楽だからいいけど、昔、大変だった頃に亡くなった人たちはかわいそうだよ」とおっしゃる。

その唄は私たちに三十六話を話されているが、祖父母から昔話や世間話を聞いておられ、中でも昔話は主に祖母力マタさんから聞いている。祖母はムシロを作つたり糸を紡いだりしながら、あるいは雨が降って畑仕事ができない時にムシロを作りながら昔話を語ってくれた。作業をしている小屋には孫であるトミ唄や従兄弟たちが集まって祖母の話に聞き入ったというのである。祖父の亀さんは首里に勤めており、無口であり話はしてくれなかったとのことだが、雨が降った時などは昔の侍の話をしてくれたという。夜は家族全員でムシロ作りをしたが、その場では話はしなかったらしい。

唄の祖母は、唄が十三歳の時には六十一歳であつた。その年から唄は働きだし、二十歳で結婚、子どももすぐできたが、唄ご自身も早くに夫を亡くされたので農作業に追われ、子どもたちに話をする暇がなかったそうである。

次に、三十四話を語られた与座の伊敷清保翁(大正十年三月十七日生まれ)の場合は、父母から昔話を相当聞いた覚えがあるということである。特に製糖時期の前には縄を綱^なつたが、一束五十尋綱^なわないと眠れなかったので、その仕事をしながら話を聞いたのである。

翁には家系による伝承のほかに、来訪者伝承といえるものとして、若い頃、宜野湾市から来て農業をしていた天久という人の父親が、面会のためこちらへ来た時、清保翁の家にも来たので、そんな時にその父親から話を聞いたそうである。また、翁の奥さんのスエ嬢は主に父母・祖母からも話を聞いているが、水を貰いに来た近所の人からも聞いたということであった。

照屋の上江洲由豊翁（明治四十一年五月十九日生まれ）は、八重山の西表島白浜生まれで、家業の建築業を営んでいたが、奥さんが照屋の人だったので五十七、八歳でこちらに移住、手が器用なことを生かして六十歳頃から貝などの装飾品作りをしていた。翁の祖父は由信という人であったが、翁は特にこの祖父から八重山にいた頃多くの昔話を聞いたという。それは、子どもの頃同級生に清村君という話上手の少年がいて、クラスの童話会などで活躍していたのに触発され、それに負けまいと、暇であった祖父にせがんで夜昼となく話を聞いたといったことが大きかったらしい。翁は話をされる時に、まず姿勢を正し、「昔、どこそこであった話であります」というふうにおっしゃってから語られるが、それは祖父母から聞いたとおりの語り方であったと言われる。

また、小波蔵の伊敷フチ子嬢（大正十一年二月一日生まれ）は、祖父から寝物語に多くの昔話を聞いていたというし、同じ小波蔵の伊敷ヤス嬢・伊敷ヨシ嬢・伊敷力ミ嬢といった人たちも、昔話の伝承機会としては等しく夕食後や寝る前と言っておられた。

(5) 村落伝承の中で

家系伝承からやがて地域的な広がりの中に話が求められるなかで、村落の内部における伝承・伝播はそれに次いで重要な意味を担っているといえる。糸満においてもそれは、たとえば隣りの爺的な存在であったり、人の集まる場、年中行事などの場であった。

伊原の玉城ハル嬢（大正三年一月十日生まれ）は、本文例話として十二話掲載し、豊原の国吉マツ嬢と並ぶ語り手

である。しかもその話柄の幅は、神話・伝説・本格昔話・笑話に至るまでの広がりを示している。嬢は、家系伝承としては曾祖母にあたる阿佐慶ゴゼイさんから聞いているが、それよりも嬢に特徴的なのは、子どもの頃から青年に至るまで、村落内の社会生活とのつながりの中で多くの昔話を仕入れていることである。子どもの頃は「村屋」と呼ばれる集会所で子ども同士の昔話の語り合いがあったというし、嬢はそこで得意の「継子話」をたくさん自分のものにしており、本書の例話にも嬢の「継子話」が二話掲げられている。「村屋」へは、学校を終え、水汲みなどの仕事をした後、勉強をするために集まったというが、そのような時にも昔話が語られ、子どもたちの耳袋は肥やされていたのである。

さて、青年期になると、青年会の集まりで夕方から十時～十一時頃まで過ごした時に話をしたものであるといい、そんな時に覚えた話の中に「キジムナー話」や「保栄茂タルチー」があった。「キジムナー話」などは肝試しとして話されたという。

東里の上良ヒデ嬢（大正十二年五月十五日生まれ）のお話によると、昔話は、新屋かつひこさんという話好きのお爺さんがおられ、モーアシビの時によく語ってくれたそうである。それは嬢の娘時代のことであった。

また、賀数の照屋亀八翁（明治四十四年七月十日生まれ）の場合は、夕涼みの時、近所のおじさんから話を聞いているし、真栄平の喜納サト嬢（大正五年三月十日生まれ）は、旧暦八月十五日のウマチーの時にサト嬢の家がその練習の場所になり、たくさんの人々が集まった折り、年寄りどうしが集まって話がされ、嬢はそのような機会に話を聞いたという。

福地の上良正光翁（大正三年六月十五日生まれ）の伝承経路も、お祝いなどの寄合の場に皆が集まっている時、誰からともなく出てくる話を聞いて覚えたとのことで、特に女性から聞いた話が多かったそうである。また、翁の家は門中の元家であり、二月十五日、三月十五日、五月十五日、六月十五日のウマチーは、崎城（さきぐすく）へ行って行なうということだが、そんな折りにも話を聞く機会があったとのことである。しかし、それも戦前までのことで、

戦後はもうしなくなったという。

国吉の翁長文子媼（大正五年一月七日生まれ）の伝承も集落内の年寄りからで、話好きのお爺さんが村の中におられ、やはり門中の集まりなどの時にその人から昔話などを聞いたという。また、「仲順流り」は、真栄里での聞き取りでは、旧暦七月のお盆に村人たちが踊りを踊りながらこれを唄っていたということである。

ところで、学校の先生も子どもたちにとってはその伝承の話柄の広がりによって重要な位置を占めている場合が多いといえるが、武富の長嶺和男翁（大正三年六月八日生まれ）は、十二・三歳の頃、尋常高等小学校の賀数直という先生から「渡嘉敷ペークー」や「名護親方と具志頭親方」「モーイ親方」などの話を聞いたことを覚えておられた。翁は親戚の叔父さんで、兼城の初代の地頭代だった大嶺親平という人からも「継子話」などを聞いたという。

当該地においても、その村落伝承をみると、実に様々なかたちでの伝承状況が知られるのである。

(6) 村落外伝承・来訪者伝承

糸満漁民の名で知られるように、特に旧糸満地域に生まれ育った人々には、常に外の世界を目指す進取の気象に富むところがあるようである。

糸満の上原牛蔵翁と上原亀広翁の兄弟の伝承には、漁師を生業とされていた人としての特徴がみられる。お二人は那覇市教育委員会の伊芸弘子氏を中心に、すでに昭和五十九年、『糸満市史（民俗資料）』の聞き取り調査を通してともに優れた語り手として知られていた。

上原牛蔵翁（明治三十八年八月十五日生まれ）は糸満の地に生まれ、元追い込み漁の頭を勤めた人である。十四、五歳の頃から海に出て網元の総領として鍛えられ、若い時分に無人島で潮待ちをする時など、先輩からしばしば話を聞かされたし、自分もやがてその役になってからは若い連中にしよっちゅう話を聞かせてきたという。私たちの調査で語って下さったのは、「普天間権現に助けられた話」や「フ力に助けられた男」といった話で、いずれも船に乗っ

ていて遭難し、無人島に漂着、やがて苦難の末に神あるいはフ力の助けによって帰還するといった話で、いかにも海の生活を彷彿させる伝承である。そのほかには、例話として紹介はできなかったが、「唐話（天まで届く帽子）」という大話や、同じく「唐話（果てない蟻）」という果てなし話ふうなものをお聞きしている。

ちなみに、伊芸弘子氏などの調査された資料を見ると、たとえば「ウファガリ島の話」「黒潮太郎の話」は私たちの聞き取りした二話と同じものであり、また「那覇の海を貰った糸満のヤブ」は先の二話と同様、海にまつわる伝承といえる。ほかには「三穂田の始まり」「人間の始まり」「ルカ島の話」などといった神話的伝承、「火正月」「三月三日の浜下り由来」「鬼餅由来」「仲順流り」「宮古の豊見親の話」（犬簀入）といった本格昔話といえる伝承、「白銀堂の話」「真玉橋の話」「京阿波根親方の話」といった伝説、「生き返った人の話」「後生へ行つて来た人の話」「ギジムナーの話」といった因縁・化物譚的な伝承、「火玉の話」のような世間話、さらには私たちもお聞きしている「唐話」なども報告されている。その海の伝承における幅の広さ、話柄の豊かさはやはり当地を代表するにふさわしい語り手の一人ということができよう。

弟の亀広翁（明治四十年一月十日生まれ）も、兄の牛蔵翁と同様漁業を生業としておられた。亀広翁は十四歳で漁師になり、漁にでかけたが、そのような機会に三十〜四十歳代の人たちから話を聞いたものという。翁の伝えている話には笑話的なものや、やや世間話的なものが多いようであるが、漁師仲間の話す話がそのような傾向のものだったのであろう。お聞きした話の中には、「渡嘉敷ペークー（ルカ島返し）」という、笑話というよりもいくぶん神話的な伝承や、「文徳マサー（空手の修行）」「糸満マギー」といった笑話的な話、「平良シカマグチ」といった因縁化物譚といえる話、「後生バーリー」「国吉坂の遺念火」「新島の火の玉の話」といった世間話、それに「糸満やといの始まり」「北極星について」といった海の仕事や民俗に関する説明などがあつた。

翁は漁が終わって家に帰れば父親の徳七さんから話を聞いたという体験もあり、家系伝承の中でも話を自分のものにしていくようだが、漁団を編成して慶良間・渡名喜などに漁に行き、無人島に小屋を造って、夜はいろんな話を聞

くことが多かったということから伝承の主流はやはり本格昔話よりもこのような傾向の話が多くなったのであろう。^{注(4)}

米須の仲宗根善道翁（大正二年二月十九日生まれ）の場合、喜屋武殿内出身の人から軍隊で一緒の時に話を聞かされたという経験を持っておられる。善道翁は生まれも育ちも米須であるが、終戦後は一年間を捕虜としてハワイにも過ごしたという。長く博労をされ、沖縄のほとんどの地に行ったことがある。趣味は三線で、弾くことはもちろん楽器の収集もされていたそうである。調査中にも祝い節などの弾き語りをして下さったりした。その翁の語った話にはたとえば「名護親方と具志頭親方」や「米須按司の敵討ち」「かぎやで風節」といった史譚があり、一方では「保栄茂タルチー」「文徳マサー」といった笑話も多く、いわゆる本格昔話は少ない。そこには、広く世間を渡り歩いた人としての特徴が現われているとみることができよう。

村芝居なども、話の伝承・伝播に一役買っている。賀数の照屋亀八翁によれば、賀数からすぐ東にある東風平村当銘でやっていた村芝居で「モーイ親方」を見たという。これは当銘村の青年たちが舞台を作ってやったもので、八月十五夜にやったものであるらしい。賀数では村が小さく青年も少なかったのでやらなかったという。また、「モーイ親方」の芝居は那覇市内でも見たことがあり、糸満のほうにも芝居がやって来たという。また、大力で知られる「糸満マギー」なども、糸満の大城英次翁や上原亀吉翁、米須の仲宗根善道翁の話によれば、芝居で演じられていたということであった。

北波平の大城清助翁（明治四十年十一月六日生まれ）も、昔話は父親の八郎さんから、「昔、こういうことがあった」というような言い方で話を聞いたそうであるが、一方で、「継子話（蝶の霊）」（例話に掲げていない）という話は、旧暦の七月十三日、八月十五日のシシマイの時に、素人芝居でやっているのを見て覚えたものという。その梗概は、継母が下男に、墓参りをさせてやるから継子を殺せと命令。継子は自分の境遇を実母の墓で嘆いていると、実母の霊が蝶になって助けてやると語る。下男が継子を斬り殺そうとすると蝶が現われて下男の刀を防ぎ、下男はそのショックで死に、継母も蝶に襲われて死んでしまうというものである。

南波平の伊集スエ嬢（大正二年十月十日生まれ）の場合は、父親が芝居を作って演じる人であったということがかがっている。

このように、糸満の人たちが他の地域へ行くことによって、あるいは村芝居などのように、外の世界から訪れる人々、あるいはそれを取り入れることによって当地方における伝承世界は確かに広がりが増し、豊かなものになっていったといえるのである。

(7) 昔話の形式について

さて、当該地にはこれまで述べてきたように多くの優れた語り手たちがおられた。しかも調査の中でわかってきたことは、これまで本土に較べ南島においては乏しいと言われてきた語りの形式が、それなりにここでは見られるのではないかとということであった。

昔話の形式について、まず豊原の国吉マツ嬢によれば、昔話の呼称は「チテー話」「ンカシヌチテー話」（昔の伝え話）と言った。そして、昔のお年寄りたちは、昔話を語り始める前には、「グエーサチウンヌケービラ」（ご挨拶いたします）、語り終わると「ニフェーデービル」（ありがとうございました）とか「ワカイビタンデー」（わかりました）とか言い、また、途中の相槌には、「アンヤイビーンナー」（そうですか）目上の人に対して、「アンヤンナン」（そうですか）目下の人に対して、「アンヤンドー」（そうですか）目下の人に対して」といった使い分けがあったというのである。

照屋の上江洲由豊翁（明治四十一年五月十九日生まれ）の場合は、昔話を語る時、最初に、「昔（昔々）、どこそこであった話であります」と言って姿勢を正されたが、それは翁の祖父母から聞いていたとおりの語り口であったという。例話として掲げた中にも、その語りの始めと終わりに翁に特有の型と思われるものが見られる。たとえば、

「33 北谷王子と黒鉄座主」は「昔」で始まり、「そのくらい力が、この黒鉄座主というのはあったらしいですね」と

結ばれ、「40 名護親方と具志頭親方」も「昔」で始まり、「無事に中国からの派遣されて来られた方にもお見せすることができたというお話です」と結ばれている。また、「101 モーイ親方（マブイの恩返し）」も「昔」で始まり、「こういうお話がありますがね」と結ばれ、「111 逆立ち幽霊」も「昔々」で始まって、「それからもう、逆立ち幽霊というのは出なかったというお話です」と結ぶ。さらに、「90 モーイ親方（薩摩の難題）」では、発端句はないがその末尾は、「どうどうと琉球国に、大きな使命を果たして帰って来たというお話でございます」と結んでいるのである。それらは必ずしも本格昔話だけに限定されてはいないが、翁なりに冒頭を「昔」と語りだし、特に語り納めのところは相当意識して、「……（で） あつたらしい」とか「……というお話で（ございま）す」といった形を、発端の句に対応するかたちで使っているように見受けられるのである。いわばそれは、翁に取つての語り結びの文句とも見られよう。^{注6)} 同様のものが武富の長嶺長行翁（大正二年四月四日生まれ）の語る笑話「121 ナヴァーグワの知恵（イ）（尻拭き）」にも見られ、そこでは「昔ね」と語り出され、「もう、私としてもこれは話ですがね、今から百二三十年前だと思っております」と結ばれている。

与座の金城幸徳翁（大正八年四月七日生まれ）の場合もやはりその語りの発端句がきちんと語られている。例話でみると、伝説に分類した「6 暁城の名の由来」は「昔々」、「13 火返し（ヒーゲーシ）御願」でも「これは昔々の話ですよ」とあるし、武富の長嶺和男翁（大正三年六月八日生まれ）の場合も、そのいくつかには「昔」という発端句が付けられている。それらの話は必ずしもすべてが本格昔話というわけではなかった。しかしそこには、たとえば伝説なども昔話的世界のものとして享受しようとする一面がうかがえるようなのである。^{注6)}

ところで、同じ発端句でももつと別のかたちのものを見てみると、小波蔵の伊敷フヂ子唄（大正十一年二月一日生まれ）は、本格昔話の「69 大年の客」で、「あるお正月の夜にね、これ本当かうそか、これはわからんけどもよ、お爺さんから聞いた話だからよ」と語り出している。これはいかにも本格昔話の語り出しにふさわしいといえよう。ところが、同様の言い方は、糸満の上原カツ子唄（大正五年三月十日生まれ）の語る因縁・化物譚の「116 キジムナー

と友達（口）」にも、「私も小さい時分に聞いた話ですから、ほんとうかどうか知りませんけど」とある。また、同じような言い方を、与座の伊敷清保翁（大正十年三月十七日生まれ）は、例話「12 左御紋の始まり」で、「そんなことあつたかなかつたか知らないがね」と語り出しており、最後を「左御紋の始まりはこれだつたそうだ」と結んでいるのである。これも伝説として語られ、左御紋の由来を説く話でありながら、話者は昔話的な感覚でこの話を受け入れているようにも思えるのである。

ちなみに、同様の言い方を豊原の国吉マツ唄は、本格昔話の「56 継子話（麦搗き・二十日月）」の最後に、「そんな話やつたが。ほんとに嘘かわからん。聞いたただだから」というふうに使っていた。そこにはやはり、虚構の世界で語られる昔話としてそれらの伝承を受け入れようとする姿勢がうかがえるのではないかと思うのである。

これらの例はあくまでも個人的な使われ方ともみられ、当地方全体での語りの形式の傾向を指し示すということではないが、沖縄の他地域の例、それに当地方の優れた語り手の口を通してみれば、本土における形式句のあり方とはまたおのずから異なつた、独自の語りの形式というものが南島にも存在しており、そしてその一端は確かに糸満の地においても育つていた証左ともなるであろう。

(8) おわりに

以上みてきたように、当該地における昔話伝承の現状は、これまで、私たちが主に本土を歩きながら味わってきた「伝承の終末」とでも言えるような状況とは違い、私たちにまだ沖縄地方での調査の可能性を示唆するものであつたといえよう。まだ南島には伝承が生きているといえ、それを語り伝えるべき人々も今なお健在といえるのであつた。しかし、いつまでもそのような状況が続くわけではないことは、私たち自身が南島を歩きながら強く感じていることもまた事実である。いずれ、遅かれ早かれ昔話伝承が終焉を迎えるであろうことは否めないのである。言うなれば、半世紀前の「鉄の暴風」とはまた異なる暴風が戦後の日本列島を吹き荒れ、今また南島をも巻き込んで吹き荒れてい

るとみられるのである。

注

- (1) 昭和十四年、「佐渡民間伝承叢書」第二輯として民間伝承の会より発行。昭和四十八年、日本昔話記録5『新潟県佐渡昔話集』として三省堂より復刊。
- (2) 昭和四十五年、「昔話研究資料叢書」第三輯として三弥井書店より発行。
- (3) 『京都新聞』昭和五十八年十一月十八日付け夕刊コラム。
- (4) お二人の詳細は福田晃氏「沖縄地方の民間説話―その「語り手」をめぐって―」（『日中文化研究』第五号《特集》「アジアの中の沖縄」平成五年、勉誠社刊）に述べられている。
- (5) 福田晃氏注(4)のご論攷、および拙稿「南島説話の伝承者」（福田晃・岩瀬博編『民話の原風景―南島の伝承世界―』平成八年、世界思想社刊）において、沖縄本島と八重山地方の語り手の事例をもとに、語り方における一定の型の存在を考察している。（本書解説「二 昔話採訪記録」の注（2）参照。
- (6) 岩瀬博氏「南島説話の文芸性」（『奄美沖縄民間文芸研究』第十九号所収。平成八年）で、真实性を強調する沖縄の説話世界において、それを伝える者も聞く者も、真摯なハレの心意と厳粛な態度を保ちながら、話を楽しむ心情を内蔵しているのではないかと述べておられる。その論旨は叙述の内容に関わつてのものであるが、このような形式句の面においても参考になろう。

四 糸満説話の伝承世界

福田 晃

(1) 伝承のジャンル

日本本土において民間伝承は、伝説・昔話―本格昔話・化物因縁譚・笑話・鳥獣草木譚を含む―世間話の三つに分類される。しかるに沖縄においては、神話が民間に息づいており、かつ史譚が伝説の枠を越えて伝承されており、この二つを加えて五つに分類される。そこに沖縄における伝承上の特質があると言えるが、その民間説話は、しばしばチティイバナシ（伝え話）と総称されており、そのジャンル間の異同が明確には示し得ないものとなっている。つまりその点にも、沖縄の伝承上の特質がうかがえると言える。

右のごとくではあるが、本書は、一応、その五つの分類にしたがい、かつ昔話の枠をはずして、各話を八つのジャンルに収めている。したがってそれは、一応の伝承の範囲を示すものであつて、その分類は融通性を有するものと言わねばならない。

(2) 神話の伝承

1「アマミキヨとギジムナー」は『琉球神道記』巻五（キンマモン事）、『球陽』巻一（琉球の分野及び開闢）、『おもしろさうし』巻十（昔初まりや）などのアマミキヨ・シネリキヨ創世神話、『中山世鑑』巻一（琉球開闢之事）のそれと一連のものと言えるが、それは、

昔此国初。未ダ人アラザル時、天ヨリ男女二人下リシ。男ヲシネリキユト、女ヲアマミキユト云。二人舎ヲ並テ居ス。此時此島。尚小ニシテ。波ニ漂ナリ。爾ニ。タシカト云木ヲ現ジテ。殖テ山ノ麓トス。次ニシキユト云草ヲ殖。又阿檀ト云樹ヲ殖テ。漸ク国トス。二人。陰陽和合ハ無レドモ。居所並ガ故ニ。往来ノ風ヲ縁シテ。女胎

ム。遂ニ三子ヲ生ズ。

と叙する『琉球神道記』の〈キンマモン事〉の条に近い。しかし、伊集守吉翁の語りによると、それは『中山世鑑』の〈琉球開闢之事〉に見える阿摩美久の国作り神話の「久高コバウ森」に準じながら、アマミキヨがお産をするとき、太陽や月に見えないように、ヤナブーという固い木を肩に担いだという。そして、ギジムナーは、この神の木を今に守っていると伝える。文献伝承にはうかがえない神話伝承と言える。

2 「稲の始まり」は、玉城村百名の受水・走水、三穂田とかかわる「鶴の落し穂」伝承によるものである。今も百名の大前家を中心となり、この伝承にしたがう「天親田」のクエーナにもとづく稲作予祝儀礼が、毎年正月にいとなまれている。しかるに、『中山世鑑』の〈琉球開闢之事〉には「阿摩美久、天ヘノボリ、五穀ノ種子ヲ乞下リ、(中略)稲ヲバ、知念大川ノ後、又玉城ヲケミゾニゾ蒔給」とある。また、『琉球国由来記』卷十三「玉城間切」の項には、上古、阿摩美久、ギライカナイヨリ、稲種子持来、玉城間切、百名村之人、作ヤウ教ウケ、溝・小マシ田、苗拵、稲蒔、百日成時苗取、浜川ウラ原親田、高マシノマシカノ田ニ、稲植初也。

とあり、四月稲ミシキヨマの時、琉球王が当地に御行幸なさるのはこの由来によるという。しかして、「其故、教ラレシ人ヲ、阿摩美久ヨリ、名ヲ米之子ト給タル由、伝来也」とし、「毎年五月、稲穂祭之時、高マシカマノ田ヨリ、稲之穂三筋、米之子家取来、巫火神(玉城)ニ祭奠也。是ヨリ稲穂祭、始タル由也。米之子末孫、于今連綿也」とある。この米之子家とは、先の大前家に当ると推されるが、鶴の穂落しによる民間伝承と阿摩美久伝来という記載伝承の異同が注目される。

3 「五穀の始まり」は、『琉球国由来記』卷一「王城之公事」(行幸于久高嶋)、同卷十三「知念間切」(中森之嶽)、『琉球国旧記』卷三「公事」(二月王幸於久高嶋)などに見えるアナゴノ子、アナゴノ姥夫妻の五穀(七種)の壺発見譚ともかわるものであるが、新垣武登翁の語りによると、百名シラタルとあれば、むしろ『遺老説伝』卷二、第七十三話に準ずるものといえよう。すなわちそれは、昔、百名の白樽と玉城按司の孫娘との夫妻が、東海に小島を見つ

け、小舟にて渡島し、海浜の貝類を食して毎日を暮らしていたという。しかして、

夫婦、共に伊敷泊に到り、以て子孫繁衍・食物豊饒を祈る。未だ尽くは祈り畢らざるに、忽ち一白壺の波に随ひて浮び来る有り。(中略)婦女、喜びて其の壺を執り、其の蓋を控開するに、内に麦三種(一は小麦、一は葉多麦、一は大麦)、粟三種(佐久和、餅也、和佐)、豆一種を載す。(中略)此よりの後、五穀豊饒し、子孫繁衍し、遂に以て邑と為る。之れを名づけて久高島と曰ふ。其の長女於戸兼、専ら祝女職に任じ、各種の祭祀を掌る。長男真仁牛は、父の家統を継ぐ。其の子孫、延きて今世に至るまで、外間根人なり。

と叙されている。しかるに新垣翁の伝承話は、シラタル夫妻の久高島の渡島を南山王滅亡の折に、戦乱を逃れてのこととしている。これは兄妹始祖の漂着伝承にしばしばうかがえるものであれば、あるいはこれには兄妹漂着の叙述が複合しているともできよう。

4 「大力のイッカンウェーブ」とジョウサグンウェーブ」は、一般には「大人の足跡」とか「ダイダラボッチの奮担ぎ」などと称する巨人伝説に属するものである。しかしそれが照屋の御嶽に門中の宗家によつて祀られているのであれば、それは巨人神話に属すべきものであらう。ちなみに『琉球国由来記』卷十二「兼城間切」(照屋之嶽)の項には、「神名、サトシキ若御イベ」とある。

(3) 伝説の伝承

5 「糸満の地名由来」は、地名が聖地に由来することを説く伝承である。蟹は聖水の主、その聖なる蟹が糸満のごとくに湧出させた泉水が糸満のウブガーと伝えるのだ。つまりその聖水を生命の源とするゆえに、当地を糸満と称したというのである。6 「暁城の名の由来」も、城名もまた聖地に由来することを説く伝承である。が、これは聖なる鳥の鳴き声として、城の聖名を説明する伝承なのである。

7 「与那原の綱引由来」、8 「小波蔵の綱引由来」は、いずれも聖なる綱引き由来を説くのであるが、前者は大城

按司の娘の悲劇を言い、後者は兄妹の愛の深さを言う。また前者は沖縄固有の豊年祭、後者は薩南地方に連がる十五夜祭と異同するものであるが、いずれも収穫祭における聖なる神占の意義を有していたことは動くまい。

9「阿波根の飯石の由来」、10「金の砥石」は、いずれも石の聖性を説く伝説である。前者は成長する石の伝説、後者は財宝をもたらす石の伝承である。11「フチャギ餅の由来」は、ハレの食物の聖性をめでたい過去の出来事で説き、12「左御紋の始まり」は、左御紋の聖性を敗軍の大将の悲劇で明かす。ハレの聖性は、つねに幸福と不幸の狭間にあるというのであろう。

13「火返し御願」は、ヒーゲーシ御願の由来として語られているが、一般には嫁の心がけによつて火の玉が退散してきたという昔話として伝承されるものである。14「七月お盆の始まり」は、亡父のために孝行息子が始めたと言くもので、エイサーの念仏歌「親の御恩」「孝行念仏」に通じる。ちなみに本土においては、『盂蘭盆経』にもとづく亡母のために目蓮尊者が始めたとする伝承が一般的である。15「位牌の由来」は、本土の「鯛の頭も信心から」（つまりない物も信心の対象となればひどくありがたく思われる）という諺に準ずるものである。なお、「位牌の由来」は、一般にははからずも川に落ちて死んだ親を、その川で拾った板ぎれを形見として祀ることにしたという昔話として伝えられている。

16・17「二ービチ由来（イ）（ロ）」は、特に久高島の結婚習俗として伝えられるものである。久高島では、嫁入りのミジムイ（水盛）の儀礼のあと、花嫁は友人に囲まれて仮宿に行き、そこで二口過ごし、三日目の朝実家へ戻るが、その晩から夫の知らぬ所へ身を隠す。一週間か二週間すると見つかるようにするが、早く見つかつてはならぬというのである。

18「伊原の喜納ワタブトウの土地分け」は、伊原の英雄の事蹟として伝えるのであるが、一般には「ミルクとサーカの土地分け」として語られるものである。19「糸満のヒーダチ御願」は魚を追い払う拝みの由来、20「ユードレ墓の由来」は、死者に手拭を被らす習俗の起源を説くもの。21「波平玉川の由来」は、著名な組踊「手水の縁」とかか

わるもので、それによると、男は波平大主の一人息子の山戸、女は森小屋の玉津である。

22「遊女墓の由来」は、昔話「枯骨報恩」に準ずるものであるが、これは沖縄市山内にある遊女の墓、竹林塔の伝説として伝えるものである。ちなみに頭蓋骨が筍に刺されて「東風吹かばみ頭ぬ痛むい」と歌っていたという伝承は、はやく伊波普猷氏が「東風と死人の頭痛」（『島』第一巻第二号、昭和八年六月）に、

子供の時分、能くきかされた話だが、髑髏の下から孟宗竹が芽を出し、ぐんぐん延びて、髑髏を一丈余も突上
げた時、その亡霊が、

東風の吹けば み頭の痛みゆり さんか珍しややだもならぬ

と口号んだ、といふことがある。（中略）こんなに高く上つて、東風に吹かれると、頭痛がして、気持ちよくないが、さんがが珍しくて、実に何とも言えない、ということである。（中略）散界は定界に対する語で、下界の同義語だが、夙に南島に入つて、さんかに転化し、……

と述べている。これに先立って島袋源七氏は『山原の土俗』（郷土研究社 昭和四年刊）において、この話を「唄を歌う骸骨」と題して紹介している。昔樵夫が大宜味村字喜如嘉の山奥で、大川ペークという恐ろしい所に入ったとき、背後から女の歌う声を聞く。振り返ってみると、二、三間ばかり離れた後方の木に髑髏がかかっていた。よく見ると、鼻穴からは小さな枝がさし出ている。その唄は、

東風ぬ吹きば御髪んやむい
三日水ふしや飲みんならぬ

というものであった。伝える所によると、喜如嘉の女が薪取りに行き、毒蛇に撲たれて死んだが、発見されず、そのままそこに白骨となつてしまったらしい、というのである。日本本土では、これに類似した話ははやく『日本霊異記』下巻第二七「髑髏の目の穴の筍を掲ぎ脱ちて祈ひて霊しき表を示す縁」に見えている。それは「枯骨報恩」の話型にあるものであるが、髑髏に筍が刺さつて「目痛し」と叫ぶ声がしたとする、いわゆる「あなめ」説話は、はやく

『古事談』第二に見える。それは業平が奥州で、小野小町の屍に出会ったこととし、その歌は「秋風の吹くにつけてもあな目あな目」というのであった。

23・24・25「真玉橋の人柱（イ）（ロ）（ハ）」は、豊見城村と那覇市を結ぶ要路の国場に架かる真玉橋の伝説。本土の「長良の人柱」に準ずるもので、その伝承は平安時代に遡る。その伝説は自ら物言った者が人柱とされたというものであるが、やがてそれは、親の遺言ゆえに物言わぬ娘が後日譚を添える昔話として伝承されるに至った。この「真玉橋の人柱」は、昔話化した「長良の人柱」によると言えるが、芝居・演劇として上演された「真玉橋由来記」との響き合いも留意される。25・26「白銀堂由来」は、これも昔話「話千両」を伝説化して伝承するもの。はやく、『遺老説伝』外附巻・第一三六話に見えており、これによると、倭人より銀を借りた人物は幸地村の美殿、その教えは「心怒れば、則ち手を動かす勿れ」とあり、「倭人、因りて名づけて白銀堂と曰ひ、遂に威部と為して尊ぶ」と結んでいる。28「普天間権現由来」は、宜野湾市の普天間宮にまつわる伝説で、ウナイが夢のなかで、船旅で台風に漂っている兄弟イキリを助けているとき、母親が起こしたために、口にくわえていた長兄を殺してしまい、第二人は無事に戻り、長兄だけは戻らなかったという。いわゆるオナリ神信仰とかかわる伝承である。なお、『遺老説伝』巻一、第三五話には、安谷屋村の貧しい夫婦が、普天間権現の化身から黄金を得て幸福を得た話と、首里桃原邑にだれにも見られようとしない美しい女が、はからずも妹の夫に姿を見られたことを恥じ、普天間の洞内に入つて二度と現われず、人々が神とあがめたとする話とが載せられている。その前者は『琉球国由来記』巻十一「諸寺縁起」へ「普天満山三所大権現縁起」、『琉球国旧記』巻七「寺社」へ「普天満山三社並神宮寺」にも見えるが、野原由宗翁の伝承は、むしろ後者のそれを複合したものと見えよう。

29「運天港由来」、30「婿入り橋の由来」は、舜天王の父と伝える源為朝にかかわる伝承。その為朝の事蹟は、すでに『中山世鑑』巻一「南宋淳熙十四年丁未舜天御即位」、『中山世譜』巻三「舜天王。附記」に見えている。たとえば、島袋仁榮翁の伝承とかかわる記事をあげれば、

○ 舜天尊敦ト申奉ルハ、大日本人皇五十六代、清和天皇ノ孫、六孫王ヨリ七世ノ後胤六条判官為義ノ八男、鎮西八郎為朝公ノ男子也。（中略）暫ク命ヲ助テ、可被遠流ト、議定有テ、伊豆ノ大嶋ヘゾ被流ケリ。（中略）永万ノ比、嶋嶼ヲ征伐シ給ノ次ニ、舟、潮流ニ従テ、始テ流虬ニ至リ給。（中略）従之事、草ノ、風ニ靡クニ、不異。爰ニ於テ、為朝公、大里按司ノ妹ニ通ジテ、男子誕生有リ。尊敦トゾ付ケル。（中略）為朝公、故郷ヲ、慕心ヤ出来ニケン。妻子ヲ具シテ、順風ニ帆ヲ上、一里計モ走リケルガ、俄ニ北ノ方ヨリ、黒雲立覆トゾ見エシ、風アラク、浪ウツマキ、吹返シテケレバ、（中略）妻子ヲバ、牧那渡の浦ニ下シ、形見ノ物ヲ与ヘ、命アラバ、又モ相見ントテ、暇申テサラバトテ、順風ニ帆ヲ挙タレバ、卒ニ帰郷ヲゾ、メサレケレ。女房モ、別ノ涙ヲ押ヘツツ（中略）浦添ヘノボリ、（中略）其子、漸ク十年余リニモ成リヌレバ、（中略）御歳十五ト申スニ、国人是ヲ尊ンデ、浦添按司トゾ申ケル。（『世鑑』）

○ 舜天王之父。為朝公。（中略）投崇徳院。以助其戰。寡不勝衆。大敗被擒。諸將受誅。公見流于伊豆大島。宋乾道元年乙酉。公駕舟以遊。暴風遂起。舟人驚恐。公仰天曰。運命在天。余何憂焉。不数日。飄至一處海岸。因名其地。曰運天。即今山北運天江。乃公之所飄至也。公上岸。偏行國中而遊。国人見其武勇。尊之慕之。公通于大里按司妹。而生一男。……（『世譜』）

などとある。しかし、そこにはワタキナ森や婿入橋などは見えてはいない。つまりそれが文献を越える伝承なのである。

(4) 史譚の伝承

31「かぎやで風節」は、王の前で謡われるので御前風とも言われる琉歌楽曲の一つ、カジヤディフーぶしの由来をいうもの。物言えぬ啞王子ゆえに、王位継承を拒まれた尚元が、重臣の大新城親方の励ましに、ついに言葉を発したという。そのときに大新城親方が喜びのあまり謡ったのが、

今日ぬほこらしやや なうにぎやなたてる

蕾で居る花ぬ露ちやたぐとう

であったという。このときの曲節が「かぎやで風節」になったと伝えるのである。またこの王位継承事件は、「チーグー王」と題してしばしば芝居・演劇に演じられてもいる。ちなみに大新城親方は、尚清・尚元二代の三司官を勤めた人物で、その呼称は再任後のことで、先には池城親方と称されている。生年は不祥であるが、没年は、尚元十二年（一五六七）である。なお、日本本土にも物言えぬ啞王子の伝承が『古事記』中巻（本牟智和氣王）、『日本書紀』卷六（垂仁記）に掲げられている。しかしその本牟智和氣御子、誉津別皇子がはじめて言葉を発するのは、空行く鶴の声に誘われてのことであったとする。

32・33 「北谷王子と黒鉄座主（イ）（ロ）」は、これも「悟道院変化」などと芝居に演じられたもの。尚敬王は第二尚氏王統十三代の王、在位三十九年（一七一三〜一五二一）。北谷王子はその弟。おそらくこれは、歴史的事件を伝承化したものである。34・35 「京阿波根親方（イ）（ロ）」は、本土の将門伝説・弁慶伝説などにもみえる鉄人伝奇譚に属するもの。沖縄では八重山・竹富島のハザマ御嶽に祀られる根原金殿の伝承がはやく知られるが、右の伝承例話は国頭郡金武村の「儀部鉄人」に類する。それは、「生きて千人、死んで千人」、本土から押し寄せた軍勢を退けたとするもので、その軍勢を薩摩からとする伝承は、慶長一四年（一六〇九）における島津の琉球侵攻にことよせたものと言える。ただし、この京阿波根親方は、尚真王（在位、一四七七〜一五二六年）の家臣・京阿波根親雲上実基の謂い。『琉球国旧記』卷五「古城」「瀬長城」によると、豊見城の瀬長按司の子孫と伝え、同書卷一「首里」（京阿波根塚）によると、嘉靖年間（一五二二〜一五六六）、尚真王の命により、上京して苦心惨憺の末に剣冶金丸を獲得して帰国したという。しかし、その剛直な性格ゆえに暗殺され、その遺骸は時の女君神によって坊（町）外の地に葬られたと伝える。36 「内間金丸」も、前項の「京阿波根親方」に準ずる鉄人伝奇譚。ただし内間金丸とは第二尚氏第一代の王・尚円王（在位、一四七〇〜一四七六年）の俗称であるゆえ、ここには伝承上の屈折がある。一般には、東風平町富盛の八重

瀬城に拠った英雄力ニカマドの事蹟として伝えている。

37 「大里嘉手志川と金屏風」、38 「綱の始まり」は、いずれも中山王の事蹟として伝えるもの。前者は、第一尚氏王統を創始した尚巴志王（在位、一四二二〜一三九九年）の前身・佐敷小按司の巧智譚として伝えるもので、一般に昔話「藁しべ長者」（三年味噌型）にしたがうものである。これによって佐敷小按司は南山王を滅ぼし、やがて三山を統一したというのであるが、後者もその巧智譚と連動して尚巴志王の事蹟として伝承されたものであろう。

39・43 「名護親方と具志頭親方（イ）（ホ）」は、それぞれに巧智譚をもつて伝えられる二人を名護親方を中心に対照して伝えるもの。名護親方は本名・程順則、一六六三年那覇久米村に生まれ、再三、中国に渡って漢学を学んだ碩学。江戸にも上つて新井白石らとも交流し、本土にもその名が知られた。尚敬王の信頼も篤く、久米村総役を勤め、紫金大夫（三司官座敷）・名護間切総地頭職に任じられ、一七三四年に没している。名護聖人とも称せられた。一方、具志頭親方は本名・具志頭文若、唐名・蔡温、一六八三年、久米村に『中山世譜』の編者・蔡鐸の次男として生まれ、陽明学に通じた行政官として活躍。はやく尚敬王の国師を勤め、やがて三司官に任じられ、王家とも姻戚関係を結んで、その朝政を補佐したのである。一七三四年、和学に通じた首里出身の平敷屋朝敏らによる投書事件には、首謀者以下一五名を極刑に処することがあり、これが伝承例話にも影を投じているのである。

44 「米須按司」は、『琉球国由来記』卷五「古城」（米次城）、『遺老説伝』卷一・第二四話にも見えるもの。ただし仲宗根善道翁の語りによると、夫人に横恋慕した人物は隣の大度按司とするが、『旧記』『説伝』には、「我瀬之子」とあり、「犬の死体発見」のモチーフは見えていない。が、米須按司夫人の事蹟として叙する点では一致する。しかるに、この伝承例話は奄美から沖縄諸島に及んで、木の精の由来を説く昔話「妻の仇討ち」として語られている。つまりこの「米須按司」は昔話の史譚化・伝説化したものと認められるのである。

45 「瓦屋情話」は、一般によく知られている瓦屋節由来である。その瓦屋は、那覇・泉崎の東方湧田という所、今の壺屋で、その附近にある高い丘を瓦屋ツチ、その妻は小祿間切の当間村の女だったという。しかし、豊見城村方面

の伝承によると、その女は同村翁長の高安門中の出身であつたという。女を担いで行く国王の使いを高安のブシが追いかけたが、国王の旗印を示されて奪い返せなかつたと伝え、今でも正月・七月には壺屋から翁長に拝みにくるといふのである。46「吉屋チル」もよく知られた話で、しばしば芝居・演劇にも演じられている。売られて那覇へ向かう途中に、「恨む比謝橋やわぬ渡さとう思てい 情ねん人ぬかきていうちやら」と言い、遊廊では上句を詠み下句を返せる者しか相手にしなかつたというのは有名な逸話。死後に抱え主が墓に詣ると、墓のなかから、「生きているとき粗末に扱い、死んでから水を供えても役には立たぬ」と歌つたとも伝える。47「チャタンモーシー」は、北谷真牛のことで、美声の持主と伝えられた女性。百名節に「北谷まうしぎやぬが歌声うち出せばなかべ飛ぶ鳥もよどで聞きゆさ」（北谷真牛が歌声を打ち出して、その声が空高くひびくと、空を飛んでいる鳥も止まって聞くよ）とある。その美声ゆえに北谷の按司のお召しによつて城中に仕えたとも伝える。48「仲村渠マカトウ」は、著名な仲村渠節の由来。その歌詞は、「仲村渠そばいどますだれは下げてあにあらはもとまば忍でいもうれ」（仲村渠の家は父母の目が厳しいけれど、裏口にすだれをかけたなら、そこからでもいいと思うなら忍んできてください）という。情緒ある曲調によるものである。

(5) 本格昔話の伝承

49「天人女房」は、語り手の玉城ハル唄が「羽衣川」を宜野湾・真志喜の「森ぬ川」と注しておられるので、これは察度王の誕生をいう天人女房譚とかかわる伝承と言えよう。しかして、この奥間大親と天女の婚姻譚は、『中山世鑑』巻二「大元至正十年庚寅察度王御即位」の項に詳しく記載されている。52「アカマタ婿入り（口）」（普天間権現由来）は、28普天間権現由来」とかわる伝承で、人に見られたことを恥じ、普天間の洞内に姿を消して神に祀られたとする『遺老説伝』巻一・第三六話を「蛇簪入」（芋環型）に習合したものと言えよう。

53「睡次郎」は、はやく『遺老説伝』巻一に見えており、しかもこの「隣の寝太郎」（鳩提灯型）の昔話は、沖縄各地に伝承されている。54・55「難題簪」は、いずれも結末が悲劇で終わっている。したがってこれらは、難題簪を含んだ伝説というべきものである。

56「継子話（麦搗き・二十日月）」、57「継子の味噌弁当」は、本土には見いだせない話柄。しかし沖縄においては各地に広く伝承されている。61「継子台」は、宮古・伊良部島下地の通り池にかかわる伝承で、それが昔話として伝承されたものと言える。63・64「兄弟の仲直り（イ）（口）」は、本土にはほとんど見られない話柄で、奄美・沖縄方面に伝承されるものである。ただしその殺した獲物は「猪」とするのが一般であるが、伝承例話のごとく、「大鰻」とするのは沖縄諸島に見られるもの。しかし、前者が含む「立聴き」のモチーフは元来、「蛇簪入」（芋環型）のものである。

65・66・67・68「仲順流り」（イ）（二）は、昔話「孫の生肝」（三天婦型）「孝子と金瓶」に属するものであるが、沖縄ではニンブチャーの唱える念仏歌に見出だされるものであり、しばしば芝居・演劇でも演じられてきている。そしてその原話は中国の郭巨孝子譚に求められるものである。71「泥棒の恩返し」は、一般に浦添の金持・城間ナールのこととして伝えるものである。史譚に属すべきものが、固有名を後退させて昔話化したと言えよう。

72・73・74「鬼餅由来（イ）（ハ）」75「鬼の家の便所」は、十二月八日のムーチャー折目、ホーハイ祭りの行事由来として伝えられるものである。しかしてそれは、『琉球国由来記』巻一「王城之公事」（十二月）（鬼餅）の項に、当国於禁裏、従大台所、御嘉例御盆一通、（御飯）並調餅、献上於御内原也。諺曰鬼餅。上古、鬼害人間。因愁難忍。或人巧、以鉄作餅形、米餅相交、因与鉄餅。従其時、恐人間、去而、隠入于深山、不出于人村。故作餅祭于嶽、為佳例。互贈酬而食之、

とある。また、『琉球国旧記』巻三「公事」（鬼餅）の項には、

由来記。上古之也。首里金城村。有鬼害人。人不勝其難。妹巧做米餅。内装鉄塊。又以糯米做餅。雜亂攪在而食焉。鬼人視之。而乞餅。即与鉄餅以吃。即鬼深怕。而隠去深山。不敢出来。人各得其所。從此家々作餅。薦嶽神

並先祖。相送於親族・隣家。以賀人免其害。

とある。鬼を騙して鉄餅を食べさせた者を『由来記』は「或人」としているが、『旧記』は「妹」として昔話に近づくが、いまだ「鬼の口」や「鬼の家の便所」には及んでいない。しかるに『球陽』巻一「国初」は、『旧記』の「金城村。有鬼」を受けて、「附、首里内金城邑の鬼人」と題し、「遺老説伝に記す、首里内金城邑に一兄一妹有り」として次のごとくに記している。

次後、兄は大里郡北洞中に遷居し、時々人を殺して肉を吃ふ。村人、大里鬼と叫ぶ。妹、偶々往きて問候するも、家に在らず。但竈上の釜中に人肉を煮るを見る。(中略)妹曰く、家の裏に便を下すは礼に非ずと。堅く請ひて外に出づ。兄即ち小縄を以て妹の手を縛り、茅廬に行かしむ。妹、その小縄を將て樹枝上に掛け、遂に逃去を為す。(中略)

厥の後、兄、妹を問候して首里に来る。妹、遽かに一計を為し、兄を請じて岸上に座せしめ、即ち鉄餅七顆(糯米にて餅を為り、内に鉄丸を装す)・蒜七根、且米餅七顆・蒜七根を作り、兄に鉄餅並びに蒜を給す。鬼人、吃はんとして能はず。時に妹、前裙を開きて兄の前に箕居す。兄、怪しみて之れを問ふ。妹曰く、吾が身に二口有り。下口は能く鬼を喰ひ、上口は能く餅を喰ふと。即ち餅と蒜とを吃ふ。兄、大いに驚きて慌忙し、後岸に跌落として死す。是れに由りて毎年十二月、必ず吉を択び、国人皆餅を作りて之れを吃ひ、以て其の鬼災を避くの賀に倣ふと爾云ふ(鬼餅節は此れよりして始まる)。

前半で「鬼の家の便所」が叙され、後半で「鬼の口」の鬼餅由来が説かれている。

81「ハブの昇天」は、天に昇つて龍になろうとした蛇に、口外しない約束をして、一旦裕福になった男が、その秘密を口外してたちまちに落ちぶれたという昔話に属するもので、ほぼ沖縄方面にのみ伝承され、しばしば伝説として語られている。82「フカに助けられた男」は、もとは八重山・黒島の多良間家に伝わる伝説で、多良間真牛という人物が西表島に出作りに出た折り、遭難して無人島に漂着、たまたま蟻に助けられ、その背に乗って黒島に戻ったとい

う。それで多良間家の人は、今もつて蟻は食べないと伝える。この話が昔話化して沖縄各地に伝播している。

85・103「モーイ親方(イ)」(ツ)は、史譚的性格をもつものから笑話的性格を含むものまでに及んでいるが、その中心は「親方の智慧」にあるとして、一括して本格昔話に類別している。史譚に登場する親方とは違つて、モーイ親方の実在は不明。それゆえに、現実を越えて、享受者たちの親方(間切の総地頭、しばしば国王の補佐役の三司官となる)に対する期待や希望が実現したと言えよう。したがって、このモーイ親方話は、史譚としての親方話ともども、あるいはそれを越えて、しばしば芝居・演劇に上演されてきている。

(6) 因縁化物話・笑話の伝承

104「生き返った大屋のアヒトウ」105「後生戻りの話」106・107「ナーチャミー由来(イ)」「(ロ)」は、不思議な事実を伝える世間話に近い因縁話。葬制の習俗とかかわつて発生する伝承で、ナーチャミーの習俗は、本土には見られない。110「平良シカマグチ」は、「子育て幽霊」をもつて後生と現世とを往来できる資格をもつと説くものである。その冥界と現世とを往来した者としては、本土の小野篁が著名であるが、平良シカマグチは、唐旅をして中国から沖縄へ念仏を伝え、あるいは葬儀の獅子・ガンを招来した人物とも伝えられている。111「逆立ち幽霊」は、今日でも劇場で上演されており、それも大正年間に遡る。おそらく上江洲由豊翁の語りも、それにしたがうものと推される。

115・119「キジムナーと友達(イ)」「(ホ)」は、はやく『遺老説伝』巻三・一二五話に、真壁郡宇江城邑の久嘉喜鯨殿と桑樹の妖魔の交友として掲げられている。しかしそれは、その桑樹を焼き払った後、はからずも朋友に変じた妖魔に小刀で襲われて死んだと伝える。しかもこの話は、しばしば家の興亡としても語られている。すなわち、キジムナーを裏切った家は滅び、これを迎えた家は栄えたとする、当地方の伝承は、隣の豊見城村・名嘉地大屋の繁栄を説くものがその中心となっている。ちなみに当家では、現在もキジムナーを庭に祀っている。

126・134「渡嘉敷ペーク(イ)」「(ヌ)」は、「モーイ親方」と近似した話群であるが、彼が国のまつりごとの中核

となる「親方」の〈知恵〉に期待するのに対して、これはいちだんと庶民に近い「ペーク」（親雲上・パーチン・士族）の〈頓智〉に喝采するもので、本土の吉四六話・彦市話に近い。すなわちその〈知恵〉は〈おどけ〉にまで展開するものである。しかもその渡嘉敷ペークの実在は不明であるにもかかわらず、「お上」に立ち向かう身近な存在として期待され、これもしばしば芝居・演劇に上演されるものであった。

136 140 「糸満マギー（イ）」（ホ）は、実在した力持ちの滑稽譚で、大男の行為がユーモラスに語られる。141

148 「保栄茂タルチー（イ）」（チ）は、隣の豊見城村保栄茂聚落に実在した人物の大力譚で、それは事実を超えて笑話の主人公に形象化されている。しかもそれは小さな英雄として、その「最後」まで語り伝えられていることが注目される。149 「保栄茂ユーチー」はこれに準ずるもの。150 155 「文徳マサー（イ）」（ヘ）は、語り手たちがその武芸者ぶりを直接見聞した人物で、それは笑話というよりも、奇行を示す世間話とも言える。しかし、156 158 「アガリ武士の力比べ（イ）（ロ）（ハ）」は、小男の〈頓智〉を説く笑話となっている。

(7) 鳥獣草木譚・世間話・対訳資料

本土に比べて、沖縄における鳥獣草木譚の話柄は少ない。生息する鳥獣が限られたせいであろう。しかるに、本土の鳥獣草木譚は、ヨーロッパにおける伝承に比するとき、その話柄は寡少である。それは動物葛藤を主題とする動物昔話がヨーロッパほどに成熟していないということでもある。それを端的に示すのが沖縄の伝承である。そして当糸満市の場合もこれに準じている。すなわち、動物葛藤を説くものは169「猿の生き肝」のみである。

これに対して沖縄における世間話の伝承はきわめて豊かである。それについては、拙稿「南島説話の伝承世界」（福田晃・岩瀬博編『民話の原風景—南島の伝承世界—』世界思想社 一九九六年）の〈世間話の分類〉で示している。それは、〈その一〉神の霊異（告知）（邂逅）（懲罰）、〈その二〉妖怪の奇異（化物）（変化）（靈魂）、〈その三〉人間の異常（運命）（奇行）に及んでいる。しかし、本書に収載した世間話は、171キジムナーの胸押さえ（イ）から

178 「ヨウドレの由来」まで、そのほとんどが〈その二〉の「妖怪の奇異」にとどまっている。実際の伝承はもつと豊かなものであったに違いないが、これは聞き取り調査の限界を示すもので、地元の研究者による伝承調査に期待するところである。

対訳資料は、179 「人の始まり」180 「稲の始まり」が神話、181 「犬のつけた井戸」182 「与座の名の由来」が伝説、183 「慶留（ぎる）バーリーの祭り」184 「米須按司の敵討ち」が史譚、185 「アカマタ智入（浜下り由来）」から190 「モーイ親方（ヌブシの玉・勉強）」までが本格昔話、191 「キジムナーと友達」192 「名嘉地大屋とギジムナー」が因縁化物話、193 「渡嘉敷ペーク」が笑話、194 「雀孝行」が鳥獣草木譚、195 「アヒラーマジムン」が世間話に分類されるが、その話柄の多くは本文資料に収められている。そのなかで、179 「人の始まり」は古宇利島の始祖譚として伝承されることが多い。181 「犬のつけた井戸」は、佐敷小按司（尚巴志王）が金の屏風と取りかえて、南山王を滅ぼしたというもので、37 「大里嘉手志川と金屏風」とかわる伝承。いずれも注目される。

〔追記〕本稿引用の『琉球神道記』は、横山重氏編『琉球神道記 弁連社袋中集』（角川書店、昭和四五年）、『琉球国由来記』『琉球国旧記』『中山世鑑』『中山世譜』は、いずれも横山重氏編『琉球史料叢書』（角川書店、昭和四七年）、『球陽』は球陽研究会編（沖縄文化史料集成8）（角川書店、昭和四九年）、『遺老説伝』は嘉手納宗徳編訳（沖縄文化史料集成6）（角川書店、昭和五三年）の「読み下し」によっている。

沖縄・糸満市の昔話

本文資料

凡 例

一 本書に掲載した民間説話資料は、昭和六二年八月二日より同八日まで、昭和六三年八月四日より同六日まで、平成元年七月三十一日より同八月一日まで、平成三年八月十一日十二日の四回にわたり、沖縄県糸満市の各集落において、同市総務部企画開発課（市史編集係）および同教育委員会社会教育課と立命館大学説話文学研究会が協同で実施した、聞き取り調査にもとづくものである。

二 本書には、同市において聞き取った民間説話資料の中に、原則として一話型一話を本文に掲げている。ただし、やや異なったモチーフなどを含み、注目すべき資料については一話を越えて掲げていることもある。その他の資料は類話として取り扱い、伝承地（集落名）・語り手名だけを記すことにとどめている。また同市において聞き取った民間説話資料は、従来の昔話（本格昔話・因縁化物話・笑話・鳥獣草木譚）に留まらず、神話・伝説・史譚・世間話に至るまで収載し、伝承実態の全貌を紹介すべく努めている。

三 本書における民間説話資料の分類・配列は、神話から世間話まで及ぶものとしているが、そのなかで昔話資料については、『日本昔話名彙』（柳田国男監修）、『日本昔話大成』（関敬吾編）を参考にしておこなっている。またその題名はできるだけ語り手の与えたものを残すようにとめたが、多くは右の二書などを参考にしながら編者が付している。

四 本書の本文資料は、いわゆるヤマトグチのものを聴取したテープにより、それをできるだけ語りのままに翻字したものである。その翻字は、聞き取り調査と同じく立命館大学説話文学研究会会員がそれぞれ分担して行なっている。また対訳資料は、糸満市史民話担当の伊芸弘子氏によるものである。

五 本書の編集は、おもに立命館大学講師・同研究会OBの松本孝三があたり、さらにその最終的編集は、金城善氏

(前文化課文化係長)、上原善明氏(現文化課文化係長)の協力のもと、立命館大学説話文学研究会指導教授の福田晃がおこなった。

神話

1 アマミキヨと

ギジムナー

久高ですね、久高の一番古い二千八百二十何年前の天の話だ。歴史は古いよ。アマミキヨ。天から降りた神と書いてあるですよ、ね。アマミキヨ。また、男はシネリキヨと。シネリキヨ。男の神はシネリキヨ。

これがどうするかというと、恋をしましてね、久高のクバグスク。クバが生えているグスクになっているわけですよ。こっちは二人、アマミキヨ・シネリキヨの恋した時代ですからね。

こっちな、お産すると。このヤナブー（テリハボク、オトギリソウ科）ですね、ヤナブーといって。固い木を肩に上から担いで。あの木を仕入れますね、あのアマミキヨは、お産する時には。またこっちでは人が死んだからね、カチャを張るわけです、萱を。あれはどうするかというと、このアマミキヨが、天の太陽が見えないように、月に見えないようにお産するといつて、この、幕張るわけですよ。肩にですね、刺があるから

ね、カタカする（さえぎる）わけですよ。これを、カタカしてお産するんです。

これを、木の精で、この、ヤノブの精が。これ、ギジムナーというのがこっちに、この木にガジマル（榕樹）の大きい穴が開くんだそうです。これが木の精といつて。これをお産する時に敷いてあるから、このギジムナー、この木に入るわけだそうです。これが木の精で、また出てきて化けたりするわけですよ。

それは何でこうなっておるかという、これは、お産。シネリキヨ・アマミキヨがお産する時に、アダンに刺がある。あれは、天のカタカするといつて、代表者は月様に見えたりさしてはいかんと。神グスクは。

このギジムナーはこの木を守らんといかんという。これ、ギジムナーの、こっちに木の精というのは残っておるそうです。この下におつたら、ギジムナーがもう教えるそうです。いまでも昼でも、ヤナブの精たちは全部教えるそうです。これ、神の木です。

2 稲の始まり

稲の苗が、飛んでいる山鳥、山鳥がね、稲の穂をどこかで食べて、この糞からね、糞からこの田んぼぐわーに落としてね、これから始まったという伝えはあるけれど。

それから、これは大事なもんだねといって、人が見つけて、この種から広がったという話はあるけどね。それ一般に大々的に広がったという話もある。

百名のね、受水^{うきんじゅ}という川。受水^{うきんじゅ}・走水^{はいんじゅ}といってね。一か所の川は滝から落ちてきて流れて、一か所はまた流れて行くと、走水^{はいんじゅ}といって。受水^{うきんじゅ}・走水^{はいんじゅ}というところ。三坪ぐらいないかね、この田んぼは。

字伊原 玉城ハル

類話

字糸満 玉城マシ

3 五穀の始まり

あれは、察度王時代の何だが、久高にこの、南山での戦争の時に、自分の娘を山に隠してあったわけですよ、王様の娘。

「戦争のすむまで山に隠れておりなさい」と言っただけ。

戦争すんで、戦争負けたんです、南山の王様。そして、王様の言い分で、この娘に、

「もうあんたはここで生活はできませんから、わしもどのようなになるか分からんから」と言っただけ、これは、女一人やつては危険だからと、百名シラタルというヤカー（王の使い）、使いを付けて久高に渡した。

それから、その百名シラタルはこの娘と夫婦になって久高の生活を始めたわけです。それで、向こうに行くと、何も、野菜の種も何もないもんで。いえ、これは神の仕業でないかと思われるんですよ。何かといえ、この百名シラタルが海岸に立っただけ、丸い壺

字北波平 大城正太郎

字兼城 金城 文

字豊原 国吉マツ、金城カマド

字真栄里 德里実盛、宮里カメ

字真栄平 大城加那、名嘉真朝昌

字新垣 宜野座仁一郎

字名城 新垣武雄

字糸洲 神里カマ

字束里 玉城佐一郎（東辺名区）

字束里 上良武定（上里区）

字摩文仁 伊集盛亀

字大度 高嶺 正

字伊原 上原孝助、酒屋ヤス

が下から浮き上がってきて、取ろうとしても取られなかったんですよ。それで、これは珍しいもんだと思っただけ、この女の方と夫婦になっただけから、

「これはわしが行って取ったら取られなかった」と言っただけ。何川であつたかね、川に行つて水浴びをして来て、そして、白い衣装を掛けてやったから、その壺はまた浮き上がって来てね、その壺は妻の方にはすぐわかれた。

それを取って開けて見たら、麦類、裸麦、また、粟なんかの種が入って、それを植えて、はじめて農作物を作つて生活を始めたという。それが、これは神女になっただけですから、この女は。

字名城 新垣武登

類話

字豊原 金城カマド

4 大力のイツカンウエーブーと ジョウサグンウエーブー

この部落にですね、非常な偉丈夫な方、偉丈夫の方がおったというわけで、えらいまあ知識も多いし、体格も良かったというわけですね。これがイツカンウエーブーとジョウサグンウエーブーと、二人の偉い人がおったというわけですね。この人たちは大体この部落の宗家ですね。まあ、元屋もとやでしょうね。門中制度がありますので。

その人で、結局この人たちは体格もいいし、それから、知識も豊富で、みんなから偉いということで慕われたわけですね。だから、この人たちがですね、照屋しょうやの東側の大城おほきという森があります、ウフグスクモーという。小高い山があるわけです。この人たちが二人がですね、この棒でもってこの山を担かかごうとしたら、棒自体が折れて担げなかったと。そういうふうに担いでおれば、ここは本来ならば町になったという。今は沖縄の中心地は首里になっておったけれども、惜しい

ことにこの棒が折れたので、もうこの、出来なかったと。そのくらいその人たちが偉かったということですね、まあそれで、言い伝えが残って。

この棒というものがですね、これがまた、後に残すために、替わりを、代替品を置いてですね、この照屋しょうやの殿とんがありますよね、御嶽みづがありますので、今現在ありますから。そこにぼくらの小さい頃はあつたわけですよ。そして、その人が着けた着物がですね、着物は今の所の屋号はイツカンと言いますからね、まあこれは門中の元屋もとやですね、宗家ですね。そこに戦争前は残っておったと。

字照屋 前川次郎助

伝説

5 糸満の地名由来

糸満という名前付けたのは、勢理井戸（シリール）というあるんですね。勢理というのは屋号なんですけどね。その井戸が近くにあるんですよ。

そこ掘った時に、蟹が、このいわゆる湧水が出てくる泉の中から蟹が出て来て。絹糸の糸ですね。糸とこの繭。それをくわえて出て来たと。

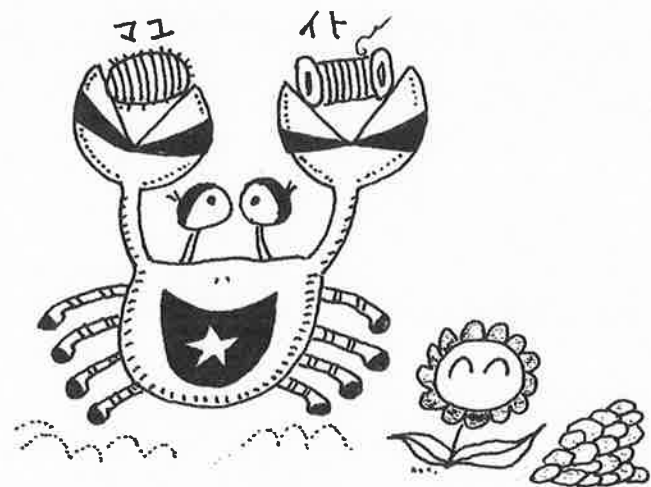
それで、繭のことをマンと言うんですよ、沖縄の言葉で。そして、イトとマンとくわえて来たということ、イトマンと付けたという伝え話がよく子どもの時された。

この辺に生まれた人は、ここはウブガーといって、正月には、一日の日にはこの水を汲んで来て、いわゆる若水を汲んで来てね、それでお花を飾ったり、また顔を洗ったり。顔を洗ったら若くなるとか何とか言ってるね、そういうことも。現在もやるんです。

類話

字糸満

田場天龍



字糸満

金城安彦

6 暁城の名の由来

昔々、按司世の時代、按司が群雄割拠しておるでしょう。その場合に、与座にやっぱり何か戦争があったんですよね。戦いが。

それで、あつちからもこつちからも、こつちの親類がですね、遠い縁故があったからさ、駆けつけたらしいんですよ。それで、ずうっと、あれどつから、玉城におつたらしい。非常に槍の使い手が、これは大変なことになったということで応援をやるために、昔は足で歩いてくるわけですからね。歩いて来たらしいんですよ。

そうしたら、ちようど与座のこの^{あかちぐすく}暁城の鳥が鳴いたと。もう夜が明けるからと。そしたら、その鳥が鳴いたもんだから、ああ、これはもうこつちは『ア力チチグスク』と、こういうふうにつけられたというんですね。暁になったということ。



7 与那原の綱引由来

綱は豊年祭という意味でこの糸満はやつとるわけですが。与那原というところがありますね。向こうのこの、綱が始まったのは、砂浜、浜辺ね、波打ち際で始まったんです。それにこの、与那原の綱はわらび綱やしが、この年になつても見たいっていうような歌があります。

これは砂浜で綱引をした。これはなぜ綱引を、向こうで綱引をしたかという、昔、これはもう五六百年前の話らしいね。大城^{うふぐし}按司^{あんじ}という按司の娘が、きれいな娘が生まれておつたらしい。あの娘が十七、八になつて、鹿児島^{さつご}島の島津公に見染められたわけですね。

「いや、こりや立派な娘で、これに舞、教育、舞踊とかね、女に生まれては舞踊知らなければだめだから、いろいろと教育して帰すから、これは鹿児島^{さつご}島にいつしよにやつてくれ」ということで、この島津公から言われて。大城按司は、

「いや、仕方ないかな。それじゃそうしなさい」と言つて、連れて行かれたんですね。

行つて、向こうに行つて、一年後に帰すという約束で行つたのに、約束通り帰してくれない。

その時に妊娠してしまった、妊娠。妊娠してしまつたもんだから帰つてこない。便りもないからね。今度、大城按司という按司^{あんじ}が、各部落のノ口を集めてですね、七ヶ^{あさ}字のノ口、これは久高ノ口、津堅ノ口、玉城ノ口とかね、あるいは佐敷ノ口とか大里ノ口とか、糸満ノ口、もう一つはこのノ口だったかな。七ヶ村のね、ノ口を呼んで、

「私の娘は鹿児島^{さつご}島に連れて行かれておるが、お前たち行つてこれを連れ戻してこい」ということで、ノ口を派遣したわけです。

向こう行つたら、妊娠しておる。

「ああ、たいへんだ、たいへんなことになった。お嬢さん、あんたはもう妊娠しておられるからね、あなたこれ、入れ墨を、手に入れ墨をしよう」。これが、手に入れ墨をするということは、昔、生娘でも、男に交際したらね、必ずやるんですね。入れ墨をする習慣に

なつておる。一晚でもまあ、妊娠しておるいうたから、部屋で捕まえてね、入れ墨一晚で全部やってしまった。だからね、二日後か、島津公が見舞いに来られた時に、手は何かで包んでありますね。キレで包んであった。

「なんで手を包むか」。実はこうこうでありますと言うて、開けてご覧に入れた。その時に、
「お前は汚いことをやったな。これは誰がやった」とノ口たちがね、

「沖繩の習慣、琉球の習慣として、男にこういう何が嫁げばね、これはもう習慣ですからやりましたから」。これ言うた時に、

「これは汚い。連れて帰れ」と言つて帰された。

けど、帰されたから、船に乗ったら、場天港に船が着いた。で、大城按司は、

「船が入ってきます」という知らせでね、駆けつけた。そうしたところが、娘はどうしたかという、船の中で待つております。待機しております。

「実は、子どもができたんです。こうこう、こういうことで、子どもを産んで、そこに中にいます」。

それが男の子二人だった。これを、向こうから来る時に船の中で出産をしたんですね。男の子二人だったんですね。

「こうこういうことです」と言うたら、

「何、そんなことか。絶対この、城には足を入れちゃいけない。お前これ、連れて帰れ」と言われた。それでその、娘がね、

「城には絶対に足を入れるなどおっしゃっている。私はもう親がそういうことおっしゃれば、生きる望みはないから」と、二人の子どもを抱いて海に飛び込んだ。海に飛び込んでしまつて。

「これ、助けろ、助けろ」ちめて、この子たちの着物に、それから入つて行つて助けて。下はもうこの、魚に食われて。渦を巻いとる、魚がね。巻いとったもんだから。下は、海の底はみな魚です。マチという魚。

これが下を巻いておりました。それからにわかに波が荒れた。風が荒れたらしいね。これも偶然ですけども。風が荒れたもんだから、船がもうどんどんどんね、何して。これはもう、おかれんで、とうとうこの船は波打ち際に打ち寄せられて、浜辺に來た。

その人はずっと沖のほうで亡くなつたんだではないか。

だけどこれ、探されない。そういうことで、波が荒れたから大変ですつて。みな、村の、この与那原の人がね、大騒ぎして、どうすればよいかと。

「いや、これは、首里のビンの御嶽というところがある。そこにお寺がありますね。そこに坊さんがいるから、あの人の前へ行つて、何か習つて来い」と。そして、馬に乗つて習いに行つたら、坊さんがいわく、

「いや、これは綱をね、女綱めづなと男綱おづなとね、作つてこう、綱を浜で引いて、綱引をして。その頭と尻尾から切つて、それを海に投げて供養しなさい」ということを言われた。そうしてこの、それをやつたんですね。供養したわけですね。そしたら、これも偶然で、またこの波が次第次第に静かに、風も止んだ。止んだから、それでその、死体が浮かんだとか、いうことで、今でも綱引をする時は必ず頭のほうか尻尾のほうから、綱のですね、切つて海に流しますよ。

8 小波蔵の綱引由来

このムイノハナ（字小波蔵にある拝所）に、こつちの部落に、ムイノハナつてあるんですがね。そこに、男と女がね、ウナイとイキー、兄妹かそんなものだったらしいよ。ウナイとイキーだったつて。

それで、昔はあんまり今のようにも何も見るものはないでしょう。他の村に何か見るものがあるといつたらね、みんな部落の人は見に行きよつたらしいよ。

だけど、そのウナイ・イキーは人の中におられないから、二人で何かしようねえいうて、面白半分に縄を縋つてね、あなたはこれをつかまえて、あなたはこれつかまえてと、こんなにして二人で綱引いてね。この人たちがやつた仕事を、村の行事になつて。

小波蔵の部落というのは、どこにも男と女と引く綱はないんだけど、ここの部落だけは、女と男と、十五夜の夜は綱を引く。この人たちがやつた真似をしてね。

9 阿波根の飯石の由来

阿波根にですね、飯石のという、岩ですね、大きな岩があります。その昔の伝え話ですよ。ある人が、上からお箸で下へ投げたそうです。その投げたのが、岩が大きくなって飯石と言っておるそうですけれども。

しかし、私たちの今の頭で考えて見たら、でたらめだと思っておりますから、それを本当だとは思っておりませんけれども、そういう伝え話があります。

とにかく、どうしてそんなにまた、捨てた岩の、ご飯と言われた時に、ご飯の中にその石が入っておったんだそうです。で、お箸で挟んで捨てたと。それで、その石が大きくなって、飯石ということになったという。年寄りから昔はそう聴きましたけれども。

字阿波根 平田徳太

10 金の砥石

大里玉城村ですか、あっちの出来事なんですけど。貧乏で家庭が貧しいために、金持ちのところに雇われて、そこで日雇い、何をやっていたのがですね、いつも、毎日草刈りの仕事をやらせられておる。山行つて、山で草刈りやっている途中、鎌持って行つてですね、とにかく、やっぱし変な石を見つけて、この石に鎌を研いでいたというんですね。これ、大里村の船越という部落に。そういうことを聞かれたんじゃないですか。その石がですね、やっぱし後で、そのご主人がですね、

「砥石も持たずにどうしてその鎌は切れるか」といつも草刈りに出たら、一杯ずつ担ぐだけの草を刈って。毎日ですね。

しまいにですね、

「山にいい砥石があつて、私はこの砥石に草刈りに行つて、鎌を研いでいる」と。そういうお話をしたら、お

かしいなあと思つてこのご主人がですね、いっしょに行ってきたら、やっぱり黄金、金の。だから、この小僧はですね、助けられて相当、この島尻地区の大金満家になつて、そういう何、小僧のおかげでその砥石を家に持つて来てですね。

字名は船越というてんですがね、船越と。屋号はウエゾウとか何とか言うていましたが。今でも相当あるらしいですよ、財産家です。

字新垣 宮里栄吉

11 フチャギ餅の由来

お祝いの小豆餅ね。小豆餅の由来は、アマワリ（阿麻和利）が首里城を攻める場合に、戦っている側に、首里の勇士がアマワリに向かって弓を引こうとする場に、暗くてアマワリの顔が見えないでね、何かなあ、明かりがあればね、これで射殺すんだがなあ、こう念願するようにしとる場に、天から星が落ちて、アマワリの頭の上に。それで、弓を放してもらつて、アマワリは射止めてもらつて、この、勝つたお祝いらしい。これ、大きなフチャギ餅じゃつたらしいです。フチャギ餅。小豆餅をね、フチャギ餅。

字伊原 外間樽助

12 左御紋の始まり

そんなことあつたかなかつたか知らないがね。薩摩は、初めはね、垣花^{かきのはな}から船で攻め込んで来たわけさ。こっちはもう、首里が近いでしょう。警備が厳重でね、上陸出来なかつた。それをまた迂回して、本部半島の向かいから入って来たわけさ。運天港。運天港から攻めて来て。そして、琉球藩はもう薩摩にやられたわけさ。その時の沖縄の戦の大将は、謝名ティロウとって、まあ総司令官だつた、沖縄の。その人は薩摩に捕まえられて、向こうに連れて行かれて。

それで、その時にね、薩摩は鉄砲があるわけさ。琉球はもう空手でしょう。普通は武士は刀を持つているが刀を使わん、戦は。もう空手で。だからこういう言葉があるさ。沖縄ではね、棒、棒といったら鉄砲のことやった。担ぐ天秤棒も棒じゃがね。鉄砲という言葉が分らないわけさ、昔は。見たこともないし、また武器もないから。それで、『棒の先からピー（火）が

出て、私の腹に当たつて死んだ』って。こういう言い伝えがある。琉球では。で、また、沖縄はどうするか。つていつたら、豆叩く場合にね、棒があるでしょう、棒。沖縄では短い柄を使つて豆を叩いて殻を落とすわけ。それを使つたわけさ、戦に。それで、薩摩では、『琉球人は中折れ棒で戦^{いくさ}する』と。で、また首里は、首里城に攻めて来る時はお粥を炊いて全部道に流して滑るようにして。もう幼稚な話さ。こういう言い伝えがあるわけさ。

それで、散々戦は負けて琉球王も降参して、戦大将の謝名ティロウという男は鹿児島に捕虜で捕まえられる、向こうでいろいろ問ひ質されて裁判になつたわけさ。で、もう武勇が勝れておるからね、ご飯も食べなくても力はあるわけさ。いざ死刑という時に、大きな鍋に種油を入れて、それに投げ込むといつてね、薩摩の兵隊が二人でやろうとしたが、もう武士だから、この二人捕まえて、すぐ飛び込んだ。で、ぐるぐるぐるぐる左に回つた。左に。それでもうしまいだね、この人は。

それで首里の宗家の紋は左に巻く。これから取つて

宗家は左御紋と、この紋付の紋は。左御紋の始まりはこれだつたそう。

字与座 伊敷清保



13 火返し（ヒーゲーシ）御願

これは昔々の話です。火玉^{ひだま}といつてね、火事を起こす神様。これ、悪い神様なんです。それがどこかの家に来てですね、

「あんたは火事を起こしなさい」、こう言いつけられて天から下つて来た。しかし、日限が限られて下つて来たんだが、その家はとつても掃除とか、清潔で、それから、いつも竈の前には水なんか置かれておつてですね、どうしても火事は起こすことができない。

それで、どうしたもんかと。この火玉は、火事の神様ですよ。これはどうしたもんかと。これはもう到底、私が命令されてこつちに来たんだが、火事を起こすことができない。それで、どうしたらいいかということ。

「実はこういうもんで、私は命令されて来たもんだが（これは、暗示を与えたんです。ね、この家の人に）、何月の何日にこういうふうにして四角において、

ちよつと家の格好を造つて、そこに火を付けて、そして竈の前から火を付けて、ホーファイホーファイして出してくれ」と。そしてもう、この火玉がですね、竈に潜んでいるのが出て行つたという。

昔は、今の竈はですね、戦後は改良竈ですが、昔は石三つをもつて、そこに鍋を載つけたんです。非常に簡単ですよ。だからそこを清潔にせんとどこへでも火が燃え移って行くという状態ですからね。そういう時期の話なんです。

その後は、部落でもこれは、その話を聞いて、部落でもこの行事を大切にしようと、それから現在もですね。戦前は部落のこの村の前の、こつちにもあつたんですよ、前は。そして、こつちが広場。その中ですね、その日になったら、旧十月の八・二の日、それから正月の八・二の日、そこに小さい小屋を造つて、これを神女が拝んで。それで、神女が拝みをしてから、今年度中、火事を起こさないで下さい、と拝んでから、家帰つた時に、そこで村の人が火をこれして。そうしたら、神をたたえてですね、そして、ホーファイホーファイする。今でもそれが続いておる。

字与座 金城幸徳

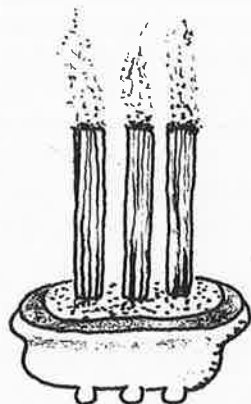
14 七月お盆の始まり

七月は、お父さんが罪被つてから、亡くなつたらよ、地獄に行くつて。極楽に行かないで、地獄に行かれて。何もかも供えたらこれ、火に見えてあがれなかつたつて。それをこれ、また、息子が、こんなこと聞いて夢見たのかな、見たから、

「じゃあ、あの、七月になつてあげますから」と言つてよ。七月からまた祈つてから、七夕で。

「また、おうちであれするから、おうちにいらつしゃつて、七月の盆はいらつしゃつてみんなに孝行させられて下さい」と言つてよ、願つたから、あれからお迎えができて、十三日お迎えつて、迎えてね、またご馳走あげたりして。それから、また、十五日は送りでしょう。そんなんして孝行したから、極楽に行つたつて話があった。

お盆の話だったよ。だから、このお盆には、遠いところへ行っている孫たちも来て、お線香あげるさね。



字豊原 国吉マツ

15 位牌の由来

ある親孝行の息子が、親父が年取って隠居してから、夏になると真昼は暑い、晩も暑いから、そうして、屋敷のそばにゲゲツいうて木がありますでしょう。あの大きい木があつたもんだから、そこに朝晩いつも床を造って寝起きして。そうして楽しんで、夕涼みしたら、朝、ゆったり休んでいたらしいですよ。そうだから、もう親父もある程度年取って、老衰したもんだから死んでしまつたらしい。

親孝行の息子は、考え出して、生きておる時には親父の世話になつて、われわれはこんな一人前大きくなつたもんだから、死んで何を親父とあがめて拝むかという、頭を捻って考え出したものが、その夕涼みしたり、朝休んだりするところのゲゲツを切つて、それをきれいに、高さも幅も要領よく作つて、立派に磨いて、それで、朝晩お茶を供えて花添えて、拝みよつたらしいです。今日もお陰様で満足に飯も食べて、元

氣にみんな働いてきました。そうして、年中行事の節日、何かの行事のご馳走も食べる時にも、いつも、その古い木の根っこにあがめて拝みよつたらしい。

それをまた、嫁さんが見てですね、いえば妻が見て、うちの旦那さんはもう狂つてゐる、大変になつてしまつたと思つて、主人がいけない間にその古い木の根っこを竈の前に持つて行つてですね、このへんではヘータングサーいう、火を燃やす時の棒、木の枝です。その熱い棒をこの古い根っこに突き付けてですね、うちの親父は馬鹿になつておるから、こんなことをするんだというて。そうしたら、その木の根っこがですね、水膨れあがつた。そうして、倒れたり起きたりして、相当やりおつたらしい。それから女は驚いて、これはもう神になつておる、大変なことになつたというて、慌ててですね、そうして、主人を呼んできて、

「こつたおるが、これ、あんたが拝んだからこつたんだ。もう大変なことになつておるが、どうするか」と言つたら、その息子がですね、ちゃんと仏壇に持つていつてあがめて、そうして、ひざまづきしてね、

16 ニービチ由来(イ)

昔、大昔の話になるが、そういう時代は、沖縄ではカーサヌハー世といつて。

「今日の家の妻がやったことは誠に申し訳ない。もうこれ以上絶対させませんから、神になつた木の根っこでも、神を神としてあがめますので、何の災いもないようにお願いします、お父さん」と言つたから、水膨れもなくなつて、それから、その木の根っこが治まつてですね、それ以来夫婦ともに朝晩拜んで、満足に暮らしたという話、親父がしよつたですよ。これ恐らく私は、坊さんからならつたかも知れないと思うんです。なんぼ古い木の根っこでも、なんぼ石でも、拜んであがめたなら、神になるなあとという話、感心しましたよ。

それが位牌の由来とかいつたですよ。それから改造、改造されて、今のような位牌になつたらしいですよ。

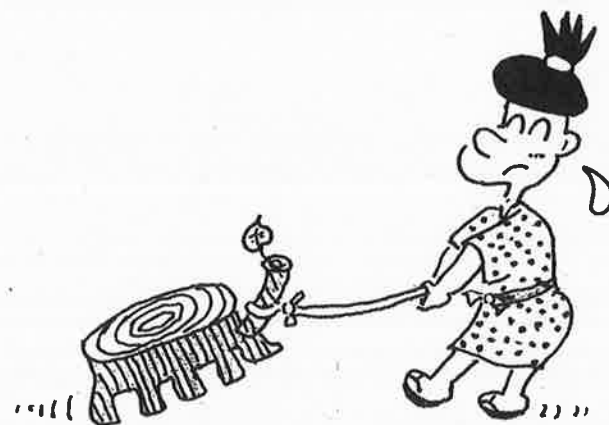
字与座 伊敷弘吉

妹と兄貴と二人暮らして、世を過ごさんためには是非これを自分の女房にせんといかんて。それで、一回逃がして。それでまた、二回も逃がして、思い切つて三回目には、またも森の中逃げて行つたから、追つかけて行つて、後ろから引つ張つた場合には、もう掴む物がないから、指ぐらいの大きさの木を掴んで、「いやだ、いやだ」とやつておるが、力入れて引つ張つたもんだから、ありや女は両手で掴んでおるさ。だから、根っこから引き抜いたから、今度は名前を根引ちになしたんです。結婚式には。

それで、今でも、津堅島といつたら通常は広つぱに津堅島、久高島、小さい島がある。あつちであつたという話もあります。それで、今でもそのところの人はその習慣で、今度は嫁貰いに行つたら、男のほうから

嫁貰いにこつちに来た場合は、女は三日間逃げる。三日間逃げて、それで会わすようになってもいた。

字北波平 大城清助



17 ニービチ由来(口)

夫婦あれする時、約束するでしょう。そしたら結納があるでしょう。あの結納は、何で結納できたかという、これ、約束の日はあれしないとね、また、しなかつたらそのうちに心変りをするから、その約束としてできた。これ、結納したら約束はずれることないと。それで結納できて。

このニービチというのが、女がもう、

「あつちにはいかない」と言うて逃げたから、結婚。山へ逃げてから。

それでまた、女探しに行ったら、

「もう結婚していかない」と言つたから、この女は木を力いっぱい押したから、みんながまた引っぱつたらよ、この木は抜けたて、根っこから。それで根っこが抜けたからもう逃げてはいかないと。それからまた、聞いてよ、結婚をしたて。ニービチをやつたて。

木を引つ張つて、この木はみんなで女を連れて行く時

引つ張つたから、自分一人の力でないですよ。みんなで引つ張っているでしょう。だから、抜けたと。「根っこから抜けたから、木も一本抜けているからあんたも行かないといけない」と言つてよ、また、あれからニービチはできたて、話があつた。

字豊原 国吉マツ

18 伊原の喜納^{きな}ワタブトウの土地分け

喜納ワタブトウといってね、偉いもう頭の優れた者がおつたらしい。その人はね、昔はもう、権力やら武勇やらの強い人が上でしょう。だから、この人はあの時代までは財産のある、強い者の勝手だったでしょう。その人がね、ほとんどのこの財産を囲つて。

こつちから、自分が高いところに立つておつてね、一番、森の。こつちから見えるだけはね、私の領地、財産。見えないところはよその物にして。この人は相当のようなやり方だね、この近辺の土地のよ、見通しのできるだけはよ、自分の見通されるだけはよ、この人の財産であつたて。

それで、その人は今は、喜納という名前はあるけれど、その人はどういうふうになったかもう、戦後はもうあまり栄えていないからわからんけれど、そんな例もあつたて。

喜納ワタブトウという武勇の強い人があつたらしい。

これ、権力もあるしね、腕力も権力も強かった人だったそうですよ。

字伊原 玉城ハル



19 糸満のヒーダチ御願

ヒーダチというのはどう書くちゅうと、ちよつと私もわかりませんけども、あれは昔からの糸満の言い伝えですから、伝説ですから。

ヒーダチ御願というのは、これはなぜ御願と。昔、このね、この辺にですね、この辺からずうっと入り船であつたつて、海が、陸に。ここにこう、今のところ全部家が建つております。埋め立てしてね。家が建つておりますけれども、そこはこの、入り海であつた。つまりこの、辰の魚ね、このとがつたやつが。やつがこの、潮が満ち潮になつて、たくさん辰の魚が寄つてきた。それを釣ろうといつてみんな、たくさんの人が魚釣りに行つておる時に、その魚はピューツと飛ぶんです。飛んでくるわけですね。飛んで来て、人の胸を刺したりね。それで亡くなつた人が何名も亡くなつたんでね、これはたいへんだということで、あまり魚が多いから、これを退けようじゃないかと、なるべく

追い払うような、ひとつ、ご祈禱でもさせようというようなことで、これが向こうのほうに、海辺じゃなくて向こうに起こつたもんだから、向こうに出て願つたらしい。

そしてその、そういうこの、拝みをするのがヒーダチの御願と。魚を追い払う、寄せつけないようにという拝みですな。まあひとつの呪いでしょね。

字糸満 田場天龍

20 ユードレ墓の由来

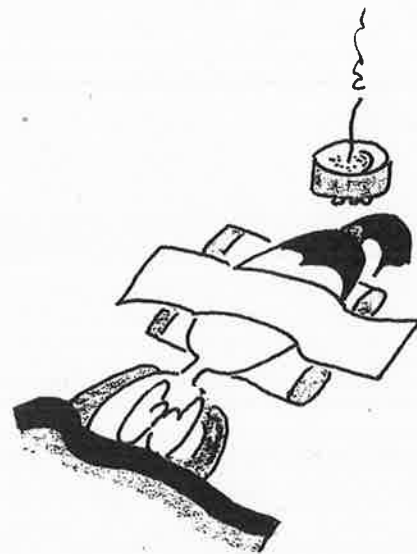
死んだ人には必ず手拭被らすでしょう。この流れはあなたね、ユードレ墓に入っている王の時代にね、みんな嫁さんたくさん集めてね、集めたからね、世の中が滅んだつて。ユードレ墓つて。ユードレ墓。だからこの人は、

「私が死んだ時には、神ウグワンス（ご先祖）と都合がからんから、私には手拭を被せて下さいよ」つて言つたから、この流れがまた、みんな死んだら手拭被るつて。あの時代は。

このユードレ墓に入つた王様が、あちこちでたらめにしたからね、世の中衰えたつて。この衰えた時に、自分の遺言に、死ぬ時の遺言に、『私は先祖と顔が合わさんから、私には手拭被して送つて下さいよ』つて言われたから、この流れをまた、こつちでも死んだら手拭被せるでしょう。あの由来。

類話

字豊原 金城カマド



21 波平玉川の由来 はんじゃたまが

井戸があります。その由来があるわけです。波平玉川。一つの歴史だから。

首里のある侍の息子が、南部に来て。そして、水を飲みたいちゆうて。ある女が、美人が柄杓で飲ましたら、

「あんたのこれよりか、手に水を汲んでおいて飲ましてくれ」と。それを手水の縁ちゆうて。手に水を入れて飲ましたもんだから、これが縁になって。

字伊原 外間樽助

類話

字糸満 野原由宗

字南波平 山城幸栄、伊集スエ

字福地 殿内三吉

字伊原 上原孝助

22 遊女墓の由来 じゅり

辻のある遊廓にね、女の人がね、この、恋に破れてね、失恋をしたということでしょうね。失恋をして、自分でまあふらふらとして遊廓を出てね。今の沖繩市のね、山内という、諸見というところがあるんですよ。というところの竹林にこの女の人がある、遊女がね、着いて、結局は首つりをしてしまったと。失恋の余りにね。ふらふらと歩いて、今の中部のあたりで、この竹林でね、首つり自殺をしてしまった。

そして、幾日かたつてしまつてね、白骨化したわけですよ。そして、ちょうど白骨になった時点ですね。三月の季節になつてね、この竹藪の筍がね、もうぐんぐんと伸びてね、伸びるわけですよ。雨後の筍と申しますよ。その筍がうんと伸びてね、この頭蓋骨をね、突き刺してね、ぐんぐんとこの竹が伸びてしまつてね。もう、一メートルにも、二メートルにもなつたんでしょう。それがね、ちょうどこの、沖繩の言葉

で、「こち」というのがね、東北。あれ、「こち」というんですよ。あの、よくあるでしょう。『こち吹かば匂いおこせよ梅の花』つてあるでしょ。あの「こち」ね。東北の「こち」。その風がちよつと荒れてね。こうどんどん吹くとね、この頭蓋骨が筍に刺さつて、そのままずつと伸びてしまったから、急にね。こち吹いた風がね。するともうこれでね、頭が痛かつたんですよ。

それでね、夜中ね、ここ通るところに、みんなこのことを、竹林の寂しい、ちよつと怖いところだからね、村人がちよつと敬遠していたところですよ。そこでね、女の方がよ、この遊女がよ、この頭骸骨がこちの風に荒らされてね、こうふらふらしているのを歌にしてね。幽霊の歌があつたんですよ。伝説だから。その幽霊がね、『こち風吹かば、みちぶるぬやぬい。さんかみじなりや、あんがあゆら』と。沖繩の言葉ですよ。風がね、こちの風がね、風が吹くとね、頭が痛いよと。

『さんかみじなり』というのはね、沖繩では洗骨というのがあつたんですよ、ずっと前まではね。私たちの青年時代までは洗骨というのがあつた。その洗骨とい

う時にはね、洗骨は洗うんですよ。洗って。洗ったのを甕でちゃんと納めると、足下からずつと頭にね、甕にちゃんと、骨甕に入るようにして。お酒で清めてね、ちゃんと洗骨したんですよ。戦前はね。私たち、青年時代までは。

そこでね、この歌を歌うんですよ。時たま。そして村人が聞いてね、びっくりして。『こち風吹かば、みちぶるぬやぬい。さんかみじなりや、あんがあゆら』といったら、『洗骨してね、洗骨して洗う時にはそんなに痛いものかなあ』という歌をね、この幽霊が歌って、歌ったんですよ。

そこで、村人はもう騒動になつてね、
「これはたいへんだ」。日頃はもう立ち入りもね、寂しいところで怖いところだから、立ち入りも出来ないところだから、みな敬遠しているところだからね。そこでみんな、意地がある人、勇気がある人がね、
「やあ、行こうよ。何とかしないといかんよ」と言つてね、村人の青年たちを呼び集めてね、みんなで行つて調べてみたらいいんだな。そして、ここに白骨があつたと。そして、この頭蓋骨がね、筍のここにちよ

うど突き刺さつてね、もうぐんぐんと伸びてしまつてね。この頭蓋骨がもう、しゃれこうべがもう踊つてね、いるからね。それを見てもうびっくりしてね、
「これはたいへんだ」と言つてね、みんなでもう、村の方々全部、みんな情け深いところだからね、みんな寄り集まつてね、お墓を立てたんですよ。そして、みんな、村人が全部でね、この供養をしてね。ちゃんとお経をあげて、みんなで手を合掌して。したらね、その後からはこの歌声が聞こえなくなったというんですよ。

字糸満 野原由宗

23 真玉橋の人柱（イ）

まだんばし

あの橋はね、造つても造つてもあれ、首里からずつと伝えて流れる川だからね。あれは水がひどいわけさね。造つても造つても流れるもんだからね、昔の、大昔の話よ。大工さんがね。造つても造つても流れるもんだから、

「もう、この橋は造つてもね、なかなか、架けよう思うても架からんから、七色ムーティの女の人が、紐、入髪ちゆうたら髪を大きくするために、大きくするためにこれいくつか紐で括つて、それ入れてあるわけさね。だから、そのね、その七色のね、紐を括つた髪をしている人を犠牲にしたらどうか」ちゆう話が出たわけさ。ほんで、いえば沖縄の端から端まで、国頭から島尻まで探してもいないわけね。

そしたらあの、いくら探してもいないもんだから、いないで。たった一人残つたつて、棟梁の奥さんが。それは言うた人が棟梁だからね、棟梁が言うてるから

その棟梁が、奥さんが一人残っているわけだ。その人の髪を外して検査したら当たっているわけさ。その人が七色の紐括つた。それは方言ではね、七色ムーティちゆうわけ。

それでその人がなつて。それからね、女の子がいたつて。娘さんが生まれていたつて。お母さんが死ぬ前に、

「自分は犠牲に行くから、行く前に娘に伝えるがね。あんたはね、どこに行つても人先に口から話は出さなよ、もの言うなよ」つて。この人先に口から出たもんだから、自分のお父さんが出たもんだから、自分が当たっているでしょう。だから、

「人先に口からものは言うな、話はするな」つて、お母さんに言い伝えられて。それで、お母さんは犠牲になつてもうたさね。

そんで、それから娘は大人になつても口はきけないわけさ。話が出来ないさ。言うなつて言われているから、もう無言になつて。別に話しないわけさね。そんな話。

それからね、ずっと偉いさん方がね、昔、王様時代

でしょう。上の人が、あんまり顔もきれいし、これ嫁さんにしたいって。で、その、嫁さんにしたいけれど、そのお父さんがね、自分の息子に、口の聞かんそんな嫁さんは貰わんで。そんでね、そしたらね、そのいっしょになる主人がね、

「じゃあ、その娘がね、一言でもしゃべったら許してくれるか」って親にお願したわけさね。そんなら親はそれオーケーしてるわけさね。そんで、何とか話しそうになって。二人いっしょになりたいからね、

「何とか一言、何でもいいからちよつとだけでもいいから一言話して話して」って、一生懸命して。やつとそれで話して、話が出たて。

「あのね、私はね、親がこうこうで、親に遺言で止められたもんだから、私は全然話を出来なかつたけれど、あんたといっしょになるあれだから、一生懸命、喉を撫でながら一生懸命涙をこぼしながら話したら出来るようになった」ちゅう。真玉橋よ。

字東里上里区 下田ミツ

類話

字糸満	稲嶺盛亀
字武富	長嶺陽元、大城トミ
字照屋	上江洲由豊
字真栄平	喜納力メ、金城 苗
字新垣	宮里栄吉
南波平	伊集スエ
字伊原	上原孝助

24 真玉橋の人柱（口）
まだんはし

その橋はね、昔から、首里からこの島尻に通う時の重要な橋だから、その橋を架ける時にね、どんなに架けてもね、この橋はもう壊れて、水に流されて。どんないい大工がやつてもできなかつたそうですよ。流されて橋は架からなかつたそうですよ。

それでね、そこに女だったというが、ちよつと生まれても違つておつた。その女がね、

「この橋は、七色ムーティをしている人を埋めない限りはこの橋は、架からないよ」と言つて口出したそうですよ。そしたら、こつちから通る人みんなね、昔はみんな髪を結つておるでしょう、男も女も。それから、みんな紐解いてみたらね、その言つた女だけしか七色ムーティをやつておる人がなかつた。だから、その人をね、自分で言うてあるから、もう仕方なく、その人はそこに埋められたそうですよ。その橋の下に。

それからね、その人が自分の子に（女の子を生んで

おつたそうですよ）。

「ものを言うてはいかないよ。ああなつたらね、埋められる。真玉橋の香炉になるよ」と子どもに言つてね。その女の子はね、全然ものを言わなくなつたそうです。

だから、その人をそこに埋めてね。それが位牌になつて、その人を柱に埋めたそうですよ。その時からね、その橋は架かつたそうです。昔、どんなにしてもね、水に流されて橋が架からなかつたそうです。

それで今でもね、自分たちの女の子がものを言わなくなつたら、

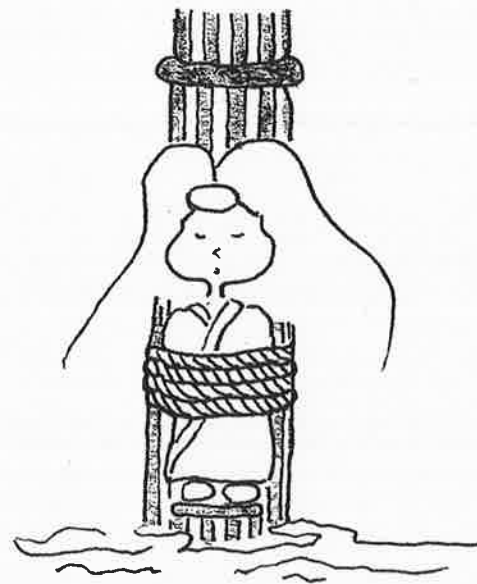
「真玉橋の香炉にされるぞ」と、今の子は誰も言わんけれど、自分たちのお婆ちゃんの時分はね、そう言うて脅かしよつたさ。

その娘が下女になつてきてね。あそこの偉い人のお嫁さんになつたそうですよ。その娘がね、親が「ものを言うてはいかんよ」と教えたから、その人が結婚したから言つたつていう。それで、本当はチーグー（啞者）ではなくてね、ものは言えるが、言うていかんと言われとるから言わなかつた。それで、後はね、結婚したから言つたという伝説があるさ。

25 真玉橋の人柱まだんばし(八)

侍の時に、何の侍だったかね、これは名前は私は覚えていませんけれど。その方があっちこっち回って船をあれするんでしょう。そうして、ある日、来たところにかわいい娘がいたから、その娘と。結婚してしましたから、その娘と結婚のつもりでなく、遊び、あれであつたんでしょう、子どもさんが出来て。

また、この侍の方の奥様が病氣でありましたから、人の肝を取って、これを薬に飲ませたら治るとのこと。だからそれはどこの、何というサアがあつたかねといつて、占いに行つたわけ。それを調べたところが、この七ムーティなさつたところは、百姓の子どもであつたそうです。その百姓の子どもが女の子でありましたから、そのまた占いが、七つのムーティ。髪に昔は結んでありましたでしょう。そのムーティやっている女の子がその方の肝さ、心臓さ、それを取ってあげたらすぐ治ると言つてきたから、すぐお願いに行つて、



「どうも助けて下さい」つて言つたかな。向こうも仕方なく、新しい子どもでしょう。だから、嫌とも言えないし、まあ向こうは侍方でありますから、仕方なくやつて、あげたとのこと、それをまた、この方は、

この真玉橋というところに埋めてみたつて。それを真玉橋七ムーティと。人柱になつてゐるんですよ。人を埋めて橋を架けたんだから。これを人柱といつて、今、呼んでいるそうです。こつちでは、真玉橋七ムーティといつてゐます。

字北波平 当銘キヨ

26 白銀堂由来(イ)

薩摩の侍がね、薩摩の廃藩までの、三百七十年間のね、薩摩の支配下に沖繩はあつたわけですから。薩摩の王様の支配下にあつたわけだから、その時には薩摩からいろいろこの、商売をする商人あきんどの方々が次々に貿易をして沖繩に来るんですよ。

来た時に、マンクーという方がね、たいへん正直者だつたらしいです。そして、その鹿児島の方からね、お金を一応借りてあつたらしいですね。商人から。借りてあつて、この薩摩の商人の方はね、一応お金を貸して。その時にはまあ帰つたでしょうな。

そして、二回来た時も三回来た時も、実際はたいへん貧乏でね、お金を返す力がなかつたと。いつ来ても、催促されてもね、お返しするお金がなかつたと。もう癪に障るから、日本刀を抜いてね、切ろうとしたと。その時にね、この借りた人がよ、

「ちよつと待つて下さいよ。手が出たらね、意地を引

きなさい。意地が出たら手を引きなさい」と、こういつた言葉を使つてね、いたらね、結局その方も短気を押えてね、

「ああ、そうか。じゃあもう一回来る時には必ずこのお金を返済してくれよ」

「必ずね、次来る時までには間違いなく返済いたしますよ」と言つてね、その場をしのいだらしいんだな。

そしたら、この薩摩の侍はね、その時薩摩に帰つてね。自分の妻がね、自分のおふくろがね、蚊帳の中で自分の母が男の姿に変装して、寝ていたらしいんですな。これを、間男を作っているんだろなということ、刀を抜いて切り殺そうとしたんだけれども、あの沖繩のね、琉球のあの海人の、お金借りた人が、『意地が出たら手を引きなさいよ。手が出たら意地を引きなさいよ』と言う言葉を思い出してよく考えてみたらね、やっぱしこの、自分の妻はね、おふくろがちゃんとしていたと。あのお金を貸した方がね、そういうことを言わなかったら、私は自分の母も自分の妻もね、切つて捨ててあつたんだろな。これを、自分の短気を押えてね、たいへん有難いと、恩を感じたと、い

うことでね、再度沖繩に来てね。

したら、その時にはきちつとね、海もね、大漁で、どどん漁がうまくいつてね、お金をようやく作つたんだと。

「このお金は長い間、たいへん延び延びになってしまつてね、ご迷惑掛けましたが、どうぞ取つて下さいよ」と言つてね、差しあげたらしいんだな。そのお金をね、銀貨を。そしたら薩摩の商人はね、

「いやいや、これはもういいよ。君の言葉のお蔭でね、私は自分の妻子をね、親を殺すことがね、止めることができた。たいへん恩のある言葉でね、私は有難かつたんだ。だからね、そのお金を取らないよ」

「ああ、取つて下さい」

「取つて下さい」と言つてね、押し問答したらしいんだな。

「いや、そんならこのお金をここに埋めよう」と。そして、埋めてね。ここが白銀堂としてお宮が建つたんだというふうには伝説はなっているんですがね。

しかし、もともとここにはニライカナイという海の、

遠い見えないところからのね、目に見えない神様がね、御豊饒をね、大漁ね、海の幸も山の幸もちゃんと与えて下さるんだという願いをね、したところが拝所であつて、拝所のところと同じ場所にこういったのがあつたんだと。だから、拝むところは、ここも拝むんだけど、ここも拝むところがある。二か所もあるんですよ。

字系満 野原由宗

類話

字系満

金城修治、上原徳助、田場天龍、

上原加州男、金城安彦、上原セキ

上原亀吉、稲嶺盛亀、長嶺トミ

字武富

大城トミ、長嶺陽元

字北波平

賀数長安、大城清助、大城正太郎

当銘キヨ

字賀数

大城政秀

字照屋

上江洲由豊

字豊原

国吉マツ

字与座

伊敷清保

字真栄平

比嘉スエ

字新垣

宜野座仁一郎

字名城

新垣栄蔵、伊敷義光、伊敷亀順

字小波蔵

新垣武登

字小波蔵

奥間ヨシ、伊敷カミ、伊敷ヤス

字系洲

伊敷ヨシ

字南波平

神里カマ

字摩文仁

伊集スエ、山城カナ

字摩文仁

伊集盛亀、伊保三郎

字大度

玉城トシ

字米須

山城昭治

27 白銀堂由来（口）

鹿児島島の侍からイチマンマunker（糸満マunker）

という人がですね、金を借りたわけですよ。金を借りて、

「まあ、とにかくいつかは払います」ということを言っただけでも、なかなか払わないもんで、払わないもんだから、この鹿児島島の侍がですね、この人を斬ろうとしたと。糸満マunkerをね。そしたら、その人が、『意地ぬんじらー手引け、手ぬんじらー意地引け』

（短気にはやって殺してやろうと思った時には、心を休めて手を引きなさい。短気を起こすな。短気は損気だからやめなさい）と、まあそういうことを言うたので、「じゃあ、あの、いつまでに私は返しますから」ということを言うたそうですよね。そうしたら、その人が、
「じゃ、そうして下さいよ」ということで、手を引いたと。

も代えることのできないありがたいことであつたと。

それですね、もうそれで、明くる年沖繩に来てですね、約束で、このマunkerは、

「まあ、私はあの時には助けていただきました。それだけの金子はね、用意してありますからどうぞ受け取って下さい」とまあ、出したわけですよ。そしたら、この薩摩の侍はですね、

「いやいや、これはあなたのお陰様で、あなたがあの時にああいうことを言わなければ、既に私は自分の母親も自分の家内も一刀のもとに切り殺しておつたんだけれども、あなたがああいうことを言ったので、あなたは命の恩人である。いや、この金はもう私はいりませんから、どうぞ収めて下さい」とこういう言い方をするさね。そしたら、このマunkerという人はね、

「いやいや、これはもうあなたとね、約束ばかり違えてどうもすみません。とにかくこの金で私は助かりましたから、どうぞ受け取って下さい」。

「いや、取らない」。

まあ、これですね、結局この金はですね、もうどつちも取らないもんだから、こりやもう、『意地ぬんじ

ら』として、鹿児島ではですね、この主人がですね、沖繩へ行つてゐるわけですよ。その間にはですね、姑がですね、この嫁をそのまま一人で寝かせたら大変だから、間男が来たら大変だから、これは何とか覚悟しなけりやいかんからと、男装でもつてですね、男装でもつて添い寝をしていつもやつておつたそうですよね。

それで、沖繩での用事が終わつてこの人は帰つてきたわけですよ。帰つて来たら、やつぱしこの、添い寝をしてゐるもんだから、これはもう、間男をしているに違いないと思つてですね、やつぱしその、一刀のもとに切り捨てようとしたけれども、しかしながら、あのマunkerが言うた言葉にね、『意地ぬんじらー手引け、手ぬんじらー意地引け』と、ああいうことを言つておつたんだが、これはやつぱし意味があるんじゃないかと、こういうことで、手を引いて、やらなかつたそうですよね。そして、結局まあ、明かりをつけて見ると、自分の母親が男装して寝ておつたと。はあ、これはやつぱしあのマunkerがああいうことを言わなければ、私はもう既に殺しておつた。はあ、このマunkerのあれだけのあの言葉というのは、もうこりや天地に

らー手引け、手ぬんじらー意地引け』と、あれだけの名文句を残したお金で、子々孫々に伝えても恥ずかしくないところのあれだから、これはここで祀つておこうというのがだいたい筋道です。

字照屋 前川次郎助



28 普天間権現由来

普天間宮そのものは、昔は一つの、単なる一洞窟ですよね。そこでね、沖縄ではね、ウナイ神と。兄弟が仮りに三名いても四名いてもね、一番上の長女ね、女の子が一人、男の子が仮りに四名いるとして五名兄弟ですよね。そしたら、ウナイイキリといってね、女の方をウナイというんですよ。男の方はイキリというんですよ。

そしたらね、この、唐^{ちやう}旅^{りょ}といったらシナですよ。中国。昔は中国によく進貢、冊封といつてよく中国の旅に行きましたよね。進貢船、冊封使とかね。中国との貿易で一生懸命盛んにやりますから。

その時に、中国に行く旅の時によ、台風に遭って。そしたら今のこのウナイがね、女の兄弟がね、神になつてよ、夢みたいに、幻みたいによ、

「あつ、今、災難だなあ」というふうに幻で何かを想像するわけよね。そしたら、この親がね、

「ええつ」て合図したらね、

「はあ、もう起こさなければいいのに。今もう少し、この兄貴を、自分の兄弟を救いよつたのに」と、言つてね、

「もうあんたが起こすから、お母さんが起こすから、もうだめさ。これはもう、うちの兄弟がね、今、中国に行くためにね、たいへん嵐に遭って、今難渋しているのに、これ何とか救おうとして、私、幻で今、何していたんだが、もうお母さんが起こしてしまつてもう覚めた」と。それからもう、洗つた髪をそのまましてね、何とかできんもんかといって、この普天間宮に入つて行つてしまつたと。そつで、行方がわからなくなつたということですよ。

その意味で、向こうは旅に行く時には、向こうの神様をよく信仰している。旅のお守りをするということ、向こうの一つの神としての普天間宮のいわれを、そういうふうには聞いているんですがね。

だからそこに、旅に行く時には、刀を持ってね、ここに置いて拜んで。信仰して拜んで行つて。刀忘れてもね、この神様が帰ってくるまで刀がそのままあつた

と。

旅に行く人は、必ず帰ってくるよと、元に戻ってくるよと。そういう意味でね、沖縄ではね、琉球の昔からの何は、床の間にはね、虎の絵を、必ず掛け軸を虎の絵を、猛虎を掛けるんですよ。あれは、『虎は千里を行つてもまた元に帰ってくる』といういわれがあつてね、これにあやかうという意味でね、床の間には掛け軸が、虎の絵を、旅をする家にはね、虎の絵の掛け軸を掛けたとか。ウナイがね、女の兄弟がね、いつも守っているんだと。沖縄の昔からの信仰があるんですよ。

字糸満 野原由宗

類話

字糸満	上原牛蔵、上原亀吉
字北波平	大城清助
字賀数	大城政秀
字豊原	金城カマド、国吉マツ
字伊敷	新垣ヨシ

29 運天港由来

源為朝が、保元の乱に敗れて伊豆の大島に流され、そこからさらに流れ流れて、国頭の今帰仁村運天港と云うところに流れ着いたようであるが、その運天港という名前の源は、付いたということは、結局為朝公の、運が天に通じて着いた港ということで運天港という名前になったわけです。

為朝公はそれから、運天港からずっと南下して、昔の南山城主のところまで来て、その南山城主は大里按司であるが、大里按司の妹といい仲になって、今、ワタキナムイという森がありますが、そこでいろいろと語り合った場所だということ、ワタキナという名前が付いて、今でも拝所としてあがめられています。

その二人からできた子どもが、尊敦^{すんとうん}という名前が付いて、それが舜天王になつて中山王になつたというところで、その妻子を残して為朝がさらに本土に行つたところが牧港^{まちなか}。浦添にあるやつですが。そして、妻子は

為朝の帰ってくるのを待ちわびて、マチミナトが牧港
になったというお話です。

字真栄里 島袋仁栄

類話

字糸満 上原亀吉

字阿波根 山内昌朝

字与座 伊敷清保、城間ウシ、賀数カメ

字新垣 宜野座仁一郎

字南波平 伊集朝助

字伊原 玉城ハル

30 婿入り橋の由来

こつちに婿入り橋という橋があるんだよ。七号線か
ら高嶺の入り口に橋がある。これはまあ、話を聞いた
のがね、昔ね、源為朝が南山王の娘さんを嫁入りする
ために、こつちを通って、通るために造らした橋と。
これで、婿入り橋と付けたと。

字与座 伊敷清保

史譚

31 かぎやで風節

『今日の嬉しさは、何に例えようか。ちようど花の蕾が露を受けて開くような心地である』。これは何かというね、首里の王様の、琉球藩の王様の長男はね、本妻の長男は、ものを言わなかった。啞だった。で、その守り役がウフアラグスク（大新城）といって。また、次男は妾の子どもでね、これはまた賢い人だった。って。

王様が亡くなって、後継ぎは誰にしようか。王の後継ぎを長男にしようか、また、次男にしようかと、こういう、まあ、役人が集まって世継ぎの問題をあれしたわけさ。

ウフアラグスクといったら、長男、チーグー王。また、次男の抱えのあれを津堅親方といって。これは妾の子どもだがね。で、次男は頭もいいから次男にやろうと。自分が次男のあれだから。で、競争になったわけさ。

最後に決める時に、ウフアラグスク親方がね、

「あんたは今日、何か一つね、声を出さんともう一般のあれになるよ。王様の位には就けないよ」と言つて、心配して言うた。そしたらすぐ声が出てね。その声がこの歌のあれだったわけさ。それを例えて、『今日の嬉しいことは何にも例えられない。ちようど花が咲くの、蕾が露を受けて開くのと同じである』と。

これがおめでたいあれでね、その関係で、ウフアラグスクという方は誠に人のいい武士だった。津堅親方はまた、何か賢い方であつた。その罰で、津堅という島があるでしょう。離島に。その海にもう沈められてね、黒潮巻いて沈められて。「ワッターチキングー」といってね、浮き上がってきよつた。一回は。その歌がめでたい歌で。

類話

字米須 仲宗根善道

字伊原 上原孝助

字与座 伊敷清保

32 北谷王子と黒鉄座主（イ）

今の護国寺、沖縄の波の上のね、お寺にね、ちよつと偉いお坊さんがいたらいいんですね。この方は隠居して、那覇の若狭町という所にね、悟道院というお寺を持つて、座主になつていたらいいんですね。

そしたらこの、黒鉄座主くろがねざしという座主がね、たいへん偉いお坊さんだつたらいいね。高僧だつたらいいですよ。高僧でね、偉いお坊さんだからね、たいへんまた美人であつたらいいんですね。頭が切れるしね。この方のお経のお話はもう、みなこれ聞いたらね、もうみなうなずくぐらいでね、たいへんこの素晴らしいお説教をするお坊さんでね。美人で好男子でね、いいお坊さんだつたらいいんですが。

この方はね、魔術を使つたらいいですよ。術ね。忍術よ。そしてね、この意味でね、若い女の方々もね、たくさんね、この方のお経を、講話を聞きにしようと思つてうみんなひっきりなしに聞きに来ようと思つたらいいんです

よ。そしたらね、このお坊さん、忍術を使つてね、女の方が、きれいだなと思つた方を忍術でね、すぐこの女にいたずらしようと思つたらいいですよ。それがね、もうきりがなく次々とそういうふうになつてしまつてね。王様がこれを耳に入れて、

「これは大変だ。これは世の乱れだ。これは退治しなければ大変だ」ということでね、王様の思いつきで、これを退治することになつたらいいがね。なかなかこの、耳切り坊主という、この高僧のお坊さんはね、頭も鋭いしね、感が速いから、なかなか退治することができなかつたらいいですよ。

そうしてね、北谷王子ちやたんおうじといつて王様の弟、この方をね。北谷王子という方はね、王様のすぐ、今の皇太子の次男坊さね。そして、皇太子の次男坊であるんでね、武勇が勝れているしね、文学者で頭が切れる、たいへんいい王子であつたらいいですよ。そしてね。

「それは私が退治するよ」と、王様に申し入れてね、ある日ね、この、退治することになり決議をしてね。したら、この方はね、もうとにかく高僧でね、講話も上手だし、もう何だが、この女にいろいろこの、手

を出すんでね、結局世の中から次第次第にあきらまれて

しまつてね。このお寺に行くお客さんがいなくなつたらいいんだな。したら、お寺の境内は草ぼうぼうするしね、もう古寺でね、何かしら怖いような寺だつたらいいんですね。そこでね、北谷王子という王様の弟のね、武術の達者な頭の切れる王子がね、治金丸という大きなものをね、三種の神器というくらいにね、たいへん切れる刀があつたんですね。王様にね。これ、治金丸というたいへん名刀でね、持つて行つてね、行つたらね、この黒鉄座主というお坊さんはね、頭は速いから、ああ、これは私を退治しに来たんだと直感でね。

「王子様がわざわざこの古いお寺に来てくれてありがとうございます」と感謝を述べてね、

「どうぞどうぞ、古いお寺であるが、どうぞ中へ入つて下さい」と言つてね、案内されてね、もうこの、お寺の中でね、ちゃんとして接待されたわけだね。そこでね、

「今日はあんと碁を打つために来たよ」と。
「ああ、そうですか」と。碁の勝負をしようというこ

とで来たらしいんだな。

「ああそうですか、王子様と碁の相手になるといったらたいへん名誉なことですよ。ひとつお相手になりましょう」と言つてね、碁盤を前にしてね、二人とも座つてね、碁を打ち始めたらしいんだな。

するとね、この北谷王子という武芸者はね、ここに治金丸をすぐそばに置いてあるから、これで切られたらたいへんだなと思つてね、坊さんはね、忍術を内緒でかけたらしいんだな。そうしたら、碁を打ちながらね、結局は王子にね、碁のほうに負けているらしいんだな。これ、ごまかそうとしてね、坊主がね、術を掛けてね。したら相手はもう眠気をさして、した時に、立ち上がつて逃げようとしたらしいんだな。その時に、この治金丸という名刀でもつてね、

「坊主、待て」と言つてね、切ろうとしたらしいな。そしたら耳が切れたらしいな。この北谷王子という王子様もね、この術をやつぱし出来ようと思つたらいいんだな。黒鉄座主という坊さんも術はたいへん上手だつたらいいね。鳥に化けて飛んで行こうとしたところをね、

「待て」と言つてね、この名刀でもつてね。このお坊

さんはね、生命を断つわけですよ。殺されて、退治されて。そして、この後からね、
「いつかは、必ずこの恨みを返しますよ」と言われてね。

そしたらね、この、うふむら御殿^{うどうん}という家はね、殿様の家は、男の子が生まれたらね、次々に亡くなるらしいんだ。この坊さんがいたずらしたんでしょね。そしてね、この坊さんがね、遺念でね、この、次々男の子が生まれたらね、もう全部死亡して亡くなって、後継ぎが出来なくなるらしいんですね。そこで考え付いたのが、男の子が生まれたらね、「大きな女の子があるよ」と言つてね、女の子の名前をね、付けてね。女が生まれたという。男が生まれたら、

「女が生まれた」といつてね、言つたらいいですよ。そこでね、この男の子はね、女の赤い着物を着てね、女らしくいつも女の姿をしてね。成長するまでよ。それから男の子が生まれてもね、こういったような死人が出るという不幸はなかったらしいですよ。

そこでね、歌にして、この今さつき歌つたね、『うふむら御殿ぬうじよなかい、耳切り坊主が立つちよん

どう』。「何名立っているか」というと三名立っているよと。泣く子どもは耳を切られるよと。この坊さんはね、耳きり坊主は、鎌もね、刀も刃物も持っているよ。泣いたらたいへんよ」と、子どもは子守歌をしてね、きつつていうのが沖繩の伝説ですよ。それが黒鉄座主といつてね、これは今の波の上のずっと大昔のね、隠居になつた坊主らしいですよ。

字糸満 野原由宗

33 北谷王子と黒鉄座主（口） ちやたん くるかにざーし

昔、黒鉄座主^{くるかにざーし}というのがおりました、これは催眠術の上手な方であつたらしいです。ある日のこと、王子がその黒鉄座主に、

「私を殺すことができるか。私をお前が殺すことができるか」と言つて、黒鉄座主に話したところが、
「あんたぐらいの人を取つて退けることは私は問題じゃありません。いつでも、あんただったら取つて退けますよ」と言うもんだから、

「それなら取つて退けてみれ」と言つて、
「それじゃ、何月何日にそういうことをやる日に決めよう」と言つて、黒鉄座主とその王子が話を決めて、とうとうその日がやつて来たらしいですね。

そうするというと、その時刻になるといふと、本当に、自分の住んでいる、王子だから宮中ですね。宮中の建物が一斉に地響きをして、地震が、大きな地震が起きたようにして、家もがちがちがち、ごちごち

ごちごちして、もう今にも倒れそうな格好をして来たらしいです。それで、『これじゃ大変だ。これはもう私、約束をしたんだが、こいつはやっぱりやるんだなあ』と思つて。今度はまた、ウングンチョーローというお師匠さんがいらつしやいますので、そのお師匠さんのところに王子が行つて、

「実はこういうふうな約束をしてしまったところが、私はそんなことはしないだろうと思つて約束したんだけれども、実は、これは本当に私を殺すことができる。これどうしたらいいか、ウングンチョーロー助けてくれ」と言つて、王子がウングンチョーローにお願いしたところが、

「あんたは大変なお約束をされますね。あれは、そのくらいのことばやり遂げますよ。大変ですよ。大変な人間ですよ。それじゃあ、お救いしましょう」と言つて、そのウングンチョーローがチョーグンで、術をかけるというと、ウングンチョーローがそれ、チョーグンを吹き返すようなチョーグンをかけられておつたらしいです。そうしたもんだから、黒鉄座主も、

「ああ、これはまた、ウングンチョーローの仕業だな

あ。これは約束が違う」と言うて、黒鉄座主は、その

王子のところへ来て、言ったところが、

「ああ、それは私が悪かった。私が悪かったから許してくれ」と言うて、難を逃れたという話ですが。

そのくらい力が、この黒金座主というのはあつたらしいですね。

字照屋 上江洲由豊

34 京阿波根親方（イ）

戦争の時でなかったかね、薩摩から何百て寄せた時でもね、京阿波根がよ、みんな滅ぼしてよ。征伐しよつたつてよ。この一人で。

それで、その人が生きている間は沖縄に勝てないからといって、ある薩摩の人と、沖縄の散髪の人と相談して、京阿波根をね、散髪に連れて来て。そうしたら、髭剃ったり何なりするでしょう。そういつた時に、剃刀で喉仏切ろうかという企みで、散髪屋はまた、薩摩からどうしてもお金いっぱい貰うてるでしょう。その企みで、京阿波根がね、床屋に連れて来た。そうして、「今日は、お前はね、もう仕方がない、死ぬから」と言うてね、剃刀で喉仏を切ろうとしたら、

「お前ぐらいにやられるもんか。お前も薩摩の身内だったか」と言うてね、この散髪屋の人を、股引き裂いてね、海に流したつて、京阿波根が。

そしてその後はね、その後はまたも軍勢で寄せて来

て、内地から軍勢で寄せて来て。これ、泊か、運天港、そこに寄せて来てね。向こうからまた、弓矢でよ、この喉仏やつたつて。京阿波根を。あん時にはもう死んだつて、京阿波根は。喉仏、いいところ当ててるから。

それをね、京阿波根は墓に埋められるということをね、もうわからんうちにね、どうしてもまた、もう、薩摩からいっぱい来るから、墓からね、これ思いついた人は何という人かねえ、あるもんは、またいい考え持った人がね、お墓からね、腐らないうちに出して来て、京阿波根をきれいにね、この、港に向かつてね、立てて置こうつて。そして、立てて置いてね。そうしたら、この鼻からね、蛆が出て来るでしょう。鼻から蛆が出て来るのをね、港に向けて立てておつたから、京阿波根はよ、

あんなに生きて、生きておつて、お米で蒸したあれがあるでしょう。ここらにしても何というか、

「これを食べているのにね、あんなに死んだ、死んだ言うてもね、あんな初米食べて。こつちから初米が出ているのに」つて。死んでおつて敵を負かしたつて。それでもう、この薩摩はね、大軍は引き揚げたという。

死んでもからも敵をみんな引き揚げさせてよ、勝つたつて。

字伊原 玉城ハル

類話

字阿波根 山内昌朝

字与座 伊敷清保

字真栄平 名嘉真朝昌

字新垣 宜野座仁一郎

字小波蔵 伊敷フヂ子

35 京阿波根親方（口） ちようはく

この京阿波根は、武芸の達者な人で、ここに瀬長というムイ（森）がありますよ。瀬長按司といって、按司というのはその大将なんでしょう。一つの城の一番大将で、その瀬長按司の子孫でいて、とうとう、後は首里に行つて相当成功した人で。

で、この人の親は、内緒にはらんだもんで、これをどうすべきか、堕ろそうと思つてですね、鉄を煎じて煮て、これを飲んだために鉄になつて。そういうこと話してあるんですよ。

とてもこれ、武芸の達者な人で、この人の芝居見たような話はたくさんありますよ。

堕ろすつもりだったけどもやっぱり本当に生まれたというのですかね。鉄で作つて、こつちだけが肉であつて、みなどこもかも鉄だったということを言うてるそうだがね。で、これはまた、言うにはですね、髭剃り、これは何か同じ同僚の、お城の者が讒言してですね、

嘘ついて。どういう讒言したかわかんけれども、これ、謀反をするということを言つたかわかんけれども、

「そんなら殺してやれ」と言つてですね。この京阿波根を。

「それを殺すの、どうして殺す」と言つて思案の結果、「これは何か、髭剃りですね、髭を剃る者に頼んで、喉のほう切つてもらえばいい」と言つて、で、髭を剃りながら喉を切つたというんですね。そうしたらですね、これもまあ、本当のことではないんですからね、この京阿波根は怒つて、右左の足を両方捕まえて、二股を押えてそんなことしたというんですよ。で、東のもんも西のもんも、雨が降つたら、ゴーゴーゴーゴー鳴るでしょう。鳴るというようなことを言つたそうです。だから、海鳴りも、その人のせいで海が鳴つておるとかい。天氣が悪くなると海がゴーゴー鳴るでしょう。だから何も信じられず。

またですね、あるところから攻めに來たら、京阿波根がおるからとても攻めることができない。

「今度京阿波根がやられたから、死んだから、今度は

攻めよう」と言つたら、その人は死んでおるのに、生きたふうしてあれで作つてですね、立てて、先頭に行つたら、

「ああ、京阿波根は生きておる」と。蛆がうずうずしておつたそうですよ。

「ああ、京阿波根はお菓子を食べておる」と。

字阿波根 平田徳太



36 内間金丸 うちまかにまる

内間金丸という人がおります。これは八重瀬の人でしょう。その人ですね、嫁さん、それが他の者と恋をして。それを、おながが大きく、月日がたつて大きくなるもんですから、これはもう男に、夫に対して済まないからというので、是非何しなきゃいけないと、鉛を呑みんです、何回も。その鉛を呑んでいるうちにね、妊娠してる。子どもが鉛で出来上がってるんですね。この、他は全部鉛で、この喉元だけを本当の何やつたらしいですよ。

この子どもがですね、産まれ月になって、前もつてですね、お母さんに夜寝ておつて、「お母さん、私はもう産み月も近いから、私が産まれるとお母さんの命がなくなるから、どうしますか」と聞いたらしいですね、おなかに入つていて。この子どもがですよ。お母さんは、

「あんたが立派に産まれるんだつたらお母さんは死ん

でも構わないから、立派に丈夫に産まれてくれ」と、
こう一言言つて産まれてきたそうです。

それが、まあ、子どもを産んで。その子どもが大きくなつてからの話ですがね、その城に闘争が、戦争ができて。何は、鉛になつた何は、真つ先に戦いに行つて。反対側は大勢でどうしようもなくて、最後にです、ね、喉元にやられて。弓の矢。

それで、その人はとにかく死んで。死んだことは死んだですけど、その人はですね、まあ、部下の連中が生きているようにして、両手を上げて、立派に何か、何やつていたんじゃないかと。

「金丸は死んだんだから、もう大丈夫だ」と、敵のほうは安心していたんです。ところがこの人はちゃんと手を上げて、それが、

「まだ生きているから大変だ」と言う。逃げるの、途中で逃げるのを気絶して、死んだのが相当いたつて。

そういう話を聞きましたよ。
これは八重瀬岳^{やえしたけ}の。

字新垣

宮里栄吉

37 大里嘉手志川^{かでしが}と金屏風

タロマイ王という王が南山城です。そいでその、水の飢饉の年にね、そこだけは水が豊富にあったもんで、金の屏風を持つてきてそれと交換したというね、その話はよくあります。記録にも残っておりますよね。

金の屏風とそれを交換して。それをもう、中山のほうから井戸を囲つて、ここへ絶対、ここから水を取つてはいけないということをいうたもんで、庶民はもう大変なことになつたちゆうて、ね。七百年前の尚巴志時代だから。それだから、

「おれに従うものは水を飲ましてあげる」ということで、尚巴志が南山を征伐して、とうとう、金の屏風は貰つたことは貰つたんだけど、井戸は使えないで。水は、庶民は困るでしょう、水は取れないという。水飢饉だから、雨が降らないから。それで、尚巴志に全部、

「おれに付くものは水は自由に飲みなさい」ちゆうて、

とうとうそれじゃ尚巴志に付いて、中山王に全部付いたから、中山王が勝つたわけ。

字糸満

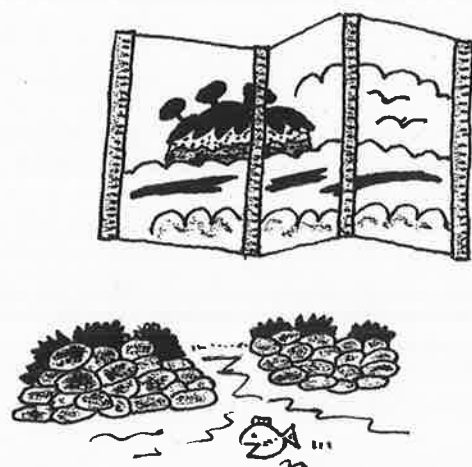
田場天龍

38 網の始まり

ある人がね、山でのんびりとしてね、その人はもうあんまり働かないでのおきな人だったんでしよう。だから山の中でこうして寝ていたらね、木の陰でして、その上の木でね、蜘蛛が、ね、巣を作つていたつて。あれを見てね、『ああ、こうだったら網ができるな』と思つて、その蜘蛛のやり方を見てね、網作つて、して、海の魚取る網作りあげて、住民にこれを教えて。持ち上げられて。ね、中城の王まで、中山の王まで立ち上がった方、あの人の話。

字国吉

翁長文子



類話

字豊原 国吉マツ

39 名護親方と

具志頭親方（イ）

名護の親方とですね、具志頭の親方はですね、具志頭親方という人はですね、首里の按司のですね、賀さん。娘の賀さんであつてですね。その人を勝手にさしてあつたらしいですがね。そして、本当は具志頭親方より名護の親方のほうは頭が上であるわね。やつぱしあの人は賀さんだがね、あの人に頭上がらなくてですね、していただきますよ。

その人はですね、名護の親方が頭がとても秀でてたから、具志頭親方が憎んでですね、それは安全なほうに嘘をついてさ。この人は、首をはねるちゅうようなことで。

して、それからあれですよ、今、クワン浜（浦添市小湾）といつてですね、ここはあの当時の死刑場だったらしいですよ。死刑。こういうことをするのは、向こう行つてですね、死刑するところやつたらしいですよ。

と怒つたらね。その名護の親方は頭がいいから、按司様にですね、

「これは来年がね、来年が豊作するために、その具志頭親方が八分を、その入れ物の八分を入れて持たせてあるけどね、それをいっぱいしてですね。こぼれたのは来年、迎える年がとても豊作で、豊作になるのをです、で、これはあふれております」と言つたらね、
「ああ、そうか」と言つてね、結構頭はいいから。それ通してあつたんですがね。

それからその人は、名護の按司はですね、人の脈から何してですね、

「何も当てる。医者もできる、何もできる」と言うたらしいですね。そしたら、それわかんと言つたもんだからね、それを完全に言うてね、首にさせるつもりですね、その鼠ですね、鼠。最初はその、王様にですね、あれでしたよ、首里王はその。

「あんたの脈はですね、その、捕まえなくつてもね、紐で括つてもね、その見えないところでもわかる」ちゅうんだから、

「さしてみましよう」ちゅうてですね、やつたらしい

あれは惜しいことにですね、その、本当の話だったんですがね。具志頭親方がね、その名護の親方をね、どうして死刑与えるかということ、理屈ばつかししておつたそうですね。して、もうあれですよ、百姓から上納を取つてですね、その、豆なんかするのをですね、やつぱし味噌をですね、味噌なんかこうして入れ物に入れてですね、按司のほうに上げるんですね。上げる時にですね、最初の話ですよ。その入れ物に、味噌だからね。豆腐もおんなじでしょう。それに入れるでしょう。味噌入れたのを持って行く時に、あれでですね、味噌はわくんだから、そばに流れるらしいです。それをいっぱい持たしてですね、これしたら、無礼者だといつてですね、失礼になるから、首にするつて。それにこの名護親方がですね、いっぱい入れてね、
「おいしいねえ」とか言つて持たしたらいいですよ。それ、按司に上げたですよ。それはもう垂れるんですよ。それをあの、無礼者と言つて、首にするつもりでやつているけどね。その名護の親方、頭がいいからね。その按司がね、

「なぜこの味噌はね、何でこんな入れ方してあるか」

ですね。だから、そうなったから、「あんたはまあ、これわかるか」と。

「わかる」

「じゃ、私は見えないところにね、紐で括つておくんだから、やつてみなさい」つて。やつたらですね。その具志頭親方の理屈ですね、理屈してですね、馬の脚に紐を掛けてさ、ずつと遠いところで診せたらですね、
「どんなもんだ。按司の、王様の脈はどんなもんだ」と問うたらですね、

「これは人間じゃないよ。この按司は人間じゃないよ」という話ですね。したらね、按司に、

「これは人間じゃない、動物であるちゅうことを言うから、首を切つてしまえ」言うたらですね。按司に、
「こういう王様、

「あんたの脈は、名護の親方はそれ人間じゃないと言つたんですよ。これはもう首にしたほうが、死刑にしたほうがいいじゃないか」と言うたら、

「そう言うたか」と。

「そう言うたんです」

「そうだったあれば、うちの馬のね、足首であつて、

うちの脈じゃなかったよ」と。

「おお、よくわかる」ってね、按司は言いおつたらしいですね。

それもこれと二つですよ。もう一つは、これはもう、首にさせようと思ってね、したら鼠ですね、鼠を箱に入れてですね、箱に入れてさ。

「これ何匹入ってるつちゆうことわかるか」と言ったらですね、言うたら、具志頭親方が箱に入れてよ、したら、

「わかる」と言つて。

「これは鼠何匹入っている」

「これあの、四匹入っている」と言うたらしいですね。早くこれは按司に言うておりますね。これはあの、うちが鼠入れたんだから、入れてあるのは一匹しか入ってない箱にね、四匹おるというんだからね、これは嘘だから、早く死刑にしなさい」と言つて。したらですね、その、馬に乗せてですね、クワン浜（小湾浜）に、家来たちに目を、あれしてですね、白いのにこうしてですね、死刑にやつたらしいですよ。

したらその、箱はですね、按司のほうが開けて見た

らですね、その、妊娠している鼠はですね、一匹入れたのがね、子を産んで四匹になっていました。本当に四匹いるからね、

「早くあれは戻しなさい。あれはもう死刑やらなくていいんだから、当てたんだから、早く連れてこい」と。ちよつと向こうの、首里の物見ですね、ここから、早く連れてこいというのを、早く死刑やりなさいということ、切つてしまつてですね、なんしたちゆうことです。

字米須 仲宗根善道

40 名護親方と

具志頭親方（口）

昔、名護親方という人と具志頭親方という人は、同輩同士で、中国にも留学に行った人です。この名護の親方と具志頭親方のお話でございますが。

実はこの琉球国に、昔は、中国と取引をしております、中国からある日のこと、石碑が送られて来ておりまして。この石碑がもう、年月が経て、壊れて文字も、どんな文字が書いてあったか、刻まれてあったかわからないくらい破損しておりました。そうしておるうちに、来年は中国から使者がお見えになるといふことに決まりましたので、この琉球では、

「大変だ。使者がお見えになるが、この、中国から送られてきたところの石碑を、元のようにきれいにしておかないという、中国に対して済まないから、是非この石碑を新たにこしらえて、設置しておかなければならない」ということになりました。国王のところで、「是非これを、それじゃあ設けるように」という命令

が下りましたので、これを造る、これを設置する準備に取りかかりました。

ある日、その設置をする材料とか、その他のことはもう、きれいに片付いて、準備できておりますけれども、肝心かなめの、その石碑に刻まれておった文字が、文句が、何という文句が刻まれておったか、それをわかる人がいない。それで国王が、名護の親方と具志頭親方に、

「お前たちはその石碑に刻まれておった文句はわかるだろう。教えてくれ」と、お話があつたもんですから、具志頭親方もわからんから、

「わかりません」と。名護の親方は、知っておるけれども、

「私もわかりません」と言うて、お断りをしたわけですよ。

「もうこりや大変だ。学者といえども名護の親方と具志頭親方、この二人しかいないのに、この二人がわからなければ、もう他にわかる人はいないだろう。これは困ったことになった」と言うて、大騒動になりました。

「どうしたらいいか、どうしたらいいか」と言うて、日夜、これ、宮中では吟味ごとがされておつたらしいです。

そうすると、この名護の親方は、自分は知つてはおるんですけども、これを私が「こういうこういうふうにして書いてありました」と、「こういうこういうふうに刻まれておりました」と言うて、報告をしたならば、実は自分の先生が数年前に島流しされておつたらしいですね。これ、具志頭親方と名護の親方の先生が、数年前に何かの件で島流しされておられたらしいです。それで、名護の親方の考えですが、こういういい機会を逃したらもう先生をお救いすることは出来ない。是非先生をお救いするには、これより他に道はないから、私がこれを「わかります」と言うて報告したならば、私は地位も名誉も高くなるけれども、これはかまわない。是非先生をお迎えしようという覚悟で、私はわかりませんとご報告申し上げたらしいです。

で、具志頭親方という人は、同級生ではあるけれども、実際にわからないから、わからないということになつておるわけです。

それで、それをご報告申し上げたところが、国王は、「それではその先生を、島流しの罪を許そう。その先生を出迎えるようにしなさい」と言うて、下の者におつしやつたもんですから、臣下のめいめいは、その先生をお迎えする準備に取りかかりまして、船を仕立てて、そしてその、島に行つて、先生にお会いしたところが、

「私はただでは行かない。私が琉球に着いた時には、名護の親方は硯・筆を持つて私を出迎える。それから、具志頭親方は私の草履、私が履く草履を持つて、二人で出迎えるならば琉球に帰りましょう」という条件を付けたらしいです。それを国王に申し上げたところが、

「ああ、よろしい。そうする」ということに決まつて。その先生はとうとうその島流しの罪を終えて、そして、琉球国にお帰りになつたらしいです。

その時に、名護の親方は硯・筆を持つてお迎えをする。それから、具志頭親方は草履を持つてお迎えしたらしいです。それで、先生もよくわかつておられたらしいですね。やっぱし、名護の親方も聖人であるし、

それから先生も先生だから、これたち二人の根性はよく見通しだつたらしいですね。

そうして、無事その石碑の文字を、先生がおつしやつた通り書いて、無事その石碑も落成して、無事に中国からの派遣されて来られた方にもお見せすることができたというお話です。

字照屋 上江洲由豊

41 名護親方と

具志頭親方（八）

牧志と恩河という名前の方がいるわけです。二人とも若い、和学者ですよ。和学者で、非常に頭の切れるやつ。まだまだ、三十前後の若い人ですよ。将来の沖縄を担う偉い人ですからね。意見が合わないわけです。向こうはシナの学者であつて、ここは日本の学者であるわけです。この二人、生かしておいたら、私はもうひどい目に合うから、これ切つて捨てなければいけないと。

で、名護の聖人は那覇の久米村の出身だから、那覇に行つておつたらしい。その話を聞いたもんだからです、ね、駆けつけて、首里に上つた名護の聖人は、

「この人を殺したら沖縄はもう、後世に役立つ人はいなくなつて、大変なことになるんだから、殺してはいかない」と言つて。ほで、クワン浜（浦添市小湾）まで行つてですね、向こうに死刑場ですよ、クワン浜つていったら。今はアメリカの軍用地になつて、全部埋

立地になってなつとるんです。向こうで死刑にするもんだから、首里城から旗を振った場合は切りなさいという命令だった。二人は引つ張られていつとるですよ。

名護の聖人は、もう一秒でも一分でも早く行って、死刑させていかないと。駆け足でいつとるけれども、待て待て、待って下さいという意味で手を振ってるですよ。旗を持つておつてね。だが、名護の親方は旗を振つたらしいですよ、ほたら向こうは切つてしまつておるんです。ほんで、あの、牧志と恩河という人がです、切られる前に、

「あなたは遺言はないか」と、聞いとるわけですよ。そしたら、この牧志という人がですね、

「アカギ アカムサガ ハベルナティトウビバ マキシウンガヌ イニントウムイ」とこういう歌を作つたんです。「アカギアカムサ」が「ハベルナティトウビバ」と。牧志と恩河の因縁であるということを知りなさいと、歌を残してですね、切られてしまつたと。

本当にこの人たちは、若い時分に、沖縄の後を担う人たちだった。目の上のたんこぶだから、切らさないと私が痛い目に合うということ。

字武富 長嶺和男

王様に進言しておるわけだから。この二人を残したらね、まあ、嘘を王様に申し上げておるわけさ。

「この二人をこの世に残したら、王様に謀反を起こすから」と、嘘を申し上げておるわけです。ほいで、王様はわかつておる。王様は。王様、何と歌を歌つたかというと、

「ワガミチリンチル、ユスヌイヤシユル、ムリスルナウチユ、ナサキビカジ」とこういう歌を具志頭の親方に聞かしたんです。日本でもこういうことありますね。「我が身をつねつて人の痛さを知れ」と。あれと似たような歌ですね。

こういう歌を王様は具志頭の裁判に歌つてやつてゐるんです。しかしもう、死刑は済んでしまつておるから、後悔している。王様は非常に頭はいいし、とつさに歌を詠んでおるんです。

42 名護親方と

具志頭親方(二)

名護の親方と具志頭親方が琉球国から中国に留学にやられた時の話らしいですね。中国で、教室で授業を二人とも受けておる最中に、

「雷買わんか、雷買わんか」と言うて歩く商人がおつたらしいですね。そしたら、具志頭親方は、

「不思議だなあ。雷というものが買えるもんかなあ。どんなもんかなあ」と言うて、先生に断つて、その、雷を買わんかと言うた人に会いに行つたらしいです。そうしたら、雷というものが買えるわけがないでしょう。それで、とうとう尻づくめをして帰つてきて。先生が、

「どうだったか、具志頭親方」と聞いたところが、「いやいや、これは違います。何もありませんでしたよ」と言うて、物笑いになつたらしいですね。

幾日か過ぎて、ある日のこと、今度は虎の子、「虎の子買わんか、虎の子買わんか」と言うて歩く者

がおつたもんだから、名護の親方は、

「ああ、虎の子。これ、中国ではおるんだなあ。一応虎の子を見るだけでも見てみよう」と言うて、先生に断つて虎の子を見に行つて、帰つてきたら、

「虎の子というのは、沖縄では生存しませんので、どんなかなと思うて見に行きました」と言うて報告があつたらしいです。

それだけ、人間の頭の知恵が違ふんですね。

それからもう一つ、名護の親方が歌を書いて。そして、自分の机の引出に入れておいたらいいですね。そうすると、具志頭親方が、その名護の親方の机の引き出しをひいて見たところが、そこに歌を書いて置いてある。何と書いてあるかなあと思つてその歌を読んだところが、この歌が、『クバヌハルヤシガ、ムティナシヌユタサ、アチサシラマスル、タマヌウチワ』という歌を書いてあるんです。それで、

「ああこれはようできた歌だなあ、立派な歌だなあ」と言うて、今度は自分が書き直して。そして、国王に、「国王様、私、歌を詠みました。ひとつご覧になつて下さい」と言うて国王に差し上げたところが、

「これはお前が詠んだ歌ではない。本当にお前が詠んだか」ちゆたら、

「はい、私が詠みました」

「嘘を言え、こりやお前が作った歌ではない。これはお前に対しての歌だよ。わかるか」とおっしゃったらしいです。

これ、実は、具志頭親方というのは、国王の簀さんに当たるわけですよ。そうだから親しく、そうお話もなさったでしょうけれども。で、この歌の内容を申し上げますと、『クバヌハルヤシガ、ムティナシヌユタサ、アチサシラマスル、タマヌウチワ』という方言の歌ですがね。『クバヌハルヤシガ』というのは、クバの葉といって扇子を作る材料です、あれは。そんな粗末なものだけでも、『ムティナシヌユタサ』というのは、国王の簀さんだから、国王の簀さんだから、国王も自分の簀には親しくされるし。それから、簀さんだから、自分の親父だから親しくして行くのであって、本当の玉のうちわになっているんだと。

結局、具志頭親方に当てての歌だけれども、具志頭親方はそれを知らない。自分に名付けて作られた歌だ

けれども、自分はわからないで、国王に、「私が作りました」と言うて、報告しておるんですよ。それだけの名護の親方と具志頭親方の頭の相違というのがあったらしいですね。

字照屋 上江洲由豊

43 名護親方と

具志頭親方（ホ）

具志頭の親方は蔡温、一方、名護の親方は大臣職。それで、二人シナに渡って勉強しとるわけですね。二人とも、勉強して、また帰って来て。

この名護の親方は和漢学者ですよ。本土にも行つてゐるんですよ。本土でも勉強しておる。この人は、シナ系ですからね、蔡温は。シナだけに行つてゐるんですよ。で、二人は対立というよりは、本当は名護の親方が頭はずつと上です。この人は政治家ではある。それで、沖縄のこの人の歌に、『誉められるのはいや。また、叱られるのもいやである』と。この世の中はですね、楽しく渡って行こうと、そういう歌を詠んだらしいですよ。ほしたら、具志頭の親方は、『誉めたり、人に叱られるのは当り前。当然のことであつて、それを拒む人が政治できるものか』と。何も役に立たないと。そういう返し言葉をやつておるですよ。そうすると、名護の親方、『天と地面では、君が主として見ておる。

影にはちゃんと映つておるよ』。鏡に映つておると。悪いことは出来ないよという意味ですよ。これは名護の親方の歌つた歌ですよ。

もつとあの人は歌、たくさん詠んでおるんですよ。

字武富 長嶺和男

類話

字豊原 金城力マド

44 米須按司の敵討ち

米須按司はですね、その米須按司のウナザラ（王の奥方）ですよ、奥さんがですね、とっても美人ですね、美人であつたもんですね。その隣の大度ですよ、大度ですね。向こうの按司がですね、その米須按司の奥さんを欲しがつてさ。して、米須按司はですね、浜の遊びですね。こつちに大度浜つてありますよ。大度浜つてところがありますよ。これまた港がですね。そこに大度按司が誘つてね、

「浜の船遊び、行きましょう」と言つてね。して、向こうで船遊びする時にですね、海でさ。もう酒もどんなやつてですね、もうこれ殺してですね。米須按司を。

して、米須按司はもう向こうに何だから、ここに、その浜端にですね、玉壺といつてですね、岩の掘ったのがですね。それは、潮が満潮の時はそつちは潮が入ってきますがね。そして、引き潮の時はですね、引き

潮は何ともないですわね。して、ここにですね、米須の按司はですね、大度の按司に殺されて。してもう、向こうから流れて来てですね、その玉壺に入つたらしいですね。それをここのですね、米須城主の、按司の飼犬がですね、もう、奥さんのね、着物をですね、裾を引つ張つてね。そして、

「珍しいね」つて。何となしても全然行かないつてさ、この犬は。したらもう、その犬がする通りに奥さん、行つて見たらですね、自分の按司ですね、主人が殺されて死んでゐるつて。して今、ここにその城址の、お城の上の按司の墓はですね、按司の墓とですね、それからまた犬の墓といつて、ありますがね。その犬のためね、この按司が向こうに死んでゐるのを連れてきてお守りしたから。して、その犬もやつぱし墓を造つて入れてあつたんですがね。

したらまた、この大度按司がですね、もう自分はですね、米須按司を殺したもんだから、もう自分の妾にするとやつて、嫁にするとやつてですね、したらしいですよ。したから、したもんですね。したらあの土地は、米須按司の、それはもうとっても大木が、大

きな木が生えていたらしいです。したらその、米須の

また按司の奥さんがですね、ウナザラですね、その人はもう頭がとっても敏感だつたらしいですね。して、その奥さんがですね、五寸釘ですね、釘を、釘とゲンノウとを隠して持つてさ。してもう、この大度の按司のですね、

「あんたがこつちを嫁にするんだつたらね、立派な家を造つてからね。じゃなかったら、うち行かない」つて言つたもんだから、

「そうか」と言つてですね、向こうの按司は。してその、米須のウナザラがですね、

「あんたがこうしてしてね、このぐらいのね、木を切つてさ、それであの、家を造つたらね、行く」と言つたら、本氣にしてですね。

してその、ウナザラとですね、その大度按司が歩いてですね、木を測つたらしいですよ。したらこの米須按司の奥さんは、ウナザラはですね、どうしてその夫の、米須按司の敵を取るかといつて、それを考えておつたもんだから。そしたらもう、

「もうちよつとこうして案内して下さい」言つてです

ね、ここで自分のこうしてしてるからね、

「もう少し。もう少し締めて、もう少し締めて」と言つてね。そして、こうなつたらですね、自分の五寸釘持つておるんですがね、そおと。大分こう大きいんだから、向こうの太さ、大度按司はこうして喜んでもうやつておるんですよ。向こうにですね、釘を打ち込んでですね、釘。釘でもうされてからもう動けないでしょう。それでその、敵を取つてですね。米須按司の奥さんが大度の按司を殺したということですね。

字米須 仲宗根善道

類話

字大度 高嶺 正

45 瓦屋情話

琉球王朝の昔、沖縄で屋根の瓦ね。あれ、本土の瓦と違って沖縄のは赤い瓦でしょ。獅子頭が上にあるでしょう。戦前はね、侍の方々は全部瓦葺き。そしてね、普通の平民は、下級の侍まではね、端ばかりが瓦で上は茅ではみだれ瓦といっているんです。で、百姓の場合はね、全部茅葺き。この三段階に分かれていたんですよ、昔は。

そしてね、この沖縄でね、この焼物ね、瓦。これを作るとね、一番最初はこの沖縄では瓦。屋根瓦がたいへん重要視されたんですよ。住居だから、衣食住だから。まず最初に重要だからね。この、屋根を葺く瓦をね、最初作った時によ、唐の国からね、瓦職人が沖縄に来たんですよ。そうしたらね、この瓦職人はね、毎日瓦を焼くんでね。沖縄の王朝の王様に仕えてね、瓦を焼いていると。そして、その瓦焼きながらね、ホームシックにかかってしまつてね。

「もう中国に帰るよ。もう沖縄寂しいから帰るよ」というふうになつてしまつてね。で、その方に帰られたのは大変だといつてね、いろいろと要求を聞いてね。「あんたの希望に添えるから、どうぞ沖縄のためにね、この琉球のために瓦職人として頑張つて下さいよ」と言つてね、留めていたらしいんですよ。

そしたら、ある時にね、
「もう帰らなくていいよ」ということになつたらしいんだな。なぜならばね、沖縄のね、昔の琉球の娘、美人を見かけてね、
「これを妻に貰いたい。そしたらね、私は帰らなくてもいいよ」ということになつてね。この、帰るのを思い留まつたということですよ。そしたらね、王様は、
「あんたがね、それだけ、今まで帰りがつたのがね、留まつてもいいというならね、あんたの要求はいくらでも聞いてあげますよ。何なりと遠慮なく言つて下さいよ」ということだね。

「その女がたいへん美人で気に入っているから、その女をね、嫁にさしてくれ」と言つてね。そしたらね、早速王様がね、家来を使つてこの女を探しに行つてみ

たらね、旦那さんがいる人妻だつたらしいんですよ。それでね、

「これはもう困つたなあ。相手は旦那もいるし、人妻であるんでね、これはたいへん困つたなあ。それ以外に、独身の女性でも何とか代えてもらえないかなあ」ということだね、お願いしたらね、

「いやいや、必ずこの女がいい」ということで、
「これ、好きになつたよ。好きだから」ということでね。仕方なくね、あの時分、百姓はたいへん気の毒でね、差別をされていたわけだから。この、とうとう王様の命令で、家来に言い付けられて、人妻を引き裂いてね、唐の人に、瓦焼きの職人に与えたんですよ。

そしたらね、その、いくらおいしいものを食べて、御殿でね、職人だといって、きれいな着物を着てね、のんびり奥さんに納まっているよりはね、もとの寂しい百姓の家でも、自分の愛する夫といつしよにいるのがね、何においても素晴らしいんだといつてね。この唐の瓦職人の希望によつてね、無理矢理に引き裂かれてね、この方の家内に、奥さんになつてしまつたんですよ。

そして、毎日瓦を焼く窯の上に丘があつたらしい。

ここに上つてね、自分の恋しい夫のところにもいつも前に向かつてね、南に向かつてね、いつも自分の恋しい夫をね、偲んでいたんだけど。島の浦は見えるけれども、この夫が見えないなあと毎日泣き明かしていたということだね。

この沖縄の古典の音楽の中にね、『からやついじめぶてい、まへんかていみりば、しまぬらどうみゆる、さとうやみらぬ』と。瓦屋の家の屋根に上つて、南のほうを向いて見るけれども、その自分の島のね、島浦は見えるけれども、恋しい男は見えないなあと、毎日泣いて暮らしたそうですよ。それが沖縄に残るカラヤノ節の本当の情話ね。

類話

字名城 新垣武登

字糸満 野原由宗

46 吉屋チルー

ジュリ（遊女）ね、遊郭の。貧乏なんだね、親が。ジュリに売られたて。遊郭に。そしたら、自分がね、歌を詠んでね。上句はこの吉屋ウミチルが言うんだがね、下句をね、わかる人になったら、あれはお客さんになったらいい。そして、ジュリを、すぐく歌った男がね、お客さんになったらいいですよ。

国頭ね、山原から那覇のほうにね、ジュリ売りされた時に作ったという。このヒジャ橋（比謝橋）という橋があつた。ヒジャ橋。この橋を造つてね。連れて行った途中でね、橋を渡ろうとした時に歌を詠んでね。『私を渡すために架けた』。また、いやいやながらね、行ったらいいよ。連れて行ってね。

字北波平 大城正太郎

類話

字兼城 大城ウシ
字豊原 国吉マツ
字与座 伊敷スエ
字新垣 宜野座仁一郎
字名城 新垣武登
字福地 川門カメ
字伊原 上原孝助
字喜屋武 前原タツ

47 チャタンモーシー

この人はですね、歌が上手だったらいいですよ。声も。その人がですね、歌を歌う時には、歩く道でも止まって聞きよつたらいいですね。

非常に歌の上手というわけだね。飛ぶ鳥でも、ゆるんで聞きよつたて。今、古典の三味線のこれでも、広く載っているわけですよ。チャタンモーシー（北谷真牛）が。

字大度 玉城登助

48 仲村渠マカトウ

昔、伊江島あがりえの東江という部落に仲村渠マカトウという美人がいた。ある年に、部落の行事をやらなければならぬ。この、祭りですね。やらなければならぬといつて、踊りのなかなか達人な人を師匠に頼んでこなくちやいかんということで、伊平屋の松兼という非常に踊りの達人な先生がおるから、あれを頼んで来て、この部落民に舞踊を教えておつたと。行事をするためにね。

教えおつたその時に、仲村渠マカトウというのは、この伊平屋の松兼に惚れてしまつて、二人は恋仲になつてしまつたと。恋仲になつてしまつたので、伊平屋の松兼が自分の伊平屋に帰る時は、伊江島の海にある、マミクというなかなかおいしいものですね、これ。海草だけでも。これを持って来てお土産に持たしたんですね。

持つて行って、この妻子にもやつた。おいしいおい

しいと食べた。食べて、これを風の便りに伊平屋の松兼は仲村渠マカトウと恋仲になつておるらしいということを知った。

「こんにちは。こいつがおつたら大変だから、自分分は後、捨てられやせんか」という心配があつたんでしようね。それがこの伊平屋の松兼が首里に役目で、首里上りの時に、留守になつた、その時に、この家内は伊平屋から伊江島に訪ねて来て、その仲村渠マカトウの家まで行つて、

「自分は伊平屋の松兼の妹である。まあ、ここにこう踊り教へに来た時にいろいろお世話になりましたとありがたうございました。御礼にきました」ということを嘘ついで、それ言うたんです。で、

「おいしいものをいただきました、あれはおいしからもう一ぺん、海に行つて取つてきましょう」と言つて、いつしよに連れて行つて。これはこの波打ち際でないところに、大波の打ち際じゃないと生えないうらしいね。そこまで連れて行つて、

「ここからこれ、取りなさい」と、このマカトウがどんどんどんどんそれを取つておる最中に、これを押し

倒して、水に、大波の中へ押し込んだと。それで、死んでしまった。

それから今度、そのことがわかつて。今度また、伊平屋の松兼はあれが死んだということを知り、風の便りで聞いたんでしようね。これもまた行つて、それもまた何か知らんけれども自分一人、小さい舟から行つたんだから。昔の人は小さい舟で自分で漕いで行きますわな。それもまた海で死んでしまった。二人ともね。

二人とも死んでしまったんで、これがこの、海に、宵々、夜長になるといふと、明かりがね、こつちからもこつちからも出てくる。こう、近づいては別れ、近づいては別れて。遺念火という。火がこの、伊平屋を渡る遺念火と。伊江島と伊平屋とのあい中に火が出るというようなことを聞かされたですね。

字糸満 田場天龍

本格昔話

49 天人女房

男の人は漁師であつたですよ。それでまた、女がこの、水浴びをする時は、海から上がつてきてね、この人はもう、どういうきつかけでこの着物を見たかは知らんけれどね、この女が着る物を見かねて、松の木にきれいな衣装が掛けてあつたもんだから、それを盗んできて、自分の家の小屋に隠して、宝物にしておつたわけやて、長らく。それで、この女は、かわいがつてもう自分の家へ連れてきて、いたわつて。それからもう夫婦になつて。子どもも出来たつて。四、五年経つ間には二人の子どもが出来たつて。

それで、この子どもがね、下の子をお守りする時によ、どうしてもこのお父さんがね、着物をね、かねがね見かねておつたかどうか知らんけれども、子どもが生まれるまでお父さん、隠しているでしょう。この、かねがねお父さんが見る物を、子どもが見たでしょう、どうしても。それで、この上の子がよ、下の

子守をしながら、お母さんが夕御飯とかいろいろなものを作る時に、子どもの子守歌に、

「泣くなよ、泣くなよ」をして、下の子をおぶつて、あれしながら、子守しながら、

「どこどこにこういつた宝物があるから、大きくなつたらこの着物をね、着せてね、どういふふうにするから」というこれをね、この子が子守歌代わりに呼びよつたつて。上の子。それお母さんが不思議に思つてよ、「変だねえ、この歌は」と言つて。探したら、お母さん。ここに隠してあつたつて。

そうしてもう、お母さんは確かにこつちだねえと思つて、出して、その場でお母さんはもう、子どもたちと泣きの涙で別れて。お父さんが来るまではね、まあ、このお母さんはね、この着物着てよ、天に上つて行つたつて。

そして、そのいわれの川でもね、松林もこつちにあるわけよね。羽衣川といつてね。

類話

字北波平 当銘キヨ、大城正太郎
 字阿波根 山内昌朝
 字照屋 上江洲由豊
 字真栄里 玉城フミ
 字真栄平 喜納サト
 字新垣 金城守正
 字小波蔵 伊敷ヨシ、伊敷ヤス
 字糸洲 神里力マ
 字福地 殿内三吉
 字摩文仁 伊集盛亀
 字大度 玉城トシ
 字伊原 上原孝助

50 ハブ智入(苧環型)

その娘、それためしにしてやっぱり、毎晩毎晩来るんだから。それで糸を付けて、針と糸と付けたら、糸をたどって行ったら、ハブの目玉に。それやっぱり、ハブの目玉には入ってなかったらしいですね。その着物の襟に、よく見たら、着物の襟に付いていたと。こちらの何はあるんですよ。伝説は。

それからまた、だいたいいたような話ですね、これはまた、神の子。ハブとの子でなくてですね、その娘が、若い男と何も恋をしてないのに、急にはらんでしもうてですね。お母さんが不思議に思つて。そして、その娘もですね、もう産み月になって、もう子どもを産まないといけない。これ、お母さんも認めていたらしいですよ。もう、年頃も年頃だから、やっぱり、とにかくもう、若い男が来るのはもう間違いないから、妊娠しているから。それはやっぱしお母さん、よく毎晩その、起きていて、試してみようと隠れて見ていた

らしいんです。やっぱり男は見えないで、やっぱり妊娠したと。これが神の何か、神の子が宿っているという何が、こちらでの伝説があるんですよ。神の子。風の子ともいうていますね、これ。立派な子どもが産まれて。

その本人もですね、本人にはとにかく夢で、毎晩寝る時に必ずこの、きれいな若い男がね、娘の側に寝よつたというそうです。だけど、『おかしいな』とそう思つて。ただわずかな時間だけで、泊り通しでなくて、夜明けまで、わずかな時間にやっぱり娘のところに寝て。すぐ帰つて。

それが、子ども産んで何したら、今、風の子と言ひましてな。最初はお母さんのほうでは、神の子と名付けてあるし、神の子とか風の子とか。それが伝説があるんですよ。それがですね、成長して偉い人になったと。

字新垣 宮里栄吉

51 アカマタ智入(イ)

(浜下り由来)

昔の人の話でね、機織する人のところへアカマターが、きれいな男に変わつて来たそうです。それがね、気に入った人が針を刺して、アカマターに。この針通つて行くところを見たら、穴に行つたそうです。

それから女は、三月三日は浜下りしなければならなといつてね、これが行事になっておるそうです。昔のお爺ちゃん、お婆ちゃんから聞きました。

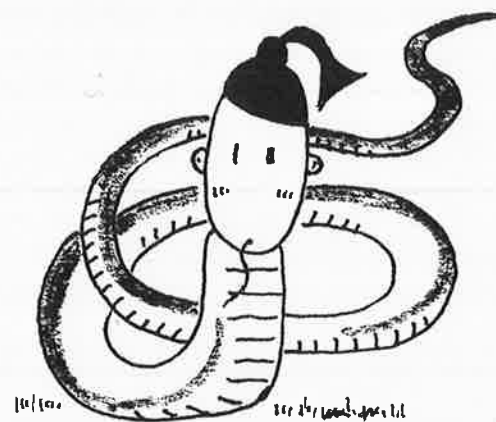
字宇江城 神谷ハル

類話

字糸満 上原亀広、野原由宗、上原亀吉
 字武富 大城トミ、長嶺京子、長嶺悦子
 字北波平 賀数長安、大城正太郎
 字阿波根 山内昌朝、平田徳太
 字賀数 大城清吉、中野トミ子

字喜屋武 前原タツ

字兼城 大城キヨ
字照屋 与儀ウト
字豊原 国吉ツヨ、国吉マツ
字与座 伊敷弘吉、賀数カメ
字国吉 金城正勝
字真栄里 德里実盛、比嘉スエ、島袋仁栄
字真栄平 喜納サト、大城加那、大城清三郎、
大城ハル
字新垣 上江洲安景
字名城 新垣武登
字小波蔵 伊敷フチ子、伊敷ヨシ
字糸洲 神里カマ、中村光一、中村カツ
字南波平 伊集スエ
字東里 玉城佐一郎（東辺名区）
字東里 志茂トシ、下田ミツ（上里区）
字福地 殿内三吉、大城タツ
字山城 志茂嘉一、仲門用三、仲門銀助、
新屋タカ
字大度 山城アキ、玉城トミ
字米須 仲宗根善道



52 アカマタ聳入（口）

（普天間権現由来）

ある、ちよつと名高い家庭の一人娘であつてね、この娘が大変きれいだったつて。それでね、このアカマターもとてもきれいな青年になつて、その娘に迷わされて。それで、このアカマターの、何か、妊娠したさ。

それで、親はね、親は知らなかったから、

「いつの間にこんな、自分の名高い家庭に娘として立派に育て上げたのに、いつの間にこんな顔さらししたのか」と大変親に説教されておつたつて。それで、もう娘がもうわからない。

「ただ一目だけ見ただけだけど、どんなことをされたか自分にもわからない」つてね。

それで、ある日、親に教えられて、

「もう、今晩来る時は、この針を髪に突き刺しておきなさい」て言われたからね、長い糸を引いて、髪に針を突いたのがね、はなになつて行つたつて。それをね、もう帰つたらすぐ翌日、この糸を尋ねて行つたらね、

普天間の壕に入つて行つたつて。

それで、その娘はね、女の子二人できたつて。だからね、このアカマターが、

「あなたができた子はね、普天間の壕にね、神として連れて行きなさい」と。それで、普天間の壕にね、連れて行つたらね、背中に乗せて、壕の中に入つたつて。この娘が生んだ子は。女の子、双子であつたつて。神であつたわけ。

それで、あれから自分の子を見ることもできないしね、そのまんま壕で神になつたつて。

字伊敷 新垣ヨシ

にいがいじら
睡次郎という男の子は大変貧乏者でね、その隣に大変美しい女の子ができていたって。それで、この美しい娘をね、娘はよそから大変好かれて、もうこの睡次郎というものは朝から晩まで寝たり起きたりばかりしている。

隣の美しい娘がね、見ればきれいだし、自分の家庭なんかに及ばぬ娘とは思っていたが、あんまり美しいから、よその若い人からね、この美しい娘をみな欲しがっていたからね、自分も考えて、お母さんにね、「白鳥、買って下さい」って、お母さんに頼んだって。それで、お母さんがね、

「この白鳥を買うお金があればね、こっちは御飯食べるのも心配なのに、どうしてこの白鳥なんか買えるか」言うたらね、

「一生のお願いだから、この私にはどうしても白鳥を買って貰いたい、お母さん。一生のお願いだから」

ちの家庭はみななくなる、よく聞け」。そんな、自分で言って。言って、話して、後、この白鳥はぱつと天に放して飛ばしたわけ。

それでね、こっちの両親は本当かと、本当に神様の言いつけだと思つて、また翌日、隣の睡次郎の家に行つてね、

「どうか、私の娘をね、あんたの次郎と夫婦結びさしてくれんか」と頼みに来ていたって。それで、こっちの母親がね、びっくりして、

「何ということをおっしゃるんですか。こっちはね、お金は一銭もないし、食べるものもないし、親子二人暮らすのに大変精一杯なね。あんた方のこんなお嬢さんを貰う、こっちの、ないだから、ちよつと考えて下さい」言うんだけど、

「いや、夕べね、神様が言いつけだから、ぜひ貰つて下さい」ってね。

それで、この睡次郎は、この娘を貰つてからはね、その翌日から一生懸命、もう眠るのわからなくなつてね、一生懸命働いて、大金持ちになつたって。

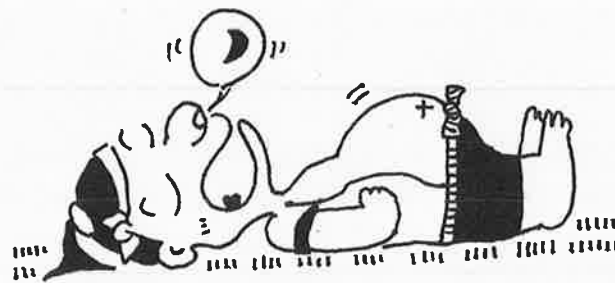
て母に頼んだって。こんな朝から晩まで寝ていた次郎が、こんなことを言うには何かひとつ理由が立つはずと思つて、このお母さんはずっとも稼いで。

「三日は待つて下さい。三日にどうしても白鳥を買うお金を作るからね、三日は待つて下さい」と、子どもに、この息子に。一人息子であるし。

それで、このお母さんは、白鳥を買うお金をあちこちから作るだけ作つてね、白鳥を買つてあげたらね、この白鳥を持つて、翌晩、この隣のきれいな娘の家に大変大きなアカギ（トウダイグサ科）があつたって。この木の上に乗つてね、この次郎は。この白鳥を持つて、それで、声を出して、

「こっちの娘を隣の睡次郎の嫁にあげないと、こっちの家庭はみななくなるから、よく聞け」。天からの神様の言いつけと思つていんだよ、こっちの両親は。庭に、こんな不思議なことにね、夜更けの月夜にね、天からこんな言いつけされるのを、神様からの言いつけだと思つてね。それで、この娘の両親は出て聞いてるね。

「こっちの娘はね、隣の睡次郎の嫁にやらないと、こっ



字伊敷 新垣ヨシ

54 難題智（熱田のマーシリー）

昔、王朝時代にね、沖縄の王様の時代に、具志頭村と糸満市と境界のね、東側にね、糸満の平和記念堂の東側の村が具志頭村というところですよ。そこにね、白川タルガニーといってね、男のたいへん美男子がいたそうですよ。きれいな好男子がいたということですよ。

そこである時にね、商いに商売人が来てね、ここで、白川タルガニーという方のお家に来てね、お茶飲み話やりながらね、

「勝連浜の村にね、琉球一番の美人の女の人がありますよ」と話し出したんでしょね。

「おお、そのくらい美人かなあ」と聞いたらね、

「うんまあ、沖縄であの人ぐらい美人はいないでしょう」という、今度はねえ、女の話が出たらしいんだなあ。

そしたら、白川タルガニーとは具志頭の方だから、

れだけ切れるかというね、何と言うかな、謎々みたいなね、今の人では考えられない話さね。話で持ち掛けられてね。そしたら、

「二頭の馬にね、鞍をちゃんと載せて、これで一人で乗って来なさい」と。二頭の馬によ。鞍ね、鞍を置いてね、これに一人で乗って来なさいと。

言ったらね、これはもう、意味がわからなくてね。家に帰ってみてね、いくら考えてもわからんということだね。二頭の馬に鞍一つ掛けて、これに一人で乗って来なさいということはどういう意味かなあといつてね、たいへん頭を悩ましたらしいんだな。そしてね、あるお年寄りに聞いたらね、

「あんだ、このぐらいいもわからんのか」と。年寄りはそのだけ長年世の中を渡って来ているんだから、頭は、世の中渡った人間だから、頭は優れて切れているんじゃないかな。そこでね、お婆さんが教えてね、

「あんだ、そのぐらいいもわからんか」と言つてね、
「今、分娩前の馬に乗って、鞍を置いて乗って行きなさい」と言つてね、行ってみたら、ね、女の方はびっくりしてね。なるほど、分娩前から馬が二頭あるわ

この方も好男子であるわけよね。そしてね、この話の中からね、

「そんなにきれいか」と言つてね。

「じゃ、それを自分の目で見てみよう」ということだね、わざわざ具志頭から中部のね、勝連の南風原^{はえはる}について、今は南風原村になっていますが、あの時は浜原といつていたんですよ。そこにたいへん美人がいたと。それで、これはね、この美人をね、わざわざ見に行つてね。一目見たらね、なるほど美人だしね、きれいな女が。そしてね、あんまりきれいだからね、すぐ結婚を申し込んだらしいね。

「ひとつ奥さんになつてくれ」と、結婚申し込んで。

そしたらね、女の方もね、口には出さないけれども、

『ああ、好男子だなあ』というふうにまあ、見たんでしょ。しかし女の方はね、威厳が強くね。美女だからね。とにかくもう、好男子だというふうに胸内にはあつてもね、なかなか表わさなくてね、表に。思い詰めたらしいんだな。

そしてね、この、私に会いに来るならね、頭のね、

謎々みたいなことが初め、この女の方からね。頭がど

けですよ。鞍は一つしか置けないわけでしょう。

『ああ、なかなか頭は切れるなあ』というふうにああ、思つたんですよ。今の人考えられないね。馬に乗って行くということ。馬二頭あるわけよ。おなかの中に一頭いるしね。一頭は我が身の馬だから。分娩前の馬にね。やがてお産する馬さ。乗って行くとね、鞍一つで行けるわけですよ。それであの女の方もね、『ああ、これはすばらしい。頭がきれいなものだなあ』と思つてね、期待していたんですよ。そしたらね、そのまあ、今になったらデートでしょう。家に忍びに遊びに来なさいということだからね、馬に乗って行つたと。

今度またね、謎々があつてね。この簾^{すだれ}ね、下げる簾よ。上と下のまっげね、あれを簾に例えてね、

「上の簾と下の簾が一つになつて仲良くなつた時に来なさい」ということで、また言われたらしいんだな。

それしたらね、何の意味かまたわからなくなつてね、またこのお婆ちゃんに聞いたらしいんだな。そしたらね、「眠たくなつてね、目が上のまぶたと下のまぶたがいつしよになつて眠つた時分にね、夜中に忍んで来なさい」ということである」ということを言われてね、

「ああ、そうか」と言つてね、やつぱし夜中忍んで行つたらしいんだな。

そしたらまた、女の方はね、また謎々掛けたらしいんだな。そしたらこの謎々何かと叫びたらね、お婆さんに聞かなきゃわからんわけよね。そしたらね、ここに、お盆の上にね、沖縄の言葉でね、小刀のことをシーグというですよ、シーグ。沖縄語では普通の小刀ではあるけれども、沖縄の言葉ではシーグということですよ。これとお椀と、御飯が入ったお椀ね。それと、竹で作った箸ね。あれを置いたらしいんだな。それを見て女の方はね、すぐ自分の布団の床に就いたらしいんだな。そしたら、この出してあるのはね、この小刀とね、御飯と、お箸と。竹のお箸があるんでね、まあ、晩飯でも食べなさいということだなあとと思って、御飯食べてしまったらしいんだな。そしたら女の方は怒つてね、

「あんた、御飯食べに来たの」と言つてね、すぐ突っ返したつて。

「帰れ」と言つて追われたらしいんだな。

追いやつてもしかし好男子だなあとということで、正

面には出さなくつても恋心をその女の方は持っていたんでしようね。

さて、女に振られて失恋をした男はね、追われてしまつて、家に帰つてみたらね、このお婆さんにまた聞いたらしいんだな。

「こういうふうにして行つて、ちゃんとしてあるんだが、この、こういうふうにしてね、この小刀とお椀と御飯と出して、これ食べてしまつたらね、怒つてしまつて追われたよ」ということでね、聞いてみたら、

「あんた、これもわからんのか」と言つたよね。

「すぐ私を抱いてくれという意味だよ、これは」。シグというのはね、すぐという、直ちにということさ。沖縄の言葉を方言から普通語に直すと、小刀のことをシーグというから、すぐという、急いでということさ、ね。椀というのは私という意味さ、ね。お椀。私という意味。ダキは竹、私を抱けと。米と。御飯は米でしょう。『すぐ私を抱き込め』という意味であるのを、わからなくつて、御飯を出してあるから食べようということさ、食べてしまつてね、追われたということはね、それ、後でお婆さんから聞いてね、

「ああ、そうか、ああ残念だったなあ」ということでね、たいへんこのね、今までの何をね、悔しがったんでしょうね。こんなに何されて。嫌われてね。追われてもう、行きなさいということさ。後でお婆さんに聞いてみたら、『すぐ私を抱き込みなさい』ということさ。をわからなく御飯食べてしまったということだからね。謎々がそれ、三つ続いているわけでしょ。

そこでね、男の方はね、恋に焦がれて結局、恋の病で死んでしまうわけですよ。女もね、また、好男子だったなあ、ただ女の義理でね、すぐ表面に出せなかったのが残念でね、これはもう、後で、女もまた恋に焦がれて死んでしまうんですよ。

そしてね、この遺骨をね、女の見えるところにと、男の場合はね。女の場合は男の見えるところにということで、遺骨ちゃんとを納めるということさね、両方の村の方々が寄り集まつて、両方に行つてね。この突き当たりがね、この熱田のマーシリーだったという。それで、ここでぱつと会つてしまつてね。

「じゃあここに二人ともいっしょに合葬しよう」ということでね、ここに祀つたということさね。それで今ま

でもずっとここは拝所ということさね、みんな、村人だね、ここは熱田のマーシリーというところであるということが、伝説があるんですがね。

字糸満 野原由宗

55 ウールンチブシ

(勝連按司の難題・アガデーガマ由来)

名城という部落にね、とても強い武士がいらっしゃったらしいよね。この武士がね、

「嫁さんを探すにはどこに行ったら嫁さん探せるかねえ」と言うて歩き回る時に、ある年寄りのお婆さんと会って、

「私は嫁さん探したいんだけど、どこにいないかねえ。私と似合う嫁さんいないかねえ」と問うたらね、このお婆さんが言うには、

「あなたと似合う妻は、勝連按司と行ってね、その娘さんだったらあなたには似合うはずだけど、しかしあそこの娘さんは按司の子だから難しいんだから、よく考えて行かないと簡単には上げないはずよ」と言われたらしいよね。

「じゃあ、まず馬に乗っていつぱい偵察して見て来ようね」と言ったらしいよね。そしたら、向こう行つて見たら、やっぱしこの、美人だから、自分が妻にして

もいいと思つたんでしよう。向こうで、

「嫁さんになつて下さい」と言うたらね、向こうから、「じゃああんたは、これを嫁さんにするなら、馬二匹に鞍を一つ載せてきたら上げる」と言われたから、このまた武士は帰つて来て、このお婆さんに、

「こんなに言われたんだけど、どうしたらいいですかね」とこの年寄りのお婆さんに問うたら、このお婆さんが言うには、

「じゃあ、妊娠した馬に鞍を一つ掛けて行ったら、これが子どもが出来たら二匹になるから、妊娠した馬に鞍を掛けて行きなさい」と言われたらしいよね。この武士もまた、ああなるほどと思つて、こんなんして言われた通りに行つたらしいよね。

たらまた、向こうでは、今度はこれを合格したんだけど、

「流れる水にきれいな薔薇の花を浮かべて、薔薇の花流れたらどうしますか」と言われたらしいよね。そしたらこれも返事にまた、

「そんなにきれいな花は取つてみたいなあ」と、そう返事をしたらしいよね。そしたらこれも合格したらしい

い。

今度はまた、これも二つは合格したから、

「今度はもう一つ合格したらあげる」と言つてね。今度はまたたくさんの人集めて、たくさんだったから、簪を選ぶでしょう。簪を選ぶ時には、竹を三つ切つて来てごう、竹の上にお膳を載せて、その上にご馳走作つて入れてあつたらしいよね。それで、みんなの前に置いたら、この御飯とつて食べ切れる人だったら、もう簪を置いてないから、嫁さんを上げるに決まつていますでしょ。で、あの、みんなは考え切れなかつたらしいけど、この武士はね、小刀も置いてあるから、竹を刻んでお簪に作つて食べたら食べられるなあと思つたからね、この竹を小刀で割つて食べたらしいよね。そしたらこれも合格して。嫁さんをもう貰えることに決まつたらしいよね。

そしたら、決まつたから今度はもう結婚して、いくらかも日にちたつてからでしょ。このもう、嫁さんにすることに決まつたから結婚してお家に連れて来てね、連れて来て普段の生活をしていたんでしよう。

その時に、オランダから名城にこんな強い武士がい

るという話だから、噂話だから、

「本当にいるかねえ、私たちと力比べが出来るかねえ」と言うて、向こうから望んで来たらしいよね、浜辺に。そしたらこの名城の武士はね、浜辺に百姓の支度をして、簡単な支度をしてね、浜辺に行つて、普段の人みたいに浜辺に行つてゐる時に、そのオランダ人は寄せて来ているんでしよう。そしたら、このオランダ人はね、

「あなた、この部落に武士がいるとの話だけど、あなたこれ知ってますか」と言うたら、

「はい知ってますよ」と言うたらね、

「じゃ、あんたこれ呼んで来てくれないか」と言うたら、

「はい、呼んで来てはくれるんだけど、何か私の望み通りね、私の希望を通してくれたら呼んで来てくれますよ」と答えたらしいよね。であの、

「あんたの望み通り何をあんた欲しいか」と言うたら、「私は刀、太刀ね、あれを欲しい」と言つたからね、「じゃあこれを約束通り上げるから、あんた呼んで来てくれ」と言つてね。呼んで来てからこの太刀を一つ貰つ

てね。自分の家へ、

「じゃ、呼んで来ますから」言うて、実は自分が武士だから、また百姓の支度をしているんだから、着物着替えに行ったんでしよう。で、お家行つて、妻もまたやつぱし按司の娘だから、やつぱし妻も武士の家だからね。

「私はこうしてオランダ人と力比べするから、大勢で私は一人であるしね、もしや負ける時、私の着物にね、血が付いていたらね、私はもう切られている証拠だから、その時はあなたもそのつもりでやりなさいよ」と話はして出たらしいよね。

そしたら、大勢の人だから、どうせ戦つて、みんなこの短刀でみな切り殺して、相手をみな。で、自分は相手をみな殺したから、今度は自分の着物に血が付くわけですよ。それを妻は、ここで立つて眺めて見ていたらしいよね。そしたら自分の旦那さんが着物に血が付いているから、もう生きていないねと思つて、妻はそこで切腹したらしいよね。そしたらこのウールンチブシ（大殿内武士）も、負かしてはいるんだけど、妻が切腹したから自分ももう切腹したとの話だけ。

このまたそこで倒れた人は、名城の後ろの北側に大きなガマ（洞穴）がありますよね。今もありますよ、このガマはね。そこをアガリエとかアガリエガマとこのへんの人は言うていますけど。その人が初めてこんな大勢の人を殺して入れたから、初めての穴だからつて、アガデーガマと付けたという伝説になっているらしいよ。

字小波蔵 伊敷ヨシ

56 継子話（麦搗き・二十日月）

自分の子は大変可愛かつたつてね。麦搗かせたからね、あの、麦は昔は臼で搗きよつたて。臼に入れて搗きよつた。あれ、いくら搗いても皮剥けなかつたつて。だからもう、涙が出たから、疲れて涙が出たから、涙が出たところはね、麦の皮が剥けたつて。

「ああ、こりゃ水掛けて搗くんだね」と言つて、あれから水掛けて搗いたて。

それにまた、

「今日の仕事は二十日月が上がるまで、月が上がるまで働かなければ夕飯あげないから」と言うたからよ。あの時も、神様がわかつたのかなあ、前の日よりも早く上りよつたつて、月が。十九日の月よりはよ、早く上がった。そんな話やつたが。ほんとか嘘かわからん。聞いたただだから。

類話

字伊敷 新垣ヨシ



57 継子の味噌弁当

類話

字束里 玉城 春（東辺名区）
字束里 下田ミツ（上里区）

自分の子とね、継子はどうしても本妻の子だったでしょう。自分の子なら後妻だから。それでもう、区別してね。御飯上げる時も区別して、しておったつて。昔はそんなにご馳走もないし。もう、味噌といつても味噌はもう自分で作るから、いっぱいあるから。

自分の子どもにはいつもおいしい物を上げてね、何か。そしてこの、継子にはね、味噌ばかり食わせておったつてよ。味噌ばつかし。

そしたら、自分の子はね、自分の子どもはもう、おいしい物だといつても、昔だからそんなになかっただろうが、自分の子はおいしい物を上げたつもりであるけれども、栄養はつかない。継子はね、味噌ばつかし朝晩食べているから、もう体が丈夫になつてよ、味噌の栄養で。それ、強^{ごうりき}力になつたね。継子はあの、優れたつて。

字伊原 玉城ハル

58 継子の毒入り弁当

人にはわからないように殺そうと思つてね、おにぎり作つてあげようとしたら、あの、二つ作つてあつたて。自分の子にもあげるものあるでしょ。また、神様あれしたかな、子どもがしたかなあ、毒の入つたものを自分の子どもが食べてよ、本当のものをまた継子が食べてからに。自分の子どもが亡くなつて、また、継子は生きていたから。これも、「おにぎりはどれ食べたか。どつちのもん食べたか」と言つたから、

「こつちのもん、兄さん取りよつたから、自分はまた別のものを取つて食べた」と言つたから、これもびつくりしてよ、あれから継子いじめは良くなつてきているつて。あの後からは継子いじめが良くなつた話だつた。

字豊原 国吉マツ

59 継子話（簀と七重ね毛）

この島尻から首里に行こうとする。首里に行つて帰り、冬の一寒い日に、継子と実子二人、女の親と三名、まあ首里に行つてゐるわけですね。首里に。帰りはもう冬の非常に寒い日に大雨が降つて、雨が降つて。この継子は簀と笠を着けさしとるわけさ。そして、着物を、一重の着物を一枚で、もう非常に寒い。で、この実子はもう厚い着物を七枚着させてね。だから雨に濡れないうちは温いから。で、継子と実子とはこう、相当継子は非常に、この取り扱いが獣のような取り扱いしかやらんもんだからですね。実子は、本当の子は厚着を、七枚も着けさせているから雨が降つても大丈夫いので。いよいよこの、ナバンミ（那波嶺）という坂まで来ておるわけですよ。

そしたら、この継子はですね、簀だから全部流れて、下には水は通らないわけですね。

それでこの子は元気。実子はだんだんだんだん水が

下にしみ込んでいつて、もうぶるぶる震えて、凍死してしまつたです。この坂で。

それで、そこで葬つたわけです。それでここを七重ね毛といっているんです。七つの着物を着せとるものだから。

字武富 長嶺和男

60 継子とみみず

継子と継親がいたらしい。それであの、継親はね、自分の子はいがって継子は粗末に、あれだつたでしょう。継子が盲人だつたらしい。

親が継子に、みみずが置いてあるでしょう。みみずいっぱい持つてきてね、みみずそうめんといつてよ、煮てね、この継子に、この目の不自由な継子に上げたつて、継親。そうしたらね、こりやもう食べれんでしよう。食べたならね、この目が開いてよ、立派になつてね、子の継子はね、順調に成長したつていうこともあるわけ。

字伊原 玉城ハル

類話

字糸満 玉城マシ

61 継子台

継子と実子二人寝かせてね、この継親が。継親はこの継子を殺すために。一人は連れて行つたら、寝ておる間に寝返りしてから、二人は変更になつてよ、反対になつていたつて。反対になつて、これ、わからないで、池に落としたらね、自分の子だつたつて。あれから目が覚めたね。

字豊原 国吉マツ

62 継子話（チバナより痛い）

お母さんが継親で、あんまり苦しくていじめられて、ほんであの、チバナという木がありますよ。刺がたくさん立つたチバナでありますよ。それがこの継子がよ、あんまりお母さんがむつかしくていじめられて、そのチバナという木に例えてよ、あんまり苦しくてよ、『このチバナ、刺が立つてるから、足踏んだら痛い。それより継親のお母さんはもっとむつかしく痛い』いうお話があります。

字真栄里 比嘉スエ

類話

字豊原 金城カマド

字小波蔵 奥間ヨシ

字糸洲 神里カマ

63 兄弟の仲直り（イ）

山羊がね、いつも産むたんびにね、三つずつ産みよつたんですね。それでもう、これはもう、こんなにしてね、山羊を産んだらね、

「これはもう山羊でないからね、早く太らして、殺して食べよう」と言つてね、殺したんですね。その中に、竹の葉ですね、それとまた、瓦ですね、それが一個あつたんです、このおつゆの中に。そして、入れてあつたからね、不思議に思っているですよ。『珍しいね、いつもはこんなにしないのに何かねえ』と思つて聞いたんですね。

そして聞いたたらね、うちのお婆さんの話が、それはね、あるところにね、昔の頃の話だけどね、兄弟が、大麥仲の悪い兄弟だつたそうです。それでもう、カワラの側に弟のほうですね、カワラの側の畑にですね、麦植えてあつたらしいんですね。そして、その麦が毎晩毎晩つめられてね、してもう、この主は怒つてです

ね、それで、

「今日はもうこれは捕まえないといけない」と言つて、棒を持つてね、行つたそうです。して、隠れていたら、この麦をつめよつたそうですね。それは本当の人ではなくて、鰻だつたらしいんです。それでね、棒で殴つてね。したら、この鰻がもう死んだそうです。

でも、この殺した人がもう人と思つてね、それで、友達の家にね、

「私ね、人殺してあるからね、いつしよに行つてくれないか」と、頼みに行つたそうですね。したらあの、この人はね、もう、人殺してあつたらね、

「私、こんなものできない」と言つて断わられたそうです。友達はや。して、もうこれは自分一人では片付けることはできませんでしょう。それで、この仲の悪い兄弟のところに行つたらしいですね。

「私、もうこんなこんなだからいつしよに行つてくれないか」と言つて頼みに行つたそうです。して、頼みに行つたら、

「ああそうか、どこか」と言つて、またこの兄弟はね、行つたそうです、この畑に。

行つたら、こつちの穴から喋りよつたそうですね。

それで、こつちで何か話があるからね、まず隠れて聞こうといつてね、隠れて聞いたたらね。これは雄だつたそうですね、この殺された鰻は。また雌が出てきてね、それで、

「もうあんた、殺されたらどうするね」と言つてね、したら、このまた、殺された鰻が、

「私ね、私、炊いて食べたらね、キーハギヤンメーつける」と言つたそうです。してね、だから、この生きている鰻がね、

「あんた、炊いて食べられてもね、竹の葉とね、瓦とね、入れて食べたらあんたはどうにもできないよ」と、そう言つたそうです。そして、その鰻は泣きよつたつて。

そいでね、これは鰻だからね、また、兄弟二人で担いで行つてね、それでみんなで食べて、竹の葉とね、瓦と入れて食べたからね、何でもなかったそうです。それから、この兄弟はね、大麥仲良くなつたつて。

類話

字武富	長嶺トミ
字与座	伊敷清保
字真栄平	大城ハル
字小波蔵	奥間ヨシ、伊敷フチ子
字山城	仲門銀助、新屋タカ、新屋アキ
字大度	山城アキ、外間カメ

64 兄弟の仲直り（口）

井戸があつたからさ。畑の前にとうもろこしなんか植えてある、野菜植えてあるけど、毎日これを、野菜切るからと思つてさ、殺しに行つたから、鰻であつたつて。鰻。鰻だけどね、夜だからね。

大きい井戸があつたそうですよ。鰻がいるところさ。まあ言えばね。あつたから、こつちのほうの、とうもろこしのことをとうぎんて言つたね、とうぎん。とうぎん食べよつたつて。

「毎日こんなんして食べるから殺しとけよ」と言つて、行つたからさ。鰻、大きい鰻だから殺したつて。それで、もう殺したから見ないでさ、逃げてきた。友達に行つてさ、「人、殺してあるから、いっしょに片付けてきよう」と友達に言つたそうですよ。だからあの、大きい鰻だった。だから友達にさあ、

「うち、人殺してあるからいっしょに片付けてきよう」つて言つたからさ、

「いいえ、わたし、人殺したの担いできたらわたしもおんなじねえ、罰当たるから」つて言うていやがつたつて。友達はや。

もう仕方がなく、仲の悪い兄弟に言つたから、

「大変だねえ。いっしょに早く、人が見ないうちに片付けてきよう」つて、いっしょに兄弟が片付けに行つたから、いくら何言うたつて兄弟はね、仲良しくはなくても兄弟は兄弟だねつていう話があるさ。

字真栄平 喜納サト

65 仲順流り（イ）

あれは、仲順ウスメーといつてですね、三人の男の子を生んでですね、その嫁さんを貰つたわけですよ。そのですね、仲順流りというのは父親です。それが出てきて、その子どもですね、性質を調べるんです。

最初にね、長男から。

「僕らはね、これで長くないんだから、君の子を捨ててね、僕を助けなさい」と言うたそうです、長男の子に。そうしたならばこの長男の子がですね、父親にね。この父親、仲順ウスメーと言います。

「仲順ウスメーは馬鹿になつて、こういう立派な子を捨ててあなたの命を救えと言うんですか。これはできません」と言つてですね、押し返してしまつた。倒すんですよ。これは、仲順ウスメーはですね、

「これでは僕の命をとて救わない」。そうして長男は帰るんです。

今度は次男に言うんです。次男にもね、

「次男の子ども、よく聞いてくれ。僕はもう助かるわけないんだが、君の子を捨ててね、僕の命を助けなさい」と言うた。それもやっぱりまた次男も、その長男が言つたように、

「仲順ウスメーは馬鹿になつて、どうしてこんな子どもを。とてもできません」と押し返したそうですね。

またもですね、仲順ウスメーはまたも、

「これではもう命は助からない、だめだ」と言つて、するんですが。押し返して次男もまた、嫁さんを自分の子どもにですね。

今度は三男がですね、この仲順ウスメーにこの三男の子が、

「子どもはね、生まれれば生まれる。親の命はだめにしたらもうおしまいだ。子どもは生まれるだけまた生まれるんだから、子どもを捨てて親を助ける」と、仲順ウスメーに言うんです。この仲順ウスメーは、

「ありがとう。君がそういうふうな考えてくれたら感謝する。じゃあそうしてくれねえ」と言つて、この三男のほうに頼んだらしい。

そうしたら、この三男の子は、

「はい」と言つて。

「子はもう捨てて、あなたの命は僕が救うから、安心しなさい」と言つて、この父親に言うんです、仲順ウスメーに。

「ありがとう、そうしてくれねえ」と言つて、これをもう頼んで。それから、

「君の子は捨てるんだから、東のムイのね、三本松の下に三尺穴掘つてね、埋めなさい」と言うんですよ。仲順ウスメーがですよ。そして、言つて仲順ウスメーが帰るんですよ。

その三男はですね、子どもを連れて、この三本松のあるところを探しに行く。子どもを連れてですね。そして、この三本松を探して、村のね、村のずうとあちらこちら改めて、三本松はここにある。じゃ、ここに三尺穴を掘つて埋めようといつて、夫婦ともね、やるんですよ。

そして、三尺穴掘つてね。埋めようとする場合にですね、それ、そこに黄金くわんごの玉が入つてあるんですよ。それが破裂してですね、花咲くんですよ。

それでね、もう子どもの命も救われて。

66 仲順流り（口）

この仲順流りちゆんじゆんながというもの、仲順大主ちゆんじゆんおふすという。大主です、仲順大主。主がですね、男の子三名もうけて、生まれておる。三名生まれておるが、この三人の子どもですね、これにいわば、物言いつけですよ、物言いつけ。

「親はもう年取つて何もならんから、食べ物もできんから、あなたの息子を捨ててですね、おれに乳を与えなさい。おっぱいを与えなさい」という意味でですね。

長男も次男もお断わりしたわけですね。お断わりして。三男がですね、こういうふうに歌つておつた。

『親のまたとも拝まれん、なちぐわーなじきてい抱かりゆん。なちぐわーやしていい。ちいあぎら。』つちゅうて、するわけだ。おっぱいあげましよう、これを申し込んだわけだ。申し込んでからですね。

これを、この人がよ、このなちぐわーを、この孫をですね、どこにも捨てさせない。三本の松の生えてお

類話

字真栄平

比嘉ス工、喜納カメ、金城 苗、
玉城亀雄

字新垣

金城栄吉

るところに三尺穴を掘つて、葬つて、やったですね。

この妻がですよ、この夫を抱いて子どもを抱いて出掛ける、妻が。ここにおつても何もならん。雨傘を被つて、この自分の息子のところついで行く。

行くところですね、夫は鍬を持って穴を掘つて、この一鍬打たせば子どもは面白く、二鍬打たせば、親に向かつて笑うて。三番目に、二回打たせば三尺で、二回に掘りたる穴の中、今度はここから宝が生まれてくるわけだ、宝が。黄金の宝箱をそこから掘り上げた。自分の子どもを宝と思つて。

字名城

伊敷義光

67 仲順流り（八）

子どもを三人産んどるがね、産んだ子どもの心はわからないという。今日のよい日にね、三人集めて、そして、この心を調べるといふんですな。そしたら、長男に言つたらね、

「ぼくはもう年のためで、物を食べないから、君の家内の乳をぼくにやれ」と言つたら、「年はもう、そんな年になつておるからもうだめだ。断わる」と。長男は。

それから、次男はね、

「そんなに年になつたので、もうだめだ。朦朧なつておる。お前は死ぬならもう死ね」と言つて。またこれも断わるんです。次男。

それから三男はね、

「ナシグワーというのは、また産めると。ところが、親というのは二度とは得られないから、子どもは捨てて乳を上げます」といふんです。乳をね。そしたら、

「もし君が子どもを捨てるならば、東の森に三本松が生えておるから、その松の下に三尺穴を掘つて、そこに埋めなさい」と。本当はこれ、三尺穴掘れというのはこのお爺さん、ここに埋めてあるんですよ。そして、もしも親に孝行する者にはこれを与えようという意味でやつておるもんですからね。

この三男は、三本小松の下に三尺穴を掘つて捨てろといったもんだから、今度は子どもをおんぶしてね、あそこの森に、そこに三本の松があるんですよ。したら、三本の松があるから、

「ここまで来た。もうとうとう君とぼくとはお別れだなあ」と言つて、子どもに対して泣くわけさ。

そして、子ども降ろして、今度、一鍬下ろしたら一尺、二鍬やつたら二尺、今度、三鍬打つたら三尺だからね。今度三鍬打つたら、とうとう子ども埋めるところですがね、子ども埋めようとしたら、黄金が花を咲いてね。黄金の花も拝まれて、なんじゃ（銀）の花も拝まれて、子どもの命も救われて、親子連れて家に帰るつていふんです。

類話

字摩文仁 伊集盛亀
字伊原 上原孝助

字名城

伊敷亀順

68 仲順流り（二）

兄弟二人おつて、二人とも親孝行なもんですからね。で、それで、お爺さんが病気で、

「どうしてもこれは、子どもの生き肝をやらねば治らない」と言つたもんですから、兄さんに聞いて、兄さんは反対したと。

で、弟に聞いたたら、弟が、

「じゃ、やる」と。

「それじゃあ、その子どもを、どこそこの山の麓に穴を掘つて埋めなさい」と言われたもんですから、鍬を担いで行こうとしたら、お爺さんが治つて、

「本当にそうするのか」つて何したら、

「そうだ」と言つたら、

「これはあんたらの肝を見るためだから、もういいからやめなさい」と言つて、そこを掘つたら、そこから宝物がたくさん出て、その弟のほうは金持ちになつたという話は聞いたことがあります。

69 大年の客



あるお正月の夜にね、これ本当かうそか、これはわからんけどもよ、お爺さんから聞いた話だからよ。大晦日の晩に、一人のみすばらしい人が、このある一軒の金持ちの家に入って来たつてよ。ほんで、

「すみませんけれども、一夜は泊めて下さい」つてお願いしたつて、そこに。そいてお願いしたらね、その家主がね、

「お正月にこないして人の家に宿を求めて来るのはね、どんな人か知れない」と、とにかくもう追い払ったわけよ。人を泊まらせるわけにはいかないといつて追い払ったつて、この金持ちの家から。

そしたら、このみすばらしい支度をしたお爺さんはね、また隣の貧乏な家に、

「泊めてくれ」と言つて行つたら、そこはまたね、その家は、何も食べるものはないね、薪を焚いて。冬さ、お正月の、大晦日は。

てよ。

そして、その方がね、

「明日は、朝は隣の家に行きなさい」つておっしゃつたつて。そのおっしゃる通りに隣の家に行つたら、びつくりしてね、

「なぜあんたたちは昨日まで年寄りだったのに、今日はこうして若者になったの」と聞かれてね。それから、夕べのことを、

「泊まりにお爺さんがいらつしゃつて、そして、泊まられたお札にこうしてお風呂入つたら、もう若くなつたよ」というように話したらしいよね。

そうしたら、自分の家に一応来たけれども、追い返されたでしよう、金持ちからは。そんでまた、後追つてまた呼び戻しに行つたらしいよ、この金持ちは。そして、泊まつたら、

「私たちも若返りたいから、若くして下さい」つてまたその人にお願ひしてね。したら、とにかく、その家の長男はお猿になつたつて。お猿になつて。また、鳥になつて飛んで行くものもあるし、みんなもう、鶏なんか、獣なんかになつたんですよ。お爺さんたちも

「薪を焚いて当たつても、お爺さんとお婆さんの二人でお正月しようねつて、今相談しているところですから、それでもよかつたら泊まつて下さい」と言われたつて。そしたらね、

「結構です」と言つてそのお爺さんが入つてきて。

そして、何か、このお爺さんがお米持たしてくれたといったのかね。何かそんな。そして明日、泊めてくれたお札にね、

「あんたたちは欲しいものがあつたら何でも言つてごらんなさい。欲しいものを出してあげるから」とおっしゃつたらしいよ。そしたら、

「欲しいものはいりませんがね、もう年取つてお爺さんお婆さんだから、若返りたい」つて言つたつて。そのお爺さんお婆さんが。そしてあの、

「じゃあ、若返るんやつたら」。お鍋にお湯を沸かしてね、お爺さんがお風呂入らせて浴びせたら、もう若者になつてしまつてね、このお爺さんお婆さんは。貧乏者のお爺さんお婆さんは。そして、若者になつてしまつて。それで、若くなつたらね、お爺さんの、泊まりにきた、みすばらしい支度をなさつた人が神様だつたつ

昔の話を、聞いた話をまた孫たちにしたはずよ、その話はね。

そしたら、

「何か障りごとはないか」。障りごというよりも、その、もうこつちはみんな、鳥や獣になってみんな飛んでいなくなつて、この金持ちの家は空いたさあね。だから、「その家はあんたたち夫婦で住みなさい」つて。そこにこの貧乏者は住んだらしいよ。住んだらね、何かこの後から、

「何か災いごとはないか」つてまた回つて、また神様はいらっしゃつたつて。その時に、何か、

「ワヤーネーリー」と言つてお猿が来て、いつもこつちに、石の上に座つて「ワヤーネーリーしますよ」と言つたらね、そのワヤーネーリーという言葉は、『私の家を返せ』という。私の家をネーリーという言葉で言つたらしいよ。そしたら、この神様がね、

「何時頃、夜は来るねえ」と言つて、したら、

「何時何時に來ますよ」と言うたら、

「じゃ、あれが来る前にね、この黒砥石をね、火でものすごい焼いて置きなさい」つておっしゃつたつて。

そしたらね、お猿さんが来るさね。で、こつちに止まつたら、それから焼けて、お猿はお尻が赤くなつたつてよつという話。もうそれからこつちには行かれなないと。お猿も来なくなるしね、その貧乏者の正直な夫婦はこの家の主になつて。神様が下さつたつて。

だから何でも、欲張りにもならないで、みんな素直に育てなさいよと言つたお爺さんのお話だつたはずよ。

字小波蔵 伊敷フヂ子

類話

字糸満 稻嶺盛亀

70 猿長者

それでは、私たちが小さい時に、お正月の、お爺さんやお父さんたちが、年頭の挨拶参りを兼ねての席でよく聞いた昔話をこれから始めます。

昔あるところに、年取つたお爺さんとお婆さんがおられたようであります。また、その隣にはたいへん金持ちの、先のお爺さんお婆さんというのはごく貧乏のお爺さんお婆さんで、また隣には、たいへん金持ちの家があつたようですが、ある年の暮れ、大晦日の日に、この貧乏人の年取つたお爺さんお婆さんは、普通だつたら一般的に沖繩では、豚をつぶして年を取るといのが、年を取り、そして各道具、家内の道具です、道具にもニンニクの葉をもつて年取りなさいといつて、そのニンニクの葉を配つて、そして大晦日は一様に年を取つたようですが。

この貧乏人のお爺さんお婆さんは、食べる物もなければ何もないということで、お婆さんに、

「隣の家へ行つて米俵を借りて来なさい」と言つたもんだから、お婆さんが、
「これを借りてきてどうしますか」とお爺さんに聞いたら、お爺さんは、

「この米俵を借りてきて、これから米粒の一粒でも二粒でも落ちれば、それを炊いて、それで年を取ろうではないか」と言つたもんですから、お婆さんは、

「ああ、そうですか」と言つて、隣の家にこの米俵を借りに行つたと。

だがしかし、隣のお金持ちの親父はすぐさま、「貧乏人に貸す俵はない」ということで、突つ返したようであります。そのお婆さんは泣く泣く家に帰つて、その状況をお爺さんに一歩始終話したら、

「そうか、それではもうやむを得ないから、火を炊いてでも年を取ろうか」ということで、火を炊いて老夫婦話し合つていたところに、あるところから白髪のお爺さんが現われて、

「なぜこのようにしているか」と言われたら、お爺さんから、

「実はこうであります」と、今までのことを一部

始終、この白髪のお爺さんに話したら、

「ああそうか。それでは心配することはないから、早く鍋釜をきれいに磨きなさい」と言われたんで、お婆さんがその鍋釜を丁寧磨いで、したら、すぐたちまち立派な御馳走ができて。

で、三名御馳走して年を取り、そして翌日、元旦の朝になって、起きるとこの白髪のお爺さんから、

「湯を立てなさい、お風呂を立てなさい」と言われたもんだから、素直に、

「はい」と言つて風呂を立てたら、まずお爺さんからそれに入つて。そしたら、この貧乏人のお爺さんは、今までもう年取つたお爺さんであるが、風呂上がると同時に、結婚当時の若さの若者に立返り、お婆さんも結婚当時の若い人に返つたと。

そしたら、この白髪のお爺さんから、
「それでは早く着物を着替えて、隣の金持ちの家へ行つて、年頭の挨拶をしてきなさい」と言われて。年頭の挨拶は本土では『おめでとうございます』ですが、沖縄では『よいお正月でございます』という意味のご挨拶をするわけです。そういう年頭の挨拶に行ったら、

逃げて行つてしもうた。

その時に、この白髪のお爺さんの隣のまた、前は年寄りで老夫婦であつたが、貧乏人の老夫婦であつたが、今はもう若返つておる、若夫婦になつておるその二人を、この金持ちの家に連れてきて。

「こつちにはもう主はいないから、君らでこつちのあれは管理しなさい」と。沖縄の言葉でカグサミという、カグサメルという言葉がある。これは、管理するという意味。

「しなさい」と言われて。それを喜んで受けて、その主になつて。

「その代わり、世のため人のために尽くしなさいよ」と言われて、

「そうしますから」と言つて一生懸命働いて、世のため人のために尽くしていたところ、こつちの元の主人が、猿になつた人が、今でいえば午後の三時頃になるといつも庭の、庭石に来て、庭石に座つて、

「我が家を返せ。我が家を返せ」と、もう毎日そのようにしてやられて、もうほとほと手を焼いていたところに、いつかまた、元の白髪のお爺さんがみえて、

隣の金持ちのお爺さんが、

「君は誰か」と。あの年寄りがこのように若返つてきたもんだから、見分けがつかずして問い質したら、実はこうこうであつたということの一部始終話したら、

「ああ、そうか」と。そして、

「そのお爺さんはまだいるか」と言ったら、
「もう今さつきお立ちになりました」と言つて。

したら、その金持ちのお爺さんは早速馬を立てて、そのお爺さんの後を追つて行つたら、道中でこのお爺さんに会つて、そして、もう拝み倒して家に連れ戻して。そして、

「是非われわれも若くして下さい」とお願いした。ただ、その白髪のお爺さんは

「そう、いいから早く、じゃあ風呂を立てなさい」と言つて、風呂を立てて。そして、主人から入ったら、その主人は終わると同時に、湯から上がると同時に雄猿になつて上がってくるし。そして、その奥さんは、女主人は、蠅とりになつて帰つてきたと。そして、子どもたちは鼠と。みんななつて出てきたと。そしてもんだから、この動物はここにはいけないから、みんな

「どうか、その後の状況は」と言われたもんだから、

「こうこうであります」とお話したら、

「それでは」ということで、

「それでは、その座る石の上に置かれる石を、釜に入れてちゃんと焼いておきなさい」ということで、この石を焼いて。

そして、お猿さんが来てそこに、石の上に座る時期を見計らつて、その焼いた石を置いたら、その猿が来て、そこに座ると同時にすぐ尻を焼かれて。それからお猿の尻が赤くなつたというお話と、さらに、世の中には貧乏してもね、嘆いてはいけないと、僻んでもいけないと。また、金持ちになつてもね、人を馬鹿にするんではない、奢るんではないと。金持ちも貧乏人も助け合つて世の中を渡るもんだというような教訓があつて。いつも昔の年寄りの方々は、われわれの小さい子どもたちにはいつもそういう話を聞かして。そして、われわれもそういう話を聞いて、ああ、そうかなあと真面目にこれを聞いて、今でもうる覚えではあるがまだまだ覚えて、たまには子どもたちにも、また孫たちにも今現在、實際話しております。

71 泥棒の恩返し

ある貧乏な方がですね、子持ちの貧乏の方が、大晦日になってもお正月をやる何もないんでね。金持ちの家に泥棒に行つて。その金持ちの主人がいい人間であるわけよ。そういう、まあ、泥棒に行つて。その金持ちの主人は、これが入つて、こつちが寝るのを待つてですね、片一方にあらしているのを主人は見ているけど。また、この人は見ているから、寝て。

この泥棒が取ろうとしたら、泥棒にそういうことを言うたらしい。白ですね、白にね、この泥棒が帯を外して、この白に巻いてね。武器道具ですよ、包丁なんかですね、この白に刺したら、何も取れるようなね、そういう話をしたら、この泥棒はこれを信じて、武器もいろんなものあれしてね。そうしたらまた、主人は起きて、泥棒を呼んで、どういふ事情できたか、事情を一々詳しく聞いてですね。まあ、実は家族が多くて食べ物に困っている。そういうことで泥棒に入つた



というあれでね。この主人は言うたそうです。

「そうか。何でも持つて行きなさい」と。たくさん何でもかんでも持たして。

後は成功して、この人に恩返ししたという話もありますかね。

字糸満

上原亀吉

72 鬼餅由来(イ)

男女兄妹、二人いたそうですよ。だからその男はね、男のきょうだいは鬼だったわけ。して、もうみんなも、この男がね、男のきょうだいがもうみんな、人をこなしてもうあれするでしょう、鬼だから。食べてしまおうでしょう。だからこのウナリ神がね、女きょうだいがね、

「こんなしてはいけない」と言うてもう、頭使つてから。して、餅をね、やつぱし昔は、とうもろこしと違って、もう一つね、赤い餅作つて、また半分は白い餅作つて、両方作つてからね。して、きょうだいにね、男のきょうだいに、

「今日、この日だから兄さんにあげるよ」って言つて、して、あげたけど、あげたのが、その場所が、今までこれ確かめられないっていうわけ。歴史面からもね。

これをね、海の側だったかね、ずっと山の絶壁だったか知らんけど、いえば絶壁にね、この男がね、絶壁

を後ろにして坐らしてね、坐らしてからね、餅も持って行って坐らしてからね。して、この女のきょうだいは、その前を開けてからね、して向かい合いに坐って、したら、その餅を二人の間に置いてからね、上がって行って、その女きょうだいがやったら、食べて、「おいしい」と言つて食べたことは食べたけど、赤い餅を食べようとする時に、その女がね、「兄さんは人食い口を持っているから、私は鬼食い口を持っているから」って言つて、やつぱこつちと言うわけさね。して、そのまま後ろに急に押し倒したつてしたら、男は落ちてしまったわけさ。それで退治したつて。

それでその、やつぱし餅の、いえば本当のあれは、この餅でやっているわけでしょう。餅食べさせるあれでやつておるわけでしょう。だから、それから、この鬼を退治するために、この餅の意味は、伝説ができて、して、それを家で毎年茹でるでしょう、餅をね。ふかすでしょう。そのお湯をね、家の口にね、みなかけるんですよ。熱いうちに。これね、『鬼の足をゆがします』と言つてかけるんですよ。これは。

73 鬼餅由来(口)

姉と弟が生まれて、弟が鬼だったらしい。それから鬼ムーチーといつて伝えが出たつてね。

きょうだいの弟がね、あまりもう一般の邪魔になつて、鬼だから、子どもたちもう食べよつたつて。それで、これ、考えごとしたでしょう、家族の者は、姉さんなんかは。それで、ムーチーの日にね、餅をいっぱい作つてね、ご馳走の餅持つて、この鬼の来るのを待つておつたつて。そしてね、ホーハイムーチーですよ。ホーハイ、絶壁に餅を作つてよ、また、パンツも脱いでね、この、見せて、女は。このきょうだいに。そしてね、餅も作つて、この饅頭も置いてね、開いておつて、

「あれは何か」と言つたら、
「これは何する餅」。また、
「これは何か」と言つたらね、
「これはね、鬼を食う口」と言つたつて。女。このち

類話

字武富	長嶺豊子、大城トミ
字北波平	大城正太郎
字賀数	大城政秀、照屋亀八
字阿波根	平田徳太
字兼城	新垣登一
字豊原	伊集守良、国吉マツ
字与座	城間ウシ、伊敷清保、伊敷スエ
字真栄平	名嘉真朝昌、大城加那、喜納サト、金城ヒデ
字名城	伊敷義光、伊敷亀順、新垣武登
字糸洲	中村光一
字小波蔵	伊敷力ミ
字南波平	伊集スエ
字東里	上良武定(上里区)
字福地	殿内三吉
字山城	新屋夕力
字伊原	上原孝助

んちんを開けてね。

「これは何か」と言つたらよ、

「これは鬼を食う口」と言つたつて。

そしてね、そういう場合に、姉さんの考えごとで、これは絶壁にね、わざわざ絶壁に行つて、もう殺すつもりだから、姉さんは。それでね、その争いの時にね、あの絶壁でよ、押し落としたつて。そして、押し落として後から、このムーチーを作つた、このゆがいた熱い湯があるでしょう。これを撒いてね、上がつて来させないように。湯を撒いて死なせたというさ。

それ、今もね、このムーチーの時には、ムーチー作つたらね、作つて後からは、この熱い湯でね、屋敷を清めるわけよ、みんな。一般でも。

「鬼は外、福は内」と言つてね。

74 鬼餅由来(八)

類話

字照屋 上江洲由豊
字真栄里 島袋仁栄

きょうだい、女と男どうしでね。それで、男のほう
が鬼だったらしいですね、話を聞いたら。お兄さんが。
それですね、ホーハイちゅうのはここですね、女の。
それは、一日、十五日は液が出るですよ。それを見せ
て、男のほうに、自分の兄さんに。兄さんは、
「これは何か」ちゅうのでですね、見せたら、兄さん
もびっくりして。そして、真っ赤な血を出しているも
んだから、

「これは鬼食らい口。鬼を食う口だ」と。

それで、庭には竹藪があつたらしいですよ。ムーチー
作って、ムーチーを煮てですね、その汁ですね、煮る
汁を屋敷内にかけてやったそうですよ。それを、妹が兄
さんを藪に押し込んでですね、そこで死亡させたちゅ
うような話だったですけどね。

字山城 仲門用三



75 鬼の家の便所

類話

字糸洲 神里カマ

字摩文仁 伊集盛亀

兼城の御嶽に男が住んでるわけさ。女はまた別々だ。
これがあんまり、鬼になってですね、悪いことする。
これ、動物を食べたりする。この姉さんが、これどう
にかできないといかんと、こつち見にきたら、子ども
を鍋にいっぱい炊いてあるそうですよ。姉さんは、こ
れはもう大変だから、死ねないから、逃げるわけさ。
自分も殺されるからといってね。この姉さん、逃げる
ことができない。

「小便可行から」と言つて、小便に行くと、腕にです
ね、縄をつけて、それを引っ張ったわけさ。

ところが向こうに、逃げたらどうするかといったら、
姉さんは、ムーチーね、自分が食べるのはお餅、作っ
て。また、この男は鉄を、鉄のを。女はおいしい餅を
食べて。それから下出してね。こつちをこう出して。

「こりや何か」と聞いたたら、

「あなたを食べる穴だ」と言つた。



76 クスケー由来

夜、夜半ね、夜分の時にね、歩いてね、歩いたらね、何かが来るらしい。夜分に歩いたら。その時にね、赤ちゃんのお祝いがあつたらしい。その時にね、人が夜遅く入って来たらしい。

その時にね、この人が来たからね。霊がですね、この赤ちゃん取りに来たらしいよ。赤ちゃん取りに来たから、来ないうちにね。まず、あれが来ないうちによ、用心棒が来たのか知りませんですけども、

「どんなんしてこの赤ちゃんを取るかね」と協議したから、

「鼻ひらしてね、くしゃみさせて取る」と言うて、霊の話ですよ、今、したから。それをまた人が。そしてね、

「くしゃみした時に、『クスケー』と言ったらどうしようか」と。

「そんな時はもう取られない」と。そうしたらしいや。

だからね、誰でもね、くしゃみをした時には、『クスケー』と言うらしいですよ。霊が来てよね。霊が来て、くしゃみした時にね、『クスケー』と言ったから、この霊は子どもを取らないで、もう戻って行つたらしい。だから、その伝説もあるから、さて、みんながね、大人でもいいですよ、くしゃみの時にはね、必ずクスケーと言いますよ。

字兼城 大城キヨ

類話

字与座 城間ウシ

字福地 大城タツ

77 ハジチ由来

沖縄からね、この人の妻が流されて、鹿兒島に流されたつて。流された時に、この人はまた、王様が、

「立派な女が来ているならこつちに寄せてこい」つて。話して、

「あんた、私の奥さんになるかならんか。今返事、返事」つて言われたから、

「考えさせてくれ」と、そのうちにリクサツク（袋）から墨取つて、手塗つたつて。

「はい、そんなら出来ます」。

「杯を取りなさい」と言うたから、これ見たからね、これ見たから、

「ほう、これは野蛮の奥さんだろう。これ、できない」つて。このままでまた、自分の国に帰ったから。これ、上からの流れだから、時代の人だから、これ突いたらもう引つ張られない。これは上からの流れだから、これはいいことするハジチ（針突）だなあと、みんな。

これは、昔の話だからね。何の王様の妻だったか、これ。王様の妻聞いたが、もう忘れてないから。沖縄の人よ。沖縄の大主（うふす）の人妻、鹿兒島に流されて、ここであつた王様が、

「連れてこい、連れてこい」されてね。これを、

「私の妻になるかならんか、はい、杯取りなさい」と言うたから、

「考えさせて下さい。できるから考えさせて下さい」。

そのうちリクサツク取つてから、

「はい、できる、できる」。

「できるかできないか、そんなら杯取りなさい」という時に、取りながらこうして、こうして取つたから、こうしたから見えてしょう。

「もうこれ、野蛮、野蛮。連れて行け、連れて行け」つて。これから、あれされたから、「これ、いいことだねえ」と言つてから、この時代の娘たちはこれ付いている。これを付かんとまた引つ張られる。こういう話聞きました。これは昔話。

字糸洲 神里カマ

類話

字豊原 国吉マツ
字新垣 宜野座仁一郎
字福地 並里武吉
字伊原 玉城盛勝

78 姥捨山(イ) (柴折り・難題)

昔の年寄りにはよ、これチテ一話(伝え話)であるよ。六十歳になったらよ、もう年寄りは役に立たないといつて、息子がおんぶして、このアムトウンシタ(堤の下)というところに捨てに行きよったつて。

そしてまた、最初、連れて行く時によ、行く時に、やっぱし親は、子どもが捨てに行くけれども、親は、子の思いは人情があるでしょう、親というもの。だから、この親が、行く時に枝を折ってね、道の途中、アムトウンシタに行く途中、枝を折ってね。この枝を折るのは何のために枝を折るかといえば、またこの、自分の息子がおうちに帰る時に、道に迷わないように、道の何というか、

「この枝が折れているのを見て、おうちには帰りなさい」というのさ、息子に。

親がやっぱしこのぐらい子どものことを思うさ、息子のことを思つて。であつたから、これもやるし。

また一つは、王様から、

「雄鳥の卵を持つてきなさい」と言つたから、

「やっぱしあなたも男だから、あなたも卵を産めるか」と返事返したさ。返したから、もうこれはこつちに負けているさ。これもやるし。

また、

「綱を灰で、灰で綱を編んで、この灰の綱を持つてきなさい」と、この命令がきたからやん。またこの子どもには、この息子には命令がきたから心配しているさ。考えても、灰で綱を編うということも、これは考えても考えれない。どうしてもできないとこの息子が心配しているさ。だから、もうお父さんだつたらわかるかもと思つて、お父さんのところに聞きに行つたから、「これより簡単なことはないのに、こんな簡単なの心配するねえ」と言つたから、

「綱を編つて、綱を編んでね、藁で綱を作つて、これを焼きなさい。焼いたらすぐこの形がやん、灰で綱編っている形がちゃんとなるからこれあげなさい」と言つたから、これから親は大事になつたて。年寄りは大事になつた。やっぱし親の考えが上。

類話

字武富 大城トミ、長嶺京子
字北波平 大城正太郎
字賀数 新田繁一
字豊原 国吉マツ
字真栄里 比嘉スエ、伊敷三郎、玉城亀雄
字真栄平 喜納サト、名嘉真朝昌
字新垣 宮里栄吉
字伊敷 新垣キク
字福地 川門カメ
字伊原 上原孝助、玉城ハル

字真栄平 喜納カメ

79 姥捨山(口)(柴折り・薩摩の難題)

お婆さん方でもお年寄りでも女でも、六十一歳になったら山に捨てに行きよったそうですね。その時、子どもが山に連れて行つてからね、このお婆さんは、もうこの子が道迷いしたら大変と、帰り道に木の葉を折って置いて、ほいで、といといとい山奥まで行つて。だから、またこのお婆さんが、

「私が木の葉を折つてあるから、迷わんように行きなさいよ」って。親子の情はあるけど、六十一歳になつたらば、お婆捨て山に捨てられたつてね。その捨てられたお婆さんの理由がね。

また、ある子どもさんは、お婆さん連れて行つて捨てては可哀想だからゆうて、床、家の横の下に穴掘つて、お婆さんは、巡りに来た人が来ても、

「お婆さんはいないよ、持つて行つたよ」って、下に籠めておいてしたからね。

その時ね、お婆さんが、お婆さんそこに御飯も上げ

である。またこの人も、何といふかなあ。雌鳥は卵を産むでしよう。『雄鳥の卵持つて来い』って。こう言われて。これにこう言われて。また、何とか、『灰で綱縋つてきなさい』って。お婆から習つたんだよね。このお婆さんは自分のあれだから、またこのお婆さんが、灰で綱縋うてくれつて言い付けられたからどうしようかねえと心配するうちに、

「これをね、瓦の上に縋つた綱を焼いてごらん。すぐ綱になるから」と、お婆さんに習つたらね。

「まあ、お婆さんは偉いからこれ捨ててならん」言うた。

字糸洲 神里力マ

類話

字照屋 前川次郎助

字糸洲 中村カツ

字南波平 伊集朝助

字福地 大城タツ

字山城 仲門銀助

80 姥捨山(ハ) (馬の親子)

六十になつたらですね、仕事もできないから、物ばかり食べて。アムトのヒチャー(岩戸の下)に連れて行つてですね。それはティール(籠)といったんですがね。それはね、芋を入れてですね。

「お前の食べ物ほそれだけだから、それだけ食べたら死んでしまえ」と言つて、アムトのヒチャーに連れて行きよつたですよ。そういう話もあるんじやが。

それが直つたのはこうらしいです。ある部落ですね、白い馬を二つ、まあ、道から貰つたか、どっから取つて来たそうですね、親か子かわからんらしいですよ。この生きているのが。だからある人が、

「アムトのヒチャーに連れて行つたあるお爺はそんなものよくわかるから」言うてね、二、三名連れて聞きに行つたらしいですね。

「あなたがたは、そのぐらいもわからんか」言うてですね、

「それやつたらね、寒い時にですね、風のある時に二つ並べなさい。親は風の上に立つ。子は下になる」つて、そう言つたらしいですね。それから、

「ああ、年寄りは宝だから、これ捨てて行つてはいかん」と言うた。それから直つたという話もあるんですが。

字賀数 新田繁一

81 ハブの昇天

ハブは七回脱皮するまでに人間に見られなかったら、竜になるという話しよったが、これも本当かうそか。ハブは七回脱皮するまでに人間の目に見えなかったら、人間に見られなかったら竜になるという話ですよ。

ハブが七回脱皮するには何年かかるかという問題があるわけですよ。昔の年寄りはその話をした。ハブが七回脱皮するまでに人間に見られなかったら竜になって天に上がって行く。

それからもう一つは、竜巻ですね、竜巻。竜巻はだいたいは海から上につながつて、だいたい黒くしてこうして回るでしょう。昔の人は、竜が水を吸い上げるという話よ。

字与座 伊敷弘吉

82 フカに助けられた男

八重山で、ある人が、八重山は無人島がたくさんあるもんですからね。この無人島に畑があるわけさ。それを自分の島からサバニで渡つてね、こういうふうにかう渡つて。畑耕してきて。

帰りには暴風雨だつてね。あれだつて、船が沈んでしまつて。そして上にあがつて、島の。上に上がつてね。凍えて寒いとは、その頃は何なんでしょうかねえ。子どももいたという。端上がつてからよ、端上がつてこつち、潮が引く時には小さい貝類はね、その貝類を取つて食べて。そうやつて今まで暮らしておつたそうですね。それ、八十歳になるよ、今。

八十歳になつてからよ、その時に、この浜でね、浜に。魚がね、キラキラと泳いでくる。魚が。それ取ろうと思うて。フカだつて、フカ。フカがきて、後ろのほう回つてね、股のほうに入つて。これ、雌でね。フカというね、どこ行くかと。元の島に行ったね。浜

にフカは引つ掛けて。それでこの人、置いてね、置いたらフカは帰つて。

字糸満 上原牛蔵



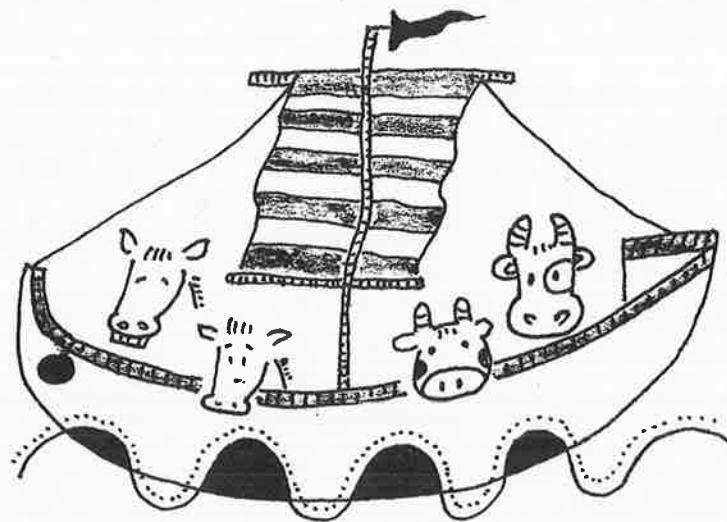
83 武士と肥やし

昔、百姓と士族とはね、もう、百姓は、野菜ぐらいにしか見ていなかったつて。斬つて捨てても。

それでね、武士がね、お供も連れてよ、坂の下から首里であつたところを通つて来られた。首里城。何とにか向こうは。識名、識名であつたとこ通つて。そこで、武士がよ、お供連れて上がつて来よつたつて。

そして、百姓はよ、百姓はタンゴによ、桶。昔は肥やしを入れて、畑に担いで行きよつたつて。それで、この坂の上で武士が来たから、タンゴを置いてね、お辞儀するといつて、もう落ちんとして、下から転んだから、向こう、タンゴを置いてね、こんなにしていふつむいておつたらよ、このタンゴからね、肥やしがこぼれて、この上がつてくる武士にね、汚したつて。そうしたから、その後はね、もう肥やし担いでいる時はよ、坂びらではよ、武士にはお辞儀をしないでね、そのまま行くように許されたつて。

字伊原 玉城ハル



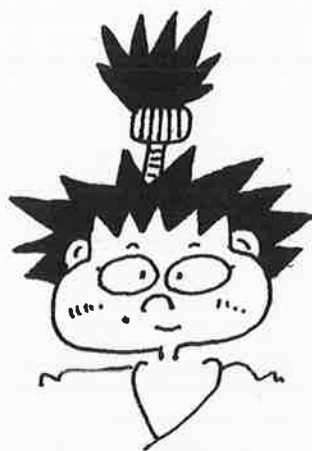
84 とーあちねー
唐商いよか糠商い

『知らん唐商いよか、知つちようる糠商いまし』。昔、琉球王時代にね、琉球から牛とか馬とか積んで、唐の時代に行つて。行つた場合には、琉球は貧乏なところだから、たくさん船にいっぱいむこうから貢ぎ物を持たせていただいてよ。

ただ、その行つた船がまともに帰つてくればいいが、帰らないのが多かったらしいよ、暴風なんか遭つたりなんかしてね。帰らないものも。だから、糠というのは、稲を製粉する時に糠が出るでしょう、米糠。あれを例えている。知らん唐商いというのはね、あそこ行つたらたくさん、琉球持つてきたら儲かるけれども、あれでは帰つてくる船が少ないから、

あれでは、知つておるこの糠商いのほうが儲けはいいということです。『知らん唐商いよか、知つちようる糠商いまし』というのは、結局。

字潮平 百次仁助



85 モーイ親方(イ)

(勉強・煙草は一回・嫁取り・薩摩の難題)

モーイ親方は偉い人でね。モーイ親方は頭は偉いが、人にはフラフージ(馬鹿なふり)してよ、人望がないように見せて、いつも蛙を取つてよ。生徒がみんな集まらないうちに学校へ行つて先生から勉強を習つてからに。また、生徒が来る時から蛙を取つていたつて。

そしてまた、勉強はよくしたよ。人には見えないように。勉強していると見せないようにね。知恵者ではあるから親がもう分からないでよ。

煙草を吹いたら、

『子どもはそんなに煙草を吸わないで』と言うからよ、
『どんなして吸わにゃいかんか』つて言うたら、

『煙草吸うなら一回で吸いなさい』と言つたから、煙管大きく作つてよ、それに煙草たくさん詰めて、これを吸うたらもう煙がしたからよ、こつちの村は火事と思つてよ、

『火事だぞ』と。その村にいる人があれしてみると、

煙草吸うておつて。

「なんでこんなしたか」と問うたら、

「お父さんが一回で吸いなさいと言うから、一回で済ますから」と言うて。

それからその、また、いいなづけの奥さん、大変きれいかった。この奥さんはもう外には出なかった。またこの友達がよ、

「あんたの奥さんを見せるならね、あんたの言うこと聞くから」と言ったら、

「そんなじゃあ見せようね」と言うて雄鳥を取ってきて。そして雄鳥をこつち放したらよ、この紡いでいる女のところへ行つて。この鳥は逃げて行つてから。そしてあの、紡ぎおる籠よ、あれをひっくり返して。奥さんはその鳥追うために外に出たからよ、みんな見ておつたよ。

このことを残念がつて、娘は。親に、

「こんなことをすると、これはもうなかつたことにしてくれ」と言ったら、親はまた、娘の親がよ、

「これ、断わろうねえ」と言つて断りに行つて。行つたらよ、またこのモーイはよ、魚釣るあれをね、肩に

掛けて引つ張つてからね。これ、なかなか抜けないでしよう、魚釣るもんだから。そして、

「約束していたものが外れるか」と言つてよ、紐で肩を引つ張つてから。またこれにも、

「ぼくの言うこと聞いたたら外すから」と言ったらよ、

「外したら何でも聞く」と言つたからよ、

「じゃあ、娘の縁談は、妻にさせるか」と言つたらよ、もう仕方がないから、またこれも負けたて。負けてまた妻にして。

そしてから、薩摩から首里へ、

「運玉森と雄鳥の卵、また、灰の縄、三つ持つて来なさい」と薩摩から来たから。首里の役人たちも心配したから、モーイ親方のところへ行つて、お父さんに、「このことをどうするか」と言うてよ、みんな相談したら、もうみんな心配して。灰の縄もできないと思つていよう。また、雄鳥が卵を産むこともないでしよう。みんなこれ、難しい難題。またこれも、モーイは聞いてるからね。

「この問題はぼくに任せてくれ」。親はもう、

「あんたができることじゃないけど、言い出したら出

来るかもわからんから行かすことにしよう」と。あれから、モーイが行つた。薩摩に。

行つたらまた、あつちの王様がまた、

「何でお父さんが来ないであんたが来たか」と言つたらよ、

「お父さんはお産すると言つてよ、もう来られなかったからぼく来た」と。

「男が子を産むか」と言ったら、

「雄鳥が卵を産むか」と言つて、またこれ、返してよ。また、

「灰の縄持つて来たか」と言うたらよ、

「持つて来た」と言つて、こつちまた、縄を焼いて見せたからよ、大変なことでしょう。これ見せたから、

「灰の縄、ちゃんとあります」と、あげたからよ、またこれも通つてるでしょう。

また、

「運玉森という、あれ、持つて来たか」と言つたらよ、崩してはあるけれども、載せる船がないから、沖縄には船はないから、薩摩から船を、持つてくる船を貸してくれ」と言つたらよ、ありやあ、あつちもできな

いでしょう。だから、これも負けて。

三問であれしたから、あつちの王様は、

「琉球にそんな知恵者がいたか」と言つてね、

「あんたの望みを叶わすから、何でもいいからあんた言いなさい。上げるから」と言つて約束したから。また、モーイ親方は、

「じゃ、一日でもいいから薩摩の王様をしてみたいから」と言つたらよ、

「やつてくれ」と。王様になつて。あつちの家来たちは王様を怒つたからよ、また王様は、自分が話したからよ、

「話したもんだから仕方がない」と言つてよ、王様がそう言つたらよ、

「沖縄からの証書みんな持つてこい」と言つて出させて。それから、それ取つてからね、琉球からの税金を納めるものみんな引つ切つて。もう、あつちの王様も家来たちも、頭があれして、

「こんな知恵者があつたか」と言つて。

琉球はまた、舞踊の国だから、音楽もやつて。また、古典もあれして、琴持つてきて弾かせていたが。弾く

時、夢中に弾いているところにまた、二人の家来が殺そうとしたからよ。それでまた、その二人の家来を押えてね、

「こんなこと何か」と言つてよ、言つたから、あつちはびつくりしてよ。

「夢中にやつてるが、後ろから分かるなあ」と言つて、「こんな偉い人にはもう何もできない」と言つてよ。

琉球はモーイ親方に助けられたと。あれまではいいめられる一方だった。それがな、モーイ親方の知恵さ。

字豊原 国吉マツ

86 モーイ親方(口)

(勉強・薩摩の難題)

親方は今でいえば総理大臣でしたよ。お父さんが。

子どもがまたヌーハのモーイ。あれは名前は何て言つたかね。これがまた、頭は切れるがねえ、人のあれとは全く違つておる。昼はもう遊んでばかりいる。鶏を持つてね、方々歩いて鶏を喧嘩させて。また、勉強はね、人に見えないところで、床下で。

それで、薩摩からね、これはもう、税金ということの問題を持ちかけてきたわけさ。島津公から。雄鳥の卵を持つて来なさいと、雄鳥。一番目は。それから二番目は、与那原というところにウンタマムイという森がある。その森を根本から持つて来なさいと。それからまた三番目にね、灰で縄を縛つて持つて来なさいと。灰で縄を縛えるわけがないでしょう。

それでもう、三司官、大臣たちはもう困つてね、

「こういう問題が来ておるがどうしよう、どうしよう」と、誰もが解決できないわけさ。それを床下で聞いて

ね、モーイは入つて来るわけさ。

「お父さんたちは何でこんなに心配してね、物事を相談しておるか」と聞いた。

「実はね、薩摩藩からこういう問題を持ちかけられておるから、すぐ持つて来なさい。」

「じゃあね、あんたたち役人の方々は心配しないで、代わりに私がね、行つて来る。」

で、薩摩に行つたらね、もう島津公、藩主から偉い方々集まつて、その前に出て、

「琉球藩の何々ですが、お父さんの代わりに私が来ました」つて。そうしたら向こうが怒つてね、

「何であんたが。お父さん来なさい。琉球王来なさい。また、三司官来なさいというのにあんたが来たか」と叱られたつて。

「実はね、お父さんはお産だからね、来られないから代わりに私が来ました」。それを言わん前にね、雄鳥の卵持つて来たかと言つたので、

「これはどういふことか」と。したら、

「ああ、これはいい」ということになつて。

二番目はウンタマムイ持つて来る。

「実はね、ウンタマムイは、根っこから崩して棧橋まで持つて来てあるが、それを運ぶ船が琉球にはない。それを運ぶ大きい船を薩摩藩から出して下さい」と。あるわけないでしょう。これも一釘刺して、

「もうこれはいい」つて。

で、三番目はね、

「灰の縄持つて来たか」。灰の縄といつたらもう難しいでしょう。だから、藁で縛つたあれを皿の上に載して燃やしたら、灰は縛われたまま残るでしょう。これが灰の縄。縛つたままワラ縄を燃やすんだから灰になつて、縛つたままの形であるでしょう。これが灰縄になつた。

「ご褒美は、何でもいから好きなものを、望みを言うてくれ」と。それはね、

「一分でもいいから薩摩の藩主にさしてくれ」と。すぐ側の重役連中は足をどんどんさして、今にも切り殺されようとするが、島津公が、

「これはね、男の約束だから、これの言うことを聞きなさい」と。で、モーイ親方がいつとき薩摩の藩主の座についたわけさ。

「これからね、沖縄の証文を持って来なさい」と言つた。そしてもうそれらを燃やしたわけさ。

「藩主の言うことを聞かなければ。私が藩主よ、今は」とすぐ指差して言うわけさ。島津公もね、

「ああ、もう恐れ入った」と言つて。

「私の願いはこれだけ。じゃ、本当に、私としてもこうして琉球の藩を代表して来たんだから、こういう、今から後はできるから、財政的な援助をしないように。証文も燃やしたから何も駆け引きしないよ」と。

字与座 伊敷清保

87 モーイ親方(八)

(嫁取り・薩摩の難題)

縁組をしたそうですよ。親同士が。それで、その女の人、自分は知っておるが、きれいな女だったつて。

それも、自分がいつしよに遊ぶ下男よ、それがね、

「あんたはその女の人、知っておるか」と言うたら、

「ああ、知っておるよ」と言うて、

「あんたも見るか」と言うたそうですよ、それに。自分の下男にね。そつて、

「それじゃ見せてくれ」と言うたら、偉い人のお家は石垣に囲まれているでしょう。それだから、

「この石垣の外からちよつと上がっておきなさい。私がその女を出すから、見なさい」と言つたらね、どんな人ですかねえと思つたら、それはまた毎日、鶏、それを抱いて、それを喧嘩さして遊びよつたそうですよ。それで、その女の人を出すにはどんなにして出するかねえと思つたら、

「あんたはそこに上つておりなさいよ。その石垣の上

に。ほして、そこを覗きなさいよ」と言うたらね、

「はい」と言つて、その下男はそつから覗きよつたつて。

そして、その鶏は家の前に投げたら、お家に入ろうとしたらね、その女はもう、

「ああ、鳥が入つておる」言うて、それを追いに出してきたそうですよ。そんなして見せよつたつて。そのモーイはね。

それで、そのモーイはね、家の親は三司官だから。三役よ、政府の。シナからね、中国から三つの難題を、あそこから、そのシナから突き付けられて。

一つはね、大きな岩を何とか持つてきなさいと言うたそうですよ。岩。ビンの御嶽。

「それ持つて来なさい」と言つて、一つはその難題。

また一つは、灰で縄を縛つて持つてきなさいというわけ。また、雄鳥の卵を持つてきなさいと。三つね、あすこから言い付けられたそうですよ。でもこの三司官はね、毎日それ集まつては、

「どんなするかね」。自分の親もいるさ。

「どんなするかね」と言つていろいろ毎日会議やつた

そうですよ。

それ、側で自分は聞いておつてですね、お父さんに、「お父さん、それは容易いことですよ。私が行きますよ」と言うたら、みんな驚いてね、どんなにするかねえと思つて。でも、これは誰も出来ないから、

「これを行かすことにしよう」と言うて、モーイは行かせたそうですよ。中国のほうに。昔は唐というた、そこは。

それで、その人があそこに行つてね。それをみんな、「雄鳥の卵持つてきたか」と言うたら、

「今、持つてくると言うたがね、お父さんが持つてくると言うが、お父さんはね、やがてお産する」と言うて。

「来なくてね、私が代わりに来ました」と言うたらね、

「男がお産するか」と言うたら、

「それでは雄鳥の卵はあるんですかねえ」と。それであそこは負けたそうですよ。

それでまたその、大きな岩もね、

「大きな岩、持つて来るのは持つて来るけれどもね、用意してあるけれど、それを積む沖縄には船がなくて

ね、その船を貸して下さい」と言っただけです。それで、あれで、あそこは貸す船ないですよ。それで、それも負けて。

また縄は、焼いてね、持って行っただけですよ、それは。それを持てたらね、それも満点になって。

「もう、あんたは偉い」と誉めてね、

「あと褒美は何欲しいか」と言うたら、そのモーイはね、

「何も別に欲しいものはないがね、こつちのね、王様の座をね、一日でも二日でも、それが欲しい」と言うたら、それはもう、その男の約束でしょう。あそこはそれに譲ったそうです。その王様のその椅子をね、

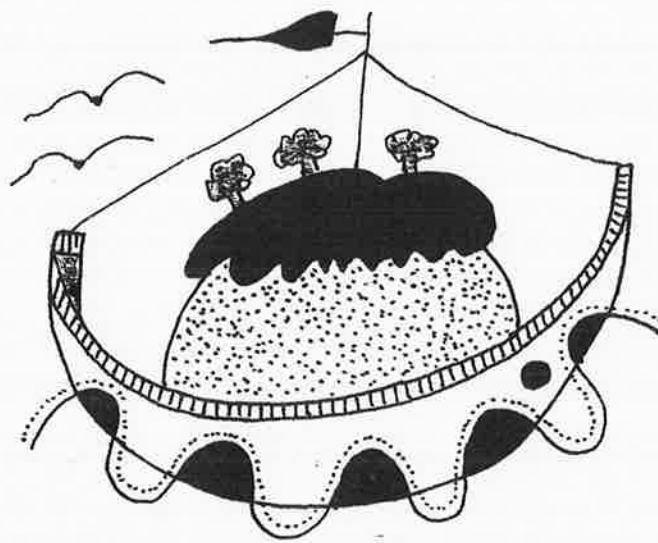
そして、その時に、沖縄はあそこから借金たくさんしておいたそうです、実は。それでその借金はね、証拠が入っておるでしょう。それをみんな取って焼いてしまうて、ちやうどなくなっておるでしょう。

それで、帰って来たらね、その人はもう、その時にモーイ親方は、

「これは偉い人だったねえ」と言うて、こつちの三司官はね、それから嫁も貰って、やったという話がありま

すよ。

字武富 大城トミ



88 モーイ親方(二)

(薩摩の難題)

これはね、薩摩藩から琉球藩に対して三つの難しい問題を押しつけられたそうですね。

まず一つは、灰綱^{アシナガ}。そしてもう一つは雄鳥の卵ですね。もう一つは今、那覇の東にあるガーナー森^{イナ}という森があったそうですが、その三つを薩摩に持つてこいという問題が言われた。そして、当時の沖縄には、摂政三司官というのがいたわけですが、

「これはどうすればできるか」ということで非常にみんな心配して。それ、できるもんでないから。

その時に、伊野波という若い侍が、これが、その伊野波という親爺がこれを解答する役目だったわけだそうですね。そうして、それを朝も晩も心配していたところね、この、息子の、これはモーイと言いますがね。モーイというのはやんちゃでね、もう、片一方は下駄、片一方は草履を履くという。人には分らないが、これは一生懸命勉強した。朝はもう闘鶏、鶏を持てあつ

ちこつちともうやんちゃばかりやった。だから、世間からは馬鹿者扱いされておった。

そういう子どもが、

「なぜお父さん心配しておるか」と言ったら、

「こういうことがあるんだということで、今、首里の城内ではみなそのことで心配しておる」と言ったら、

「そういうことであれば、私が行って返答してきましょう」と言ったら、親爺は、

「君がそういうことをできるもんじゃない」と言つて

これを納得しないわけです。この子があんまり強硬に、

「私ができますから。お父さんにはできないけど、私

ではできるから」ということで、やったら、とうとう

首里の評定も評決して、これを行かすことになるんですね。

その時に、薩摩に行つて、この人が答えたことが、まず、灰綱^{アシナガ}というのはね、縄を縛^なつて板に置いた、それを火を付けて焼いたままやる。そうして、

「雄鳥の卵をどうしたか。あんたのお父さんがこつちに来るべきであるが、何で来なかつたか。代理で来たのはどういうことか」と言っただけだから、この子ど

もが言うには、

「お父さんは産気づいて来れません」。

「男が産気づくわけじゃないか」というあれでしたから、

「何で男が産気づくわけがないのに、雄鳥の卵を持って来いというのはどういうことか」と言うたら、それもパスしたと。

それともう一つ、ガーナー森という、一つの岩山ですよね、

「これを持ってきたか」と言ったら、

「これは、起こして港の側まで持ってきておるが、それを載せる船が琉球にはないので、薩摩藩からその船を寄越してくれ」と言ったら、薩摩藩にもこの大きなあれを載せる船がないもんだから、それでいいということ、その三つの難題を無事に解決して帰ってきたという。

字真栄里 島袋仁栄

類話

字糸満 上原力メ、野原由宗

字武富 長嶺陽元 大城トミ

字北波平 大城清助

字賀数 照屋亀八、大城政秀

字兼城 大城幸亀

字照屋 上江洲由豊

字豊原 仲井真盛幸、国吉マツ

字真栄平 大城テル

字新垣 宜野座仁一郎

字名城 新垣武登

字糸洲 中村光一

字南波平 伊集朝助、山城亀六

字束里 上良武定、下田ミツ（上里区）

字福地 殿内三吉

字山城 仲門用三

89 モーイ親方（ホ）

（薩摩の難題）

モーイ親方のお父さんが役所にお勤めの時に、鹿児島からですね、難問が言い付けられてきましたね、この琉球国に。その難問というのが、何日までに雄鳥の卵を持って来なさいと。それから、沖縄本島の真ん中にある恩納森ですね、ウンナムイ。その森を、その山を鹿児島に持って来なさいと。それから、灰で縛うた縄ですね、灰で縛うた縄を百尋縛うて持って来なさいと、言うて難問があつたもんですから、

「もうお父さんは、こりやもう大変なことした。灰で縄が縛えるわけがない。どうして百尋の縄を縛うて持つてゆくか。それから、恩納森というそりや相当の山だが、あの山をどうして崩して鹿児島まで運んでゆくか。それから雄鳥の卵、雄鳥が卵を産むわけがないはずだけれども、そういう注文が参りまして、雄鳥の卵もどこ探してもそりやあるはずがない。どうしたらいいか」と心配しておられるのを、このモーイ親方とい

うのがお父さんに、

「お父さん、この役目はね、お父さんじゃ務まらない。私が代表して、私が無事お務めを終えて帰りますから、私に責任を持たして下さい」と言うもんだから、お父さんも常日頃から、このモーイ親方というのはあほみたいな格好をしておるけれども、頭のいいのはよくわかつておりますから、

「それじゃあひとつお前、請け負うてくれ」というて、そのモーイ親方が、代理として鹿児島に派遣されました。

そうして、鹿児島に行つて、その報告の日が参りましたので、早速モーイ親方は、胸を張つてどうどうと会場に行つて、殿様に会いに行きました。そして、

「どうしてお前は、モーイ親方の子どものはずだが、お父さんはどうしたのか、どうしてお前が来たのか」と言うてお殿様からおつしやりましたので、モーイ親方いわく、

「実は私のお父さんが急に産催いをしまして、お産の心地がしてとうとう鹿児島に参ることができませんでした」と言うたところが、お殿様は急に、

「お前、嘘を言うか。どうして男の人が子どもを産むことができるか」とおっしゃったところが、

「お殿様、それでは雄鳥の卵はどこからできますか。雄鳥が卵を産みますか」と言うたところが、

「ああ、こりゃ一問参った」と言うて、殿様が一問終えたわけですね。

今度はウンナムイ。

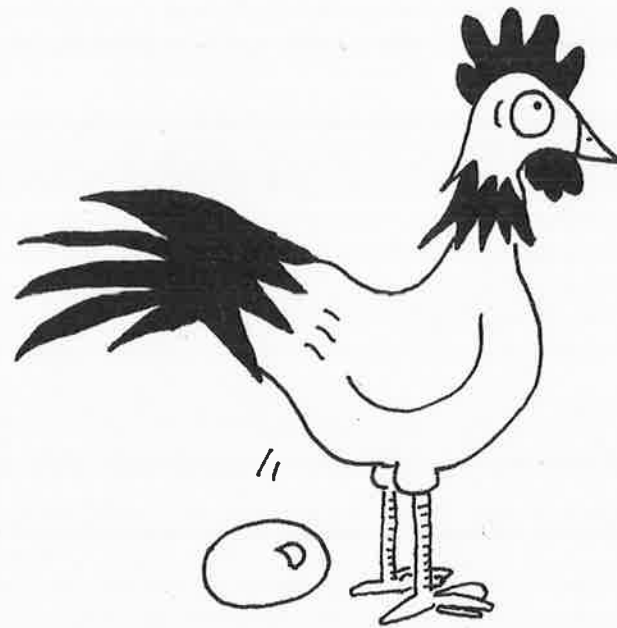
「ウンナムイは、実はウンナムイを引っ越して、那覇の港まで持って来てありますけれども、琉球国は小さい島国でありますので、こんな大きな山を運ぶ船がない。そうだから、この山を運ぶ船を一つ沖繩に派遣して下さい」と言うたところが、これも藩主は一問参りまして。山を運ぶ船というのは鹿児島にもありません。これも一問は終えたわけですね。

灰繩は、百尋繩で縛うてですね、それを火を付ける、火を付けたら自然に全部燃えてしもうて、そのまま、元の形のままに灰が残ります。それを持って行っておあげしたら、

「これも見事正解だ」と言うて、お誉めの言葉をもらってどうどうと琉球国に、大きな使命を果たして帰って

来たというお話でございます。

字照屋 上江洲由豊



90 モーイ親方（へ）

（打たぬ太鼓・灰繩）

モーイ親方なんかわからんけど、薩摩から沖繩に難題持たれてきたからね。こっちのこの親は、村の役人だったか何か知らないけどね、この難題持たれたからね、あんまり頭を抱えていたから、

「何でお父さん、こんなに悩んでいるの」と聞いたからね、子どもが。で、

「ひとりでに鳴る太鼓を作つてきなさい」と言つてた。

「ひとりでに鳴る太鼓があるかねえ」と、親は悩んだから、

「それは簡単ですよ、お父さん」

「どんなんして作るの」と言うたからね、

「かなぶんぶん、あれをたくさん集めてからね、これ入れたら、あれがぶんぶんぶんで飛ぶでしょう。これで鳴るから。これがひとりでに鳴るから」と。作つたからね、これをたくさん入れたもんだから、自分で飛ぶから糸で鳴るさね。これ作つたから。

もう一つはね、灰の繩を作つてきなさいと。これももう親は解けなかったから、

「これは心配するんじゃないよ、お父さん。私は考えているから。どういうことですか」と言つて、

「作られとる繩を灰に焼いて、灰に焼いたらすぐそのまま閉じなさい」と言つた。灰のまま繩縛っているさね。

字糸洲 中村力ツ

91 モーイ親方（ト）（嫁取り）

いいなずけの家の、女をまだ見ないから、女を見る
 といって、そのいいなずけの女を。それであの、雄鳥
 を持つて行つてね、むこうで喧嘩さして。見に来ると
 思うて。向こうの家、とにかく屋敷に入つて、喧嘩さ
 しておもしろがつて。その嫁さんが来て見たから、鳥
 を取つて逃げて行きよつたらしい。

逃げた後、断りに行くさ。これは氣違いであると、
 女の方から断りに来たと。昔はね、嫁、絶対に見せな
 い。見せないからね。このモーイという人は、自分の
 嫁になる者を見たいといつてね、これ見に行つたら、
 どうして見に行くかといつたらね、雄鳥を持つて行つ
 て喧嘩さして。この雄鳥はまたね、喧嘩したらね、鳴
 いたそうだよ。そしたらこの女は出て来た。この男は
 飛び出して来たそうさ。見たから、お家に入つたでし
 ょう。それで、鳥を取つて逃げて家に行つた。その女の
 方がね、こりや氣違いであるからこれに嫁にさせたら

大変と、もうこれはね返そう。

そうしたら、必ずはね返しに来るといつて、向こう
 わかつておるさ。そして、門にね、釣りを作つて、自
 分で。これを親父に釣りで引つ掛けてね、もう動か
 せないそうだよ。引つ張つて。そうして、
 「どうしてお前はこんなにするか」と。

「釣り針で釣つた髪も外れないのに、なんでこの娘と
 離れるわけがあるか」と言つて、またそれがまとま
 ったわけさね。

「おれが悪かつた。今から嫁にさせるから」。

「させるだろう」と言つたら、

「はい」と。

「もう結んであるよ。今からはこんなことやらんよう
 に」。結婚立派にやつたそうさ。

字豊原 仲井真盛幸

類話

字豊原 国吉マツ

字与座 伊敷清保

字真栄平 喜納サト

字新垣 宜野座仁一郎

字名城 新垣武雄

字福地 殿内三吉

字摩文仁 平田金徳

92 モーイ親方（チ）（嫁取り）

あれはちよつと変わった人ですね、勉強するところ
 は縁の下で勉強してるもんだから誰も知らなかつた
 らしいですよ。ふだんは馬鹿みたいな格好をしてす
 ね、カンターモーイ。カンターモーイというのは、髪
 を振り外すのをカンターというんですね、沖縄で
 は。わざわざ髪を振り外してですね、馬鹿な真似して
 歩いていたらしいですよ。

それからですね、年頃んなつて、これは親方の息子
 ですけどね、モーイというのは。カンターモーイは。
 何親方やつたか、相手の、おんなじ親方の娘とですね、
 いいなずけするんですよ。いいなずけしたらですね、
 それはねえ、馬鹿の真似して歩くもんだから、相手の
 親方は婚約を解消しようと思つてですね、その家に、
 モーイの家に行つて親父と交渉したらしいですよ。そ
 したらモーイは隣の部屋で聞いてですね、こりや困つ
 たなあと思つてですね、その、婚約をした娘の親父が

出るところをですね、モーイの門から出るところをですね、モーイは門の上で待つてですね、カギザーというんですがね（引つ掛け棒のこと）、それ持つてですね、相手の親方が出てくるところを、髪に引つ掛けよ、もう許さないんですよ、上げて。そうしたら怒ったですね。自分が婚約をしたのはどうしても、いったん婚約したら解消できないよという意味だったらしいですよ。それくらい頭が良かったらしいですね。

字新垣 宜野座仁一郎

93 モーイ親方（リ）

（煙草は一回）

「煙草なんか吸ったら大変よ」と言うたから、お父さんがそんなに言うから、一服だけ吸わないといけない。煙草、少しずつでしょうね。キザミ（刻みたばこ）であつたと。キザミであつたから一回しか受けなかった。いくら入れたかもわからないがね、これだけいった、これだけいったはわからないが、これだけ入る皿ぐわーがあつたでしょう。煙管、あれに入れたはずだからね、これだけ入った、これだけ入ったつてわからないさ。だから、お父さんが、あんまり煙草を吸わないでお願いしたから、一回で。

こんなたくさん吸つて、こつちの家がゴキバー（煙がもうもうと立ちこめること）してね、この人はね、伊野波モーイというがね、たくさん煙が立つてゐるわけさ、この家に。世間の人がね、こつちは伊野波殿内（いのだんち）といふたわけさ。伊野波殿内。伊野波モーイというから。伊野波殿内は火事だとみんな集まつたから、

お父さんがね、煙草を一回にもうたくさん入れて、煙がいつぱいになって、その部落の人が、

「火事になつて、火事になつて」と。お父さんがね、煙草をあんまり吹いてはいかないよと言つたから、お父さんが言いつけてあつたのでこんなことがあつたつて。

字山城 新屋タカ

類話

字北波平 大城清助
字豊原 国吉マツ
字真栄里 島袋仁栄
字糸洲 神里カマ

94 モーイ親方（ヌ）（勉強）

モーイ親方といつたら、何でモーイ親方と言うかという、何だかこの、連れの連中、同級生なんか、「貴様来い、来い。行こう」と呼びに行つても、もう馬鹿みたいに髪を伸ばしてみな。伸ばしたやつは沖繩弁でいたいモーイといった。髪を伸ばしてよ、頭を何もしない。それで、カンターワー（髪をぼうぼう伸ばしていること）とかモーイとか言うんだが。それであざ名になつておるさ。みんな、

「あれはモーイだから」と、あざ名みたいにみんなモーイ、モーイと名前を言つて。まあ、あざ名になつとるんじゃない。

その人はいつも、連れの連中が学校、教育に行つた場合は、やつぱ侍の子だから、だから、親父は首里城の役を持つてゐるから、沖繩、琉球王の。だから、親父なんかが怒つて、

「何でいっしょに勉強ができないか。親の面目だから」

といて言うとするんだが、

「はい、はい、わかりました」。それでみんなにこうして。親父なんかもまた出張。琉球王の側役だから、山に行ったら何かないですか。ああいう役だから。

それで、床下にバナナの葉っぱ、あれを持って行って、墨をすって、床下で隠れて勉強をやっておるらしい。だから、それはまた誰も知らんわけさ。誰も知らんから、いつもモーイは馬鹿者と。馬鹿もんにはフリムンと。モーイブラーと。フリムン、フリムンと言ったですね。

それで、先生はひとつだから、また、夜は、隠れて先生のところに行くらしい。人目に見えないように。だから先生が、

「もう、うちよりはモーイのほうが頭は優れておるから、あれを置いて見習いやつたらいいんじゃないか」とか言ったら、連れの連中はびっくりして、

「何だ、あんなモーイブラーが。何がわかるか」と。それで、みんなが、四・五名ぐらい行って。

「そこにモーイおるか」

「ああ、いますよ」ってお母さんが言って。そしたら、

「モーイと話をするためによく来た。こっちが馬鹿も

んであったら、そんなにみんなでないじて馬鹿にしておったが、もう非常に親なんか悲観して、精神的に小さくなっておる」。だが、一応と思つてやつたら、

「わからんもんも全部わかるか。字、お前、この字読めるか」と。モーイは先生みたいな腕になっておるから、あれたちはもう顔を真っ赤にして帰ったらしい。

だから、後から先生に聞いたら、

「あれから床下でいつまでも勉強しておる。もう上達して先生よりも上だよ」と言うて。

字北波平 大城清助

類話

字糸満 上原カメ、玉城初子

字北波平 当銘キヨ

字武富 大城トミ、大城キヨ、大城スミ

字豊原 国吉マツ

字糸洲 中村カツ

字伊原 上原孝助

95 モーイ親方(ル)

(年若い馬・煙草は一回)

アサタビ(三司官)、今の代議士みたいなやつ、あれが選挙があつたらしい。だから、片一方からモーイもこのアサタビの資格は、異常だから、

「是非あれも取つたほうがいい」と。ところが片一方から、

「だめだ。まだ年が十七歳だからだめだ」と。そう言つたら、そういうふうな、また、そんな話があつたと。

「ああ、そうか」と。また田舎へ全部回つて。小さい馬買つて、それで首里城に見せに行つたて、わざと。だから、

「こんないい馬、あなたどつからこういうの買うてきたか」と言つて、みんなが珍しがつて。そういうふうと言つたら、

「そうだねえ。確かにいい馬だなあ。だが、これ、あしたつぶすよ」と言うたです。

「ああ、こんな馬つぶしてはもつたない。琉球にこ

んないい馬はまたといないはずだから、これはつぶしてくるな」

「いやいや、これ、年が若くて何にもならん」。またも首里城はやられた。よくあれこれつて名物になつておる。

またこの人は、非常に煙草が好きだし、一日も煙草を。それで親父に、

「そんなに煙草をのんだらだめだから、やめろ」。一日に一服に決めたと。

「それでいいんだらう」。それで、もう、一日に一服。このなんだ、小間物屋行つて煙管を、いい煙管を作らして。昔は五匁の煙草というてあつた。あれを一日に今まで吸つておつた。いっぺんにこの五匁、刻み煙草を押し込んで、二階へ行つて、わざと吸つたら、もうこっちは伊野波^{ぬは}といつたらしい。伊野波の建物を伊野波御殿といつて。

「伊野波御殿は火事だ、火事だ」と言つてみんな集まつて来て、火を消しに来た。

また、それでね、道の屋敷の囲いに石つころの大きいやつがあつたから、二、三人で持ち切れん石があち

ここに転がつておったさ。ほしたら、
「それじゃ、せつかく集まつてくれたから、家の回りのあの石、どこかに片付けてくれ」と。いろんな、頭が頓知で早くて。普通の人ではなかったらしいよ。

字北波平 大城清助

96 モーイ親方(ワ)

(草履と下駄)

お父さんが下駄履きなさいと言つてね。また、お母さんが草履を履きなさいと言つたからよ、もう、二人の話を守つて、親の言葉を守ろうとしてよ、草履と下駄を履いて行つたから、学校で、

「何であんた、草履と下駄を履いて学校に来るか」と言うたらよ、

「お父さんが下駄を履いて行け、お母さんが草履を履いて行けと。二人、親だから、親の言葉を守つて来ました」と言つてよ、先生に。それから、先生も、
「なるほど」と言つてよ。

字豊原 国吉マツ

類話

字糸満 野原由宗

字真栄里 島袋仁栄

97 モーイ親方(ワ)

(小便の罰金)

モーイ親方が遊びに行く時、お父さんが下駄履いて行きなさい、お母さんが草履履いて行きなさいつて言われた時に、片足には草履を履いて、片足には下駄を履いて遊びに行ったことがあるわけよね。

そういうふうな時に、立札なんかね、『こつちにしっこをしてはいけない』という立札があるところを、わざわざするわけよね。そしたら、
「なんであんた、この札見えないんですか」つて言つたら、

「ああ、この札は見えますよ。こつちにしっこする人は銭五貫、今だったら十銭ぐらい出せばしっこしてもいいんだな」と言つて、こつち向かつて余計しっこするわけ。

怒られた時に、

「この立札見えないの」と言つたら、
「見えますけれど、十銭出せばいいでしょ」と言つて

したらね、

「それはこつちにしっこさせていけないならね、書き直しなさい」と言われたわけよね、このモーイに。したら、

「何と書いたらいいかねえ」つて言つたら、

「こつちにしっこするべからず。こつちにしっこをする方は、その時の協議、罰金にしようか、打ち首にしようか何しようか、その時々による」と言つたつて。してね、それでね、

「ああ、じゃ、これの言うとおりだなあ。じゃあ、この札を書き直そう」と言つてね、書き直させたことがあるつて。

字与座 伊敷スエ

類話

字賀数 大城政秀、照屋亀八

字豊原 国吉マツ

字与座 伊敷清保

字兼城 大城善幸

98 モーイ親方（カ）

（出たものは切る）

伊野波殿内の隣は豊見城殿内ですよ。豊見城殿内と

その境に蜜柑の木を植えてあったそうですね。そうして、伊野波殿内に全部垂れておったそうですね。蜜柑も真つ赤になっておる時に。伊野波モーイ親方が全部、小さい時にちぎって食べたもんだから、

「どうして人の蜜柑を取って食べるか」というて、モーイ親方に言うたそうですね。豊見城殿内。そしたら、「うちに垂れているんじゃないか」といって、モーイ親方言うたそうですね。

「根っこはどこか」と言うたら、豊見城殿内が。

そうしたら、

「じゃあいいよ」と言うて。四、五日待ってからね、死んだ豚ですね、豚の小さいの、もう腐って臭かったのを。長い竿で抜いてからね、豊見城殿内に、雨垂れるところに、あっちに向けてやったそうですね。そうしたら、

「どうしてこんな馬鹿なことをするか」と言ったら、「根っこはどこか」と言うたそうですね。豊見城殿内はもう黙って詫びしたって話があったですね。

類話

字北波平 賀数長安

字伊原 上原孝助

字南波平 伊集朝助

99 モーイ親方（ヨ）

（卵割り・出るか入るか）

卵が、割れてないと言うたら、そのまま。押さえたから割れるからな、

「お前が割れてないと言うたら割れとる。また、割れておると言ったらな、そのまま割らないで見せて」。

また、家の玄関口でよ、入れ口でこう、敷居をまたいで、

「我は今、家に入るのか、出るのか」と言ってな、してたって。

「中に入ると言うたら外に出て、外に出ると言うたら中に入る」と言うて、もうできなかったそうですね。頭が良くて。

字伊原 山城亀助

100 モーイ親方（タ）

（ヌブシの玉）

あれは、蛙取っている時に、蛙の頭に丸い玉があったて。そして、先生にね、

「珍しい蛙を取ってあるよ」と言ったら、

「じゃあ、その玉を学校に持って来て見せなさい」と言うたからよ、これはもう手で持ったらあれだからと、口に入れてよ、来たから、学校に行く時に溝があったから、こっち飛ばうとしたからすぐに吞んでしまつてよ。先生が、

「あんた、蛙の玉を持って来たか」と言ったら、

「こんなこんなことで吞んでしまった」と言ったらよ、もう、先生もよ、この人は偉い人で、自分もかなわなぐらいの偉い人になる。

これ、ヌブシの玉といったと。これは知恵作るあれでしょう、玉といたら。この玉を吞んでからはずつと偉くなったと。

類話

字小波蔵 伊敷フチ子



101 モーイ親方（レ）
（マブイの恩返し）

昔ですね、モーイ親方という人がおったそうですがね。この人は、昼は馬鹿げたようなことをして、みなから軽蔑されてですね、勉強もしないで怠け者みたいにおったそうですが、夜はまたその代わり、暗いところで、線香の灯火で勉強をしたような人物らしいですがね。

ある日、晩に墓場を通つてみると、ある一つの墓の中で明かりをつけて何かそこそそとしているような、人の気配がしたものですから、

「実は私はモーイという者だが、君はこの世の者か、またはあの世の者か」と尋ねたところが、

「私は実はこの世の者であります。こういうことをするのもお恥ずかしい話だが、お金があればこういうことをしないけれども、金がないために自分一人で、自分の夫の洗骨をしております。理由は、これを昼行なうということになると、親戚、知人、友人が来ますの

でお供え物も買わんといかんし、いろいろお金がかかるので、自分はもうこういうふうにして一人で夫の洗骨をやっております」というもんですから、
「それじゃ、一人じゃ大儀だろう、私も加勢してやろう」と言うて、お手伝いをして、洗骨をきれいにやつて、納めてきたらしいですね。そうすると、このモーイ親方が夜になると、足下のほうを灯火が付いて、暗い所でも明るくしてくれたらしいですね。

そういうしておるうちに、お父さんが、公儀くぎというところの県庁ですね。公儀から難問を言い付けられて、この難問を越すことができるかなと思って苦労するけれども、これは人間の力では出来るものじゃないというて心配しておられるのを、モーイが見て、忍ばれないで、

「お父さん、何の心配かわからないけれども、私が出来るかできんかわからんが、まずひとつ幼い子どもであつても、何かそこにいるのがあるかわからんから、お話していただませんか。私ができることならお力になってあげますから」と言うたところが、お父

さんも、子どもがせつかく言うてくれるんだから、まあ一口ぐらいそれじゃ話しておこう、というて話したのが、今日では那覇から名護まで自動車で二時間ちよつとで片道行きますけれども、昔は、首里から山原までというて、三、四日はかかったらしいですね。そうだが、公儀からの注文は、明日じゅうにこの政治事を是非向こうに持つて行つて、解決をみてくれという命令が下つたもんですから、これ、人間業じゃ出来ないというところで、苦労しておつたわけですよ。その訳を話したところが、

「そうですか、それならしばらく待つて下さい」と言うて、そのモーイはお墓の前に行つて、

「実はこういうふうにかじかきことで、お父さんが心配しておられるから、あんたの力で出来ることならひとつ協力してくれんか」と言うて、お墓の前で手を合わせてお願いしたところが、

「それじゃたやすいことです。私がお父さんを山原やんばるに明日じゅうにお供して用事を済まして、またお連れして参ります」というて、言うたらしいです。それをお父さんに話したところが、

「そんなことがあるもんか」と言うておったが、案の定、死んだ人の魂がこの人を山原までお迎えして行って、その用事も無事終えて帰還してきたという、こういうお話がありますかね。

字照屋 上江洲由豊

102 モーイ親方（ソ）

（三本の矢）

そのモーイはね、やっぱりあの、三名兄弟いたって。だけど、お父さんが病気で死ぬようになって、
「お前たちはこれを折ってごらん」って、弓の矢出したらしいのね。そしたら、一本では折れるけど、三本は折れなかったっていうわけさあね。そしたらあの、人間だつてね、一人だつたら人には負けるけど、兄弟三名だつたら誰にも負けないっていうような、教え方したんだって、お父さんが。死ぬ間際によ。この話もあつたんだって。

字糸洲 吉嶺タマネ

103 モーイ親方（ツ）

（親方の最期）

モーイはもう、頭は優れているから、偉いもんじゃつたら死刑にされるからね、平生はやつたつてよ、氣違ひみたいに。これはもう氣違いといつていたね。そういうお話です。

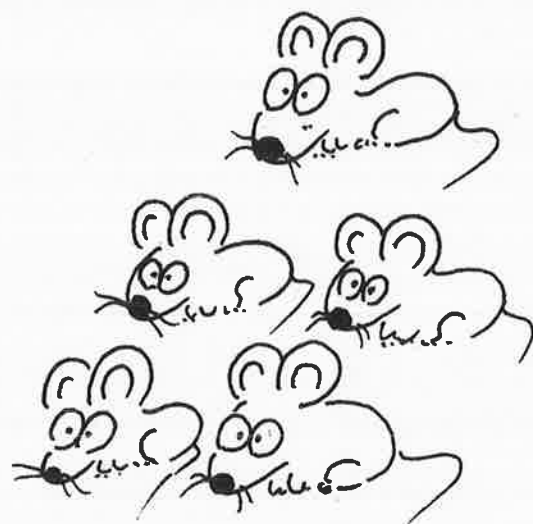
このモーイがね、これ、頭の優れた子どもとわかつてからね、もう死刑の命令を下されて、首里からね。そしたら、この、鼠を取つて来てね、この鼠を、二つ捕まえて、

「この鼠は二つでない、五つ入っている」という話があります。それがね、モーイが言つた話だけれど、首里でよ。あのもう、死刑といつてね、赤い旗を揚げてね。死刑、打ち首だ。

それからあの、このモーイはもう死刑といつて斬つたそうですよ。斬つたらね、モーイが言つたとおり、この鼠を出して見たらね、五つになっていたそうですよ。赤ちゃんが生まれて。このモーイは殺さないほう

がよかったなといつて。

字伊原 玉城盛勝



因緣・化物譚

104 生き返った 大屋のアヒトウ

今の南風原村の兼城かねしろという部落がありますが、そこ
に大屋おふやというのがありますね。そこにアヒトウとい
う男がいた。アヒトウ。この男は、吐いたりして、
とにかくコレラみたような病気で吐いたり下痢したり。
そして急に亡くなつてね。これはもう部落民の人がね、
「これは伝染病だ。人にうつる病気だから早く葬式を
せないといかん」ちゅうて、大急ぎで棺桶に入れて、
持つて行つて、墓に。石の穴のあるところ入にれて。
あちらかちから石つころ詰めてね。そして
もう、逃げて帰つてきた。

帰つたら、この人が仮死状態であつたにちがいない。
それから、墓の中で生き返つていたんですね。この桶
の蓋を開けてね。そして、
「助けてくれえ、助けてくれえ。水が欲しい、水が欲
しい」と言うたんだらう。そこに、これを聞いたのは、
その二、三日後で、青年たちが牛馬の餌取り、草刈り

に行つたんですね。それで、にわかには雨が降つたもん
だから、その墓の近くに、石の突き出たところに雨宿
りにちよつと行つたわけですね。行つたら、墓の中か
ら声が出て、

「助けてくれえ、助けてくれえ」と聞こえるもんだか
ら、この青年二人も鎌を振るつてね、

「化け物だ。大変だ、こりゃ」と。もうそれから一目
散に逃げて家帰つて。

「もう大変だ。墓の中でね、化け物が小声を出して、
助けてくれちゅうとつた」。それから、

「これは大屋のアヒトウが死んだあれだ。死んでお
るのに生きるはずがあるか」

「いや、生きとつた」。

で、それからね、その翌日評判になつてね、行つて、
墓を開けてみた。ゆっくりゆっくり墓に近づいたら、
「助けてくれえ、助けてくれえ。水飲ましてくれ、水
飲ましてくれ」て。だからもう、みんな墓をまた、
石を取つて退けてね、棺桶から出した。出したら今度、
水を飲ましたら生き返つた。それを連れてきた。その
七日、お祭りをしようというて、準備してるお金でお

祝いたという話がある。

それでね、このナーチャミーという、人が死んだら必ずよくあるね。人が死んだら墓に入れて、ナーチャミーというのは今でもありますよ。必ずやるんですね。翌日、墓参りして早く行つて見るんですね。生きていないかなあちゅうて。それ、あつたんですね。

それから、あれは死んだ人がいわくですね、生き返つた人の話が、今度は。これが冥土の、

「大変ですよ、冥土はね。奈落の地獄の話が聞こえた」と。

「どういう話だったか」ちゅうて聞いたら、アヒトウーがね、

「実は、八月十日にね、生きた人間の家行つてね、その人の魂を抜き取りに来るという話を聞かされたもんだから、もし生きた人がね、(桑の木の葉とススキの葉と混ぜてこう結んでね、家の軒に全部挿すよ、あちらこちらに。今でもあります。八月十日。今でもやる、これやるんですね。習慣が残つておる。)これをやったらね、そこに入れないと。そのうちにこの、地獄の連中がね、まあ言えば、閻魔王のお使いがね、その家

に入ることができない。生き肝を取りに行けないからね、これを干したらどうするかと、こういう話があつたから、八月十日には必ずそれを挿しなさい。家の軒に全部挿せ、挿しなさい」と、これを聞かされて、今でもそういう習慣が残つておると。

字糸満 田場天龍

105 後生戻りの話

ぐしやうもど

どことははっきりわかりませんが、いわゆるこの、何といたしますか、完全に死なんうちにですね、棺に入れて葬式しましてですね、本当は死んでいなかったらしいですよ。ほんで、それを入れたもんですから、そこ、雨が降る日だったらいいですよ。

そこに、いわゆる道から歩いて来る人が、この墓に雨宿りをしてですね、雨宿りをしたらしいですよ。そうしたら、中からですよ、髪を引かれて、髪の毛を引っ張られてしまつて。もうこの人、怖くなつてしまつてですね。まあ、こりや何か嘆いておると。

そしてもう、その人がいわくには、

「私はどこそこのもんだがね、実際もう、こう生きてるんだが、こういうふうな葬儀されてしまつて、助けてくれ」つて言うてですね。その人また、早速どこそこ、そこの人呼んで、また墓から出したという、そういう話も聞きましたかね。

それが後生戻りというふうな、いわゆる後生から帰つたということだね、後生戻り。

字与座 玉城清一



106 ナーチャミー由来（イ）

昔はね、箱に入れてお墓に持って行くでしょう、沖縄はね。埋葬じゃなかったから。棺桶にあれして、そのままね、そのままお墓に納めるんだ。そんなでしたよね。

したら、この翌日ね、本当は朝早く行くわけですよ。ね。本当は。その意味はね、通る道の側にお墓があったから、そこから人が通ったから、してもう、そのお墓の中でね、もうがらがらがらしておったって、音が。してね、この人はもう意志がやっぱし強かったわけさ。して、こっちは昨日人が入ったのにね、なんでこんなにながらがるかねえと思つて、耳、こうして墓に耳傾けて聞いたらね、もう墓の中でうんとね、箱がもう、がらがらしよったってさ。

したらね、この人は、通った人はよ、ここの葬式した家に行つてね、

「こんなだから、一応は墓開けて見てごらん」と言つ

て、連絡しに行つたわけ。したら驚いて、すぐね、翌日朝早く行つて、お墓開けたらね、この人はね、この箱の中からね、出て、箱の中でよ、箱の中大きいから、大きいから出てね、そこに寝ていたって。して、墓開けたらね、こんなだったからね、驚いてね、それから、こんなことがあるからといって翌日は、朝早く見舞いに行くそうです。

字国吉 翁長文子

類話

字糸満 上原皓吉

字北波平 長嶺光子

字阿波根 平田徳太

字賀数 照屋亀八

字照屋 与儀ウト

字豊原 国吉カマド

字与座 玉城清一、賀数カメ

字新垣 宮里栄吉

字小波蔵 伊敷カミ、伊敷フヂ子

107 ナーチャミー由来（ロ）

亡くなつたからね、葬式やつて。だから、その中で赤ちゃんが泣きよつたって。お墓から。お墓開けて見たらよ、赤ちゃんがいたって。妊娠しておつたでしょ。また、この死んだ人も生き返っていたって。

それでね、あの時から一日おいてから葬式をやりなさいという話を。一日おいて。ナーチャミーはあれからできた話。生き返っておつたって。

これ、生き返っていた話はまた、草刈りが、雨が降つたから、お墓の入り口のところあるでしょう。こつちに頭が隠れていたから、お墓の中で騒いでいたからよ、開けたらよ、

「あんたがたのお墓の中で大変に騒いでいるから、見てこい」と言つて、また連れて行つて、お墓開けて見たら、赤ちゃんとお親が生き返っていて。

字南波平 山城善助
字東里 玉城佐一郎（東辺名区）
字福地 殿内三吉
字大度 山城アキ

字豊原 国吉マツ

108 子育て幽霊

類話

妊娠してね、亡くなったから、だから赤ちゃんはとらないでね、葬式やったからね、お墓の中で生まれてね。生まれて、いつも飴屋にね、このお母さんは飴買ってきてあげよったって。

そしたらね、毎日毎日やりおったから、これ不思議に思つてよ、このお菓子屋の人が、後をついて行つたらよ、お墓に入りよったって、この女。アンジ紙（あ）の世のお金、ウチカビともいう）使いよったってよ。お墓開けて見たらよ、赤ちゃんにあげて飴玉の袋がたくさんあつたから、やつぱり赤ちゃんにあげて、育てていたって。

また、このお金がね、紙よ、紙。お金と思つたら、夜、お金と思つて取つてあるが、明日になったらアンジ紙さ。

あれから紙は、沖繩はあぶつて。

字豊原 国吉マツ

字糸満 上原カツ子
字北波平 長嶺光子
字豊原 久手堅憲吉
字国吉 大湾朝次郎
字小波蔵 伊敷力ミ
字南波平 山城善助

109 シバサシ由来

昔ね、ある男が、家庭には女房もいるけど、またよそに女作つてあつたわけ。したら、家にいる本妻、女房が、子どもが出来たわけ。子どもが出来たからね。

その、死んだ後妻の女が羨ましがって。この後の女が、家で子どもが出来たから、その子どもを取らんがために、ね、羨ましがって、もうあだ討ちみたいさね。男取られて、自分は今もう命もなくなつたし、もう、後で取られた方は、あれ、あんなにして子どもも出来て幸福に暮らすわけさ。だから恨み持っているわけさね。して、幽霊になつて。

子どもが出来て四日目の夜、この女がね、この幽霊が、このお産したところに来るわけ。子どもの命取りにさ。幽霊なつて来るわけさ。して、来たらね、昔は沖繩は、お産した人はね、別に小っちゃく部屋があつたわけ。どこのお家も。部屋があつたわけさ。て、みんなはね、その座敷で三味線弾いて徹夜するわけさ、

みんな。それは昔からお産した人をね、いわば守る意味で、やつぱしみんな友達なんか、隣近所なんか一週間ね、みんなもやるわけさ。

だから、四日の晩にね、この女が来ているのをね、この、お産したからね、何か襖なんか、穴が開いたあれからさ、こうして覗いたらね、あの穴からは見えるそうですね、やつぱし幽霊は。きれいに見えるそうですよ。して、見えたらね、幽霊が立っているからといってね。これから怖がつて、して、みんな大騒ぎになつてね。

してから、子どもでも誰でも、外におしっこしに行く時には、一番唾を通して、唾掛けてからしっこを出しなさいつて教えられたつて話もあるけどね。

したら、ある人がね、この人は何かあれじゃなかったかね、いわば神様みたいな人じゃなかったかね。その人がね、三というのはあれを三本くびつてから作つてね、この幽霊をこれね、追つたつて。

これからね、もうこの子どもがお産するにはね、みんなも産後ね、たててこれで守つたという話で、八月のね、これはシバサシと言うんですけどね、これは。

旧の八月とかにこれやるんですよ。

字国吉 翁長文子

類話

字東里 上良キヨ、上良徳栄（上里区）

110 テーラ 平良シカマグチ

グソー（後生）とね、今と分かれてなかったそうですよ。区別がなかった。それを誰が分けたかというところ、豊見城村の平良のアカンミ（赤嶺）というところで、十七、八代前になるころに、親が妊娠して、親が亡くなったという。そうしたら、墓で子どもが生まれまして。翌日行ったら、中で、があがあと泣いていたと。その人が大きくなってからね、この人がグソー（後生）と今の世と分けたそうですよ。そういう話がある。

字糸満 上原亀広

111 逆立ち幽霊

昔々、首里であつたことですが、逆立ち幽霊というのがありました。この逆立ち幽霊というものは、実はチルーという女とカナーという男の夫婦が住んでおりまして。二人は非常に仲がよくて、夫婦の間は非常に芳しいお話がたくさんあつたらしいですけれども。

ある日のこと、このカナーフィーが病気に罹りまして、長い間床に就いておつたそうですが。その代わりまた、チルーという家内はべっぴんで、村一番のべっぴんだつたらしいです。それでこの、カナーフィーは、「私が死んだら、お前はまたほかの男と結婚するんだなあ」と言うて、いつでももう口癖のように言うもんですから。

「そうじゃないさ」と言うて、言いますけれども、口癖のようにもう。あまり家内がきれいなもんだから、そう言うておつたらしいですが。そのチルーはもう、自分はべっぴんじゃあるけれども、こんなにまで自分

の夫が、死んで行ったらどうこうと話までするぐらいだから、

「もうやむを得ない」と言うて、剃刀で鼻を切り落としたりしますね。そうしたところが、そのカナーはその鼻を見て、今度はあきれ果ててしまつて。鼻がないもんだからあきれてしまつて、見向きもしない、話もしないという具合になつて。毎日の生活をやっておつたらしいですが、これではいけないというので、チルーは心配して、

「私がこんなにまで夫のことを愛しておるのに、こんなにまでされては困る」と言うて、今度は、おるうちに、そのチルーはとうとうこの世を去ってしまったらしいです。

いや、この世を去らないうちに、

「お前は自分の家内じゃない」と言うて、そういう姿になったもんだから、お前は私の家内じゃないと言うて、またよそから女を見つけてきて、そして、自分の家の中に入れて、チルーはもう見向きもしなかったという話です。

それで、そうこうしているうちに、そのチルーもこ

の世を去ってしまった。そのチルーは幽霊になって、毎晩カナーのおるところに幽霊に化けて出てきたものだから、このカナーは、これじゃいけないというので、お寺に行つて守り札ですね、守り札を買ってきて、家の真正面、家の真ん中にそのフー札（符札・護符）というものを貼っておいたもんだから、恐れてチルーはその家の中に入ることができない。それで、逆立ち幽霊になつて来るけれども、どうしてもその家の中へ入ることができない。

そうして、世間を騒がしたもんだから、イチグシクペーチン（池城親雲上）という侍がそのお話を聞いて、この逆立ち幽霊に会つて、

「どうしてお前は逆立ち幽霊になつて世間の人を騒がしておるか」と言うて、お尋ねになつたところが、
「実はこういうこと、自分は鼻までも落としてあれに自分の真心を訴えたんだけど、私の真心もわからないで、私がおる家にも、よそから女を連れて来て、こういうふうなことを行動しております」と。それで、こいつは是非取つてやらにやらんと思つて、その家に行くんだけど、不幸にし

てそこにフー札を貼つてあると。フー札を貼つてあるもんだから、その家の中に入ることができません。どうぞお願いです、そのフー札を取つて下さい。あんた、もぎ取つて下さい」と、言うてお願いしたもんだから、「そうか、そんな事情があつたのか。それじゃそのフー札を取るから、そのカナーをお前がどうかせいで」と言うて、その池城親雲上イチグシクペーチンがその家に来て、そのフー札を取つてしまった。みなこう、もぎ取つてしまった。そうしたもんだから、その逆立ち幽霊のチルーは、家中に入つて来て、カナーを荒いそぶりであったという話ですね。

とうとうその、フー札がないお蔭で、そのチルーはカナーのところに入つて行つて、そのカナーを、この世を去るようになつたと。それからもう、逆立ち幽霊というのは出なかつたというお話です。

字照屋 上江洲由豊

類話

字束里 玉城佐一郎（東辺名区）

112

国吉坂の遺念火くにしびら いねんび

このう、坂道があるんですね。こつちから下に河原がある。河原からね、これ、キジムナー（木の精）は、大雨になつてあつちに渡ることが出来なかつたら、ある男がおんぶして渡つてくれたつて。

「あんたのご恩は、（今暗いから、国吉坂くにしびらといつて坂があるんよ。国吉坂といつて坂道。）あつち行つたらね、明かりを付けて見せるから」言うたから、あつち行つたら、向こうの反対の部落で大火事があつたらしい。あつたから、こつちまで明かりを付けて。

字武富 大城スミ

類話

字糸満 稲嶺盛亀、上原亀広
字阿波根 平田徳太



113 遺念火の話

昔、この村にね、えらいこの、夫婦の、男女のね、愛が、大変よそから見ても素晴らしい愛をね、お互い愛しあっている仲をね、疑いをかけてね。この、いつも藍ね、着物を染める藍の、藍染めをしてね、いつも時間的に家内が帰ってくるのをいつもその夫がね、迎えに、ある一定の場所に迎えに行きよったと。

そして事実、心からの愛であるかどうかを確かめるためにね、変装をしてね、妻の心を試そうということだね、その時にはまあ、いたずら、今の痴漢ですね、痴漢みたいなことをやろうとね。この女は怒ってです、髪に挿したジーファーというのがあるんですよ。髪挿し（簪）が。これで夫の喉を突いてね、殺してしまつたと。そして、死んで。見たら自分の夫だつたと。これで、自分も自殺をしてね。この愛がこつからあつたんだと。

その遺念がね、いつもこういったような時間的に、

夜になつたらね、いつも付いたり離れたたり付いたり離れたりをやりおるよ。

字糸満 野原由宗



114 識名橋の幽霊マジモン

一日橋の上、そこに識名の幽霊マジモン（化物）ちゅうのがおつたわけさ。あれ、いわゆる一日橋。島尻、南部方面からね、元は王朝時代は首里にしかないわけさ。首里に何かを、貢ぎ物を持って行く場合は、その識名の坂を通って行かんといかないわけ。道がないから。どうしてもそこを通らないといけないもんだが、そこにときたま幽霊が出るといふうなことを聞いておりましてね。夜、怖がつておつたらしいよ、全般的に。そんな時や琉球王朝時代ですからね。それで、武士連中もたくさんおつたんだが、武士でさえこの幽霊マジモンは怖がつてしまつてね、そこを避けよつたらしいよ。

ある侍が、

「まさかこの世の中に幽霊ちゅうのがおるか、珍しいなあ。私、見てこよう」ちゅつて、意気込んで行つたらしいよ。そうした場合は、もうすぐ、早速立つてお

るらしいね。来い来いちゅうて言わんばかりに、こうして。何いつてるか、この世の中に幽霊ちゅうのがおるか。刀で大上段に切つてね、帰つたらしいよ。それで、帰つたらこれが、切つて帰つたらね、血を浴びたらしいよね。

「ああ、もう大変だ。これ、人を切つたに違いない」と。

帰つて、家に帰つて翌日、見たらね、ソテツを切つたて。そのソテツがね、風が来るでしょう。それを気の弱い連中は、幽霊が出てわしに呼び掛けしておるといふようなこと、間違つておつたね。しかし、それが何と言いますかな、切つて、後から血が出てしまつてね。これ、人間の血痕が残つたとな。

字伊原 外間樽助

115 キジムナーと友達（イ）

ギジムナーというのは普通、木の精だといわれています。大木の精。そして、山原方面ではですね、国頭方面ではブナガヤーといっておる。今も生きておるといことが証明されておりますがね。

このキジムナーというのがですね、やっぱり大きな木があつて、その木に洞があるつてね、この木に。ここにキジムナーが棲まっておたわけですよ。そうしたら、誰かがこの木に、

「ああこりや、ギジムナー、こつちに棲まわせない」と言つて、釘を付けたらしい。そうしたら、もうキジムナーこつちに入れない、ということ。この釘をこの人抜いて、ありがとうという気持ちを持つて、ご恩返しをしなきゃいかん。そして、友達になつたと。そしてそのギジムナーが、

「あんたはそんな恩があるのに、あんたのことをやろう」と言つてね。その人がやっぱり漁師だつたんです

よね。

「わしも海に連れて行つてくれ。しかし、ただし条件がある。わしといつしよの場では、尻をひつてはいけない。尻をひつたらもう大変なことになる」ということを条件付けられたらしいんですよ。そして、これといつしよに行く場合にはとつてもお魚がよく取れて。これがもう毎晩のように行つたらいいんですよ。そして、この家は大金持ちになつたんですよ。

しかしもう、飽きがきたので、これはどうにかしてもう払わなければいけないということで、尻をひつてしまつたと。そしてそれと別れたと。そういう話があります。

取つてきた魚はね、調べてみたら片目が全部抜き取られておつた。

字与座 金城幸徳

類話

字糸満 野原由宗

字武富 大城トミ、長嶺京子、長嶺悦子

116 キジムナーと友達（ロ）

（名嘉地大屋）

私も小さい時分に聞いた話ですから、ほんとかどうか知りませんけど。それが、ウスク木いうてね、根は大きくして緑がよう咲く、あのウスク木。これにギジムナーが巣を作つてですね。夜になつてから起こすんです。この時分はみんな貧乏人ですから、起こされて連れて行くところは海です。海に連れて行つて、魚がここにあるからつて、これ取つてよう儲かつた話ですね。それがあれです。その儲かつた話ですけどね。「連れて行くが、あんた、尻ひつてはいけませんよ。そうしたらもう、海に落とすから」

「はい、しませんから」と言つて、まあ、連れて歩いたらいいです。それで、目の玉を一個あれして。その取つた魚を、

「何でこの魚、目がないか」と聞いたら、

「目の悪い子どもがいて、この子のために目の玉を上げてるんですよ」言つて。

字北波平 長嶺光子
字阿波根 平田徳太
字兼城 大城ウシ
字豊原 国吉マツ
字与座 伊敷清保
字新垣 宮里栄吉
字糸洲 神里力マ
字伊原 玉城ハル

そうして、毎日雨が降っても風が吹いても連れて行くでしょう。後もう、金もたくさんあるし、土地やあれも出来たからね、繁盛したからね、その時分になったらもういやになってですね、その木に釘を打ったらしい。釘を打ったら、これが出なくなつて、もう連れて行かなくなつたつていうことです。

その家は、大方、名嘉地の病院の側です。ギジムナ―森いうてですね、あります。

字糸満 上原カツ子

類話

字武富 長嶺トミ、大城トミ、大城スミ
 字北波平 長嶺光子、大城正太郎、当銘キヨ
 字阿波根 島根良政、平田徳太、平田文子
 字豊原 国吉マツ
 字与座 伊敷清保
 字大里 山城力ナ
 字名城 新垣武雄、新垣亀栄、新垣武登
 字南波平 山城幸栄

字束里 下田ミツ（上里区）
 字福地 殿内三吉、並里武吉
 字摩文仁 伊集盛亀
 字伊原 玉城ハル



117 キジムナ―と友達（ハ）

（名嘉地大屋）

仲地といつて部落があるですよ。この部落に大きなウスクの木があつてね。それからギジムナ―が出てね、この主人はね、毎晩海に連れて行かれてね、蛸とか魚とかね、たくさん取つてきて、これから大金持ちになつてね。

来て、毎晩起こされたからね、もう困つてですね、これじゃあ、金たくさん儲かつたから、これじゃあ困るといつてね、この木をね、焼いてしまったつて。このギジムナ―はもう、来なくなつたつて。

字伊原 玉城盛勝

118 キジムナ―と友達（ニ）

（ムーチー汁）

スンジャにね、あの、潮平。潮平からね、何か屋号もはつきりわからんが。ウスクーいうてね、沖縄の方言ですよ。ガジユマルに似たような木です。そちらにギジムナ―ちゅうのがおつたそうですよ。そして、毎晩連れて海に行かれるもんじゃから、もう、あきれてしまつて。それに湯をかけた、ムーチーの、餅の炊いた汁。その炊いた汁を掛けたそうですよ。そしたらもう、こちらには行かんから、名嘉地大屋（なかしちうや）というて、行つたそうですよ。その名嘉地大屋が今もある。やつぱしそれ、お伽話でなくて、本物であつたのかも知れませんがね。

字名城 新垣武雄

119 キジムナーと友達（ホ）

（我那覇大屋）

このキジムナーが魚取りであつたということ。豊見城村の我那覇というところにすね、そこのお爺さんがこのキジムナーとよくお友達になつてすね、そうして海に連れて行くわけさ。行きよつたそうですよ。そして、我那覇大屋というところはキジムナーのウエーキー（大金持ち）だという噂話を聞かされていますよ。その人がもう、いつもキジムナーに連れられて海に行つたらもう、蛸やら魚やらひと重ねに取つて来て、それで成功したという話は聞かされていますがね。

字国吉 大湾朝次郎

120 坊さんと猫

昔ですな、坊さんに、白井の長老という坊さんがですな、猫を長らく養つて、自分の子ども同様にして、いっしょに床にも入つて眠つたらしい。それが、いっしょに眠っているのにね、朝起きてみたらもう泥だらけで。いつも。

「こりや珍しいねえ、不思議だねえ。どうしようかねえ」と言つてね。あれも知恵比べですな。そして、この坊さんがね、いっしょに寝てから猫が起きて、枕元に坐つて、

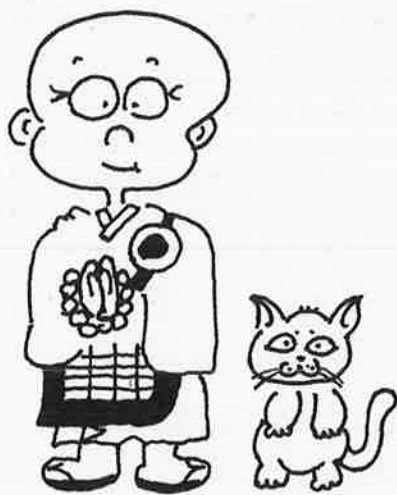
「本当に寝ているかねえ」と言つて、坊さんのあれを確かめたら、いびきするでしょう。いびきして寝たふりしたから、ゆつくり出て行きよつたそうです。だから、その坊さんもね、やつぱし知恵があるから後を追つて、ゆつくりと後を追つて行つたら、墓に入つて行つて。お墓に。そしたら、あちらで何しよるかね、と思つたらあの、協議したらしい。やつぱし坊さんは人が死

んだらあれするでしょう、だからそれ、よくわかるでしょうねえ。そして、向こう行つて、聞いたら、「何月何日にね、あんたの主を取りに来るから準備しておきなさい」と言つて、それね、したから。家へ帰つてきて、その時はですね、肉をたくさん炊いて、玄關に捨てたつてね。肉は。また、坊さんはね、竹で作ったカーテンでね、巻き上げて、人が載るから強く作つて、あつちに坐つて。

する時に、こつちに来たから、

「どうしようかねえ、主取つて行こうかねえ、この肉取つて行こうかねえ。主取つて行こうかねえ」と迷つていたらしい。主取るつていうのもいるしね、肉取る、両方いたらしいです。で、後は肉取るようになって、肉取つて行つたらしい。

字兼城 大城キヨ



笑話

121 ナヴァーグワの知恵(イ)

(尻拭き)

昔ね、大変知能のいい、頭がいい、また、意志が強い男がおったそうです。そうしてですね、この部落から二人ね、昔の那覇の遊郭からの戻りにね、那覇の垣花いうて、あんまり気が強い者ですがね、もうこの武富の二人にね、

「田舎の人たち」と。

「はい、何ですか」言うた。もう、その那覇の人はね、

「海にうんこをやっておるぞ。そうしてね、あんた、

田舎グワ」

「はい、何ですか」言うたら、

「私のケツを拭いてくれんか」て。もう一人の人がです、

「拭いてあげなさいよ」言うたら、おんなじ武富の人が、

「拭いてあげなさいよ」言うたら、

「はい、拭きます。では拭きましょう。あんたは鼻紙

を持っておりますか」言うたらね、この那覇の人、
「はい、こつちから出して、はい拭きなさい」。鼻紙を取ってね、足を捕まえてね、もう海に落としたそうです。

そうしたらこの、落ちたのがね、もう、兄弟おったかしらん。

「兄さんよ、兄さんよ」言うたら、そのお兄さんはね、それをすくい上げてね、海に落ちてゐるのを。また、田舎の人はね、もうゆつくり田舎へ帰ると。

そうしたら、この兄さんはね、追い回して、

「あんただったですね、私の弟を海に落としたのは」言うたらしい。

「いや、私はこんな、私でないよ」。実際はその人であったのですが、

「私でないですよ。今さっき私を追い越して行つた、向こうに行つた人であるですよ」。そうしたら、

「私がやつたて。私はもう胸がどきどきして、もう大変ですよ。私の胸を触ってみなさい。触つても何でもいい。私のような年寄りがあんたの若い弟なんかを海にうつつけるわけはいけませんよ」

「そうですか」言うて。そのぐらい知能あつた人がおつたらしい。

もう、私としてもこれは話ですがね、今から百三三十年前だと思っております。

字武富 長嶺長行

122 ナヴァーグワの知恵(口)

(食い逃げ)

娯楽に行つたですよ。その時は、食堂に入つてね、みんなにね、

「こんな時にたくさん食べられるよう、食べていきなさい。腹一杯食べていきなさい」言うてね、みんな食べてから、一人一人帰るんです。

そうして、食堂のご主人を、最後はこの人がみんなの分払うだろうと、出してあげるだろうと思つておる。思つておつたら、みんなもう、帰つてしまつた。そうして、残っている自分は、一人食べておるさ。そして、

「帰つた人の分もあんたが出してくれ」

「いやいや、私は自分のものを出しますが、人のものまでは出しませんよ」言うてね。

「そうですか。何であんた、あんたが出すいうてこつちはあれしとる」

「私は出しません。自分の分は出します」。こんな知能

の高い人がおつたらしいんです。

字武富 長嶺長行

123 山原と団亀

亀の上に、あの、山原行つて山の中で便をしたら、亀の上ではないと思つて、やつたら、後で、この亀が歩いてから、便が歩きよつたという話は。

「山原ぬ旅や、いくたびんさしが、糞ぬあつしや、くんどつたび」(山原への旅は何度もしているが、糞が歩くのを見るのは今度がはじめてである)という歌がある。こんなんして、歌にもありますよ。

字大度 玉城登吉

類話

字糸満 稲嶺キク

字阿波根 島根茂治

字大度 玉城トシ

124 糸満の女は男勝り

字北波平 長嶺光子

だから、糸満の女は男勝り。

糸満の女の人が、那覇に魚行商に行つて、西の道を通るでしょう。あれから毎日通っているうちに、たまには売れなくて遅く帰る時もあるさね。

旦那が、これはいつも最近遅いから、男でも探しているんだろうと思つて、それを試すために、自分はあるキビ畑の中に隠れて。したら、妻はこのこ歩いてたから、来よつたみたい。そしたら、この旦那が一応は、自分はよその男のような見せかけで、この女を引っ張つたから、

「ヤーグートルムノーヒャー」（おまえのようなやつは）ちゆつて、何かキンタマ握られて、この男の人はキンタマ握られたみたい。そして、そのまま自分は、よその男と思つているから、お家帰つて来たら、旦那いないでしょう。そしたら、また一応は戻つてみたら、よその男ではなくて、自分の旦那だったと。あんなにして話があつたんですよ。



125 渡嘉敷ペークー（イ）

（十日月・嘘の名人）

昔の場合はみんな、日雇いを募集して首里城のリンの池（龍潭池）といつて、大きい沼があつた。みんな田舎から、今日はどここの部落から作業に来る、明日はつて。

渡嘉敷ペークーといつて有名な、名物な。

「明日は何時までに、何名何名、何十名連れてこい」と作業をやつて。ああ言うとして、わざと遅らして。時間は、九時集合のやつは、あるいは十時集合のやつをわざと一時間も二時間も遅らせて行つて。また、「何だいお前、時間励行もしない。今度はお前、そういうことならずつと遅くまで使う。その縮まった分は伸ばさせよう」と。

「もう仕方ありません。そうになったら今日はもう、お月さんが上がるまで。それで遅れたのを取り戻すから。お月さんが上がるまでやりませう」と言つたら、「本当にやるか」と言つたら、

「本当にやりませう」。そしたら、十日であつたらしい。十日の月は三時頃には上がつてくるらしいのよ。さあ、勝連部落から来ているものだから、それで、

「みんな上がちなさい」と。

「何だ、このやろう。お前遅くまでやると言つたのに」

「はい、遅くまでやりましたよ。ちゃんと約束通り。」

お月様はもう上がつたよ。さあ、帰ちなさい」。それでやられた。

それでまた、片一方は、首里から那覇に何か会があつたらしいんだよ。だから、王から今度はいろんな、冗談みたいな、笑いごとみたいな、とにかく、いろいろなジャス話は嫌いなやつがあるから、第一は『饅頭にはほう』と言うてな、沖縄では。こういうふうなんですよ。場合によつて、またこの、首里に行く場合だから、それ見た場合には罰金五百円といったことで。こんな、饅頭の話をやつた場合。饅頭というところ、他府県にもある。それともう一つは『焼ける』。火災。焼ける。火よ、火災。あんなのもまずいから、火の話もしないようにといつて。

それで、途中でホーギという木があるさ。だからま

だ、渡嘉敷ペークーは、わざわざこの枝を折ってきて、「素晴らしいね。王様、これ、何という木かあまり見たこともないが」と言ったら、向こうは、「これ、ホーギという木だ」。言わされて、「はい、五百円」。

ほいたらまた『焼ける話』。火の話もせにやいかん。わざとまた、

「王様珍しいさ。ちよつとその、こうやってね、トイレなんか行った場合は、台所で木で作つてある釜で、どんだん飯を炊いておる」と。

「何、木で作つてある釜で飯を炊いておつた」

「そうよ」って。

「それ、焼けるがね」って。また王様、焼けるだろうと、またもうやられて。何とか言つたが、みんなあれにやられて。渡嘉敷ペークーに。だからこの、取つた物は、今度は税金は、

「これ、わしがもうかるもんじゃない。みんなで分け合つて食べよう」と。

字北波平 賀数長安

126 渡嘉敷ペークー（口）

（十日月）

これはですね、今ある那覇市首里にある龍潭池、ありますでしょう。その池を掘つた時に、渡嘉敷ペークーさんは何か作業場の何か、監督だつたらしいですよ。それからあの、みんなをよく働かすために、その自分の部下たちに相談して、

「今日はあんたらが一生懸命働いて、やつたら早く作業を引き上げさせて休ますから」と言うて相談して。この渡嘉敷ペークーは頓知の早いもんだから、上司の役人の方に、

「どうですか。わたしの班は今日はずんとは働かすから、月が上がつたらもう作業を引き上げさせて休ませてくれんか」と願つたらしい。だいたい月というのは晩しかならないというみんな頭があるでしょう。昼は上がらないという。

だいたい、月は、十日月ぐらいだつたら、だいたい四時・五時ぐらいから上がりますからね。

これから、渡嘉敷ペークーさんは上の上司と相談をやつたもんだから、部下の方々に、

「こういう相談になつておるから、一生懸命に働きなさい。今日も月が上がつたら、あんたらもう作業引き上げさせて休ますことになつておるから」と言うたら、みんなだいたいみんな話はわかるから、そしたらみんな一生懸命にやつたらしいですよ。

それからもう、十日月は三時、四時ぐらいから上がるもんですから、渡嘉敷ペークーは、その時間になつたら上司のほうに話しかけて、

「月は上がっておりますがどうですか」言うて。上司ももう、

「これはやつかいなことになつたなあ。別の人は働いておるのに、これたちばかり休ませるわけにいかん」言う。

「それはもう相談だから、渡嘉敷ペークーのように頭は賢くないもんだから、上司のほうは。

「もういいだろう。あんたは相談だから、またその代わり一生懸命働いたんだからいいだろう」と、仕事引き上げさせたよ。

類話

字北波平 大城清助
字小波蔵 伊敷ヨシ

字与座 伊敷弘吉

127 渡嘉敷ペークー(八)

(王様と碁・米俵・着物)

頓知のある方で、まあ、一休和尚みたような、頓知のある人で、非常に。渡嘉敷ペークーというのは。

この人はですね、囲碁が非常にうまかったらしいですよ。王様がこの方呼んで、囲碁の相手をやっておるらしいですよ。で、囲碁の場合は、同じ同等の人間になってですね、

「えいやつ」とこう、声を掛けてやるわけ。それを家臣が聞いてですね、

「ペークー、あなたはね、君はね、王様に対してね、あなたと王様とは天と地の開きがあるのに、王様に対して同等の人間の扱いをしてやっておる。そんな馬鹿なことしたら貴様許さんぞ」と、側近が言うておるわけです。だから渡嘉敷ペークーは、翌日からですね、王様のところに、庭に座つてですね、王様呼んでも中に入らないわけです。

「囲碁早く始めて下さい」と。で、一玉置いてですね、

あるんですよ。鞍。馬の背中に付ける物。この、馬に鞍をあれてですね、王様のところに行つとるらしい。そしたら、一俵を出してきてですね、部下に言い付けて、一俵出してきて、

「ペークー、米を出してきてあるからね、持つて帰りなさい」と。そしたら、このペークーはですね、一方に乘せておるわけですよ。馬の鞍はもうひっくり返つてですね、一日中もう、ひっくり返るわけですよ。こっちに乘せたらこつちがひっくり返る、向こうに乘せたら、また向こうにひっくり返る。そしたら、

「王様、これどうしても運ぶことができません。もうひっくり返りますから。もう絶対落ちるから、もう一俵出して下さい」と。もう一俵貰うために。二俵貰つて。

「ああ、今なら大丈夫です。ありがとうございました」とか言つたらしいですよ、ペークーは。それで有名ですよ、このペークーというのは。

またもう一つはですね、王様からこの、着物を貰つたらしいですよ。着物を。着物を貰つてですね。王様が着けた着物を貰つとるもんだから。

また庭に下がって行く。こうやつておるわけです。また打つて、また下がる。そしたら王様、面白くないものだから、

「どうして君、ペークー、どういう意味か」。ペークーに言うたらしい。

「実は私、命が危ないから、こういうふうにしております」と。

「なぜ、私と碁を打てば貴様の命がどうして危ないか」と。

「いや、王様はいいけれども、家臣が私のことを無礼者といつて殺そうとしてますので、そんなことやつておるわけです」。

「碁というものはね、同等の立場になつてやらなければ、何にも面白くない。貴様許さない」と。王様にやられたですよ。叱られて。

それから、ペークーは座敷に上がつて、やつたそうですよ。その点は頓知があるわけですね。

それから、ペークーに対して、

「君は米一俵やるから」。それで、米一俵やるということとで相談してあるもんだから、馬には鞍というものが

「正月に、元旦の日に着けなさい」と貰つたらしい。

そしたら、このペークーはですね、盛んに泣いておるらしいですよ、奥で。もうもう、わあわあ泣き出してですね、もう非常に泣き出しておるらしいですよ。そしたら、王様は、

「おいペークー、君はね、私が着物を着けさせたらね、くれたらどうして泣くか。着物、面白がつてするのが当然でないか」と。そしたら、

「いや、王様、私はいいいけれども、私が王様からこれ貰つて立派な着物を着けますが、うちの母は一枚しかありません。はい、着物一枚、冬にも夏にもこの一枚で過ごしております。それで、うちのお母さんは、私とはこんなきれいな着物を着けて正月はできるのに、うちのお母さんは着物、いつでも冬も夏も一枚で過ごしておるのに、それ悲しくてもうたまりません」と、そしてまた泣いたらしいですよ。

この王様は、奥さんのことをウナザラといいます、ウナザラ。ウナザラを呼んでですね、

「これ来なさい。ペークーに君の着物、やりなさい」と言うて。母の分も貰うてですね、帰つたらしいです

よ。

非常に頓知のある方です。

字武富 長嶺和男

128 渡嘉敷ペークー(二)

(王様と碁・米俵・味噌)

あのね、これも戦前、年寄りから聞いた話だがね。まあ、内地でいうと宋呂利新左衛門といて、頓知の早い人がおったでしょう。沖繩にもそういうあれがあるんですよ。

これは、名前は渡嘉敷ペークーといてね、この人の話だがね。ペークーというのは位じゃなかったかなと思つて聞いた。この人の話だがね。これは本当に頭が利れよつたつて。頓知の早い人。で、こっちの琉球藩の王、王つていつたら首里の宗家。王様。王様の碁の相手だったそうです。これがまた、頭が利くんだからね。ま、王様が、これが一番気に入つておつたそうですよ。位はずつと下だがね。

そこにはまた、摂政三司官といてね、大臣とかこういう方々がいるがね、もう王様はこの人を坊主御主ほうしゅうぎゆうといつてね、この人が好きでね、いつも碁をやる時はこれと呼んでやりおつたそうですよ。

そこで、夢中になつたら王様に敬語を使わない。敬語を使わないから、またこの大臣の方が、

「貴様、この、下品のくせに、百姓のくせに王様に向かつて何ていう言葉を使うか」と、こうお叱りを受けたと。王様は叱らないよ。偉い人が、大臣が。そしてまた、これは頭がいいからね。碁を打つて、一つ打つたら下がつて、もう、礼をして。この大臣の言うことを、偉い人の言うことをそのままやつたらね、王様は、御主ごしゅというんだ、王様には。御主。王様は、

「面白くないから、あんたがやるようにやりなさい。おんなじあれだから、碁をやる時はおんなじあれだからね、あんたが今やるようにね、引き下がつてかしこまつてやると面白くないから、碁は。お前がやるようにやりなさい」と。

で、もう碁を打つて、王様も満足して。

「あんたがね、何か欲しいか。欲しいものがあればやるから」と。

「じゃあ私は御飯を食べたことないから、芋ばつかしだから、米を下さい。一荷の米を下さい」と。そして王様は、一俵の米を持つてきた。このペークーはね、

馬を持つてきた。馬に鞍掛けて米を貰いに行つたつて。

そしたら、一俵だから、積んではひっくり返り積んではひっくり返りしたから、

「もうこれでは持つてゆけないから二俵下さい」。

で、それから、

「味噌がないから、田舎は味噌がないから味噌を下さい」と言つたら、

「あんた、入れ物持つてきたか」

「入れ物、持つてきてない」と。

「じゃあ、やるから」と言つて。で、入れ物に入れてしたら、

「これはすぐは持つてゆかれないからね、恥ずかしいから」と言つて、庭にめぐつて行つて、一番王様が大切にしてる鉢植をね、折つて、その味噌の上に差して、こう持つてゆきおつたつて。

王様も、癪に障つてもね、癪に障りきらないわけさ。こういう頓知の早い人だった。

字与座 伊敷清保

129 渡嘉敷ペークー（ホ）

（低頭門・米俵・相撲）

渡嘉敷ペークーというのはまだ昔じゃないですよ。

二百年ばかり前かな。とてもこの人は頓知があつてです。ね、いまにも考えることは早かつたわけです。尚こう王といっている、ボージウスー（坊主御主）といっている、隠居してからボージウスーといつて。その人の部下で、とても親しかったといひます。

その人はまたとても知恵があつてですね、門に入る時は、木はずうつと下にして、誰でもかがんで入るよ。うに。で、殿様が来ても王様が来ても、そこへ来る時は礼をさせるため、お辞儀をさせるためという意味らしいです。

これはまた一つの話ですけども、ボージウスーからお米を一俵貰つたそうです。一俵貰つたら馬をもつて積みに行く時ね、そしたら、わざわざ一俵なんだから、片一方に積んだらどうすることもできないでしょう。そうしたら、どう言うか知らんと思つたら、

「御主ガナシーメー、これはどうすることもできないから、もう一俵下さい」と言つて、二俵貰つて。

この人も、体は小さいけれども武芸が達者で、頭も良かったと。まあ、作り話であるから、どういう格好か知らんけれども。

糸満に行つとつてですね、とても体の大きい、力持ちの人がおつたといひます。これと相撲を取つて、なかなか相撲でも、武芸も達者だから、投げて立つからですね、どうすることもできない。この、糸満マギーという人はですね。

そうしたら後は、糸満マギーが足を、ペークーの足を二つ組んでですね、上へ上げたら、

「まあまあ、待て待て」ちゆうて負けたということ、これま、話がありますよ。普通では寝かせることができなかったそうです。だから、両方の足をうんと上げたら痛いでしょう。

「まあ、参つた」と言つて。

字阿波根 平田徳太

類話

字糸満 野原由宗
字武富 長嶺和男
字北波平 大城正太郎
字小波蔵 伊敷ヨシ

130 渡嘉敷ペークー（ヘ）

（煙草は一回）

煙草ね、好きらしいさ。でね、親がね、

「お前は煙草を吸いすぎるからね」。煙管のね、昔は煙管だった。巻き煙草なんてない。煙管のね、一つだけ灰を盛つたつて。

「そうかね」と言つてね、わざわざパイプの中入れてね、吸つたらしいよ。金の棒持つてね、火事みたいにやつたというね。

人よりも頭のいい人間であるみたいで。それで、後にはね、殿様が、

「これはいつかはやる頭だからね」ということで、侍の位になつたらしいね。

字北波平 大城正太郎

131 渡嘉敷ペークー(ト)

(塩がうまい・低頭門)

話をして、王様にね、

「王様が一番おいしいものは何か」と問うたそうですよ。

「そうだねえ、僕が一番おいしいのは豚肉かねえ」と言ったら、

「違います。一番おいしいのはね、人間が一番おいしいのは塩。塩で味をつけると何でも、豚肉でもおいしい」。で、自分の家と呼んでね、招待して。また、この人の家は茅葺で、小さい家だったそうですよ。で、わざわざ王様を呼んでね。門の前にはこう、ガジマルって大きい木があったそうですよ。わざわざ腰曲げて入らんとこの家には行けないようになっておった。で、これはまた、王様に礼をさせたといって、また自分が自慢してね。

そして、僕が一番おいしいご馳走を作ってあげるからと。で、何も入らない味噌汁の、何も、だしも入ら

ない、これを上げたって。

「あんたの一番おいしいのは、こんな野菜も入らない、何も入らない、豚肉も入らないような。おいしいのはこれに塩を入れたらね、一番おいしいのはこの塩だよ」と、王様に教えた。

そして、この人も賢い王様だったそうですよ。

字与座 伊敷清保

132 渡嘉敷ペークー(チ)

(屋根の葺き替え)

昔は王様の家でも萱で葺きよったでしょう。で、家の葺き替えの時、王様の家だから、葺くの悪かったら殺されるからといって、全部遠慮してね、誰でもやらなかったそうですよ。で、このペークーはですね、

「じゃ、あんたたちがやらないなら僕がやるから」って、すぐに上に上がってね、上から、本当は下から葺いてくるでしょう、萱は。家造るには。下から葺いてゆく。これは上から葺こうとしたんだ。王様が、

「あんたは屋根からね、萱葺いたらこの家はくしゃくしゃになって漏るんじゃないかい」って言うたら、
「王様がよくわかるからね、あんた葺きなさい」って。

字与座 伊敷清保

133 渡嘉敷ペークー(リ)(競馬)

あれはね、昔の首里の侍で、馬グワー持って、王様の馬と勝負させるいうて、稲の穂を尻尾にくびってから。このペークーの馬グワーは最低の馬であるが、王様の馬と勝負させるいうて、稲の穂を尻尾に結んで。

馬の大好物ですからね。それで、この王様の馬は、ペークーの馬の尻尾に稲の穂を結んであるから、これを食べようというて、絶対先にはならなかったって。それで、渡嘉敷ペークーには負けなかった。

字武富 長嶺陽元

134 渡嘉敷ペークー(ヌ)

(ルカ島返し)

糸満の沖にね、浅瀬があるよ。ルカ(糸満沖にある円形をした環礁の名)といつてね。昔は木も草も生えていたそうだがね。それでここは非常に、海に、日を立派に、いい日に行かないとね、いろんな日に行ったら魚が取れなかったそうさ。それで、この人が、「ここは危険だから」と言つてね、手のひらに図面を描いてね。して、これをひっくり返したら、あの島もひっくり返つたという。本当かな。だから、昔はカルだが、今はルカといっている。ひっくり返つてから。

字糸満 上原亀広

りますからと。たら、みんな考えないで、月は夜しか上がらないとしか考えていないもんだから、「十日の月が上がるまではやりませう。もう遅刻した分はそうしますから」と言つたらですね。十日からはもう月は上がっておるんですよ、昼から。昼から上がつとる。

「十日の月が上がつておるから、私たちは帰ります」と。そつでね、それを見たらみんな、月が上がつてるもんだから、がっかりしてですね、

「今日はやられてしまった」と。

それで、この人まだもう一つは、茅葺きだから、みんなこの、葺き手はいるけれどもですね、みんなできないと言つて、

「私はもうできない。まだ茅葺きをやったことがないから」と。ここに確かに茅葺きの人はおるということ

はわかつておるもんだから、
「そんなら私が葺きます。誰も葺かなければこれは、うちは今日で仕上げなければいけないし、仕上がらないから、私がやろう」と。それで、この人がですね、上がつてですね、ずっと上に、上のほうからですね、

135 津堅バーマー

(十日月・屋根の葺き替え)

昔、首里城に各字から夫といつてですね、夫といつたら、人夫が行くわけですよ。手伝いに。行つて、あの場合、首里城ではこちら御殿、殿内と呼ばれます。殿内。殿内は茅葺きですからね。殿内に行つて。津堅という離れ島があるんですよ。離島が。

津堅バーマーといつてですね、これも有名な頼知のできる人ですよ。それで、わざわざそこに遅刻して、時間遅れて行つたらいいです。そしたら、向こうも津堅から来るのが遅いものだから、向こうもみんな作戦を持っているわけです。

「私たちは今日は遅刻してきておりますから、十日の月です、十日。十日の月が上がるまでやりますから」と。みんなは、

「はあ、通せ」と言つて。

「月が上がるまでやるならいいんじゃないか」と、みんな承知したらしいですよ。十日の月の上がるまでや

一番上のほうから。茅葺きの場合、下から葺きますよ。一番上に上つてですね、

「茅を早くこつちに投げなさい」と。上から葺いたらしいですよ。

そしたらですね、下に茅葺きの名人がおることはおる。わかつておりますからね、この人がです。

「おい、貴様、茅は下から葺くのであつて、上から葺く馬鹿がおるか」と、さかんに上に上っている津堅バーマーに言うたらしいんですよ。そしたら、

「よし、貴様できるのにね、できないふりして。君、上りなさい」と。見つけてね、上せて、茅を葺かして家を。それで、いちいち仕上げて、立派に完成して。

字武富 長嶺和男

136 糸満マギー（イ）

（あそこは人並み）

向こうの、夜、女の人に好かれてからね、みんながあれさしたいけど、けつこう体の大きいから、あれ、下のもんも大きいんじゃないかなと、女の人怖がつてね。あれさしたいけど、下も大きいんじゃないかなあということ、触らせる人いなかったって。

そしたらね、あの、話を聞いて、

「体の大きい男は下のほうも大きいから、お前のはさせる人いない」と友達に言われたんでしょね。わざと裸でね、女の人が市場に行くところを見計らって、裸して歩いてね、これはそんなに大きくないということを見せたら、その晩からね、女の人がたくさん集まって来て。あれしたらね、そしたら今度は、向こうの部落の人間がね、いわゆる焼きもち焼いて、集団で来てからに、

「もうこの、やつつけてやろう」と。これ一人のために女取られてはたまるか、ということ、村の者が。

そういうたらね、マールン（馬艦船）がありますよね。帆柱を、でっかい帆柱を、たくさん来た時に、「来るなら来い」。あの帆柱引き抜いて構えたら、それからびっくりしてもう、とんで逃げ帰ったという話ですね。それから手出しも誰もすること出来なかった。

類話

字阿波根 平田徳太

字糸満 上原皓吉

137 糸満マギー（ロ）（山原船）

本当に大きい人だった。武勇はあんまりないが、大きいんだから、力があるわけ。それで、王様からね、「私の子孫にそんな人がいるかなあ」と、そう言うて、後ろを撫でたそうです。そしたらもう、後ろの皮が剥けたという。そのぐらいで。王様は見上げていたそうです。

あの人は、昔の話ではね、あんまり大きいものだから、丹前掛けてね、女を二人ここへ挟んで歩いてもらなかつた。大きすぎて。

それからね、この人が、安部・嘉陽あぶ かようと言って海端に村がある。いろんな人がな、漁師だから、点々と沖縄を回っているんです。あっちでね、大きいから、また、顔も奇麗だったそうです。女が付くがね、そんな大きな人だからもう、この人にやられたら大変と思ってね。遊びに女は集まって来たそうです。それで青年たちがね、

「これ、殺さんといかんね。女はもうあの人に付いて行くから」。それで、青年が集まって、殺そうと考えていたそうです。

そしたら、山原船といつてね、薪を運んでいつものように来よつた。山原から。その柱がこの浜にあつたそうです。それでこの人がね、『これはもう、これでおさめにやいかん』と、この柱の先を持って、これを振つたそうです。振つたらもう、この青年たちが、「もう大変」と言つて逃げて行つたそうです。そんな話もある。糸満マギー。

字糸満 上原亀広

類話

字糸満 金城安彦

字豊原 国吉力マド

字名城 新垣武登

138 糸満マギー（八）（帆柱）

顔形も良くて、山原に行つてですね、漁業やつてゐるのに、村の娘たちがくつつくもんだから、ほかの、向こうの青年連中が吝気みたいなのをやつて、この人をやつつけようといつて来た時ですね。この人、逃げ行つても追い詰められたら、船の帆柱に腰掛けて待っていたらしい。

それを、一人の年寄りが見て、

「お前たち、向こうへ行つたら死ぬんだよ。あれが腰掛けてゐる帆柱はこの人の武器だから」と言つたらです、それなら、

「そんなことあるかなあ。こんな帆柱を振り回すような人間がいるか」というのを、その年寄りが行つて、その人に声をかけた。

「お前が持つてゐるのはこれ、武器だろう」と言うたらですね、

「私ももうどうにもならん時は、これでやります」と

言つて、この帆柱を振り回して見せたもんだから、その連中はもう、驚いて逃げたという話もあったんですが。

字糸満 上原亀吉

類話

字糸満 田場天龍、大城英次、稲嶺盛亀

字宇江城 照屋寛吉

字名城 新垣武登

139 糸満マギー（二）（寿命）

死んでからよ、この人の骨はばらばらにならなかつた。昔は洗骨して、死んだらお墓の中に入れるでしよう。だから、一年たつたら全部また洗骨して、骨を一つ一つにまとめてまた墓の中に入れる。この人死んでも、あばら骨もいっしょにくつついてゐるんですよ。一つだったですよ、あばら骨。

この人が若い時は相撲よ、沖繩相撲。首里でやつたらしいよ。糸満からこの人が出て。一番、空手の強い人がわりとこれ強いですよ。だから、相撲取つておる時よ、首里の空手の師範級の人が見たらよ、この人はあと三か月の命という。三か月で死ぬつて。だから、空手出来る武士は、どっかの、死ぬあれをわかるわけ。糸満の人がわからない。だから首里の人はよ、あれ見て、もう三か月で死ぬ。ツボがあるわけだから。これを抜かれたのを見たというさ。

だから、三か月後で聞いたらしい。

「糸満マギーは生きておるか」と。

「あつ、元気で漁業やつておる」。びっくりして。この人のことが何ももう。だから、死んでもあばら骨もばらばらにならんぐらいだから、ツボに空手の達人があればしても、何も、この人一人は何もわからん。だが、相撲やつて、終わつて帰つてきて、まだ三か月あとの話、元気で漁業やつておると。向こうの空手の専門の人たち、みんなびっくりしよつたつて。空手も何もわからん。漁業する、それだけ。

身長も高くて、石垣よ、石垣から、座つて、この人が歩くの見えよつたつて。だいたい石垣は、自分より高いぐらいあるでしよう、昔は。だから通つたら、この人はもうこれだけ出て。この人以上の人はもう生まれてこないわけ。

字糸満 大城英次

類話

字北波平 大城正太郎

字束里 玉城佐一郎（東辺名区）

140 糸満マギー (ホ) (足跡)

この人が歩いた後、石の上から歩いたただけで、この石に足跡が残っておった。この家の近くの道端に、岩が出ておるところがあつたんですね。今は道になつてしまつておるが。そこに、そつくりの足の形になつておるところがあつたそうですがね。そこをよく私なんか小さい時には、これは、イーキンメータンメー (屋号イーキンメーのおじいさん) の足跡だということをよく言つておった。

またあの、今の第一製糖付近に、海の中に岩がちよつと出たおつたのが、これはイーキンメータンメーが持つて来てこつちに置いたよとかね、そんな話もあつたんだがね。

字糸満 金城安彦

141 保栄茂タルチー (イ) (力比べ)

非常に力持ちですね、鋏も、普通の人はだいたい五寸ぐらいの鋏ですよ。この人は七寸ぐらいの鋏持つてですね、耕しているらしいんですがね。この人が耕す場合は、馬が走るみたいですね。

そして、首里方面から、この辺に非常に力持ちがあるということで、力試しに来たらしいんです。そして、この人が、よく沖縄では雷の落ちるために、棒を立てる習慣があるわけです。それを、力試しに来たもんだから、棒をここに立てて、

「お兄さん、この棒をね、あんた、抜けるんだったら試合しよう」と言ったら、この本人が抜けなかったらしいんです。この人が突つ込んだ棒が。そしたら、その場から逃げたということを、話を喜屋武の人から聞いたんです。そのぐらいの力持ちだったららしいです。

字糸満 稲嶺盛春

類話

字福地 川門信義、並里武吉



142 保栄茂タルチー (ロ) (力比べ)

この保栄茂タルーちゅうのは、昔、首里からですね、昔、なんですか、カキ試し (力比べ) ちゅう、方言でカキ試しに、馬で来たらしいですよ、馬に乗つて。そうしたら、この保栄茂タルーはいなかったらしいですよ。で、次男が追つかけて行つて、この人を捕まえて、股引き裂いてですね、

「イリンゴーゴーナリヨヘヤー、アガリンゴーゴーナリヨヘヤー」ちゅうて投げ捨てたらしいですよ。それから、天気が悪くなる時の海がゴーゴーしますね。それからゴーゴーしたちゅう昔の話ありますよ。

字福地 殿内三吉

143 保榮茂タルチー（八）

（妹の大力・力比べ）

東辺名がありますよ。向こうの人ですがね。そのお家はともあれですが、その保榮茂タルチーといって、武士だったらいいです。その人の話も再々聞いておりますが。

東辺名というところはですね、そのタルーといつてですね、保榮茂タルチーはタルーですからね。タルーという名前を付けないらしいですね。その人に名字負けでね。負けるからといってね。タルーと、あれはですね、付けないと言う話がありますよ。

その人の話はですね、保榮茂タルチーは力がタルーは強いですよ、本当は。このピンということはありますが、だからここであの人は力の太郎と言うておるんですがね。

その人がですね。とても武士であつたちゆうこと。今も探せばあるはずですよ。戦前まであつたんです

がね。その人の灰皿ですね、煙草盆。それはもう、石です。こんな大きな石でさ、あつたんですがね。その人の煙草盆です。その人の話ですね。よく聞いてますがね。

首里から、首里の武士がさ、その、こんな田舎に保榮茂タルチー、力のタルー強いっていつてね、とても、だいぶん強いということ首里の武士が聞いてさ。そして、その首里の武士が言うにはね、

「そんな田舎に何と武士といつてもね、田舎にはそんな武士がいても、自分ら首里の侍も武士だから、自分にはどうしても叶わん」ちゆうことを言つて、やつぱしこつちに勝負さ、勝負を申し込んで、しに來たらしいですね。したらですね、その保榮茂タルチーは、家にはいなくつてさ、いなくつて、

「ここが力タルチーのお家ですか」と首里の侍が言つたらですね、

「そうです」と言つてですね、そのタルチーの妹が、「煙草を吸つて下さい」と言つてですね、この煙草盆さ、石で、大きな石ですよ。石臼みたいなんですよ。これを持つて行つて、

「どうぞ、煙草を吸つて下さい」と、もう出したらすね、それ、首里の侍はね、武士は、もう大変。この娘でさえね、こんなの、あれはもう四人がかりで担ぐもんだから、こんな大きな石の煙草盆をね、煙草吸つて下さいと持つてくるんだからね、そのタルチーといつたら、娘でこんな武士だからね、もうとってもこの人には叶わんと思つてですね、この人はですね、首里の武士は、わざわざ首里から來てですね。

その首里の武士は、やつぱしあの、自分の飼犬ですね、犬はですね、連れて行つた犬はとっても強い犬だったらしいですね。それも教えてね、この武士より、この犬は二倍ぐらいの力があつたつて、この犬は。したらですね、その、首里の武士は、タルチーの妹がね、「どつからいらつしやつたんですか」ちゆうたらですね、

「首里のもんだが、首里から來た」ちゆうこと言うたらしいですね。そしたら、

「あんた、何だ」つて言つたら、

「タルチーのうちは妹です」と言つたらね、

「兄さんはどこへ行つた」

「よそへ行つてますが、すぐに歸つて來ますから」と言うたんですね。もうこれは首里の武士は、もうこんな娘さえそんな武士であるからね、もうとっても自分たちは相手になる人じゃないということですね、逃げたらしいです、

「失礼します」と言つて。

逃げたらですね、ここに、その東辺名からですね、この上里というところから來て、その上里のほうから下りるところに竹藪があるんです。竹ね。唐竹といつてですね。今はもう小さいですがね。あの当時はとても竹がですね、唐竹とコサン竹とあつたらしいです。今でも竹は残つておりますがね。このタルチーが來てですね、娘のほうにね、

「今首里からね、首里の侍といつてね、來ていたんですがね。今こつちから出て行かれたやつだ」

「で、どこに行きよつたか」と。

「今は上里のほうに回つて行きよつた」つて。

「そうか」と言つてですね、これを追つてみようと言つてですね、タルチーは追つて行つたら、その、タルチーが行くまでにはもう、この首里の武士は、二ダビラと

いう坂から下りてですね、ここにアシ川堂（小地名）ってありますよ。水もたくさんあるんですよ。ここまでも侍は逃げて行く時に、

「待つて下さい」と言つてですね、タルチーは呼んだらしいです。待たしてね。したら、タルチーは竹を、唐竹ね、この竹を抜いてですね、これをこうしてしたらですね、こんな大きな竹ですね。これ、手ですぐ折つたら帯に締めてですね、帯に。

「待つて」って。待たしたらいいですよ。

「あんたですか。うちのところへ来たちゅう人は」

「首里のもんです」

「何しに来た」

「あんたと試合に来たけどね、あんたの妹さんがね、煙草盆を持つて来たのを私が見て、がっかりして、とつてもうちは叶わんということですね。今逃げてきた」ということを言うたらしいです。

「そうか、じゃ絶対やらないか」と言うたらしいね。

「とても、あんたには叶わないから」ということを、

その首里の武士は言うたらしいですよ。そしたら、

「せっかく首里からね、こつちと相手に来てね。一つ

やつてみてごらん。やろうじゃないか」と言うたらです、その首里の侍はですね、

「うちの愛犬は二倍の力がありますからね、うちもうつてもあんたには叶いませんがね、うちの愛犬とやつて下さい」と言うたらしいです。

「ああ、そうか。じゃ、やつてみるよ。じゃ、その愛犬は、うちが勝つたら、うちが真つ二つにしていいいんでしょう」

「いいんです」。

やつたらですね、そのタルチーがですね、犬もやつぱり、教えてあるんだからね。首里の侍の何だから。タルチーもあれしてやつていったらしいですよ。その犬がですね、跳んで来るんですよ。タルチーがですね、こつち捕まえて、二つに裂いて捨ててですね、もう、首里の侍も泣いてですね、

「こんな武士もこつちに、タルチーといつてね、いたちゅうことをわからなくて、どうもすみませんでした」ちめて。

字米須 仲宗根善道

類話

字新垣 宮里栄吉

字名城 新垣武登

字小波蔵 伊敷フヂ子

字束里 玉城 春、玉城佐一郎（東辺名区）

上良武定、上良徳栄（上里区）

字伊原 玉城ハル

144 保榮茂タルチー（二）

（仕事は弁当）

保榮茂タルチーの兄弟同士がある時、しなされたことは、この向こう、アシ川（小地名）渡るわけ。アシ川を出て。山城のあれは喜屋武村の領地になっておるけれども。区域は。このアシ川というところは昔は田んぼだったらしい。それで、その田んぼにね、田んぼに耕しに行かしたから。あの、弟はもう頭はいい、弟は頭ものすごく優れているし、力もあるし、やつぱし仕事の面ではあんまり、何と言うか、うぬぼれたみたいな人ではなかったかね。

それで、

「田んぼ耕して来なさい」と言つてね、弁当作つてうちからよしたら、それで自分はね、自分はもう木陰に座っておつてね、鍬によ、鍬へ弁当を下げてね、「鍬やれやれ、お前やりなさい、やりなさい」と言つてね、自分はまた木陰で物を読んだり、寝たりしておつたらしい。それを見てね、兄貴が、

「この人間生かしておつたらね、どんなことになるかわからんから」と言つて、東辺名の向こうからね、弓の矢でよ、この弟を話して、語つてね。ここでもう当たつて、即死したから。これもまた保栄茂タルチーといつてね、このこつちの、今、崖はあるけれどね、これ、葬られていたところ。

字伊原 玉城ハル

類話

字福地 殿内三吉

145 保栄茂タルチー（ホ）

（牛抱え・仕事は弁当）

タルチーというのはね、タルーヤツチーという言い分だつたつて。あんまり力が強いもんでね、田んぼに行つたら、牛の足を捕まえてこんなにしおつたという力持ちだつたらしいですよ。

あれ、アシ川（小地名）というのが伊原の境界にある、川が。その近辺は、昔は田んぼだつたつて。田んぼだつたから、その田んぼにこの、やつぱしこの、保栄茂というところの、デーブシの人たちが囲つていなかったかね。

そこにね、田んぼ耕しに来て。したら、そこはまた、アシ川といつて川があるんだが。牛なんか持つて来てこれ、田んぼ踏ますでしょう。土踏みさせるでしょう、牛は。牛ね、歩く時にはよ、このデーブシが、四つの足捕まえてね。こんなこの、いちいちあれするのはうるさいから、捕まえてよ。川にね、こんなんして突っ込んでよ、引き上げてね、そのまんまにしておつたで

すよ。そんなにも力持ちだつたつて。

それでね、またこの、やつぱしこれも、頭も優れてはいるけれども、やつぱしあの、利口な者であつただろうね。田んぼにね、農作業をさせに行かしたら、お弁当持たしてね、こつちに行かしたら、東辺名というところは向こうだから、ずっと遠いでしょう。弁当持たして行くんだから、あそこは。こつち来たらよ、お弁当持たしてね、田んぼに行かしたら、鍬があるでしょう。あの、田んぼ耕す鍬。その鍬にね、弁当下げてよ、「やりなさい、鍬。やりなさい、鍬」と言つて、自分は座つておつてよ。自分は日陰に座つて休んでおつて、そんなにしてね、

「鍬よ、やれやれ。鍬、やれ」と言つてね、鍬に弁当括つてよ、下げてよ、やりなさい、やりなさいと言う。自分は座つておつて何する人だつたつて、この人は。

類話

字東里 玉城佐一郎（東辺名区）
字福地 川門カメ

字伊原 玉城ハル

146 保栄茂タルチー（へ）

（山原船）

山原といったらずと北部のほうね。あつちから船に薪をうんと積んできて、いっぱい積んできて。喜屋武ちゆたらあの、向こうね、喜屋武の部落の船着けるところ、浜。この山原船が薪を積んできて浜に着けたつて。

山原船に乗ってきた人と争いになつてゐるわけさ。争いになつて、保栄茂タルチーらは、

「これは自分が全部浜に引き寄せる」いうけど、このまた、船持つてゐる人らは、

「できない」と言つて争いになつてゐるわけ。で、指切りして、そんでやったから、指切りやったから、今度あの、保栄茂タルチーが引き寄せて、浜のほうに。全部薪を貰つたつて、いう話。

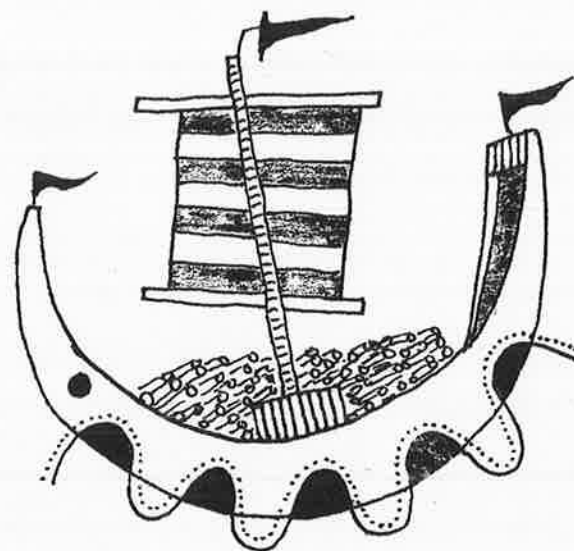
保栄茂タルチーが勝つたから、今度は、この薪は全部この、保栄茂タルチーが貰う約束で指切りやつたらしいの。それで出来たから保栄茂タルチーが薪全部貰つ

たそうです。

字東里 上良ヒデ（上里区）

類話

字東里 上良徳栄（上里区）



147 保栄茂タルチー（ト）

（保栄茂の最期）

弓の矢でよ、矢を向けてね、これがもう、昼寝しておる時に、弓の矢で命中してね、当たつて、そこで即死さしてゐるわけさ。

これ、その人のね、お骨はよ、その川のね、保栄茂タルチーの墓といつてね、牛、四つの足捕まえて浴びせたという川の側の森のところに、その人の骨はよ、埋めてあるつて。保栄茂タルチー森といつてね。

字伊原 玉城ハル

148 保栄茂タルチー（チ）

（保栄茂の祟り）

保栄茂タルチーが、これはもう、惨めに死んでゐるでしょう。病気でもないし。兄貴に殺されて死んでゐるからね。もう、急に死んでおるから、もうこれが成仏しなかつたわけでしょう。それで、部落で生まれたらね、「タルー」名付けたらよ、みんな長じなかつたつて。子どもは。このタルーがね、もう、霊が何とかしおつたでしょう。

この部落で生まれる子どもたちは、「タルー」名付けられなかったという。

字伊原 玉城ハル

類話

字東里 上良武定（上里区）

149 保栄茂ユーチー

(仕事は弁当・牛抱え・最期)

ユーチーは、タルチーより力が強いぐらいの人だったですね。で、次男だが、怠け者ですね。その、仕事はなかなかやらんでね。そしたら、うちから芋を持って行くんですよ。だから、この方言ではですね、やっぱ人間ちゅうのは食わんと働けないですよ。人間はね。だからその、これですね、この方言では、ムンヌシゴトヲスルちゅうことですね。ムンヌシゴトヲスルということはですね、標準語に直せば、御飯を食べて、食べれるのが力があつて仕事ができるちゅうことだからね。

それを聞いて、そのユーチーという人は、芋はバイスケ(もっこ)にいっぱいずつ持つて行つてさ。『食事の仕事をする』ちゅうことを言うておるもんだからね。その芋をですね、そのバイスケに入れて、あれに入れて向こうに下げておいてさ。自分は寝てさ。仕事をやらんで。寝たらしいですね。もう全然、兄貴が言

うことも聞かない。

また、牛を持たしてですね、牛はもう洗うてこうして来たらですね、どつか捕まえてですね、脚を捕まえて、牛の。どぶにそれ突っ込んで。したから後はもうこれにやられるということですね。タルチーが。それが寝ているところをですね、弓ですね、いっぺん弓で放ちよつたらしいですね。

「珍しいね。昼寝している」つて。その弓の矢を取つて見たらですね、自分の兄貴のもですね。タルチーの。それで死んだらしいですね。ユーチーはね。

字米須 仲宗根善道

類話

字宇江城 神谷ハル
字小波蔵 奥間ヨシ
字福地 殿内三吉

この人はもう何もわからんよつて。

150 文徳マサー(イ)

(空手の修行)

この人は真面目で、喧嘩もやらないといった。だから、帰つて来てからよ、弟子はひとりもない。教えるといつて、もうみんな習いに行きよつたですよ。自分が強いと思つて。教えないで、あの山のところ、国吉坂くによしざかといひます。往復駆けさせよつて。歩かせよつて。また翌日になればまた向こう。簡単に教えない。「あんたらこれを知つても喧嘩をするもんじゃないよ。これ、自分を守るために空手を覚えなさい」。何回も空手を教える。向こうに、夜から向こうさわつて来いと。もうみんな呆れて。だから、弟子はひとりもない。

ほかの強い人がいるわけさ、喧嘩の好きな人が。仕掛けに来るですよ、この人のところに。来る時、唾を掛けられても喧嘩をしなかった。自分が強いから、喧嘩をしたら勝つから、向こうは死ぬからいって。だから、向こうの人は勝つた言つてからね。あんな話を、

類話

字糸満 上原亀広
字米須 仲宗根善道

字糸満 大城英次

151 文徳マサー（口）（空手の修行）

この人も年寄りになつてから、六十ぐらいになつてから、若い時は漁業だつたからね。漁業の時よ、みんな寝ておる時よ、必ず夜中一回は出て行つて、空手の練習を。やらなかつたらなまるから。だから、出て行くのがみんな一回もわからん。どんなに出て行くか。帰ってくるのはわかる。みんな並んで寝ておるところからよ、夜中から、人には見られないで、この人はね。普通の人はわざと見せているけど、人には見せない。だから、夜中出て行つて。空手やらんなまるからといって。だから、帰ってくるのはわかる。出て行くのはわからん。普通の人にはわからんと。

だから一回よ、海がしくてよ、沖出られない時よ、この人が一番弱いと。弱いと飯炊きさ。飯炊き連れてきて、空手の基本。この人が。若いのは何もわからんわけですよ。だから空手の基本で、型をするつて、しよつたですよ。型。あの強い人とこれと倒せるかといつ

て、絶対動かない。あれからはみんなでやっぱし、名人だなあと思つて。なにもわからん人でも、この人が空手のコツで強くする術を、筋肉もりもりと。だから、強い人でも倒されたつて。しけの時、みんなの目の前で。あの時から、この人を本当、名人だなあということ。

字糸満 大城英次

152 文徳マサー（ハ）（藁^{わら}縄^ない）

年いつてからさ、藁縄^{わらな}つておかれるさ。漁業さ、近くから、何百メートルといつて。だから縄う時よ、柔らかくしてくれといつて頼むと。そうせんとあんまり堅くて使えない。六十もあん時は過ぎておつた。だから何と上の方は、一メートル五十まっすぐ立ちよつたいうか、あるところにいつたら。だから今ものこつてると。

石よ石、あの人が、藁は先が堅いらしい。だから叩くわけよ。叩いてから縄うからや、その石を。だから若い青年がよ、

「このお爺は武士ではないから、これ捨てよう」と言つたけど、夜よ、これと寝とる時に担いで行つたけど、この人の家がある、前は畑だつた。遠いところに捨てよつたですよ。明くる日青年たちが、翌日行つたらもう元のままにあるつて。だからどんなに持つて来るかなと。担いで来たかなと。それ、今度強いからといつ

て、みんな試して。自分の時代になつてから。だから今もこれはある。

字糸満 大城英次

153 文徳マサー (二) (大力)

この人は武芸者ですね、中国で空手を習ってきたとかいう人で、この、ちょんまげを結っておったんですが、もう亡くなってしまつておる。体格のがつちりしたお爺さんだったかねえ。ちょんまげを結つて、顎髭をはやしとつたんですがね。見ても、本当に武人らしいような人だと。

この人がですね、中国から帰つて来て、昼寝しておる時に、お母さんが、

「食事ができておるから起きて食べんか」つて起こしに行つたのに、起こすつもりでやつただけど、その、庭に投げられておつたというんだね。自分は、投げた自分もわからなかつたくらいの早さだったという。それから、投げられたのが後でわかつて、

「私を起こす場合には、私にくつついては絶対起こすな。竹竿でも持つて来てね、私の上から通せばすぐ起きるから」ということで、それからは、起こす時には

ちよつとした竹棒を持つて来てね。すぐ飛び起きよつた。それくらい強かつたという話です。
おもしろいことにね、この人は、外から歩く時には、必ず昔はあいあい傘というかな、日傘みたような小さいのがね、細くつてこれくらいのがあつたかね。踊りなんかを使う小さい雨傘、そういうのを必ず持つておつた。

字糸満 金城安彦

類話

字糸満 田場天龍、上原皓吉

字糸満 上原亀三

字名城 新垣武登

154 文徳マサー (ホ)

(足型・天井蹴り)

中国で、あつちに空手を習つてきてね。空手の話があるよ。あの人はね、畳の上を歩いてね、足の足型を付けたという。それくらいの人でね。習つてね、文をね、習つて。すばらしいさ。みんな見せるわけさ。それしたら、

「お前たちがね、ちよつとやつたらね、ひとたまりもないからね」。これをね、みんなに見せてね、脅かすんです。歩いてね、足の、足型を描いたそうですね。昔はね、力キ試し(力比べ)というて、侍たちがね、力キ試しをしておる、空手の。やつたらしいよ。それでね、

「お前たちがね、一度やつたらね、ひとたまりもないからね、あっち行け」。そして、畳の上を歩いてね、立つて天井をけつ飛ばしてね。もう侍たちも大変だと。そういう話もある。中国で習つて来てね。

字北波平 大城正太郎

類話

字束里 玉城佐一郎(東辺名区)

155 文徳マサー（へ）（カ比べ）

文徳はですね、糸満の方だが、この人は非常に品行方正で、空手、武術はわかるけれども、喧嘩は絶対にやらない。この本部御殿もとぶうどうんの人は喧嘩好き。それで、この本部御殿がですね、文徳というこの人をわかつてです、ね、那覇から後について、白銀堂というところがありますね、糸満に。そこに来てから、文徳という人の肩の上に飛んで上ったらしいですよ。そして、この本部御殿サールメーという人が、

「君ね、私をね、投げたらね、君の顎が危ないよ」と。ここへ上つて言うたらしいですよ。文徳という人はです、ね、力持ちです。もうなんだか、足を捕まえてです、ね、これ、両方に引つ張つて、白銀堂の岩の上に置いたらしいです。それからもう、後は振り向かないでもう、すぐ逃げて行つたらしいですよ。

文徳という人は非常に品行方正で、立派な方だったそうです。

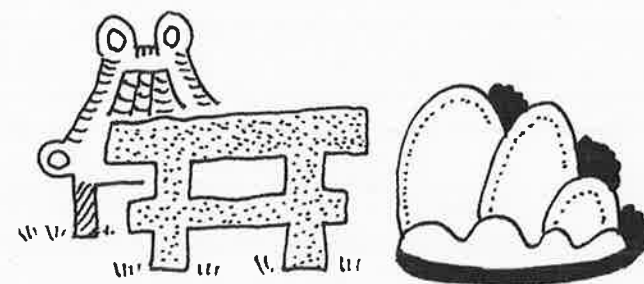
156 アガリ武士の力比べ（イ）

アガリーブシ（東江武士）といっていたらしいですよ。それはね、日本本土から来た人と力試し、試合をやつたらしいよ。井戸のほうでやつたらしいよ。それでね、本土から来る人はみんな剣を持って行つたらしいよ。

本土から来た人がね、名前が、佐太郎という人であつたらしい。その人が来てね、アガリーブシと試合に来たらしい。アガリーブシといつたら非常に小さいからね。小さい人だからね、子どもみたいに考えていたらしい。小さくなつて見えたり、大きくなつて見えたり。それで、井戸のところに来たらね、

「この井戸はね、ちよつと何だかね、こつちには剣はもつて入つては行けない」と言つたらしいよ。だから、みんな上のほうへ行つて中に入つたらね、武士がね、よく切れる剣を一つ選んで、出てくる物はみんな切り捨てて。そのため、日本の本土から来た武士たちは

字武富 長嶺和男



ね、負けてしまつてね、こつちのほう向いたら山があります。ヒータチ山（火立て山）というところに山が。それでもうはつきりしてたことはわかつておる。

字宇江城 神谷亀栄

類話

字宇江城 伊礼カメ



157 アガリ武士の力比べ（ロ）

支那から武士が攻めて来よったんで。殺しにさ。い
わば殺しに、戦いに来よったんで。それで、これ、ア
ガリー武士グワーとはわからないで、
「こつちにアガリー武士グワーという人がいるそう
すね」って聞いたって。その人さ、聞くのも、この人
だということもわからなかったそうです。子どもになっ
ているから。

「いるよ」と言つて。

「さて、どこにいるか」と言つて。

「この辺にいるかもしれんよ。行つてごらん」と言つ
たから、みんな井戸に行つたからさ、このアガリー武
士グワーが大きい石持つて行つてこの井戸をね、塞い
で、戦いできなかつたんです。このアガリー武士グワー
がみな埋めてしまつて。シナから来ている人はよ。

字真栄平

喜納サト

158 アガリ武士の力比べ（ハ）

宇江城部落にです、元はアガリーというんですよ、
あの部落は。そこに、体は小さいんだけど、拳骨の
強い人がいて。で、この人が拳骨の形もずっと前のあ
の山にです、山の岩に、拳骨の何があるとか何とか。
見てみないですけど。そういう話を聞きましたね。そ
れだけやっぱし拳骨は、空手の専門で、まさか、石に
こういう拳骨の型が入るとは、そんなに考えられませ
んよ。

それから、馬の爪、あれはこの、ずっとあの山には
城があるんですよ、昔の城がね。あつちに立派なきれ
いな馬がですね、白い馬が。それは有名な馬だつたら
しいですけど。その馬の爪跡も残っていると何かとか、
伝説の話がありますよ。真壁の。

これ、有名な馬だつたというんですね。馬の鞍の飾
り物に、金の飾り物と、踏み台、鐙ですね、やっぱし
それも金で貼られていたというんですね。

字新垣

宮里栄吉

159 サクマエバーの大力

類話

字宇江城 神谷ハル

昔の武士だつたという話は聞きましたよ。束里では、
サクマエバーという話は聞きましたよ。これも武士と
いうことしか聞いてないんですがね、力持ちの武士で
しょうね。その人が歩いたところに、この、絶壁のと
ころがありますよ。その小さい絶壁でして。嶽がある
ですよ。米須のこの後ろにね。
その人が、休んで腰を掛けたらですね、この岩が引ッ
込んでしまつとかいうような、そういうような武士の
話を聞きましたよ。

字米須 山城昭治



160 ガネクダクローの強力譚

東風平の我如古こちんだというところのガネクダクローですね。シナ人との戦いを申し込まれてですね。この人、まだ若いんですよ。ガネクという人は。

それで、波の上に鳥居がありますよ。那覇の。大きな鳥居があるんですよ、波の上に。今はこの鳥居はなくなっておりますな、戦争で。この鳥居に上るのが非常に早かったらしいですよ。ガネクという人は。で、シナ人とこの鳥居に上ってみようと。あの人、これ得意だから。ガネクという人は。上って、それで向こうで逆立ちをした。で、このシナ人を脅しとるわけですよ。

「私はこのぐらいできますよ」と。シナ人がもう、そんなことやらんで、相手が下りてくるのを待っておるわけさ、下で。一回で切られて亡くなったですよ。

字武富 長嶺和男

161 名城ヘンサの早足

名城なぐすくヘンサという人は、按司から考えたら二代か三代目ではなかったかと思われるんです。ヘンサグスク（字名城にあるグスク）、名城ヘンサといって、ここから、その時代に、こつから馬に乗って勝連まで行って、まあ、恋愛をした方ですからね。そして、夜通しまた女に会って、また夜通しに帰って来た形跡があるんですがね。

名城ヘンサといつて、やっぱり、あんまり歩いて速い人でヘンサと言われているらしいですよ。まあいえば、すべての行動が速かったという。

その子孫が今そこに残っているわけですがね。ヘンサというひとは按司ではなかったかと思うんです。

字名城 新垣武登

鳥獣草木譚

162 雀孝行（イ）

親に孝行しなさいという意味で、昔話みたいに伝え
たもんだと思うんですがね。雀と鷺とカワセミは三人
兄弟ですね、旅に出て金儲けに行つたというんです。

そして、親が危篤という知らせを受けてですね、そ
の、雀はそのままの着物で帰ってきたら、親の生きと
るの間に合つて。そしたら、このカワセミのほうは、
「せっかく儲けに来たんだから、きれいな着物を着て
行くんだ」と言つて、金儲けに励んで、危篤といつて
も行かんで、きれいな着物を着て帰ってくるまでには、
親も死んでしもて。

また、鷺のほうは、

「どうせもう危篤というんだから、行くまでには親は
死んでいるだろう」と言つて、沖縄では、葬式では白
い着物を着るといふ習慣がありますが、それで、白い
着物を着て来たら、まあ、親の遺言ですね、雀には、
お前は孝行したんだから米倉に行つて米を食べて生活

しなさい」と。そしてもう、鷺とカワセミには、
「お前らは親不孝やつたもんだから、田に行つてもの
を食べなさい」といって。雀のほうは米を食つて、カ
ワセミと鷺は田をあさつたりして、たいへん食べ物に
苦労したという、こういう話、よくやりおつた。

字糸満 稲嶺盛亀

類話

字糸満	玉城マシ
字武富	長嶺トミ
字北波平	長嶺光子
字阿波根	長嶺仙助、平田徳太
字潮平	百次仁助
字兼城	大城キヨ
字豊原	国吉ツヨ、国吉マツ
字与座	賀数カメ
字真栄里	比嘉スエ
字宇江城	神谷ハル
字新垣	真栄里朝昌

字伊敷	新垣カマド、新垣キク
字名城	伊敷義光
字小波蔵	奥間ヨシ
字糸洲	神里カマ
字束里	上良ヒデ
字山城	下田ミツ (上里区)
字大度	新屋タカ
字伊原	高嶺 正
	玉城ハル

163 雀孝行 (口)

雀と、もう一つ沖縄ではカーラカンジャーという、この二つの鳥は、雀を親孝行、カーラカンジャーは親不孝といわれた。その理由は親鳥が亡くなって、死んで、そしたら早速連絡して。そしたら雀は、すぐ早速着るものも着らずして、食うものも食わずして、すぐ死んだ親のもとに來たと。

だけど、カーラカンジャーというのは、親が死んだということを知りても、やっぱきれいに水浴びして、きれいな着物を着けて。そして結局、親が危篤状態ということを知らされたもんだから、雀はすぐ、取るものも取りあえずすぐ行つて、それ間に合つたと。だがしかし、カーラカンジャーという鳥はきれいに水浴びしたり、着飾って行つて、とうとう親の死目にも会えなかつた、ということ、雀は孝の鳥、カーラカンジャーは不孝の鳥と言われたと。

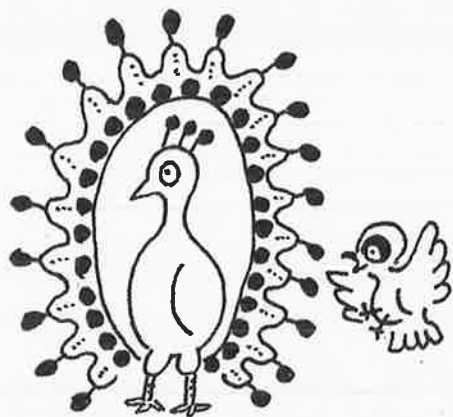
字真栄里 島袋仁栄

164 雀孝行 (ハ)

雀とね、カワジリというお話があつたでしょう。カワジリというものはですな、いわばここではね、「ウヤンコーネーンドウイ (親の孝がない鳥)」と。

これがね、母親の病氣ですな。病氣の時に、亡くなつた時に、雀はそのまま着る物を着て、すぐ、早く参つてきたと。このカワジリという鳥はあれ、見た目もきれいでしよう。見た目はきれいだがね、立派に化粧して参つたと。それから見てですな、それから見て、「君は河原端に行つて、ちよろちよろさ、魚を食いなさい。この親孝行のクラー (雀) はですな、この雀は、米倉の前で巢を作つてやりなさい」という意味ですな。これが昔の伝え話になつておるわけですよ。

だから、カワジリという鳥はですな、やつぱりきれいでしよう。ここではあの名前がですな、これ、「ウヤンコーネーンドウイグワー」といつておる。親不孝の者です。



字名城 伊敷義光

165 雨蛙不孝

雨蛙のほうは、全然元気の場合は、親にすることを全部反対をする話がありますでしょう。だから、もし、万が一の場合があったら、

「私は河原のすそに埋めてくれ」と言っただけから、そうだった場合は、親は、別に家に祀るだろうと。いつも反対しておるから、親に対して。そんなに平生は、親のおっしゃることを全然聞かなかったって。

だから、こんな場合があった場合は、息子は反対にするから、陸持って行つて私を祀るだろうと。それで、反対に河原に埋めたから、大水の時はいつも親の心配してガクガクして鳴くって。

字摩文仁 金城宏栄

類話

字真栄里 比嘉スエ、宮里カメ、玉城亀雄

に。

そうして、その鳥たちはどぶの酒を飲んで酔っ払って、ふらふらしていい機嫌になっておるのを、その親父が見て、

「珍しいもんだ。雀が木の股に溜っておる水を飲んで酔っ払って喜んでおるが、どういうものか」と言つて、それを恐る恐る初めてのことだから、その親父もちよつと指先でつけてなめてみた。そうして、自分もいい気分になってしまつて。アルコール分が発酵してしまっているもんだから。

「ああ、こりゃいいものがある」と。

それを真似してどぶ酒造り始めたのが酒の始まりとお話しよつたですね。

字与座 伊敷弘吉

類話

字真栄平 名嘉真朝昌

字糸洲 中村光一

166 雀酒屋

昔、ある豪農の家で、普通の人だったら御飯の飯は食べきれないが、まあ、財産家の家で、まあいえば、御飯食べる家があったんでしょう。そうして、御飯食べ余して、そしてね、ほかに残りの残飯を捨てた場合に、雀なんか、小鳥なんか来て食べますでしょう。

で、あんまり多いもんだから、その食べ残しは雀たちはくわえて。だいたい鳥というのは、地上に下りて何か物を食べて。また、人が来る場合はくわえておる餌は許さんで、また木に上がって行きます。飛んでくる。その調子で、御飯の食べ残しをくわえて木の上に飛んで行つて。そして、木には股があつて、古い木になるとその股に水が溜るでしょう。雨降ると。そうして、鳥もまた食べ残した物をこの水の中に、水飲みながら食べ残しを落として、それが積もり積もつて、その水と残飯と配合されて、そこで発酵して。それが何日かかったかわからんが発酵して酒になった。どぶ酒

167 十二支由来(イ)

鼠が利口なもんで、昔の神様がね、神様が動物たちを集めてね、番号を付けると言つてね、動物たちを呼んでね、順番にやつたらしい。

それが、鼠が利口なもんでね。牛はゆつくりゆつくり、まあ、のろのろして行くでしょう。ほいで、牛に、「あんたはね、のろいからね、ゆつくりゆつくり神様のほうに行つてよ」と言つて。その鼠が利口で、牛の頭の上に乗つてね。わからないから、鼠は軽いから。

そいで、牛は、「一番」と言つてね、行つたらしいね。牛はゆつくりゆつくり一番になるといつてね、やつたらしい。それで、鼠はね、頭の上に乗つてね、神様の前来てからね、すうつと跳んで行つてね、鼠が。それで鼠が一番になったらしい。

子・丑・寅というね、鼠が一番になつてね、そうやつて名付けられたらしいよ。そういう話をわれわれはお

伽話かわからんがね、そういうことを話してもらったわけさ。

それで、猫へ、

「お前は何でもないから行かんでもよい」と、鼠がね、猫のほうに話して。それで、猫はもう、

「そんなら、行かんでもいいだろう」と言つて、行かなかつたらしい。それでもう、猫は怒つてね、

「お前は嘘をついただろう。みんな集まつておるが、うちはお前が言うたからね、行かなかつたよ。お前はけしからん」と言つてね、猫が鼠を食つたらしいね。

字北波平 大城正太郎

類話

字糸満 野原由宗

字武富 大城トミ、長嶺京子

字真栄里 比嘉スエ、玉城亀雄

字糸洲 神里カマ

字束里 上良ヒデ 下田ミツ（上里区）

字束里 佐久真ミヨ（東辺名区）

字大度 高嶺正仁、高嶺 正、玉城盛栄
字摩文仁 金城宏栄

168 十二支由来（口）

神様がよ、

「十二支決めるからみんな集まりなさい、集まりなさい」と言うたから、鼠は知恵があるから、牛の頭に乗つてきて、してから。また、残りの者にはもう、日にはあれして、時間がなくてわからんがよ、その神様のところに行つたから。神様は、すぐ自分が頭の上に乗っているから、先になつたから、鼠が一番になつたつて。あれから、丑、寅と入つて。

猫が入つてないでしょう。猫には聞かせなかつたから。それから猫は怒つてから、鼠を食うことになつた。猫はまた、鼠食べるから人に可愛がられて、鼠はみんなが嫌いなもんだから、鼠を食べるから猫は家で養う。犬はまた、外からあれするから猫を羨ましがつてよ。犬は家へは入れなかつた。昔。それで、犬と猫は敵どうしになつたという話だつた。



字豊原 国吉マツ

169 猿の生き肝

竜宮城の王様が、ご病気になられてね。この亀さんを遣つて、陸に行つてお猿の肝を、生肝を取るように言われてからね。この亀が、陸に上がつて、お猿さんにね、お猿さんは木の実を食べていたからね、

「あんた、こんな木の実なんか食べてね、もつと、私といつしよに竜宮城というところに行つたらね、いろいろの果物がたくさんあつて、ご馳走がたつぷりあるからね、私といつしよに行かないか」言うたらね、

「ああ、そんなご馳走があるところなら行つてもいい」つて、亀の背中に乗せて、竜宮城の、もうちよつとで竜宮城に着くところにね、亀さんがね、もうここまで来たらこつちのもんだから、もう打ち明けていいだろうと、打ち明けて言つたらね、亀さんが、

「ああ、あんたは、実はね、お猿さん。竜宮城の王様がご病気になられて、お猿の生肝をね、食べたなら元気になるからね、お猿を連れてくるように言われたから、

それで私はあなたを連れて来たんだけど、もうここまで来たら、あんたは王様を助けて下さい」と言うたらね、

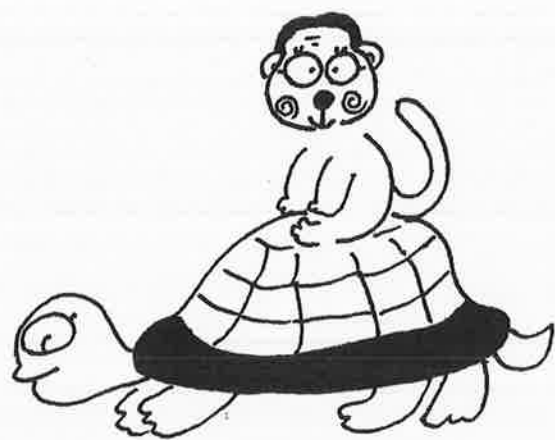
「あんたはね、これを早く、ここまで来ないうちに早く話したら私は生肝を持つて来るようにしたけど、こつち来てからね、私、生肝はね、持つてこないのに」。これは亀がだまされた話なんだよ。

それでね、

「じゃあの、仕方ないから、陸に行つてね、この私の生肝を取つてくるから、また陸まで私を連れて行きなさい」と言うたらね、

「ああ、そうですか。じゃあの、私はこの生肝のためにね、あんたをそこまで連れて来たのに、これを持つてこないと、私は王様にあんたをそのまま連れて行つてもね、理由はない。何もいる必要はないからね、じゃまた取つて来ようね」と、また陸に戻つた。

戻つたらね、このお猿さんはね、そのまんまもう逃げてしもうてよ。亀さんはもう何日何日待つても、このお猿さんはもう戻つて来ないさ。海には。それでこの亀さんがだまされた話だよ。



字伊敷

新垣ヨシ

170 犬の脚

お仏壇にね、お線香を焚く香炉ね、ありますよね。あれは沖縄の場合は三本ですよ。そしたらね、前はこの香炉はね、四本の脚であつたらしいんだな。

そしてね、香炉が前は四本脚についてちゃんとあるけれどもね、この、犬が三本脚なのを神様が見てね、気の毒だなあと。香炉にね、

「お前はもう霊前の前にただ座つたきりでね、歩きもしないから、君の四本の脚をね、一つ取つてね、犬の脚にくつつけて、四本脚にしようよ」と。そしてね、香炉の脚をね、犬の三本脚にくつつけて、犬を四本脚にしてしまったと。

それはだから、犬もね、この神様に対しての恩でね、「これは神様からいただいた脚だ」と言つてね、しつこをする時にはね、この脚を濡らしてはいけないといつて。しつこ。脚を上げてしつこするでしょう、犬はね。神様に対して、恩人という、恩を返す意味でね。

世間話



字糸満

野原由宗

171 キジムナーの胸押え（イ）

私が十五か六ごろの年頃でした。夜寝たらね、まあ、一睡ぐらいしてから、必ず夜中の二時ぐらい、いつもいつも三回ぐらい起きます。それで、女の子がもうおかつぱしてよ、紺みたいな着物を着てよ、来たな思ったらもう上から押されたか何か知らんけども、息苦しくなつて、うなるんですよ。ほんであの、家族がね、

「どうしたの」って言うんですよ。それまでにはもう、キジムナー（木の精）がおらんようになって、こうこ言うたら、

「それは、古い木の根っこから出てくるから」言うて、その根っこ、切つて捨てたら押されんようになってたけど。そんだけの話です。

類話

字武富	長嶺悦子、大城キヨ
字兼城	大城ウシ
字与座	伊敷弘吉
字名城	新垣亀栄
字新垣	山城栄正
字伊敷	殿内ハル
字糸洲	神里カマ
字南波平	伊集スエ、山城カナ
字東里	下田ミツ（上里区）
字福地	上良正光 渡口 広
字摩文仁	平田金徳

172 キジムナーの胸押え(口)

男には女がかかってくるし、女には男がかかってくるんですよ、このキジムナーというのは。なぜかというね、ちよつとうつらうつら寝ている時にすぐ、ふんふんふんふんして来るんですよ。見えるのは、ただ人間の影みたいなものは見えるがね、立派には見えな。い。ふんふんふんふんして来て、すぐ押えられるわけさ。また、すぐあつという間に消えてしまう。

だからこれは木の精であつて、その隣に大きなウスク木があつたんですよ。

字名城 新垣武登

昭和九年四月

173 キジムナー封じ

キジムナーに襲われた場合ね、お爺さん方がね、大きい釘を突つ込めと、昔は言うた。大きい穴、五寸釘がある。これを打ち込んだですよ。木にですね。それ以後はもう出なかった。それが一つの経験。木を切らないで、そのまま打ち込むとキジムナーが出てこなかった。

字新垣 山城栄正

174 兼城のカマロー

私なんか小さい時には、この兼城川、そこにはよくカマローが出るんだという。カマローというのは他府県でいう『かつば』じゃないんですかな。まあ、幽霊みたいなのが出てきて、子供たちを川の中へ引っ張り込むとか、いうふうな話はよく聞いて。また実際に過つて落ちたのか、引っ張られて入ったのか、それがわからないけど、まあ被害者がでておるわけなんです。

そういうのには、実際に見た人はいないでしょうけれども、カマローに引っ張られたんだということをよく言っておった。

字糸満 金城安彦

175 遺念火と相撲

火事に焼かれた方が、部落の外れに葬られて、その何が成仏しないで、火になってですね、ずっと前のほうに現われて。こちらの昔の話ですよ、これは。

その、夜遊びに出る若い連中、田舎あたりは夜遊びに出るんですよ、若い連中は。その灯り火ですがね、人間に現われて、相撲を取ったりしていたらしいですよ。これをマージャーといっていますね。遺念火ですね。遺念火に現われて、その火がものを言うていたらしい。人間に現われて。青年たちといつしよに相撲を取っていたらしいですよ。もう、夜遊びする青年たちといつしよに遊んで。

夜明けになって、鳥が歌ったらね、「ああ、もう鳥が歌うから、もう帰ろう」なんて帰りましたらしいですよ。

字新垣 宮里栄吉

176 煙草は吸うもの

煙草ができた話はないがね、吹く話はね、煙草は吹いてもね、貧乏にならないって。なんで貧乏にならないかというと、お金をね、煙草代は、吸わない人が煙草代を大きい瓶に入れてね、煙草代として、煙草吹かないからといってね、このお金を瓶に入れて、貯金したらね、貯金してから、後になってね、もうたくさんたまったでしょうと、手を入れたらね、蛇が出たて。それからもう、煙草は吸うのがいいと思ってみんな吸うことになっている話があった。

字豊原 国吉マツ

177 マーザーデーに出会った話

福地の大きい池がありますよ。それ、そのマーザーデーを見た時に、マーザーデーといって、これを人がちよつといたずらしたらしいですよ。それマーザーデーといって、手をくつつけおったんです、その人に。したらその人は、福地の大きい池がありますが、この池のほうに飛び込んで、やったら、池の回りを、この人を焼くといって回ってあるきよったそうです。その人が池に潜って、夜が明けたらいなくなつたから出たらしいです。

字南波平 山城善助

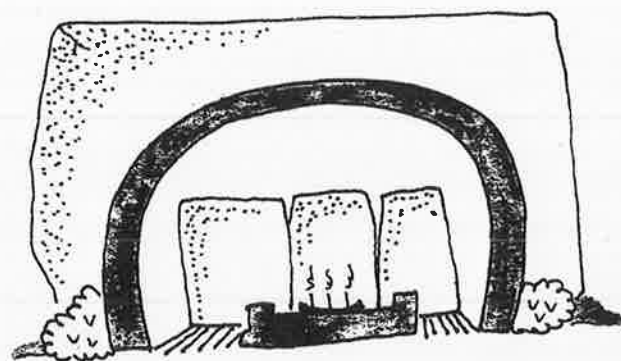
類話

字新垣 宜野座仁一郎

178 ヨウドレの由来

死ぬ時にはみんな、人はあちこち捨ておつたと。そうするのをこの人はね、自分でお墓を作つて、こんなに片付けてというお墓さ、このお墓は。そうしたから、こつちの、今お墓作つたりなんかする時に、あつちのほう拌みに行く。首里のあつち、浦添ですわね。立派なお墓よ。

字豊原 金城力マド



対訳資料

179 人の始まり

はじまいやよー、食物のーよー、御天から落さーによー、あんさーに、与てーるばーよー。

あんさーに、後からー欲ぬ出じやーによー、あーくれーなー一回に食むわんでいやーに、隠じみたるゆい
ない、

「あー、くつたーなまねー、自分さーに口えー持ちう
すさやー」んでい言やーに、うにーから、天からー落
ていてー来んなたくとう。

「トートーメーサイ、トートーメー、大餅やていん餅
ぐわーやていん、うたびみそーり、トートーメー」ん
でい歌うたやーに。

うりからー、あんせーならんでいやーに、今度種作
たいぬーさい、はじめてい自分さーに稲作てい、子作
いし、うつたー二人から夫婦からはじまたんでい。

最初はね、食べ物はね、天から落とされてね、そし
て、食べ物は与えられたそうだよ。

それから、後になって欲が出てきて、ああこれはも
う一度に食べようと思つて、しまつておくことにした
ので、

「ああ、この人たちはもう、自分で食いぶちは持てる
んだ」と言つて、それから、天から落ちて来なくな
つたので、

「お月さま、お月さま、大きな餅でも、小さな餅でも、
与えて下さい、お月さま」と歌を歌つたそうだよ。

それから、これではいけないと、こんどは稲を作つ
たりなんかして、はじめて自分で稲を作つて、子どもを
作つたりして、その二人から夫婦は始まつたそうだよ。

うぬ二人ぬ兄妹さーに、ウミナイ、ウミキーないる
ばーてー。

ウマチーぬウブンち、ウブンよー、マカイニちんか
い、かんし重にいてい、うさぎーんよー、くんなげーや
よー、今、少なーやていんニち重にいてい。

地と天とーまたよー、夫婦やくとうよー、御天か
らやー雨降んそーりわる作物実きーせーやー、地と天とー
夫婦、一人欠きーねー、合さらんねー、夫婦組ならんねー、
子生はらんせーやー、あんすくとう、かねー二んちやるばー。

字与座 城間ウシ

その二人の姉弟で、姉と弟であるのだがね。

お祭りのウブンって、ご飯はおわん二つに、こうして
重ねて、お供えしているが、これまではね、今は、
少しでも二つ重ねているよ。

地と天とはまた、夫婦だからね、お天道さまから、
雨が降って、作物は実るので、地と天とは夫婦で、一
人でも欠けると、合わされなければ、夫婦一緒になら
なければ、子どもは生まれられないでしょう。だから、要
は二人という。

180 稲の始まり

御殿でい言る、村ぬ家ぬ大んかい、うまぬ田ぬ、あ
てい、うぬ田たーんかい水浴みじあびすんでいやーに、
くぬ鳥ぬ稲種持つち来やーに、沖縄ぬ稲や、ひるぎた
んでいいる話聞ちゃん。

また、久高んかいぬくとうや、くまからーあまー東
方、知念玉城や、田まんどーくとう、あまんじまた、
稲種や、ひるがたんでいいる話聞ちゃん。

受水 走水ぬ、田んぼぐわーやよー、坪数やありや
しが、う米や毎年満作んでいぬ話聞ちゃんいびーん。

字伊敷 新垣力マド

御殿という、村の家の元家に、その田んぼが、あつ
て、その田んぼに水浴びしようと、鳥が稲の種を持っ
て来たので、沖縄の稲は、広がったという話を聞いて
います。

また、久高島のことは、ここからは向こうは東方に
あり、知念玉城は、田圃が多いから、向こうに行つて、
稲の種は、広がったと言う話を聞いています。

受水 走水の、田圃はね、坪数は少ないが、お米は毎
年豊作だと言う話を聞いています。

181 犬の見つけた井戸

あぬ、おとぎ話^{ばなし}を聞^きちやしがや、くまー大山^{うやま}やたんでい、大昔^{おふんかし}えー。

何百代^{なんひやくでー}ぬ人やみせーていん、人間^{にんじん}からる、遺骨^{いこつ}んないめんせーくとう、前^めん私達^{わったー}ん、瓶^{かみご}買^かてい来^き、入^いつてい、ちやー拌^{うが}どうんよー。

前^めや安里^{あさと}、後^{くし}や山城^{やまくすく}やくとう、二所^{たとうくる}さーに、念^{にん}じ上^あぎらは、いっぺー体^{からだ}くいんそーち、思^うみるぐとう、叶^{かな}わらちくいみそーりんち、う茶湯^{ちゃと}んうさぎてい、また七月^{しちぐわち}ん正月^{そくをち}ん、いんぐとう御祀^{うまつ}りすさ。

あんすくとう、カタイ井戸^がんでい言^いいせー、古島^{ふるしま}んーでいち、仲間^{なかんべー}拌見^{いり}腹^{ばう}ぬ西^{いり}むていーやたんでい、くぬ大^う里^{さと}おー、屋敷^{やしき}えー、仲間^{なかま}腹^{ばう}ぬ西^{いり}、あまんけよー、古島^{ふるしま}でいち拌^{うが}るさ。

くまー上^{ういー}門^{じょー}ぬ按司^{あじゆー}世^{やしき}ぬ屋敷^{やしき}やたんでいんどー、う

まーまたヌン殿内^{どうんち}ぬ、ヌルぬ屋敷^{やしき}やたんでいんどー、うん屋敷^{やしき}ん、なま石^{いし}ぐわーん、くつぴなー石^{いし}ぐわーん有^あさ。

うぬ犬^{いん}ぬよー、犬^{いん}ぬ、くぬ大山^{うやま}ぬ中^{なか}から浴^あみてい、ちやー浴^あみてい来^きゆうたんでいよー。くれーさがち見^みでいわるやるんち、犬^{いん}追^うてい、行^{いん}じやくとう、大井戸^{うふが}ぬ南^{みな}ぬチ^ちョンチ^ちョン井戸^がぐわーぬ、ティチ井戸^がんでい言^いいしが、うぬ井戸^が、くぬ犬^{いん}ぬさがちやんでい。

あんさくとう、くぬ井戸^かとう、金^{ちん}ぬ屏風^{のぶ}とう代^けたんていぬ話^ちやさ、うつさ聞^きちよーさ。

あの、おとぎ話を聞^きいたが、ここは大山^{うやま}だったそうです、大昔^{おふんかし}は。

何百代^{なんひやく}も前^めの人^{ひと}でも、人間^{にんじん}から、遺骨^{いこつ}にもなるので、前^めの家^{いへ}も我^{われ}が家^{いへ}も、壺^かを買^かつて来^きて、入^いれて、いつもその遺骨^{いこつ}を拌^{うが}んでいますよ。

前は安里^{あさと}、後^{くし}ろは山城^{やまくすく}だから、二カ所^{たとうくる}で、拌^{うが}んでいるが、体^{からだ}を丈夫^{ちやうぶ}にして下^{くだ}さつて、思^ううことを、叶^{かな}えてくださいと、お茶湯^{ちゃと}も供^くえて、それに七月^{しちがつ}のお盆^{ぼん}にもお正月^{しんがつ}にも、同じ^{おな}じように拌^{うが}んでいますよ。

だから、カタイ井戸^がというのは、古島^{ふるしま}といつて、仲間^{なかんべー}拌見^{いり}腹^{ばう}から西^{いり}の方^{はう}だったそう、ここ大里^{おほさと}は、屋敷^{やしき}は、仲間^{なかま}拌見^{いり}腹^{ばう}の西^{いり}、むこうを、古島^{ふるしま}といつて拌^{うが}んでいますよ。

ここは上^{ういー}門^{じょー}の按司^{あじ}時代の屋敷^{やしき}だったそうだよ。

そこはまたノロ殿内^{どうんち}の、ノロ屋敷^{やしき}だったそう、その屋敷^{やしき}も、まだ石^{いし}が、これくらいの石^{いし}が有^あるよ。

その犬^{いん}がね、犬^{いん}が、この大山^{うやま}の中で水浴^{みづよく}びして、いつも水浴^{みづよく}びして来^きよつたそうだよ。これは水^{みづ}を探^{たづ}ねてみよう、犬^{いん}を追^うつて、行^{いん}つてみると、大きな井戸^{いん}の南^{みな}にあるチ^ちョンチ^ちョン井戸^がが、ティチ井戸^がと言^いつているが、その井戸^がは、この犬^{いん}の見^みつけた井戸^がだそう、そうして、この井戸^がと、金の屏風^{きん}とを取り替^かえたという話^わがあるよ、それだけは聞^きいているよ。

182 与座の名の由来

今ぬ話^{なまはなし}やんてー、上座^{ういざ}ノ殿^{とんとく}所^{ところ}にん、七家庭^{ななぢやう}、八家庭^{やちぢやう}村^{むら}ぐわーなやーに、また、アクんでいる所^{ところ}にんアクガーぐわーんでい有^あんよー、井戸^{かど}ぬ、うまぬ近^{ちん}辺^{びん}にまた、十家庭^{じゅうぢやう}ぶかー。

また井戸^{かど}尻^{じり}にんなー、むる少^{いふ}ぐわーなー、少^{いふ}ぐわーなー、ふいとうかたまりなー、人^ちぬ住^しまとうたんでいるばー。

あんしが、うつさがむる一^{ちゅう}所^{ところ}んかい寄^ゆてい来^かに、あさーい、寄^ゆい座^ざ、寄^ゆたる座^ざんでいやーに、与座^{ゆざ}んでい言^いんでいさ。

字与座 城間ウシ

今の話だよ、上座ノ殿の所にも、七世帯か、八世帯の小さな村があつて、また、アクという所にもアクガーグワーといつて有るよ、井戸が、その近辺にもまた、十世帯とか有ったそうだよ。

それに川尻にも、少しずつ、少しずつ、ひとかたまりずつ、人が住んで居たそうだよ。

それで、それらがぜんぶ一所に寄つて来て、それで、寄い座、寄つて来たと言つて、与座と言うんだそうだよ。

183 慶留バーリーの祭り

くまなかいやー、高嶺^{たかんみ}井戸^がーんちよー、世^よぬ始^{はじ}まいや、くまなかい井戸^かぬ有^あたんていよー。

うまから流^{なが}りてい行^いちゆる水^{みづ}えー、あぬ池^{くわい}んじ、貯^{たく}わいたんでい。

あさーに、ハリーー慶留^{ぎる}バーリーさーに、うまんでい慶留^{ぎる}バーリーやさーによー、糸満^{いちまん}人^{ちゆう}が拝^うがみーが来^{ちゆう}たしがよー。

慶留^{ぎる}バーリーやよ、海^{うみ}をうてい死^けちえーる人^{ちゆうん}達^{ちやう}よー、うつたーが物^{もの}欲^ぶさすくとう、うぬ祭^{まつれ}、うつたーんかいグンポー投^なぎてい与^くるだーすなやーい、うぬ祀^{まつり}りるやらはじれー。

字与座 賀数カメ

ここに、高嶺井戸といつてね、世の始まりには、ここに井戸があつたそうだよ。そこから流れて行く水は、あの池に行つて、そこでたくわえられたそうだよ。

そして、ハリーー慶留^{ぎる}バーリーをして、そこで慶留^{ぎる}バーリーをしてね、糸満の人が拝みに来ていたがね。

慶留^{ぎる}バーリーはね、海で死んだ人たちがね、その人たちが食べ物を欲しがるから、その祭りは、その人たちにゴボウを投げてあげるような、その祭りであるんだよ。

184 米須按司の敵討ち

首里ぬよー、何御殿でいがいんでいがらやー、長男
とう次男ぬ生まりやーにや、長男えーなー、成長な
くとう、ばーちりむんなやーに、次男が秀りていや。
くぬ長男がまた、美らさる女よー、皆自分ぬ勝手に
せー、侍んでいるうりさーに。

さくとうなー、親ぬ、かんたるむん追い出じゃしわ
るやるんち、次男ぬかい、うぬ御殿殿内えー継がさ
に。

うれーなー首里からー逃んぎてい来にやー、あまは
いくまはい、かんし渡てい来に、南山ぬかい来やー、
南山うてい、南山ぬ按司ぬ、馬ぬ草刈やーはじめてい
から、しんでーしんでー、うまをうてい信用さつてい
使かーつてい位あがたくとうや、南山ぬ妃、いつペー
美人やみせーたんでい。

うりが、米須按司ぬ娘子やんせーたんでい、南山ぬ
妃、あさーい、うぬ、やまちりぼーちり者のー、名ん
よー、やまししなやーに、うりんかいあかしんでい
る言いたんでいるばー、やまししんでいや言らん、か
んねーるあかしんでいち、ぬき者やたんでい。

あんさーい、今度また、南山ぬ妃んかい、野心いだ
ちやーにや、なー美さるあくとう、南山王んかい船遊
びさすてい、浜んかいさすてい行ちゅーい、南山王や
いつペー可愛する犬ぬをうたんでい。

犬しーてい、南山王しーてい、また、うぬあかし
しーてい、浜遊びしーがんち行じ、あまんじ、殺さー
に、砂ぬ中んかい埋みていよー、あかししが南山王殺
ち、妃とういんでいち、あんさーい、私がたたかい
でいすが、ぬーくいーしよー、むる嘘むにーだんだ
んすんちさくとう、妃、察しやーに、くれーくりがる
謀反するんでいちよー、しんでーしんでー妃んかい、
たくみに言寄ていんじやくとう、

首里のね、何とかという御殿かにだそうだが、長男
と次男とが生まれていて、長男はもう、おおきくな
と、暴れ坊になつて、次男が秀れていたそうだ。

その長男はまた、きれいな女性をね、みんな自分の
勝手にして、侍という権力で。

それでもう、親が、こいつはもう家から追い出さな
ければと追い出し、次男に、その御殿殿内は継がせて。

その長男の暴れ坊は首里から逃げて来て、あっち行
きこつち行きして、渡り歩いて来て、南山に来てね、
そして南山で、南山の按司の、馬の草刈をはじめて
それから、そしてしだいしだいに、そこで信用されて
使われて位もあがつたので、また南山按司のお妃は、
たいそう美しい方だったそうだよ。

その方が、米須按司の娘だったそうだよ、南山按司の
お妃は、それで、その暴れ坊のやくざ者は、名前も、山の
猪のようだと、その暴れ坊にはアカチシと言うんだそ
うだ、山の猪ヤマシシのようだが、ヤマシシとは言わ
ず、こんなアカチシと言って、のけ者だったそうだよ。

それでもう、今度はまだ、南山按司のお妃に野心を
いだいて、もう美しい方だから、南山王を船遊びにさ
そつてさ、浜にさそつて来て、ところが南山王にはとつ
ても可愛いがつている犬が居たそうだよ。

犬も連れて、南山王と一緒に、また、そのアカチシ
も一緒に、浜遊びしにと行って、むこうで、南山王を
殺して、砂の中に埋めてね、このアカチシが南山王を
殺して、お妃さまを取ろうと、そして、私が戦おうと
したが、とかなんとかと言って、まったく嘘のありつ
たけつこうとしたので、お妃はお察しになつて、こい
つは謀反をたくらんでいると、するとこのアカチシは
しだいしだいに、ことば巧みに言い寄つて来たので、

うぬ妃また、

「なま按司加那志ん死しんそーちやー、間（ま）ん日（ひ）ん経（た）らん、いのーやぬこーぶぬんうちなち、んちゆうぬこーぶぬんうちなちから、御側（うすは）なかいなくとう」んでいち、落着（うてい）きやーに。

あんさーに、妃（うな）また、米須按司（くみしあじ）ぬ所（み）んかい、父親（いさかんうや）ぬみーんかい行（い）じよー、

「なーくれーちやーしさらー、敵打（かたきう）ちゆがやー、私（わん）にんかい武勇（ぶゆう）ならーちくいみそーり、くり夫ぬ敵討（かたきう）たんねーならんくとう」んでい言（い）ちさくとう。

米須按司（くみしあじ）えー、

「いやーよーなー、女（い）ぬやー、うふいなぬ男（い）んかい、いやーや敵討（かたきう）ちゆんでいさんてーまんやー、いやーがちやーんならんさ、いやー、相手（あ）んかい殺（ころ）はりーしるおちやる、あんすしゆか、頭（ち）ちかれー。うりが妻（う）なりんでい言（い）ねーやー、山（や）ぬ中（ち）んじやー、私（わん）にだてーん家（や）ん造（つく）ていとうらち、海（うみ）ん見（み）るぐとうし、だてーんぬ

城（しろ）造（つく）ていとうらち、あんし二人（ふたり）住（す）めーくとう」んでい言（い）やーによ、父（ふ）親（しん）ぬ教（な）らーしんそーちやー。

とーまた、うぬ城（しろ）造（つく）いる、木（き）選（い）びーがんでいやーによー、くぬ国吉（くにきち）から与座（よざ）んかいかんし、んぐとうーしやー、かーま高良（たから）んにーんかいよー、むる連（ち）がつてい山（や）やたんていよー、大（う）山（や）やたんてい、ガジ原（はら）までい山（や）やたんてい。

あんさーに、あまんじん、くまんじん、うぬアカチシえー

「とー、くぬ木（き）やないみ、尺（しゃく）測（はか）ていんでいんでい」言（い）ち、くんぐとうーし、だちやーに、あんさーにガジ原（はら）んじえーや、

「とーくぬ木（き）やれー、あたいがやー、とーまじ、かんしいちえーみ、測（はか）ていんるわ、私（わん）ねー丈（た）測（はか）らるー」んち、丈（た）測（はか）いねーびーしよー、釘（くぎ）えー隠（かく）くわち持（も）つちゆくとう。しぐくまんかいよー、釘（くぎ）打ち（うち）くでい、

「いやー夫（う）ぬ敵（かたき）いやーひやー、ガジバルフーフーなてい、

そのお妃は、

「まだ按司加那志もお亡くなりになつて、日も経つていない、あたらしい法事（ほふし）こともすまして、三年（さんねん）の法事（ほふし）もすませてから、お側にまいますので」と言（い）つて、アカチシを落（お）ち着（き）けて。

それで、お妃は、米須按司（くみしあじ）の所（しよ）に、父親（いさかんうや）のもとに行（い）きになつて、

「もうこいつは、どんなふうになれば仇討（あ）ちできますのかね、私（わん）に武勇（ぶゆう）を教（な）えてください、こいつの夫（う）の敵（かたき）を討（う）たねばなりませんので」とおつしやつたと。

米須按司（くみしあじ）は、

「おまえは、女の身（み）で、あれだけの男（お）に、おまえが仇討（あ）ちをしようとしたところで、おまえがどうにもならないよ、おまえが、相手（あ）んに殺（ころ）されてしまうのがおちだよ、そうするより、頭（ち）を使（つか）いなさい。そいつが妻（う）になりなさいと言（い）つたら、山（や）の中（ち）に行（い）つて、私（わん）に大きな家（や）を造（つく）ってください、海（うみ）も見（み）えるようにして、大きな

城（しろ）を造（つく）ってください、そして二人（ふたり）で住（す）ましようと言（い）いなさい」と、父親（いさかんうや）が教（な）えてくださったそうだよ。

それで、そのお城（しろ）を造（つく）る、樹（き）を選（い）びにといつてね、この国吉（くにきち）から与座（よざ）にかけてこうして、ずっと、高良（たから）のところまでね、ずっと連（ち）なつて山（や）だったそうだよ、大きな山（や）で、ガジ原（はら）まで、山（や）だったそうだよ。

それで、山（や）に行（い）つても、どこ行（い）つても、そのアカチシは、

「どうだ、この木（き）は材木（そくぎ）にできるか、尺（しゃく）をはかつて見（み）よう」と言（い）つて、こんなふうな、抱（か）いて、それでガジ原（はら）では、

「どうだ、この樹（き）ならば、できるかな、さあまず、こうして合（あ）うかどうか、測（はか）りなさい、私は丈（た）を測（はか）るから」と言（い）つて、丈（た）を測（はか）るまねをして、釘（くぎ）は隠（かく）してもつているから、すぐここに打（うち）ち込んで。

「おまえは夫（う）の敵（かたき）のおまえは、ガジバルフーフーになつてい

うぬ木とう一緒立ち枯りしよー」んでい言やーに、あんさーに、うぬガジバルムークーなたんでい。

あんさーに、私達祖父母達が青年時代よー、あまにかい田ぬ有しが、ありかーまんぐらをうてい田打ちーねー、なー三時ぐるから後ないねーよー、自分一人る田打ちゆしが、側をうていんポトンポトンしよー、田打ちちよー、打ちゆしが居んでいるばーよー。

あんさーに、またなー、芋とう汁とう持つち、昼食やせーや、うぬ残やなー午後食るむんでいち、残しーねーよ、むる饅てい食まらんよー、うりが、精やうち食てい。

あんさーにまた、馬追いうていよー、ガジバルフーぬ話しーねーよー、御香火ぐわーぬぐとうし、光やーにスルスルし来たんでいよー、あんさーに、うりひやーなー、ガジバルフー来んどーひやーんでいやーによー、皆逃ぎていよー。

馬ん家ぬ天井んじ寝じゆさやー、しぐ馬鼻ふちぷー

ないしよー、うままでい追らつてい、翌日起きてい見ねーよ、馬ぬほーよー、むる御香火やーちゆー焼かつとーたんでい。

はなしんならんたんでい言んどー、じゆんに、スールない来たんでい、ガジバルフーくびくえーちびくえーしーによー、恐むんやたんでい。

あんさーにまたやー、馬ぬ顔にんやー、御香火やーちゆう焼かつていよー。

字与座 城間ウシ

て、この樹とともに立ち枯れなさいよ」と言つて、それで、そのガジバル婿になつたそうだよ。

それで、うちの祖父母や父母たちの青年時代、むこくに田んぼが有るが、あのあたりで田んぼを打つ時には、もう三時頃から後になると、自分一人で田んぼを打っているのだが、そばでもポトンポトンと、田んぼを打つ人がいるということだよ。

それで、またもう、芋とおつゆをもつて、朝食だから、その残りはもうお昼ご飯に食べるのでと、残しておくと、全部すえて食べられなくてね、そいつが、食べ物のは精は食べてしまつて。

それでまた、馬場でね、ガジバルフーの話をするとな、線香の火のように、火が光つてスルスルスルと出て来たそうだよ、それで、またもう、ガジバルフーが出て来たよと言つて、みんな逃げて行つたそうだよ。

馬小屋の天井に隠れて泊まるとね、すぐ馬は鼻をプー

プー鳴らして、そこまでも追われて、翌日起きて見ると、馬のほとが、ぜんぶ線香の火で、お灸がすえられていたそうだよ。

はなしも、できなかったといわれているよ、ほんとに、スルスルと出て来たそうだよ、ガジバルフーはほんとうに、恐ろしいものだつたそうだよ。

それにまた、馬の顔にもね、線香の火でお灸をして焼いてあつたそうだよ。

アカマタ智入（浜下り由来）

娘子ぬ、ちゃー部屋なかい寝とーいねー、節ぬみー
みーぐわーからが入らわかんしが、開きーしんわか
らんしが、入っち来しんわからん。

あんさるむん、出じてい来しんわからん、入っち来
しんわからんしが、くぬ娘子が、妊娠ぎとーるばー。

あんし、見ちんでいわるやるんち、節ぬ穴ぐわー。

とうじてーたんでい、んーとーくれー、アカマターる
やるんち、うにねー氣に付てーんてーやー。

あんすくとう、うまぬ、物知りパーパーんかい、

「入っち来しん、出じてい去いしん、わからんしが、
私ねー、妊娠ぎとーんでー」んちやくとうよー。

「とー、今日、夜、来るはじやくとう、針ぬ目んかい
糸まちゆてい、うりが頭んかい、ちちぬきよー、ちゅ
らすがいし来る男んかい、糸追うらちさとりよー」

んちやくとう、行じやくとうよー、穴やたんでい。

あんすくとう、くぬ糸追てい行じやくとう穴なてい、
石ぬみーんていパタパターしアカマターやたんでい。

三月三日なたくとう浜下りやーに、浜砂ふみーねー
出てい去いんどーんでい、あんしちやくとう、さーら
さーらーし、出じてい去いたんでい。

あんすくとう、三月三日ねー、浜行じ、潮蹴りよー
んでい、潮蹴りんでい、あんさーに、三月三日や節日
なたんでいよー。

字小波蔵 伊敷力ミ

娘が、いつも部屋に寝ている時に、節穴から入って
来るのか、どこから入って来るのかわからないが、入っ
て来るのもわからなかったそう。

そうだが、出て来るのも、入って来るのもわからな
いが、この娘が、妊娠したそう。

それで、確かめてみようと、節穴をとじたそう。
すると、ああこれは、アカマターにちがいないと、そ
のとき気付いたんだそう。

それでね、その、物知りお婆さんに、

「入って来るのも、出て行くのも、わからないが、私
は妊娠しています」と言う。

「では、今日も、夜になると、来るはずだから、針の
目に糸を巻いておいて、その人の頭に、突き刺しなさ
いよ、きれいにしてくる男に、そしてその糸を追って

確かめなさい」と言うので、追って行くと、穴だった
そう。

そうして、その糸を追って行くと、穴になていて、
その石の中でバタバタしているアカマターがいたそう
だ。

三月三日になったので、浜に下りて、砂をふむと、
アカマターの子が下りてきたそうだよ、そして、サラ
サラ、下りてきたそうだよ。

それで、三月三日には、浜に行つて、潮を蹴りなさ
いよ、潮を蹴りなさいと、それで、三月三日は節日
なつたそう。

186 難題婿（二つの馬に鞍一つ）

昔ぬ話やし、勝連按司ぬやー、娘子ぬ、婿かめゆんちやし、やしがあまなかいまた、物知りおばーがめんせーくとう、うぬ娘子ややー、馬二ちんかい鞍一ち掛けてい来しんかい、娘子くいゆんち、おばーさんが言んそーちえーんてー。

あんさくとう、くまぬ、武士えー、いつペー考げーてーるふーじ。

ある物知りから、あんしやらー、妊娠馬んかい鞍一ち乗していきーねー、二ちないくとう、あんししんでい言やーに、娘子貰てい来やんでいぬ話やんどー。

字小波藏 伊敷フヂ子

昔の話だが、勝連按司が、娘の婿を選ぼうとしていたが、だがむこうにはまた、物知りのお婆さんがいるので、この娘は、馬二つに鞍を一つ掛けて来る人に娘を上げようと、お婆さんがおっしゃったそうだよ。

すると、この、娘の婿になりたい侍は、とつても考えたそうだよ。

それである物知りから、そうなら、妊娠した馬に鞍を一つ乗せると、二つになるから、そうしなさいと言つて、そして娘を貰つて来たという話だよ。

187 猿長者（イ）

いつーペーんなー、おじーおばーが誠ぐわーたー二人、居たくとう、また欲たー二人居たくとう、ありやたんでい。

神様るやし、神るやんせーしが、うまんかい泊まらちやくとう、

「私ねーなー泊まるかたー無んくとう、雨だいやていん、まーんかいやていんしむくとう泊まらちくいり」んちやくとう、はじめー欲たーんかい行じやくとう、あまんでえ、

「ならん」んちやくとう、神るやんせーしが、「うんぐとうー汚者のー泊みらん」ちやくとう。

また、誠たー所かい行じやくとう、いつペーまじめぬおばーたーんかい行じやくとう、泊みたくとう、「なー、私たーなー貧乏るやし、なー貧乏しなー、

たいそうな、お爺さんお婆さんが正直者たち二人、居たそう、それにまた欲張りものたちが二人居た、そうだよ。

神様であるが神様であられるが、そこにお泊めしたので、

「私はもう、泊まるところがないので、軒下であつても、どこでもよいから泊めてくれ」とおっしゃったので、最初に欲張り者たちの家に行くと、むこうでは、

「できない」というと、神様だけど、「そんなきたない者は泊めない」と言うので。

次に、正直者の所に行くと、とつても正直なお婆さんたちの所に行くと、泊めてもらえたので、

「もう、うちは貧乏だけど、もう貧乏でもう、敷物も

敷ちゆる物ぬん無んしが、うまんじ、泊まていゆたさ
み」んちやくとう、

「んー、あんししむんどー」んちやくとう。

神るやんせーせーやー、泊みんそーらちやくとう、
年ぬ夜やたんてい、

火正月すんでいさくとう、「私たーなー、御馳走んぬー
んねーらん、火正月さやー」んち、なー、物乞やーる
やんち思てーるばーてー、神るやんせーしが、物乞す
がいるそーんせーくとう。

「いーあんししむさ、あんしいったーなー御馳走ん無
んなー、」んちやくとう、

「無ん」ち。

「あんせー私が、御馳走出じやち食まさやー」んちや
くとう。

「とーあんせーいたーや、若くないしとう、御馳走食
むしとう、どうりがまし」んちやくとう、

「若くないせーまし」んちゃんてい。

無いが、そんなところで、お泊まりになってもよいの
ですか」と言うとう、

「はい、それでいいよ」と、おっしやうて。

神さまであるから、お泊まりになられたので、大年
の夜だったので、

火正月をしようと、「私たちはもう、御馳走も何も無
いから、火正月をしよう」と、もう、乞食だと思つた
んだよ、神さまだが、乞食のかっこうをなさっている
ので。

「うんそれでよい、それで、あんたたちは御馳走も無
いのかね」とおっしやうと、

「無い」と。

「そんなら私が、御馳走を出してあげようね」と、おっ
しやうたそうだ。

「さあそれではあんたたちは、若くなるのと、御馳走
食べるのと、どっちがよいのかね」と問うと、

「若くなるのがよい」とおっしやうたそうだ。

「とーあんせーなー、大鍋んかい湯沸かせー。うりん
かい夫婦浴みり」んちやくとう、いっぺー誠ぐわーた
ーけー浴みたくとう、なー白髪生とーし無んない、
二人若くなたくとう、あんさーに鍋ぬ無んたくとう、
隣ぬ欲ばーばーたーから、借てい来えーくとう、うぬ
四枚鍋えー、あんしうり持つち行じやくとう、
「何んち、いったー、あんし若くなとうが」んちやく
とう。

「はーなー、ひちぬみじしらん人なー、泊みんそーら
ちやくとう、あんし湯風呂入ちやくとう、私たー若く
なとーんどー」ちやくとう。

「だーあんせー、うぬ人おー、なまーめんせーみ」ん
ちやくとう、

「なま出じてい去みせーたんどー、」んちやくとう、
欲深ぬおじーおばーが、

「だーまーんかい去いたが、私たーん呼びやーに、私
たーん若くなら」んちやくとう、かーまんかいるめん

「さあそれでは、大鍋にお湯を沸かしなさい。それで
夫婦とも浴びなさい」と言うので、とっても正直な者
たちはさつと浴びると、もう白髪の生えていたのもな
くなって、二人は若くなつたので、それで鍋が無かつ
たので、隣の欲張り爺さんたちから、借りていたので、
そのシンメー鍋を、返しにとそれでそれもつて行くと、
「何んで、おまえたちは、そんなに若くなつたのかね」
と問うので、

「あの、まったく見ず知らずの人を、泊まってもらう
と、するとお風呂に入ると、私たちは若くなつてしまつ
た」と言うとう。

「だあそれで、その人は、まだおいでになるのかね」
と言うとう、

「いま出て行きましたよ」と言うとう、欲深のお爺さん
お婆さんは、

「だあどこに行つたのかね、私たちも呼んできて、私
たちも若くしてもらおう」と言つて、ずっとむこうに

せーしが、うれー神様、呼び止みやーに、
「私たーん若くなちくいみそーり」んち。

「とー、あんせー、いったーん湯沸かせー」んちやく
とう、湯沸かちやくとう、湯沸かち浴みたくとう、猿
なとーたんでい、二人欲深、猿なとーたんでい。

あさくとう、欲深ぬ猿なたくとう、あんすくとう、
猿や欲んちよーん。さくとう、神様がる、人間ないし
る猿なちよーたんでいどー。

あんさくとう、また、みぐていめんそーちよーたん
でい。うぬおじーが、神様ぬ、めんそーちやくとう、
「毎日うまかい来、二人までいぴーぴーしなー、食
物どう食まちよーんでー」んちやくとう。

「とーあんやらー、うぬ黒石焼けー」んでい、黒石焼
ちやくとう、うりんかい座くとう、焼ちやくとう、尻
焼ち、赤尻なたんでい。

やくとう、猿や欲、誠や世万代んでい。

いるが、その神さまを、呼び止めて、
「私たちも、若くしてください」と。

「それでは、あんたたちも、お湯を沸かしなさい」と
言うので、お湯を沸かすと、お湯を沸かして浴びると、
猿になったそうだと、二人の欲深者は、猿になったそう
だよ。

それで、欲深が猿になったので、だから猿は、欲深
いと、だから、神さまが人間になるのを猿にしたとい
うことだよ。

それで、また、まわつて来たそうだよ。そのお爺さ
んが、神さまが、おいでになったので、

「毎日そこに来て、二人ともぴーぴーと鳴くので、食
べ物をあげているんですよ」と言うと、

「そんなら、その黒石を焼きなさい」と、黒石を焼い
てそれに座つたので、焼けたので、お尻を焼いて、赤
尻になったそうだよ。

だから、猿は欲張り、正直は世の万代までと言う。

188 猿長者（口）

いちばんのー金持屋んかい泊まらちとうらしんち来や
くとう、金持屋や、

「今日や年夜るやるむんぬ、他人泊まらするくとならん帰り」んち、帰さつてーるばーてー。

また隣や、貧乏者やたくとう、隣ぬ家かい行じやくとう、隣ぬ貧乏者のー、

「私たーやなー、食むる物ぬん無らん、年ぬ夜やなー火燃ち、年取らやーんちるやるむんぬ」ちやくとう、
「泊まらりーるうつぴし、しむさ」んち、うまぬ家んてい泊またくとう。

今度なー、神様るやくとう、魔法使いぬぐとうし、
御馳走ん出じやくち、食まちさくとう、翌日ぬ正月えーや、

「いったーが希望通い、大金持るないぶさるい、また

一番最初は金持の家に泊めてくれと言って、来たので、金持ちは、

「今日は、大年の夜だのに、他人を泊めることはできない、帰ってくれ」と言つて、帰されたそうだよ。

それで、隣は、貧乏だったので、隣の家に行くと、隣の貧乏人は、

「うちはもう、食べる物もなく、年の夜は火を焚いて、年取りをしようと話しているんだよ」というと、

「泊まれるだけでよいから」と、その家で泊まったそうだよ。

つぎにまた、神さまだから魔法使いのようにして、御馳走を出して、食べさせて、翌日のお正月には、

「あんたたちの希望どおり、金持ちになりたいのか、

若くるないぶさるい」んでいち、徳くいらやーんちやくとう。

「私たーや、銭のーいらんしが、若くならりーねー若くないせーまし」んでいち、おじいさんとうおばあさんが、あん言ちやくとう。

「あんせー大鍋んかい湯沸か」ち、うぬ神様ぬおじいさんが、浴みしたくとう、夫婦なーにーせー、みやらびなてい、若くなてーるばーてー。あんさーに、うつたーや、「隣ぬ金持家んかい行きよー」んちやくとう、隣ぬまた欲深ぬおじいさんぬんおばあさんぬん、
「ちやーし、若くならりーたが」んちやくとう、昨夜ぬおじいさんぬ話さくとうやー、

「あんしる若くなたんどー」でいちやくとう。

またうぬ金持者ぬ、今度後追うてい、
「あんし遠さーめんそーらんくとう」んでいやーに、走えーし、くぬ神様ぬおじーさん、自分ぬ家んかい引ちむどうち来。

あるいは若くなりたいのか」と言い、徳をあげようねと。

「うちは、お金は要らないが、若くなれるのなら若くなるのがいい」と、お爺さんとお婆さんは、言つたそうだ。

「それでは大きな鍋にお湯を沸かしなさい」と、その神さまのお爺さんが、湯を浴びせたので、夫婦は二十の青年と娘になって、若くなつたそうだ。それで、その人たちは、「隣の金持ちの家に行きなさいよ」と言うので、隣のその欲深のお爺さんやお婆さんも、「どんなにして、若くなれたのかね」と言うので、昨夜のお爺さんの話をする、

「それで若くなつたんですよ」と、言う。

その金持ちが、こんどは後を追つて、
「あまり遠くへは行つていないから」と言つて、走つて、その神さまのお爺さんを、自分の家に引き返して来て。

今度浴みたくとう、むる動物んかいなたんではいるばー。

あんさーに、神様やなーまた、うぬおじいさんおばさんやむる、動物なてい居らんくとう、

「うぬ家やいつたー住まりよー」んでいち、金持者ぬ家や、貧乏者ぬおじいさんおばあさんぬ住まいるくとうなていから、二三日待ち、

「変わったとーねーらに」んでいち、また、めんそーちやくとうやー、

「別に変わったとー無らんしが、一匹ぬ猿がやー、庭んかい入つちつ来、庭んじ私家返りし、私家返りし、うまうてい鳴ちゅんどー」んでいちやくとう。

「あんしやらー、黒石焼ちやー、石焼ち、しーねー、翌日うりんかい座きーねー、来んないくとう」んでいやーに、石焼ち待つちよーたくとう、うまんかい来、座つち、

「私家返りー」し叫びーしが、石焼かつてい、うぬまー

それでお湯を浴びると、みんな動物になったということだよ。

それで、神さまはまたもう、そのお爺さんやお婆さんたちは、動物になつてしまったので居ないから、

「その家は、あんたたち住みなさいよ」と、金持ちの家は、貧乏人のお爺さんお婆さんが住むことになつてから、二、三日経つて、

「変わったことはないか」と言つて、また、おいでになつたので、

「べつに変わったことはありませんが、一匹の猿が、庭に入つて来て、庭で私の家を返せ、私の家を返せと、そこで鳴きますよ」と言つと。

「そうなら、黒石を焼いて、石を焼いて置くと、すると、翌日それに座つて、来なくなるから」とおつしやつて、石焼いて待つていると、そこに猿が来て、座り、

「私の家を返せ」と叫ぶが、石が焼かれていて、そこ

まなー、赤尻なてい、逃げてい、去たんでい。

あんしる猿ぐわーや、赤尻なとうんでい言いんどーんでい話。うれーおじいさんから聞ちゃん。

に座つたので、そのままもう赤尻になつて、逃げて、行つたそうさ。

それで猿は、赤尻になつているんだよという話。それはお爺さんから聞いた。

字小波蔵 伊敷フデ子

うまぬお父^{とう}が、野^やうつちてー、うぬ童^{わらび}やあとうから
あつちやくとう、馬^{んま}乗^{ちやう}てい歩^あちよーる人^{ちやう}ぬ、

「私^{わん}が行^んじ来^{ちやう}くとう、いやー鍬^{くえ}、何^い鍬^{くえ}落^{くえ}とうちやんち
並^{なら}びとーきよー」んちやくとう、うぬ安里^{あんり}ぬ童^{わらび}んでい
しが、かちくんちやくとう。

なー親^{うや}や心^し配^わさーに、

「なーいやーや殿^{とのさま}様^が、うまかい鍬^{くえ}いくち打^{うち}くでー
んでいちなー、なー大^{だい}変^じなとーん」でいちやくとう、
「心^{しや}配^わしんそーらんき」んでい言^いちやんでいよー、童^{わらび}
るやんでいんどー、七^{なな}ち八^やちぬ。

んーなーやー、馬^{んま}乗^{ちやう}ている人^{ちやう}や帰^けてい来^きやくとう、
「いやーなー、鍬^{くえ}や、いく鍬^{くえ}落^{くえ}とうちやが」んちやく
とう、

「うんじゆが馬^{んま}ぬ、足^{ひさう}音^といくち落^うとうちめんそーちや

が」んちやんでい。

ここのお父^{おとう}さんが、畑^{はたけ}をうっている、その子^こが後^{あと}

を付^ついて歩^あいていると、馬^{うま}に乗^のつてかけている人^{ひと}が、

「私^{わが}が行^いつて来^きるまで、おまえは鍬^{くえ}を、幾^{いく}鍬^{くえ}打^{うち}つたと
打^{うち}つた土^{つち}を並^{なら}べておきなさいよ」と命^{いのち}じると、その安
里^{あんり}の童^{わらび}が、並^{なら}んでいる鍬^{くえ}跡^{あと}を掻^かき混^まぜたそうだ。

それで、親^{おや}は心^し配^わして、

「もうおまえは殿^{とのさま}様^が、そこに鍬^{くえ}をいくつ打^{うち}つたかと
いうのに、もう大^{だい}変^じなことだ」というと、

「心^{しや}配^わなさらないで下^{くだ}さい」と言^いつたそうだよ、子^こど
もがだそうだよ七^{なな}、八^や歳の。

それでもう、馬^{うま}に乗^のつた人^{ひと}は帰^{かえ}つて来^きて、

「おまえは、鍬^{くえ}を幾^{いく}鍬^{くえ}打^{うち}つたかね」と言^いうと、

「あなたさまの馬^{うま}の、足^{ひさう}音^とはいくつ落^おとしてお帰^{かえ}りに

なりましたか」と言^いつたそうだよ。

モーイ親方が学校行じようによー、アタビー取ていよ、人や皆学校かいはいしがよー、自分やアタビー取ていよーアタビー取たくとう、うぬアタビーがよー、ヌブシぬ玉よー、アタビーがむる前なちよー、ヌブシぬ玉。

うり、アタビーすぐたくとう、モーイーや、ヌブシぬ玉かみとーるアタビー、玉んなかんかうちきとーてい、アタビーがヌブシぬ玉前なさーに、そーし、ブシぬ玉取やーに、口んかい、くくでーるはじやし、うち呑でーるばーてー。

「いったーがーわからんさだー」んでいやーに、くくだしがうち呑でーるばーてー。アタビーがだちようしる、自分し食てい、玉かみとーせー。

あんさくとう、アタビーたーや、散くいてい逃やー

に。

さくとう、勉強しーねー、自分や床下ぬ中をうとーてい勉強し、昼おー出じとーてい、ふらーふーじーしモーイなとーてい、アタビーすぐたい、ぬーさいし、いつペーんでいきやー、いつペーん切りやーやしが、他人のーふらーんでい思とーるばーてー。

あさーに、今日ぬ試験ぬハーガーなとーていよー、黒板にやちやーし書かつとーんち、一目見れーからーわかいたんでいよー、どうくじんぶん持ちなてい、今日試験どーんでいーねー、出して来たんでいよー。

「私にん入ん」でいちゃくとう、

「いえーふらーモーイーが出て来んどー、」でい仲間が笑とーんてー、

「何書ちーが来がやー、丸書ちーが来る来えーせー、」んち笑てーるばー。

何故がやーんでいねー、一番し書ちやーに、置ちきてい去いたんでいよー。

モーイ親方が学校に行つてゐる頃だが、蛙とりをして、外の人たちはみんな学校に行くが、モーイーは蛙捕りをして蛙とりをしていると、その蛙が、ヌブシの玉をね、ヌブシの玉を、蛙が持つていて、ヌブシの玉を。

その蛙を、たたくと、モーイーは、ヌブシの玉を持つてゐる蛙を、ヌブシの玉を真ん中に置いて、蛙がヌブシの玉を抱えているので、その、ヌブシの玉を取つて、口に、含んだのだが、つい飲み込んでしまったそう。

「おまえたちがわからないんだあ」と言つて含んだが、つい飲んでしまったんだ。蛙のだいてゐるのを、自分で呑でしまい、ヌブシの玉をいただいたんだよ。

それで、蛙たちは、方ばうに散つて逃げてしまったそ

うだ。

そうして、モーイーは勉強するときには床下で勉強して、昼は出て来て、馬鹿なまねをして髪も振り乱して、蛙取りやなんかしているが、とても秀れものだったそうだが、他人は馬鹿と思つていたらしいんだよ。

それで、今日は試験というとき、人には見られずに黒板には何が書かれてゐると、一目見たときからわかつたそうだよ、あまりにも知恵もちで、今日は試験だという日には、床下から出て来たそうだよ。

「私も入る」というと、

「あれえ馬鹿なモーイーが出て来たよ」と仲間が笑つたそうだよ。

「何を書きに来たのかね、丸を書きに来たんでしようね」と言つて、あざ笑つたらしいんだ。

何故かという、一番に書いて、置いて出て行つたそうだよ。

あさーに、

「モーイーが何書ち去ちやがやー、丸る書ち去ちやがやー、」んち笑いたんでいどー。

やしがつたーまた、モーイーが書ち去ていからんなー、書きーうさんたんでいしが、調べたくとう、うり一番科学あてていよー。

あんしうつたー、モーイーが住まーとーたる家、はに壊ちやくとうよー、うんたきぬ、うつさむる、字なとーたんでい、床下むる字なとーたんでい。

隠り武士なてい、親ぬん知らんたんでい。

字小波蔵 伊敷カミ

そして、

「モーイーは何を書いて行つたのかね、丸を書いて行つたのかね」とあざ笑つたそうだよ。

だけど仲間たちはまた、モーイーが書いて出て行つてからも、書けなかつたそうだが、調べると、そのモーイーが一番できがよかつたそうだよ。

そして、そのモーイーの住んでいた家には、家を壊したとき、これくらい、ぜんぶ、字が書かれていたそうだよ、床下はぜんぶ字でいっぱいだったそうだよ。

隠れ武士になつて、親も知らなかつたそうだよ。

191 キジムナーと友達

うまぬ門んかい、ウスク木ぬ大が生やーにや、うぬ木んかいギジムナーぬ巢作てい。

あんし、んまぬ家ぬ主が、海かい行ちに、必じギジムナーんスルスルしやー、追ていつ来、でーじな海ぬでいきでいよ、あんさーに、金持さくとうやー、あんしん毎夜毎夜、ギジムナーが来やー、海んかい行ちゆんでいち。

なー、金持さくとう、ふゆーさーにや、なー、かねーるギジムナー、今日や海かい行ちぶこーねーんあれー、また今日んあぎまーち、んでい言やーに、あんさーい妻んかいやー、

「私達が海んかい出じーらーや、うぬ木んかい五寸釘打ち込みよー。あんさーに、火燃しよー。うぬ木ぬ穴ぐわーふーじーなとーる所んかい、藁火燃しよー」ん

その家の門に、ウスクの樹が生えていて、その樹にギジムナーが、巢を作つていたそうだよ。

それで、その家の主人が、海に漁に行く時には、必じギジムナーもスルスルスルと、追つて来て、それで漁は大漁になつて、それで、金持ちになつたが、それでも毎夜毎夜、ギジムナーはやつて来た、海に漁に行こうと。

さあ、主人は金持ちになつたので、煩わしくなつて、もう、こんなギジムナーと、今日は漁に行きたくもないのに、また今日もせかされてしまふし、と思つて、それで妻に、

「私たちが海に漁に出たら、その樹に五寸釘を打ち込みなさいよ。そして、火で燃やしなさいよ。その樹の穴になつているところに、藁で火を燃やしなさいよ」

でいち、海かい行じやくとう、海をうてい魚おー取やがな、ギジムナーが、

「あいえーな、私家や焼きーるむん」でいやーに、な、スールないよ、ギジムナーや帰ていはていしや、な、いんねーすんねーな、釘打ち込まつてい、な、火燃さつていよ、あんし、うぬギジムナーが、「いやーひや、助きていん、うんぐとうるするい、とー私ねーうまねー住まーらんくとう、何んでいる家ぬフィンブンぬかい、緑りぬ二葉出じてい、生とうる木ぬ有くとう、私ねーうぬ木んかい行ちゆくとう」んでい言いたんでいよ。

うぬ家がよ、また、ギジムナーが金持なさーに、でーじな金持さんでいぬ話やたんどー。

字与座 城間ウシ

と言つて、海に漁に行くと、海で魚を取りながらギジムナーが、

「あれもう、私の家が燃えている」と言つて、もう、スルスルスルとね、ギジムナーは帰つて行つてしまい、みるともう、釘が打ち込まれていて、火で燃やされていてね、それで、そのギジムナーが、「おまえは、助けてあげたのに、そんなことをするのか、もう私はそこには住めないから、何とかという家のフィンブンに、緑の葉を二葉つけている、生えている樹が有るので、私はその樹に行くよ」と言つていたそうだよ。

その家も、また、ギジムナーが金持ちにしてあげて、とつても大金持ちになったという話だったよ。

192 名嘉地大屋とギジムナー

ギジムナーんでいちよ、大樹んけよ、赤ひがーぐわーがよ、ンーメーぐわーパーパーグワーなていよ、タバク吸きんせーたんでい。木ぬ中をうてい、夜ぬ夜中、タバクぐわー吸ち、明かがらすたんでい。

潮平ぬ村んけよ、くぬ、ギジムナーんでいーしがよ、金持しみてーたんでい。あんしうまからじやまなてい、うぬやな者のーうまから、出じらしんでい、名嘉地大屋んかい渡たくとう、あまーまた目に見てい金持すたんでい。

字大里 山城力ナ

ギジムナーといつて、大きな樹にね、赤鬚を生やした者たちが、お婆さんや、お爺さんになったりして、タバコを吸つていたそうだ、樹の中で。夜の夜中に、タバコを吸つて、明るくしていたそうだ。

潮平の村にね、この、ギジムナーが金持ちにしたそうだよ。そしてその家でじやまになつて、その化物はそこから出され、名嘉地大屋に渡つて行くと、そのの家もまた、目に見えて金持ちになったそうだ。

渡嘉敷ペークー

(十日月・味噌・競馬・米俵)

渡嘉敷ペークーんちよー、首里ぬ城ぬ王とう、友達ぐわーやたんでい。

あんしなー、碁打ちなー王様とう毎日、囲碁打ちゆたんでいよーなー。あんすくとう、今日やなー、まーから人夫達出すがんでい言ちやくとう、渡嘉敷からんちい王様が言たんでい。

あんさくとう渡嘉敷ペークーや、うぬ日なたくとう時間遅りてい来やんでい。来やくとう、

「何んちいやーやなまでいーから、いやーや仕事しーが来が、時間のー遅さんどー」んちやくとう、

「月ぬ上がある頃までい、月ぬ上がいぬふどう、仕事さびーささい。私たー月ぬ上があるふどうさびーさ」んち。

あんし、王様ぬしんでいちやくとう、一時ぐわーさ

くとう、月えー上がいたんでい。

「月えー上がたん、はいしこーれー。私たーにんずし

こーれー、家かい」んでい、いちやくとう、

「何がいったー」んちやくとう、

「あり、月えー上がとーん」ちやくとう、むのー言うさんたんでい。十日ぬ月えー屋から上がいくとう、うれーいつペー知恵のーあたんでい。あんしむのー言うさんたんでい。

あんさーに、うれーどうく知恵ぬちゆーさぬ、馬走らしぬちやくとう、他人やなー雄馬なかい、ちゆらすがいしみてい来ゆーしが、くぬ渡嘉敷ペークーや、クリヤーぬ雌馬、雌馬持つち来やんでい。

持つち来やくとう、雄馬んでいせー、クリヤー馬る追とーる、前かいや歩かんるあんでいんどー。

「ちやがさい、私が負かちゃんやー」んちやんでいあんしまた囲碁打つちからよー、家かい帰いねー、「いえー王様、私たーや食むし無びらんどー」んでい

渡嘉敷ペークーと言って、首里のお城の王様と、友だちだったそう。

それでも、囲碁を打って王様と毎日、囲碁を打っていたそうだよ。それで、今日は、どこから人夫を出しますかと言うと、渡嘉敷からと王様がおっしゃったそうだよ。

それで、渡嘉敷ペークーは、その日になったので時間を遅れて来たそうだよ。遅れて来たので、「どうしておまえは今頃から、お前は仕事をしに来るのか、時間は遅いよ」と言うのと、

「月の昇る頃まで、月の昇るまで、仕事をします。我々は月の昇るまで仕事をします」と言うのと。

それで、王様が仕事をしなさいとおっしゃると、一

時間ぐらいすると、月が昇ったそうだよ。

「月は昇った、さあ準備しよう。われわれの仲間は支度しなさい、家に帰ろう」と、言うのと、

「何だお前たちは」というと、

「あれ、月は昇っている」と言うのと、ものは言えなかったそう。十日の月は屋から上がるので、ペークーは知恵があつたので、何とも言えなかったそう。

それで、ペークーはあまり知恵もちだから、馬競争のときに、他の人は雄馬を、飾り立てて来たが、この渡嘉敷ペークーは、さかりのついた雌馬、雌馬をつれて来たそう。

つれて来ると、雄馬は、さかりのついた雌馬を追うので、前には走らないんだそう。

「どうですか、私が負かしましたよ」と、言ったそう。それからまた囲碁を打って、家に帰るときには、「ねえ王様、うちは食べる物が有りませんよ」と言う

ねー、

「あんせー持つち行けー。ペークめー味噌、渡嘉敷ペークんかい、味噌持たちやらせー」んてい言ねー、味噌んかい花挿ち持つち去いたんでいよー。あんしーねー、花鉢ふーじーなてい、味噌んでいちえーわからんせーやー。あんさーに、うりからまた、
「食むしや無らんくとう、米いーら」んてい言いたんでい。

「馬んかい、一俵負うして、持つち去れー」んちゃくとう、

「二俵や、片荷なてい、負うしらんどー」んちゃくとう、
「二ち持つち行らせー」んち、二俵持ち去たんでい。

渡嘉敷ペークーでいしや、渡嘉敷ん人、いつペー王様とう友やたんでい。

うぬ王様、うん人が言るままたんでい。

字小波蔵 伊敷力ミ

と、

「そんなら持つて行きなさい。ペークーに味噌、渡嘉敷ペークーに、味噌をあげなさい」と言うと、味噌に花を挿して持つて行つたそうだよ。そうすれば、花鉢のようになり、味噌とはわからないからね。そして、それからまた、

「食べるのが無いから、お米を下さい」と言うと、

「馬に一俵乗せて、持つて行きなさい」とおっしゃるので、

「二俵では片荷になつて乗せられませんか」と言うと、

「二俵持つて行きなさい」ということで、二俵持つて行つたそうだよ。

渡嘉敷ペークーは、渡嘉敷の人で、とても王様と仲よかつたそうだよ。

この王様は、ペークーの言いなりだつたそうだよ。

194 雀孝行

父母が病にかかてい、病が重さぬ、あんし、二人、長女娘と、次女娘と、娘 子二人、生ちやくとう、親め達やなー、

「いつペー重病やくとう、早く来り」んちゃくとう、長女娘、ちゆらすがいすんでいちなー、いつちん来らん。クラーえなー、しぐ、着物ん着まーまー、フクター着まーまー、親め見舞しが来くとう、うれー親め見舞あたとーるばてー、親め、命落らんまーる、生ちゆる間なかい、クラーや来くとう。

また長女娘、またちゆらすがいすんちなー、いつちんなーうりさくとう、

「だー姉や」んちゃくとう、

「あれー、ちゆらすがいすんち来らんさー」んちゃくとう、来くとう、

父母が病氣になつて、病があまりに重くて、それで、二人、長女と、次女とを、娘が二人、生まれていたので、親たちはもう、

「とつても重病だから、早く帰つて来なさい」というと、長女は、着飾ろうとして、なかなか帰つてこなかった。次女のクラーは、すぐ、着物も着たまま、フクター着たまま、親の見舞いに来たので、クラーは親の見舞いに間に合い、親の、命の落ちないうちに、生きている間に、クラーは来たそうだよ。

ところが長女は、また着飾ろうとして、ちつとも帰つて来なかつたので、

「だあ、お姉さんは」と言うと、

「お姉さんは、着飾っているので来れなかつた」と言うと、来たので、

「とーいやーや、親ね孝んねーんくとう、川原端みぐ
てい、雨ん風ん濡てい、魚取てい食みよー」「クラー
や、いやーや親ね孝さくとう、倉みぐてい、倉米、
米食みよー」んでいち、昔話やんでい。

字小波蔵 伊敷力ミ

「おまえは、親の孝行もしないから、川端を廻って、
雨にも風にも濡れて、魚を取って食べなさいよ」「ク
ラーは、おまえは親の孝行をしたので、倉を廻って、
倉の米、米を食べなさいよ」という、昔話だそうだ。

195 アヒラーマジムン

今生ちよーいねーやー、幾ちがないらわからんしが
や、うぬ人達がや、若さいに、砂糖しーねーや、樽皮
や、煮ちえーる砂糖や樽皮んかい詰みーせーや。うぬ
樽皮や那覇んじ買いたんでいよー、あぬ、渡地ぬ橋渡
てい。

あんさーい、うり、なー棒荷さーに担みていよー、
大里人ぬ、島 隣ぬ友達と一緒、昼間から、砂糖や
二丁なー担みてい、向んじ売やーに、帰いねー樽皮担
みてい来しよー、なー夜なとたんているばー。
夜なていさくとう、くぬ中郡道から通たくとうや。
道端んかい、女ぬ洗髪し、道や後なち、立つちようた
んでいるばー。

あんさーに、うぬ大里人ぬよー、
「いえーひるましむん。うまんかい、美 女ぬ立ちゆ

いま生きているとね、幾つになるのか分からないが
ね、その人たちの、若いときに、砂糖を作るときには、
樽をね、炊いてある砂糖は樽に詰めるでしょう。その
樽は那覇で買って来たそうだよ。あの、渡地の橋を渡っ
て。

そうして、その時にもう、砂糖は棒で担いでね、大
里の人が、隣村の友達と一緒に、昼ごろから、砂糖を
二丁も担いで、向こうで売って、帰りには樽を担いで
来る時には、もう夜になっていたそうだよ。

夜になっていたので、そこの中郡道を通ったそうだ
よ。すると道の側に、女が洗髪して、道を後ろに、
立っていたそうだよ。

それで、その大里の人がね、

「あれーふしぎなことだ。そこに、きれいな女が立つ

んでーやー」でい言に、うりし、

「いえー、うんぐとうーや、見だんどー。しらんふーりーし通るわ」んでいさくとうやー、今度また、うぬ女ぬよ、同間隔離りていよー、いかな、追付てい、顔見んでいやーに、足速みていんよ、ぜつたい追付うはんでいるばー、ちゃー同間隔離りてい。

あんするむんぬ、うぬ女ぬ、見らんない、今度また、アヒラーマジムンない、あんさーに、前からアヒラーがよー、なーグルグルグル歩ちやくとうよー、なーかんたるむんでいやーによ、石取ていやー、うぬアヒラーんかい、投ぎてーるふーじ。投ぎたくとう、ぱつとう無んなやーにやー。

なーあんすんでいしーねーなー、ちよーどう報得川ぬ高嶺入口ぬや、報得川ぬ橋来くとうやー、

「あつさみよーなー、今日やいふーな物見じやーに、うり追付んでい急じやるむんぬ、でいーなー、うまうていタバコちきていから行かやー。村わじかるやつ

さい」んでい言やーに、んまをうてい、樽皮ん下ち、休てい、タバコ吸ちゆんでいさくとうやー、んまんかいよ、御香火ぐわーぬ有たんでいるばー。

あんさーに、

「ぬーが、魂ぐみさーがやー。魂ぐみうさぎてい、去てーはやー」んでい言やーに、うぬ友達ぬ、大里人ぬや、チシリぐわーんかい、タバコ入りやーに、タバコちきーんでいさくとう、パーラみかちゃんていよー。

なー見舞しーが行じやくとうよー、なー、背中からまーから爛ていよー、大火傷し、あんさーになー、芋ぬ葉よー、バナナぬ葉よー、うり敷ちよー、うりんかい寝んでいなー、はきさみよーそーたんてい。

「うれー本當に有たらくとうどー。私たーが若さいにぬ話どー」んでい、私達祖父おじーが言みせーたん。

ているよ」といって、それで、

「おい、そんなのは、見るもんじゃないよ。知らんふりして通りなさい」というと、するとつきにはまた、その女がね、同じ間隔ずつ離れて、どんなに、追いついて、顔を見ようとしても、足を速めても、とても追いつけずに、ずっと同じ間隔離れていたそう。

そうなのに、その女は、見えなくなつてしまい、つきにはまた、アヒラーマジムンになつて、そして、前からアヒルがね、もうグルグルグルグルと歩いているので、こんなものと言つて、石を取つて、そのアヒラーに投げたそうだよ。投げたので、ぱつと無くなつてしまつて。

それでそうしているうちに、ちようど報得川の高嶺入口のね、報得川の橋まで来たので、

「ああもう、今日は変な物を見てしまつて、それに追いつこうとして急いだのだが、さあもうここで、タバコをつけて一服してから帰つて行こうね。もう村はあ

とわずかだし」と言つて、そこで、樽もおろして休憩して、タバコを吸おうとすると、そこに、線香の火があつたそうだよ。

それで、

「何だ、魂グミをしたのかね。魂グミをして、行つてしまつたんだね」と言つて、その友だちの、大里の人は、キセルに、タバコを入れて、タバコに火をつけようとする、パツと音がしたそうだよ。

後でお見舞いに行つてみるとね、もう、背中じゅうあつちもこつちもただれてね、おおやけどして、それでも、芭蕉の葉ね、バナナの葉ね、それを敷いてね、その上に寝て、痛いとうなつていたそう。

「それは、ほんとうに有つたことだよ。私たちの若いときの話だよ」と、うちのおじいさんがおっしゃって

話 型 対 照 表

／	『糸満市の昔話』			
	日本昔話名彙	大成番号	日本昔話大成	日本昔話事典
神話				
1 アマミキヨとギジムナー				
2 稲の始まり				
3 五穀の始まり				
4 大力のイツカシウエーブーと ジョウサグンウエーブー				
伝説				
5 糸満の地名由来				
6 暁城の名の由来				
7 与那原の綱引由来				
8 小波蔵の綱引由来				
9 阿波根の飯石の由来				
10 金の砥石				
11 フチャギ餅の由来				
12 左御紋の始まり				
13 火返し（ヒーゲーシ）御願				

14	七月お盆の始まり			
15	位牌の由来			
16	ニービチ由来(イ)			
17	ニービチ由来(ロ)			
18	伊原の喜納ワタブトウの土地分け			
19	糸満のヒーダチ御願			
20	ユードレ墓の由来			
21	波平玉川の由来			
22	遊女墓の由来	長柄の人柱	本格新四六	長柄の人柱
23	真玉橋の人柱(イ)	長柄の人柱	本格新四六	長柄の人柱
24	真玉橋の人柱(ロ)	長柄の人柱	本格新四六	長柄の人柱
25	真玉橋の人柱(ハ)	長柄の人柱	本格新四六	長柄の人柱
26	白銀堂由来(イ)	話千両	五二二	話千両
27	白銀堂由来(ロ)	話千両	五二二	話千両
28	普天間権現由来			
29	運天港由来			
30	婿入り橋の由来			
史 譚				
31	かぎやで風節			
32	北谷王子と黒鉄座主(イ)			

33	北谷王子と黒鉄座主(ロ)			
34	京阿波根親方(イ)			
35	京阿波根親方(ロ)			
36	内間金丸			
37	大里嘉手志川と金屏風			
38	網の始まり	聴耳	一六四C	聴耳
39	名護親方と具志頭親方(イ)			
40	名護親方と具志頭親方(ロ)			
41	名護親方と具志頭親方(ハ)			
42	名護親方と具志頭親方(ニ)			
43	名護親方と具志頭親方(ホ)			
44	米須按司の敵討ち			
45	瓦屋情話			
46	吉屋チル			
47	チャタンモーシー			
48	仲村渠マカトウ			
本格昔話				
49	天人女房	天人女房	一一八	天人女房
50	ハブ簞入	蛇簞入	一〇一A	蛇簞入・芋環型
51	アカマタ簞入(イ)(浜下り由来)	蛇簞入	一〇一A	蛇簞入

52	アカマタ簀入(ロ)(普天間権現由来)	蛇簀入	一〇一A	蛇簀入・苧環型	蛇簀入
53	睡次郎	隣の寝太郎	一二六	鳩提灯	隣の寝太郎
54	難題簀(熱田のマーシリー)	難題簀	一三〇	謎解簀	謎解き簀
55	ウールンチブシ	難題簀	一三〇	謎解簀	謎解き簀
(勝連按司の難題・アガデーガマ由来)					
56	継子話(麦搗き・二十日月)				
57	継子の味噌弁当				
58	継子の毒入り弁当				
59	継子話(蓑と七重ね毛)	米理糠埋	二〇五B	米理糠埋	継子と弁当 米理糠埋
60	継子とみみず				
61	継子台				
62	継子話(チバナより痛い)				
63	兄弟の仲直り(イ)	兄弟の仲直り	一八二	兄弟の仲直り	兄弟の仲直り
64	兄弟の仲直り(ロ)	兄弟の仲直り	一八二	兄弟の仲直り	兄弟の仲直り
65	仲順流り(イ)	孫の生肝・三夫婦型	本格新一	孫の生肝・三夫婦型	孝子と金瓶
66	仲順流り(ロ)	孫の生肝・三夫婦型	本格新一	孫の生肝・三夫婦型	孝子と金瓶
67	仲順流り(ハ)	孫の生肝・三夫婦型	本格新一	孫の生肝・三夫婦型	孝子と金瓶
68	仲順流り(ニ)	孫の生肝・三夫婦型	本格新一	孫の生肝・三夫婦型	孝子と金瓶
69	大年の客	猿長者	一九七	猿長者	大年の客
70	猿長者	猿長者	一九七	猿長者	猿長者
71	泥棒の恩返し	大年の客	一九七		

72	鬼餅由来(イ)	妹は鬼	二四九	妹は鬼	妹は鬼
73	鬼餅由来(ロ)	妹は鬼	二四九	妹は鬼	妹は鬼
74	鬼餅由来(ハ)	妹は鬼	二四九	妹は鬼	妹は鬼
75	鬼の家の便所	妹は鬼	二四九	妹は鬼	妹は鬼
76	クスケー由来				
77	ハジチ由来				
78	姥捨山(イ)(柴折り・難題)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
79	姥捨山(ロ)(柴折り・薩摩の難題)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
80	姥捨山(ハ)(馬の親子)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
81	ハブの昇天				
82	フカに助けられた男				
83	武士と肥やし				
84	唐商 トイアチネ いよか糠商 ヌカアチネ い	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
85	モーイ親方(イ)(勉強・煙草は一回・嫁取り・薩摩の難題)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
86	モーイ親方(ロ)(勉強・薩摩の難題)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
87	モーイ親方(ハ)(嫁取り・薩摩の難題)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
88	モーイ親方(ニ)(薩摩の難題)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
89	モーイ親方(ホ)(薩摩の難題)	姥棄山	五二三A	親棄山	姥棄て山
90	モーイ親方(ヘ)(打たぬ太鼓・灰縄)	姥棄山	五二四	殿様の難題II打たぬ太鼓	打たぬ太鼓
91	モーイ親方(ト)(嫁取り)	姥棄山	五二四		

92	モ－イ親方(チ)(嫁取り)			
93	モ－イ親方(リ)(煙草は一回)			
94	モ－イ親方(ヌ)(勉強)			
95	モ－イ親方(ル)(年若い馬・煙草は一回)			
96	モ－イ親方(ヲ)(草履と下駄)			
97	モ－イ親方(ワ)(小便の罰金)			
98	モ－イ親方(カ)(出たものは切る)	六一四	出たものは切る	出たものは切る
99	モ－イ親方(ヨ)(卵割り・出るか入るか)			
100	モ－イ親方(タ)(ヌブシの玉)			
101	モ－イ親方(レ)(マブイの恩返し)			
102	モ－イ親方(ソ)(三本の矢)			
103	モ－イ親方(ツ)(親方の最期)	聴耳	聴耳	聴耳
因縁・化物譚				
104	生き返った大屋のアヒトウ			
105	後生戻りの話			
106	ナーチャミー由来(イ)			
107	ナーチャミー由来(ロ)			
108	子育て幽霊	子育て幽霊	子育て幽霊	子育て幽霊
109	シバサシ由来			
110	平良シカマグチ	子育て幽霊	一四七A	子育て幽霊

111	逆立ち幽霊			
112	国吉坂の遺念火			
113	遺念火の話			
114	識名橋の幽霊マジムン			
115	キジムナーと友達(イ)			
116	キジムナーと友達(ロ)(名嘉地大屋)			
117	キジムナーと友達(ハ)(名嘉地大屋)			
118	キジムナーと友達(ニ)(ムーチー汁)			
119	キジムナーと友達(ホ)(我那覇大屋)			
120	坊さんと猫			
笑話				
121	ナヴァーグワの知恵(イ)(尻拭き)			
122	ナヴァーグワの知恵(ロ)(食い逃げ)			
123	山原と団亀			
124	糸満の女は男勝り			
125	渡嘉敷ペークー(イ)(十日月・嘘の名人)	癖をやめる賭	四九四	嘘の名人
126	渡嘉敷ペークー(ロ)(十日月)		五七七	褒美の片荷
127	渡嘉敷ペークー(ハ)		五七七	褒美の片荷
	(王様と碁・米俵・着物)			褒美の片荷
				西行のはね糞
				癖をやめる賭
				褒美の片荷
				褒美の片荷

128	渡嘉敷ペークー(二) (王様と碁・米俵・味噌)		五七七	褒美の片荷	褒美の片荷
129	渡嘉敷ペークー(ホ) (低頭門・米俵・相撲)		五七七	褒美の片荷	褒美の片荷
130	渡嘉敷ペークー(ヘ) (煙草は一回)				
131	渡嘉敷ペークー(ト) (塩がうまい・低頭門)				
132	渡嘉敷ペークー(チ) (屋根の葺き替え)				
133	渡嘉敷ペークー(リ) (競馬)				
134	渡嘉敷ペークー(ヌ) (ル力島返し)				
135	津堅バーマー (十日月・屋根の葺き替え)				
136	糸満マギー(イ) (あそこは人並み)				
137	糸満マギー(ロ) (山原船)				
138	糸満マギー(ハ) (帆柱)				
139	糸満マギー(ニ) (寿命)				
140	糸満マギー(ホ) (足跡)				
141	保栄茂タルチー(イ) (力比べ)	力くらべ	四八〇	仁王と賀王	力比べ
142	保栄茂タルチー(ロ) (力比べ)	力くらべ	四八〇	仁王と賀王	力比べ
143	保栄茂タルチー(ハ) (妹の大力・力比べ)	力くらべ	四八〇	仁王と賀王	力比べ
144	保栄茂タルチー(ニ) (仕事は弁当)	力くらべ	五九〇	仕事は弁当	仕事は弁当
145	保栄茂タルチー(ホ) (牛抱え・ 仕事は弁当)	力くらべ	五九〇	仕事は弁当	仕事は弁当

146	保栄茂タルチー(ヘ) (山原船)	力くらべ	五〇四	力比べ	力比べ
147	保栄茂タルチー(ト) (保栄茂の最期)				
148	保栄茂タルチー(チ) (保栄茂の崇り)				
149	保栄茂ユーチー (仕事は弁当・牛抱え・最期)	力くらべ	五〇四 五九〇	力比べ 仕事は弁当	力比べ 仕事は弁当
150	文徳マサー(イ) (空手の修行)				
151	文徳マサー(ロ) (空手の修行)				
152	文徳マサー(ハ) (藁綱い)				
153	文徳マサー(ニ) (大力)				
154	文徳マサー(ホ) (足型・天井蹴り)				
155	文徳マサー(ヘ) (力比べ)				
156	アガリ武士の力比べ(イ)	力くらべ	四八〇	仁王と賀王	力比べ
157	アガリ武士の力比べ(ロ)	力くらべ	四八〇	仁王と賀王	力比べ
158	アガリ武士の力比べ(ハ)	力くらべ	四八〇	仁王と賀王	力比べ
159	サクマエバーの大力				
160	ガネクダクローの強力譚	力くらべ	四八〇	仁王と賀王	力比べ
161	名城ヘンサの早足				
162	雀孝行(イ)	雀孝行	四七A	雀孝行	雀孝行
163	雀孝行(ロ)	雀孝行	四七A	雀孝行	雀孝行

鳥獣草木譚

164	雀孝行(ハ)	雀孝行	四七A	雀孝行	雀孝行
165	雨蛙不孝	雨蛙不孝	四八	鳶不孝	雨蛙不孝
166	雀酒屋	雀酒屋			雀酒屋
167	十二支由来(イ)	十二支の由来	十二	十二支の由来	十二支の由来
168	十二支由来(ロ)	十二支の由来	十二	十二支の由来	十二支の由来
169	猿の生き肝	猿の生き肝	三五	猿の生き肝	海月骨なし
170	犬の脚	犬の脚	六三	犬の脚	犬の脚
世間話					
171	キジムナーの胸押え(イ)				
172	キジムナーの胸押え(ロ)				
173	キジムナー封じ				
174	兼城のカマロー				
175	遺念火と相撲				
176	煙草は吸うもの				
177	マザーデーに出会った話				
178	ヨウドレの由来				
対訳資料					
179	人の始まり				
180	稲の始まり				

181	犬の見つけた井戸	蛇簀入	一〇一A	蛇簀入・芋環型	蛇簀入
182	与座の名の由来	難題簀	一三〇	謎解簀	謎解き簀
183	慶留 ^{ぎる} バーリーの祭り	大年の客	一九七	猿長者	猿長者
184	米須按司の敵討ち	大年の客	一九七	猿長者	猿長者
185	アカマタ簀入(浜下り由来)	和尚と小僧	五二一	殿様と小僧	殿様と小僧
186	難題簀(二つの馬に鞍一つ)				
187	猿長者(イ)				
188	猿長者(ロ)				
189	安里の童 ^{わらわ}				
190	モーイ親方(ヌブシの玉・勉強)				
191	キジムナーと友達				
192	名嘉地大屋とギジムナー				
193	渡嘉敷ペーケー				
	(十日月・味噌・競馬・米俵)				
194	雀孝行	雀孝行	四七A	雀孝行	雀孝行
195	アヒラーマジムン				

語り手一覧

地区名	氏名	生年月日	地区名	氏名	生年月日	
糸満	金城 修治 田場 天龍 新垣 キヨ 上原 亀三 金城 金三 玉城 マシ 上原 牛蔵 大武 カナ 上原 亀広 上原 セキ 上原 カメ 照谷 佐代子 上原 新助 稲嶺 キク 糸数 オトミ 金城 安彦 上原 加州男	明治二七・四・八 明治三〇・二・四 明治三三・三・一〇 明治三八・五・八 明治三八・六・一二 明治三八・八・八 明治三八・八・一五 明治三九・四・一〇 明治四〇・一・一〇 明治四〇・六・一二 明治四一・七・一六 明治四一・一二・九 大正一・一二・二五 大正一・一二・二四 大正二・二・一〇 大正二・七・五 大正四・九・二		武富	具志堅朝太 上原 カツ子 上原 亀吉 久高 光 伊敷 牛助 上原 ヒデ 野原 由宗 上原 皓吉 上原 徳助 大城 英次 上原 亀吉 稲嶺 盛亀 上原 ツル 国場 秀子 玉城 初子 稲嶺 盛春 長嶺 サト	大正五・二・一〇 大正五・三・一〇 大正五・一〇・五 大正六・三・五 大正七・八・一〇 大正七・八・一三 大正七・八・一五 大正八・七・二三 大正九・一・二六 大正一二・三・四 大正一二・四・一一 大正一二・六・六 大正一二・一〇・三〇 大正一四・一二・一九 大正一五・一一・一五 昭和 三・三・七 明治三七・一〇・一〇

山内	島根	新崎	永嶺	平田	平田	大城	賀数	当銘	大城	長嶺	長嶺	長嶺	長嶺	長嶺	長嶺	長嶺	長嶺	大城	金城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

宮里	玉城	宮里	宮里	島袋	金城	仲谷	伊礼	神谷	照屋	安谷屋源助	照屋	照屋	大城	喜納	金城	金城	名嘉真朝昌	金城	大城	喜納	大城	喜納
ウツ	フミ	カメ	一郎	仁栄	武太	亀栄	カメ	ハル	トキ	源助	寛吉	寛文	加那	カメ	苗	ヒデ	朝昌	カナ	テル	サト		
大正三・一〇・一三	大正三・一二・一二	大正四・六・八	大正九・一・三	大正一〇・一一・二〇	大正一一・一・一六	明治三四・一一・八	明治三九・一〇・一二	大正七・三・一五	大正七・八・一五	大正八・三・二〇	大正一〇・一二・一五	大正一四・一〇・一五	明治三三・五・一二	明治四〇・四・五	明治四三・四・一五	明治四三・八・一〇	明治四四・一一・一	大正一・一二・一〇	大正四・一二・一〇	大正五・三・一〇		
新垣	大城	上江洲	山城	宮里	金城	大城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城	金城
清三郎	ヨシ	安景	栄正	栄吉	栄吉	テル	常雄	トミ	キク	守正	仁一郎	朝昌	カマド	ハル	ヨシ	キク	キヨ	亀順	武雄	武登		
大正五・一二・二五	明治四二・一〇・二〇	明治四三・九・八	明治四三・一一・二〇	明治四四・一一・三〇	大正二・一・三〇	大正二・三・一五	大正二・一〇・二八	大正四・二・一一	大正五・三・一〇	大正七・一・一〇	大正七・四・一一	大正一二・八・二〇	明治三三・一一・	大正三・二・二六	大正九・七・一三	大正一〇・二・二四	明治三三・三・一〇	明治三四・八・一五	明治三七・九・六	明治三七・一〇・八		

徳田	与儀	上江洲	金城	前川	赤嶺	新家	伊集	金城	国吉	国吉	国吉	久手堅	仲井真盛	賀数	賀数	城間	金城	伊敷	金城	伊敷	徳田	与儀
幸五郎	ウツ	由豊	カメ	次郎助	時子	次郎	守良	カマド	マカト	マツ	憲吉	盛幸	カメ	カメ	カメ	ウシ	美智子	松助	幸徳	弘吉	幸五郎	与儀
大正六・七・二	明治四〇・二・一五	明治四一・五・一九	明治四四・二・一〇	大正四・七・二〇	大正五・八・一五	大正八・五・二五	明治三四・一二・二九	明治三六・八・一五	明治四一・一二・二五	大正三・一・七	大正三・九・一	大正一一・三・三一	大正一四・二・一〇	明治三七・八・五	明治三八・一二・二〇	大正四・六・二八	大正五・五・二五	大正五・六・二〇	大正八・四・七	大正八・七・二三	大正六・七・二	与儀
賀数	賀数	伊敷	山城	大湾	上原	翁長	金城	徳里	金城	宮里	宮城	金城	伊敷	大城	徳里	前原	玉城	比嘉	長嶺	賀数	賀数	賀数
クメ	清喜	清保	スエ	朝次郎	アキ	文字	正勝	ハル	カメ	カメ	カメ	正全	三郎	ウシ	実盛	タツ	亀雄	スエ	富	クメ	清喜	清保
大正八・一〇・八	大正九・八・五	大正一〇・三・一七	大正一三・二・九	明治二七・二・五	明治四二・六・九	大正二・二・二〇	大正五・一・七	大正五・一〇・二〇	明治三一・六・一二	明治三三・八・一〇	明治三三・二・一一	明治三五・一・九	明治三七・三・五	明治三八・五・五	明治三九・一二・二五	明治四〇・七・二八	明治四四・八・一四	明治四四・一〇・九	大正一・一二・二九	大正三・一・二一	大正八・一〇・八	大正九・八・五

渡口 広	前門 京子	川門 信義	並里 武吉	新屋 力メ	新屋 アキ	新屋 タカ	仲門 銀助	阿佐慶正男	志茂 嘉一	仲門 用三	伊保 三郎	伊保 守吉	金城 宏栄	平田 金徳	伊集 盛亀	玉城 トミ	神里 ヒデ	玉城 真吉	玉城 スミ	外間 力メ
大正 六・六・一〇	大正 八・一二・二八	大正 九・一二・二八	大正 一〇・一〇・三〇	明治 四四・八・一〇	大正 三・八・三	大正 四・六・一七	大正 五・五・二六	大正 五・九・五	大正 七・三・一八	大正 八・五・八	明治 三四・一二・二三	明治 四四・一二・一	明治 四二・一一・五	明治 四三・七・一四	大正 一・一〇・一五	大正 一・一二・一〇	大正 一・一二・二三	大正 三・五・六	大正 四・二・一〇	大正 四・一〇・三〇
山城 アキ	山城 登吉	高嶺 正	山城 キヨ	玉城 盛栄	玉城 トシ	山城 昭治	仲宗根善道	山城 亀助	玉城 孝徳	上原 孝助	酒屋 ヤス	玉城 ハル	外間 樽助	玉城 力メ	外間 正敏	玉城 盛勝	新里 三郎	伊敷 ヤス		
大正 六・三・三	大正 六・一〇・一〇	大正 六・一二・一〇	大正 七・七・五	大正 一一・九・七	大正 一一・一二・一一	明治 四三・二・三	大正 二・二・一九	明治 四一・九・四	明治 四四・五・六	明治 四四・一二・一〇	明治 四五・六・一八	大正 三・一・一〇	大正 三・五・二〇	大正 四・九・二〇	大正 五・一二・三二	大正 六・一二・一九	大正 八・八・一三	明治 四三・五・二五		

"	"	"	"	"	南波平	"	"	"	"	"	"	糸洲	"	"	"	"	小波蔵	"	"	"
山城 亀六	伊集 朝助	山城 カナ	伊集 スエ	山城 善助	山城 光栄	中村 光一	照屋 フミ	中村 カツ	照屋 光子	吉嶺 タマネ	中村 カメ	神里 カマ	伊敷 フチ子	奥間 ヨシ	伊敷 カミ	伊敷 ヨシ	伊敷 ナエ	新垣 栄蔵	新垣 亀栄	伊敷 義光
大正九・二・二	大正五・四・二四	大正四・四・五	大正二・一〇・一〇	明治三九・一〇・二五	明治三八・一〇・八	大正八・一〇・二七	大正六・三・一〇	大正五・八・三〇	大正五・三・六	大正一・九・二〇	明治四五・三・一八	明治三五・六・二八	大正一一・二・一	大正四・五・六	大正三・八・一三	明治四四・一〇・一〇	明治四三・三・八	大正一五・一二・二九	大正二・五・一〇	明治四〇・四・二〇
"	"	"	"	"	"	"	福地	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	東里	"
酒屋 カメ	川門 善吉	上良 正光	殿内 三吉	大城 タツ	並里 タケ	新垣 トキ	川門 カメ	上良 キヨ	上良 ヒデ	志茂 トシ	佐久真 ミヨ	下田 ミツ	佐久真 フジ	上良 武定	佐久真 カメ	西前 トヨ	上良 徳栄	玉城 ハル	玉城 佐一郎	山城 秀吉
大正六・六・五	大正三・一二・一九	大正三・六・一五	大正三・三・一五	大正二・一〇・一五	明治四五・二・一〇	明治四三・三・六	明治四〇・二・八	昭和二・一一・二	大正一二・五・一五	大正一一・一〇・一〇	大正一〇・一〇・一〇	大正一〇・三・三	大正八・二・三	大正六・三・一〇	大正五・五・一七	大正三・三・二	明治四四・二・六	明治四三・一二・二〇	明治三八・一二・二九	大正一一・一二・一

採訪者名簿

〈第一回調査〉昭和六十二年八月六日～八日

福田 晃（指導教授）

内間 弘・金城 善（糸満市役所総務部企画開発課）

伊芸弘子（那覇市教育委員会）

松本孝三・原田信之・矢田敬子・村上美登志

中村 史・桑原真広・小林基裕・和田雅裕

吉本哲也・守時早苗

〈第四回調査〉平成三年八月十一日～十二日

福田 晃（指導教授）

金城 善（糸満市役所総務部企画開発課）

松本孝三・原田信之・中村 史・和田雅裕

藤井佐美・山本 淳・黒田孝博・足立安子

〈補足調査〉平成七年八月八日～九日

松本孝三

〈第二回調査〉昭和六十三年八月四日～六日

福田 晃（指導教授）

金城 善（糸満市役所総務部企画開発課）

狩俣恵一・松本孝三・原田信之・小仲敬子

村上美登志・中村 史・和田雅裕・藤井佐美

守本泰之・山本 淳

翻字者名簿

松本孝三・村上美登志・中村 史・和田雅裕

藤井佐美・二本松康宏・濃野元子・山本 聡

松井 清・山本 淳・黒田孝博・中森 司

三輪一雅・藤原和典・渡辺亮一・足立安子

徳永とも子・中村宏美・舩木恵美・大谷賢司

木村ユキ・武田佳子・宗形英恵・原田恵一

〈第三回調査〉平成元年七月三十一日～八月一日

福田 晃（指導教授）

金城 善（糸満市役所総務部企画開発課）

あとがき

わたくしどもの沖縄における昔話の合同調査は、昭和四八年八月の与勝諸島よりはじめて二十余年、国頭から島尻に及ぶ沖縄諸島、池間・伊良部・来間・多良間を含む宮古諸島、石垣から波照間に至る八重山諸島と、大雑把ながらほぼ沖縄全体に及んで、ようやくその終熄の時期を迎えつつあった。そんな矢先に伊芸弘子さんから糸満市をやつてはとのお誘いを受けた。たまたま糸満市は壮大な市史編纂を企画されており、その民俗編の民話担当を伊芸さんがつとめておられたからであつた。すでにわたくしどもは、昭和五四年から三ヶ年間、同島尻郡の具志頭村・大里村・玉城村の昔話調査を実施しており、そのなかで、しばしば苛烈な沖縄戦の体験をうかがい、時にはわれわれの調査の無神経さにお叱りを受けることもあつた。したがって、沖縄戦最後の激戦地・糸満市に調査の鉤を入れることは躊躇されていたのである。しかるに伊芸さんを通して糸満市がわたくしどもの調査を積極的に受け入れてくださるというのであり、まことにありがたいことであつた。

その昔話のフィールド調査は、昭和六十二年八月、まずは糸満市・市役所総務部企画開発課広報統計係（市史編集担当）が主体となつて進められた。わたくしは、調査に参加する立命館大学説話文学研究会の会員に、近刊の仲宗根政善氏編『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』（角川書店）の講読を誘め、自分も再読して糸満市に赴いた。そのせいであろうか、調査の聚落に至る車は、白昼ながらどこも白骨の道を述るように思われてならなかつた。そしてその道は瓦礫の聚落に至るはずであつた。ところが、わたくしどもが訪ねた各聚落は緑の樹木に覆われて、おだやかであつた。しかもわたくしどもを迎え入れたご老人たちは、いずれも苛酷な体験を持ちながら、あえてそれは秘めて、静かに遠い昔のチティ話を語られるのである。それはまさに苛烈な戦さを耐え抜いたコトバの文化というべきものであつた。

た。爾来、四ヶ年に及んだ調査で老人たちが語られた昔話類は六七九話。そこから一九三話を選んで本書は成っている。つまり、本書「糸満市の昔話」は、糸満市とわたくしどもが赤い糸に結ばれて成った文化財であり、糸満の人々の戦争を乗り越えたコトバの珠玉の集であるということである。ただ惜しまれるのは、すべてをシマクチで残せなかったことであるが、それらはわたくしどもの限界としてお許しをいただくほかない。

ともかく糸満市企画開発課・同教育委員会とわたくしどもとの協同によって、本書の刊行までに漕ぎ付け得たことをたいへんありがたく思う。改めて関係諸機関にお礼を申し上げたい。特に直接お世話をいただいた前教育長・新垣博氏、現教育長金城正徳氏をはじめとする教育委員会のみなさん、そして最初から最後まで主体的に協力された前文化課文化係長の金城善氏、最後のまとめにご苦勞をおかけした現文化課係長の上原善明氏に対し、深甚なる敬意を表する次第である。

平成八年三月

立命館大学教授 福田 晃

沖縄・糸満市の昔話

一九九六年三月二十九日 発行

編集 立命館大学説話文学研究会

京都市北区等持院北町五八の一

立命館大学文学部

福田 晃教授研究室内

発行 糸満市教育委員会

沖縄県糸満市字糸満二〇五七番地

印刷 糸満印刷

沖縄県糸満市字糸満二〇八二番地